

奇譚クラス



1954.8

奇譚クラス

8

定價 百円



本欄はすべて新版
未発表の作品です
価格は全部送料共

〔女体緊縛〕

●寫真集●

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

悦虐写真は同好者本位の迅速、確実、安価で信用のある曙書房代理部へ

◎村田那美子嬢悦虐集◎

手札型 五枚 一組 200円

◆さるぐつわ三態◆

キヤビネ版 3枚 1組 300円

◆二女連縛集◆

(中富綾子、並川トミの二嬢)

手札型 六枚 一組 300円

自分から縛りのモデルを志願してきた二人
の乙女を仲よく連縛したポーズ

◆三人連縛棒吊り◆

(杉、坂口、村田の三嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

これは誠に珍妙な写真である。予想して出
来るものでなく、偶然のチャンスをつかん
で得た三人連縛の棒吊りである。

◆梯子責め3態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

梯子に縛りつけるということは、サディス
トの見果てぬ夢の一つである。

男性被縛写真 (縛られた男)

第三集 手札型 5枚 1組 300円

第四集 手札型 5枚 1組 300円

男性マゾ写真 (女に苛められる男)

第一集 キヤビネ 3枚 1組 300円

第二集 キヤビネ 3枚 1組 300円

◎川端多奈子嬢

第二集 悦虐姿態集◎

手札型 7枚 1組 300円

大好評の第一集に引続いて待望の第二集は
多奈子嬢の真価を遺憾なく発揮した作品と
なっている。乞御期待。

◆股間縛りの5態◆

(坂口利子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

問題の股間縛り十数態の中から選んだ最も
強烈で美しさのある五態をおすすめする

◆椅子責めの5態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

十四貫三百の豊満な姿態を縦横に椅子の上
に縛りつけて得た変化のある真佐子嬢の緊
縛のポーズ。

◆半吊り二態◆

(村田嬢、坂口嬢)

キヤビネ版 2枚 1組 200円

完全に吊り下げられてしまうよりも、半吊
りの方が、辛いとはモデル嬢の偽らざる告
白。

女性切腹姿態

オニ集 手札型 6枚 1組 300円

女性切腹擬態シリーズ

キヤビネ版 8枚 1組 600円

正坐より割腹に至る迄の連続写真。



奇譚クラブ ★八月号★目次

八月号責給 三又洲の惨劇	伊藤晴雨・画
戯文・戯画 水	畔亭数久・画
畔亭数久アブノーマル画集	
ギロツチン・鉄の処女・釜うで・答刑	
緊縛写真	辻村隆・構成
セルロイド輪利用の乳加	辻村隆・構成
片足吊り	萩千恵子嬢
くさり	伊吹真佐子嬢
後手	(中富綾子嬢) 鞭 撻 (革帯) (杉美美嬢)
連縛	(杉美美嬢) 後手 (村田那美子嬢)
繩を用いたお姉さま熱くないかしら? ... 辻村隆構成	
蠟涙 振り (春日ルミ嬢) 伊吹真佐子嬢	
アクティヴとパッシヴの美しいポーズ	滝麗子・画
縛り方教室 ナイロン・ユニホーム	
滝麗子画集 新妻遊戯夏姿・着物 (明石・紗)	
外国の資料 ザ・サイレント・パイパー	一妻艶一 (春日ルミ嬢)
伊藤晴雨撮影 乱れ髪	(春日ルミ嬢)
まぞひすちつく・ふおと	
気まぐれな弄び、尻に敷く、鞭打ち、足台	杉原虹児・画
幻想画 桎梏 (しつこく)	
(扉) 駿河問の図	(刑事博物図鑑より)

魔觸 (ましよく)

現代文藝に現れた責め

告美しい五月に

海外サディズム雑誌

読切 苔朽ちて

私の女性愛慾面の断層

シレットの女性愛慾面の断層

切腹曼陀羅図絵

あるマソヒストの手帖から

連戦・残虐なる女性たち

歴史の一面 ベンガルの黄昏

切腹研究夜話 (五)

創作 私刑 (リンチ)

懸賞 (告白と手記と体験) 入選作品

サド女性の覆面

異色あるサジズムの告白第一話

青色の螢光灯

感情教育 (十)

小ソトミア 美少年の秘密 (二)

論稿 臍窩への省察 (三)

非小説性 液

国際スパイ團監房

女性腋窩譚

濱辺の秘密レター

腹部自虐の訴え

或る手紙に寄せて

眼帯の魅力

三度び女性の鼻に就て

同性愛マニアと自縛

フェチシストの悲願

林田直樹さんの告白に答えて

二俣志津子

村田誠一

古川裕子

吾妻新

松井籍子

林弓志雄

法谷四郎

沼正三

森本愛造・訳

川野京輔

中康弘通

葭場喜代子

山田正実

川田進

吾妻新

山口幸一

須藤律夫

伊藤晴雨

野中愛三

吾妻新

佐次浩介

三村春夫

青柳謙次

野崎純

川端多奈

菅野朔

真鍋四十六

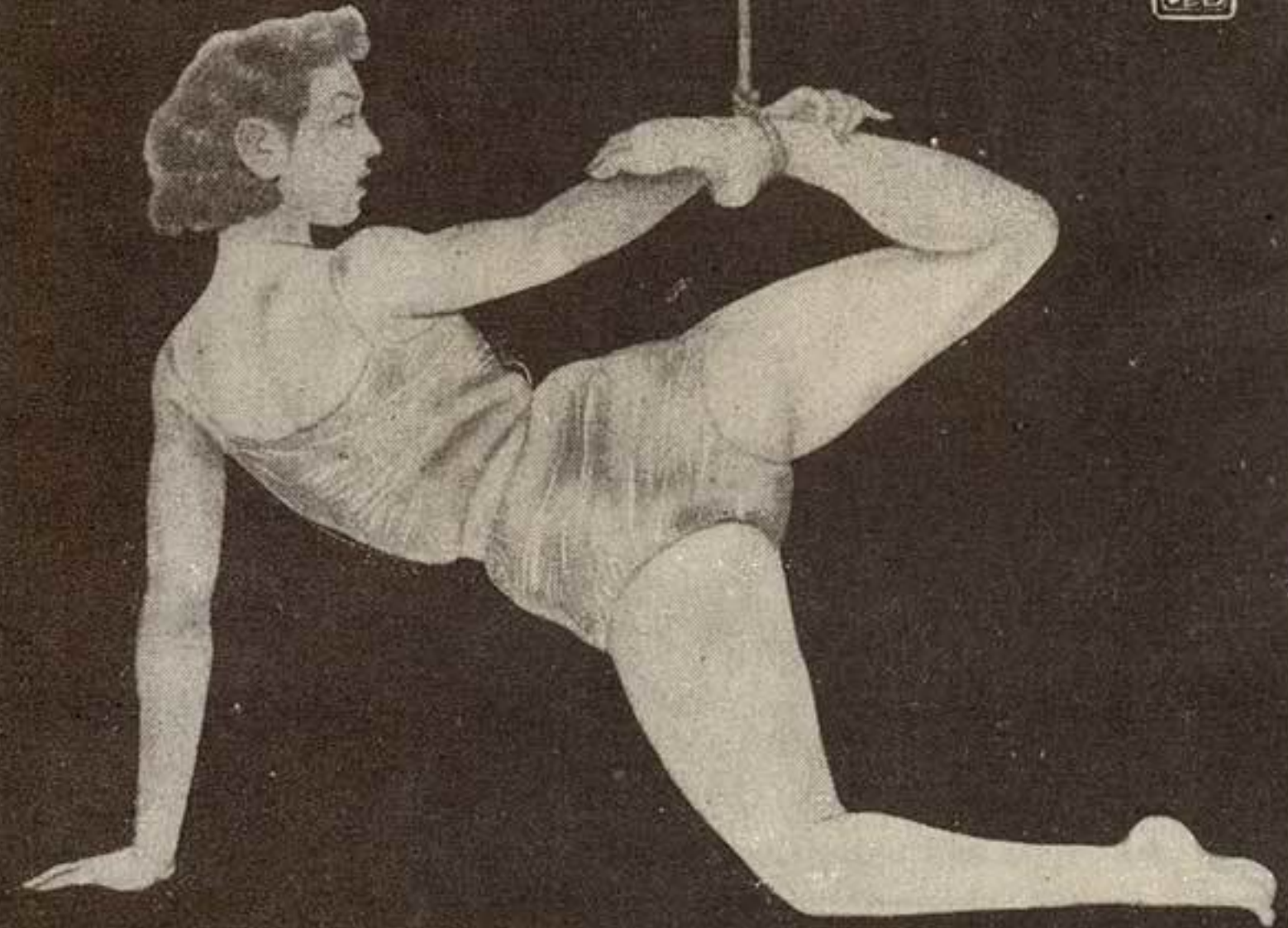
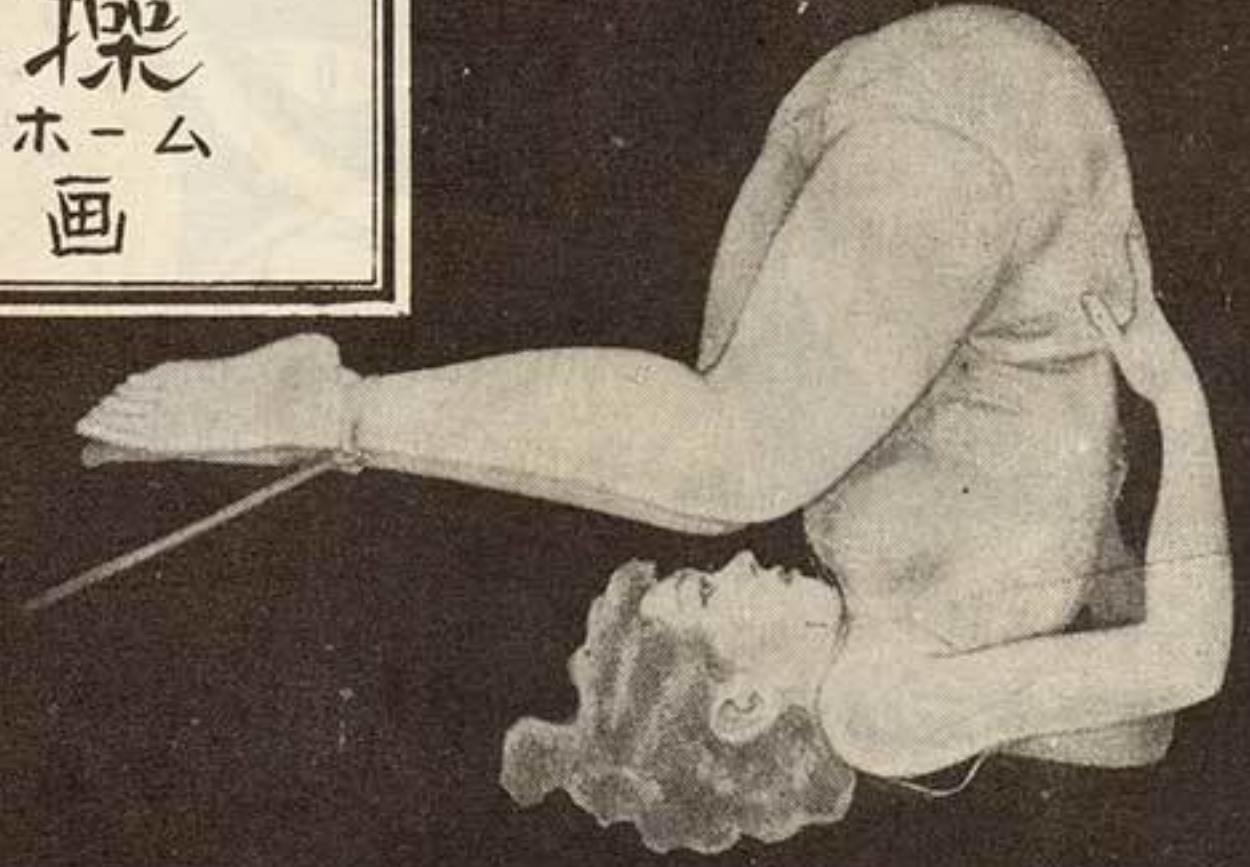
村山柴一

春山唯子

南川和子

沈陽通信、読者通信、代理部月報、原稿募集告知板、次号予告、編集通信、アイデア募集

縛りを利用した
美容体操
ナイロンのユニホーム
滝麗子画



八月の責絵

三叉洲の惨劇

伊藤晴雨画



高尾が仙台侯を振り飛ばして情夫の島田十三郎に操を立てた為に、三ツ又の洲で吊し斬りに遇ったという事が巷説に伝えられて居るが、実は仙台侯に身請けをされて仙台へ伴われて八十余才の長寿を保ったというのが実説だという。惨殺されたのは、或は仙台侯と同時に吉原に遊んだ榊原式部少輔の相方の薄雲の誤りではないかとも考えられる。八月に因みて「中洲の月」を描きました。三ツ又の中洲というのは現在の中央区中洲町の北端の、隅田川のデルタで徳川時代には船宿や料理屋が多く明治時代には見世物などがあって盛り場の一つであった。



戯文戯画

水着

畔亭数久



大変です。海水浴場の衆人環視の中で、麻理が何者かに殺されました。私がかけたつけた時、あわれや麻理の首は一米ばかりも胴から離れて無残に砂の上に転がっているではありませんか。兇器と覚しいスコップが傍に投げ捨てられていました……というのは嘘で、砂遊びのいたずらなんです。これは……。ほら、首がにこにこ笑っていますよ。

もうお判りの事でしょうが、穴を掘って頭を入れ、洗面器で顔を覆って軽く砂をかぶせたもので、しめってない砂地でやること、頭を入れる穴だけは水をかけて砂を固めるのがコツで、日中は砂が焼けているからだめ、苦しいから長く放置しては可哀そうです。首の方は胴体を手際よく埋めて砂が盛上らぬ様にする必要があります。



I J 主氏案

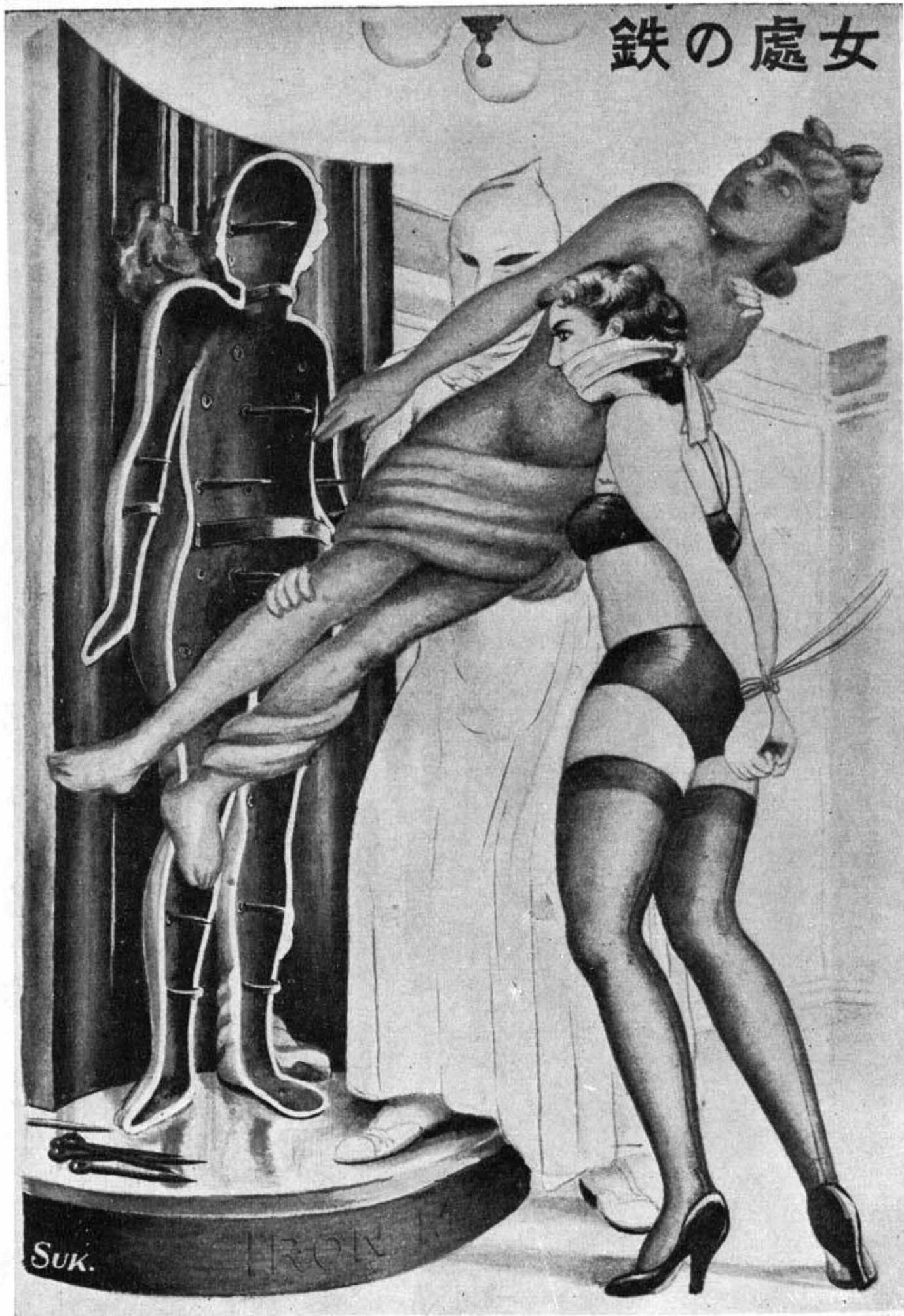
海中の岩に鉄鎖でつながれたエチオピアの王女アンドロメダ、海賊のために海へ追い落される捕虜の娘、元の軍船の舷側に掌を釘づけにされた対馬の女たち、馬の背に縛られ連れ去られる乙女、さては狂える少女オフエリアなどこの海と緊縛の戯画から幻想して下さい。

「お願い、待って下さい。あたしは公爵夫人です。お前たちの司令官の妻です。これは何かの間違いです。あたしを殺さないで………」

「こいつ間違いらしいぞ。それ！」



鉄の処女



鉄の処女の胎内に閉じこめられた娘は、やがて背後の小孔から無数の針にその身を刺し貫かれるのである。

釜茹



宗教迫害はどここの国のどの時代にも記録されている。そしていずれも非常に残酷である。しかも戦争中のような異常な環境ではなく、平和な社会の一隅で――

古事記以前の日本、それは現在のアフリカ大陸の奥地の様なものであったかも知れぬ。小麦色の美しい乙女が野蛮な生活をしている姿はたのしい空想をさそう。

笞刑





昨年十二月号にビニールの紐と鑲の応用で好評を得ましたが、その時準備したセルロイドの輪は、ついぞ利用する機会もなかったのですが、フランスのヌード写真からヒントを得て、かくの如き乳枷となりました。紐は赤色のゴムを利用、装着は特に春日嬢の協力により、同女の手によりました。

(辻村記)

セルロイド輪利用の乳枷

縄を用い
ない責め遊戯

お姉様、熱くないかしら？

蠟
涙

「熱くなんか、ないんだから、ちょっと蠟を落さしてごらんさい」



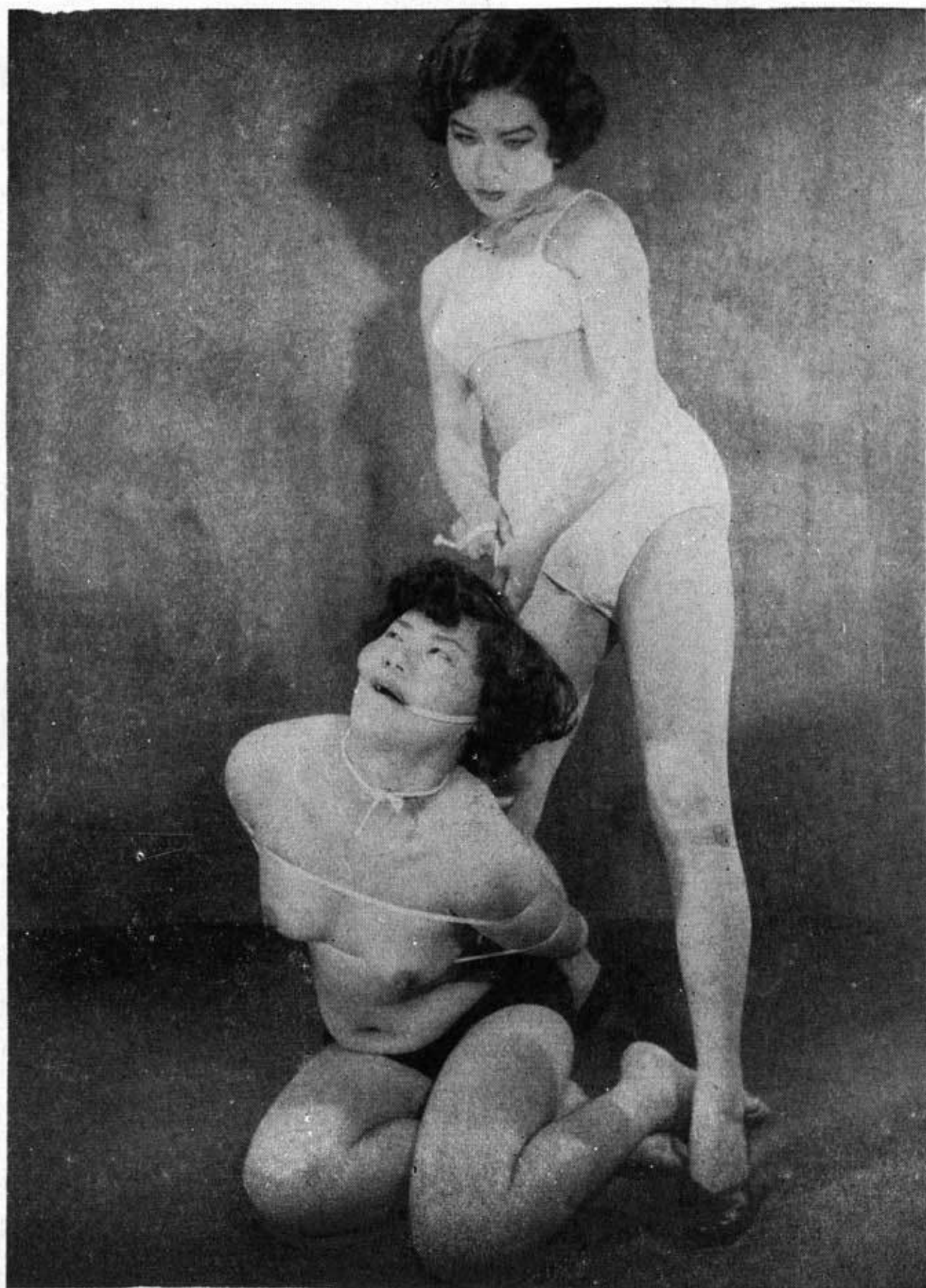
抓
り

「それくらいで勘忍して頂戴！ アザが残ると困るから……」



美 しい P O S E ◎

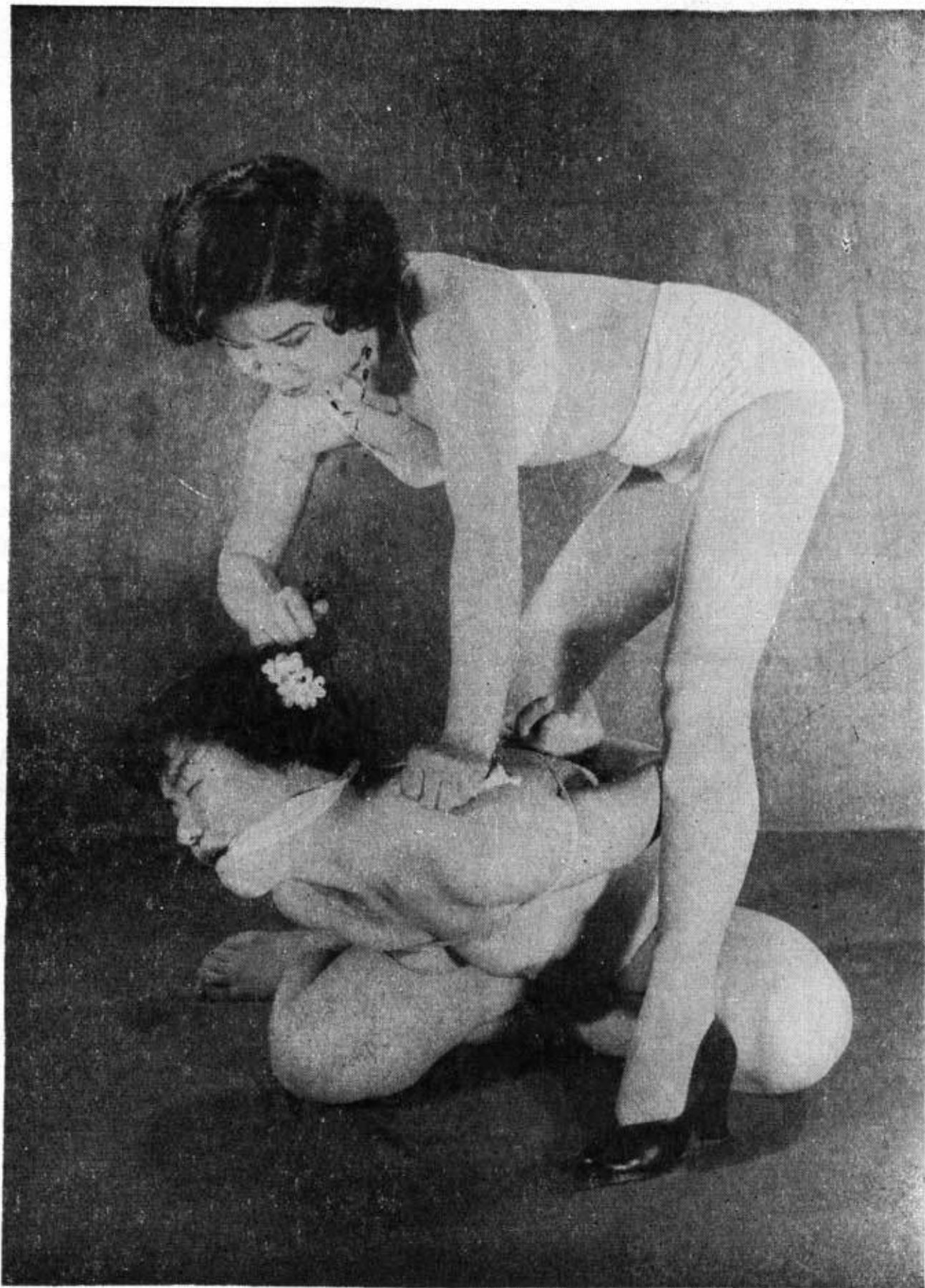
猿ぐつわを締め上げたルミ嬢のきつい表情、かもしかのように伸びた脚線が男の頭を蹴り上げることもある。



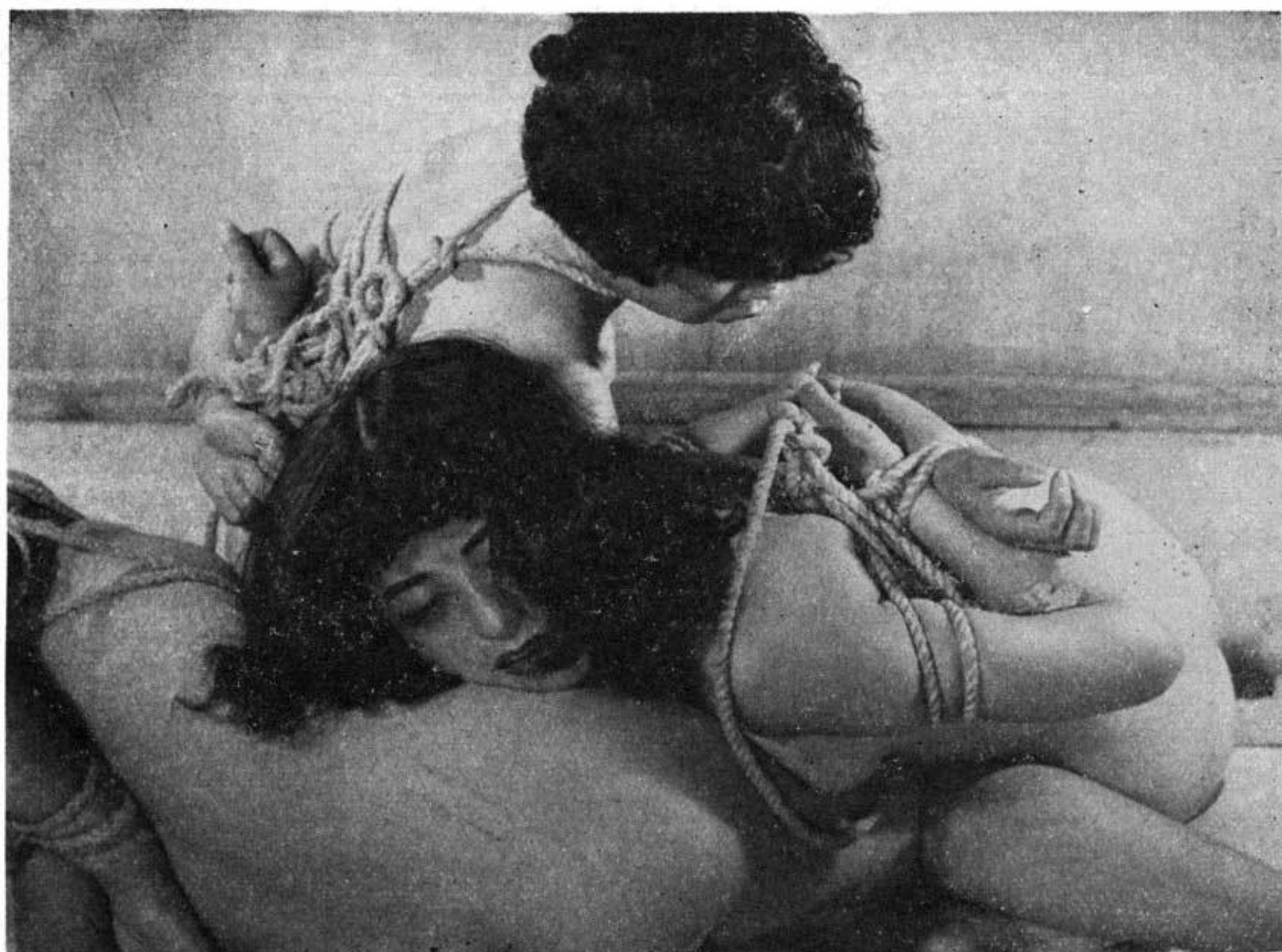
春日ルミ嬢
伊吹真佐子嬢

◎ ACTIVE と PASSIVE の

女の急所、髪を握られてぐらと蛙のように押しつぶされた真佐子嬢のまかせ
きった表情、痛いことならいくらでも辛抱するという大人しいお嬢さん。



辻村 隆・構成
塚本 鉄三・撮影



村田那美子嬢——杉 芙 美 嬢——坂口利子嬢

連 縛

後

手

(村田那美子嬢)



後
手
(腰紐)

— 中富綾子嬢 —



鞭
撻
(革帶)

— 杉美美嬢 —



新妻遊戯夏姿 着物……紗と……

晩酌のあとのひととき、ほろ酔い機嫌で新妻を縁側の柱に縛りつけると、紗の着物にすけて見える素足にそこはかとなきエロチシズムが漂う。



2



新妻遊戯夏姿 着物……明石……

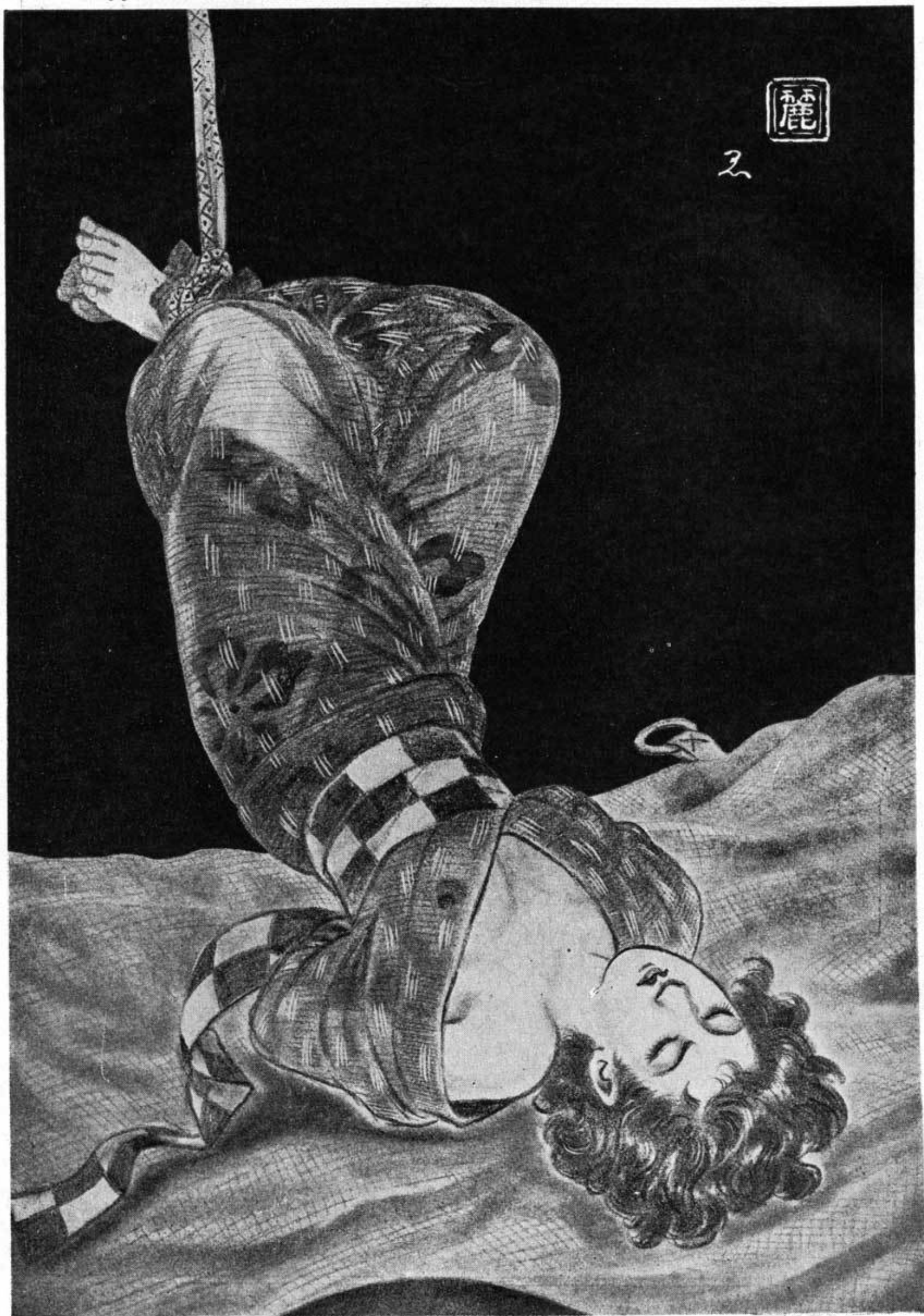
蚊帳釣ると部屋に戻りし新妻を 足吊りにして
我はたのしむ

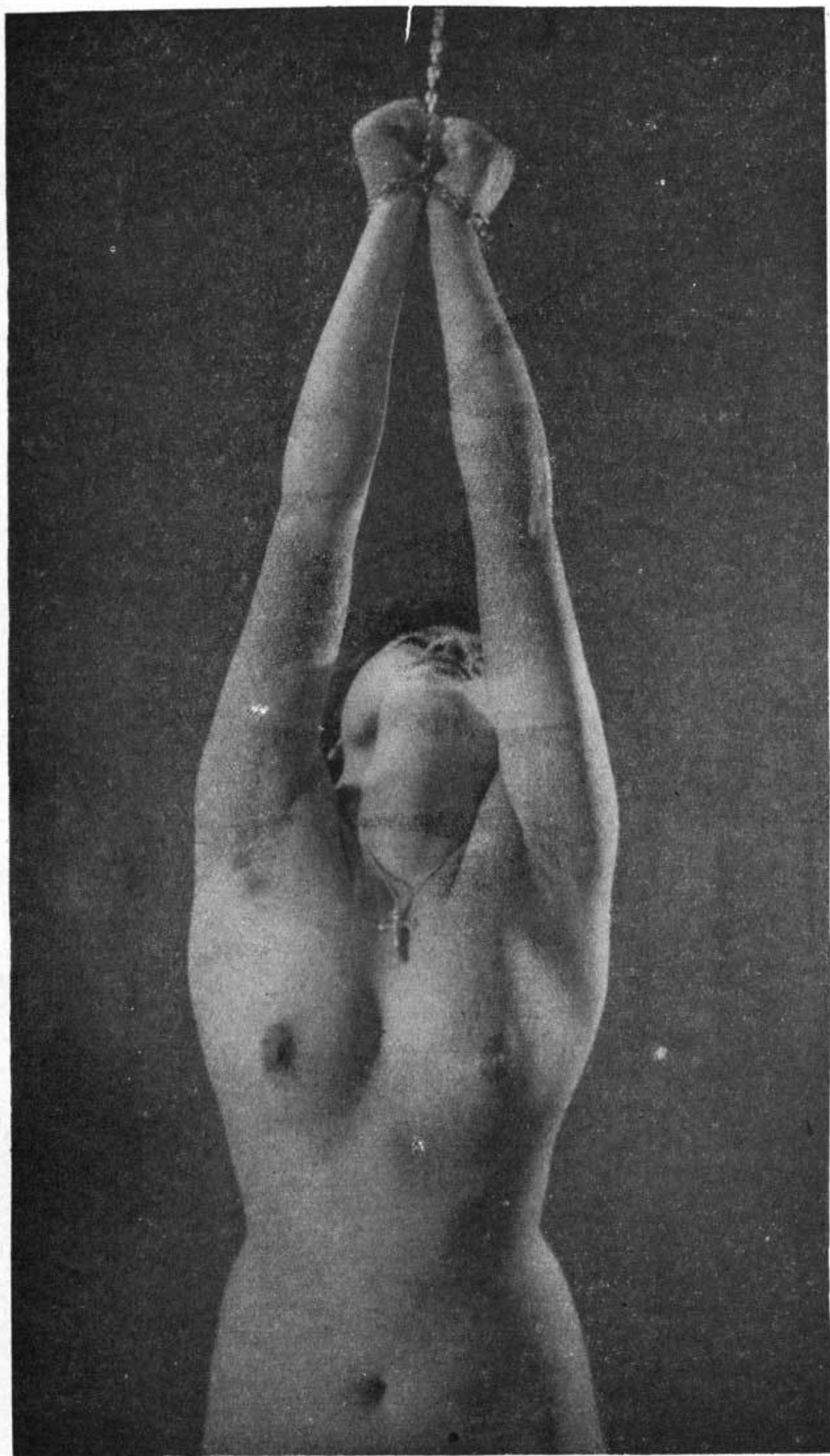
瀧

麗



又





..... ~ M S
.....

伊吹真佐子嬢

気まぐれな弄び



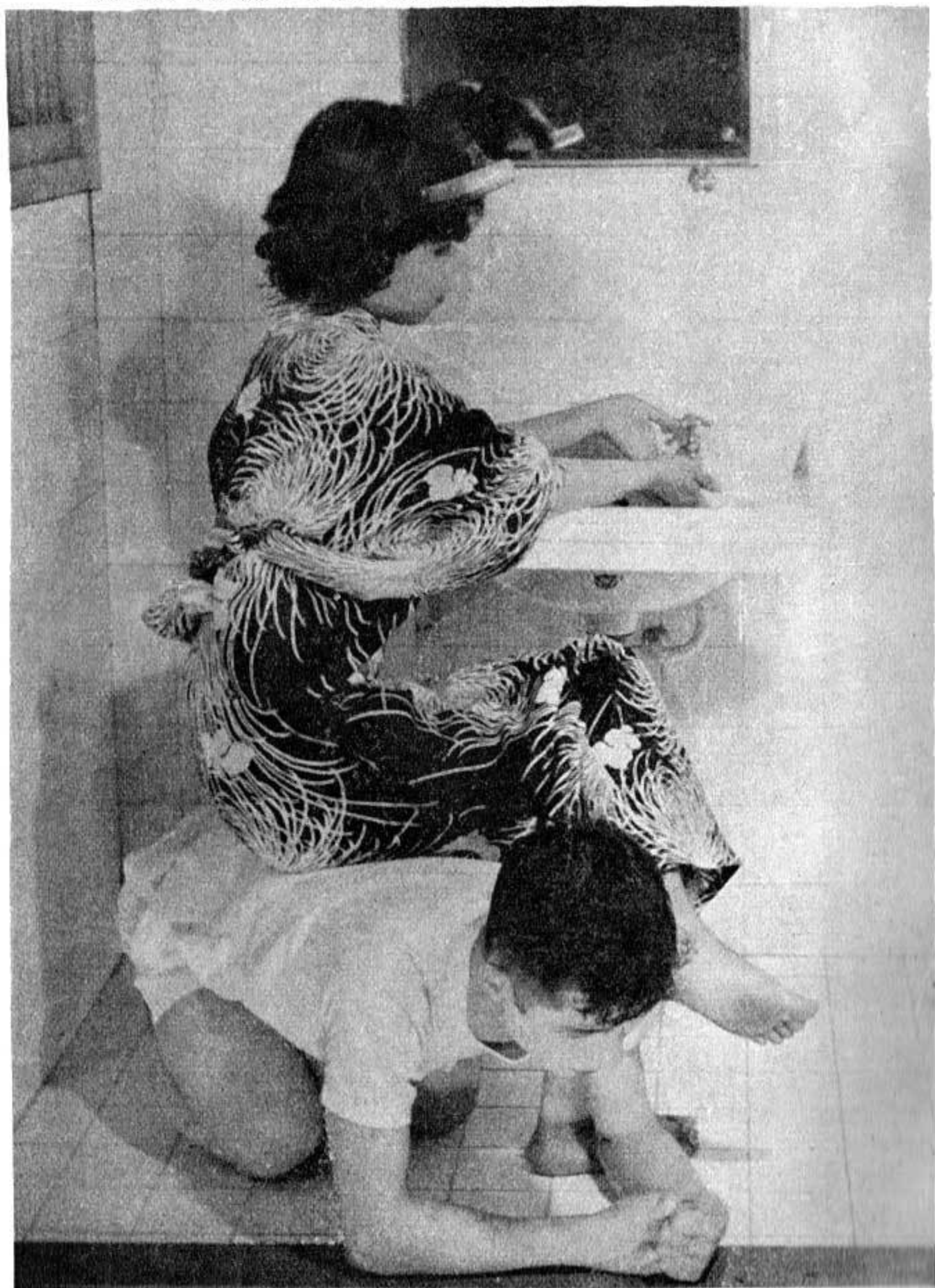
寝越きの悪い不機嫌な彼女

「これ、ワンちゃん、眠ってないで、少しは私を喜ばすような芸をしたらどうなの？
それとも、いうことをきかないで、お仕置をしてほしいとでもいうの？」

尻に敷く

御不浄から出てきた彼女

「手を洗ってお化粧するから、あんた、ちょっと腰掛になってごらん、動いたら駄目よ、御ほうびに、あとで足の裏でもなみさせてあげるわ」



男「擦りたいが、若い女の足の下になるのも万更悪くはないネ、エヘヘヘ」



春日ルミ嬢と
愛読者A氏

足

台

臀

打

ち

天 泥 盛 英・指導

「さあ、やるヨ！ 覚悟はいゝネ」

坂口利子嬢と
「愛読者」B氏





The Silent Piper.

(dig that crazy axe!)

亂 みだ

れ

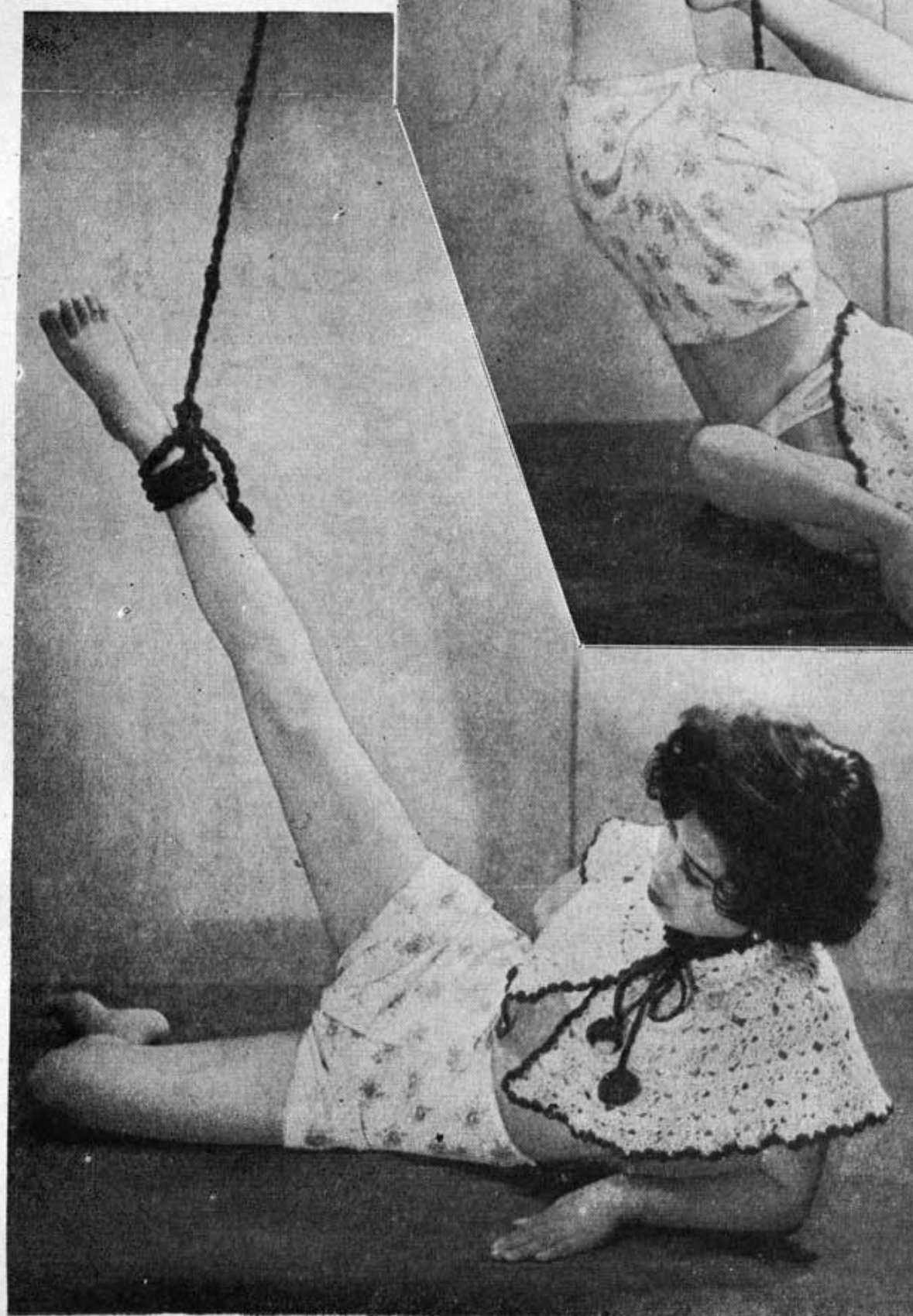
髪 がみ

伊藤晴雨・撮影



— 凄 艶 —

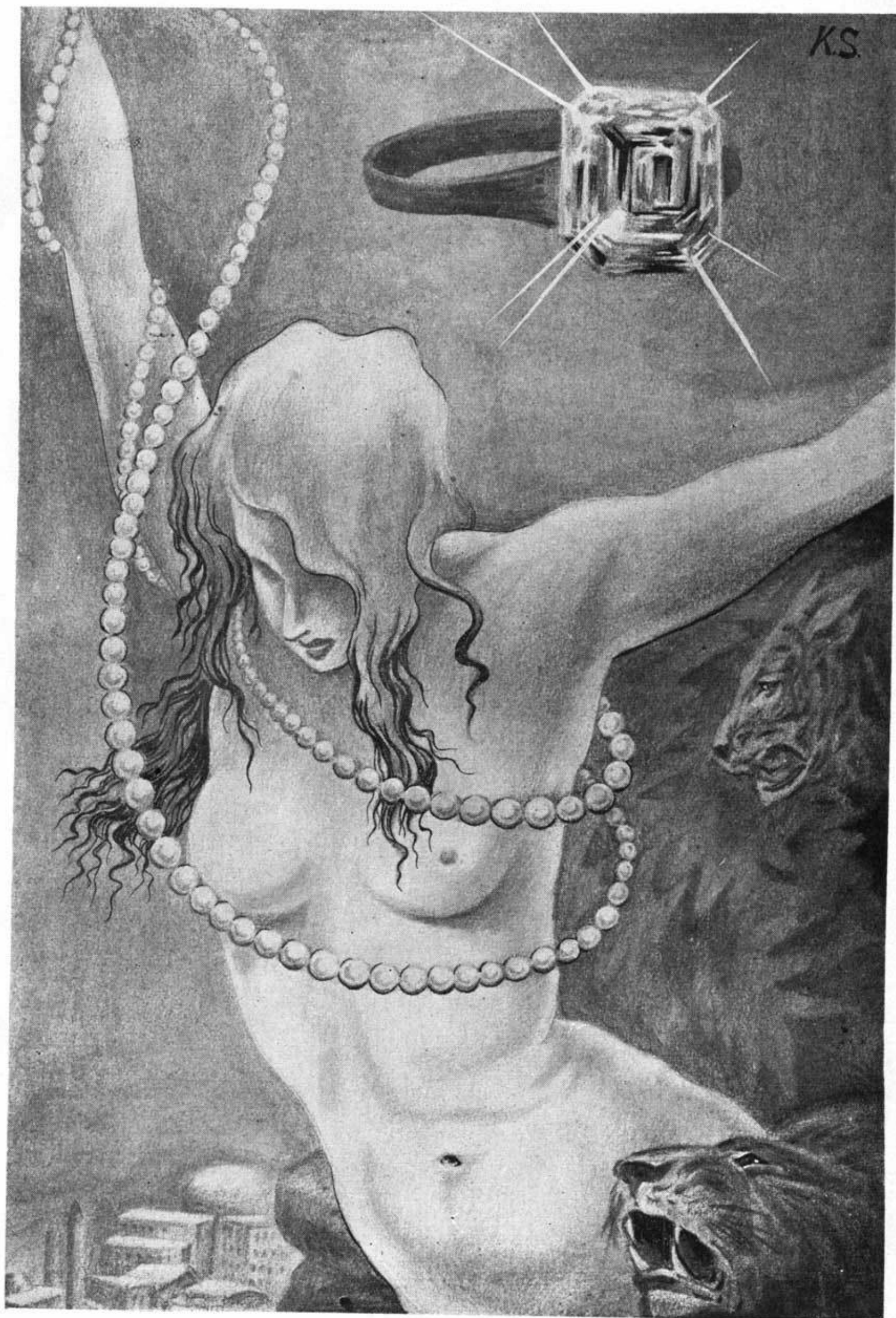
片
足
吊
り



構成 辻村 隆
モデル 萩千恵子嬢

桎 梏 (しっこく)

杉原虹児・画



文化人の文献研究誌

奇譚クラブ

1954年 8月号

(第八卷 第八号 通刊第七十一号)



駿河問の図

— 刑事博物図録より —

駿河の代官、彦坂九兵衛の創案であるというので、その地の名に呼ばれる。この拷問は、容疑者の四肢を背後に結えて木に吊り下げ、背中に重石を置き吊縄を捻り置いて手を離せば、急速度に回転し、これを数回繰返せば、いかに兇悪なる者と雖も白状すると云うので、江戸にては慶長頃侠客大鳥逸兵衛、寛永の頃には曾根甚六等にこれを行いしという。図は慶長見聞某の記事による。

魔 觸

(ましょく)

二 俣 志 津 子

—

ベルが鳴り響いている。佐登子は重いボストンバッグを持てあましながらも、階段を一息に駆け降りて行った。

二三時一九分。列車はゆるく動き出し、駅の立売の売子達は、緊張を解いて戻りかけている。階段の直ぐ脇が郵便車で、その前が二等車、その前も二等車である。

佐登子は二等車のステツプを踏んだ。電燈がゆらぎ、人影がゆらぎ、浜松のプラットホームがすべり出した。

——さようなら。浜松。

——さようなら。あの暗い織屋^{はた}。

——さようなら。淫乱じじい。

——さようなら。可哀そうな友達。織姫達。

佐登子は、振返って、改札口の方を眺めた。

しかし、もう、そのあたりは闇が流れて、灯りが霞んでいた。

——助かったのだ。もう、あの淫乱な織屋のおやじは追って来ない。ちよっぴりの借金で身体を要求するマールカピィ。

彼女は車内に入ろうとした。そして、ドアのガラス扉に始めて気付いた。

——二等車だわ。どうしようかしら？

馬鹿正直の彼女は二等車を通り抜けて三等車へ移ることに気が引けた。三等切符しかない者は、二等車に一步も入れないように思い込んでいた。あきらめのいい彼女は、ハンケチを敷いてその場に坐り込み、丸まっちい膝を抱えて、真暗な窓外をぼんやりと眺めた。これからどうなるのか。それは彼女自身にさえわからない。

——仇くわ。東京へ行ったら仇くわ。

それ以外には、何も考えることが出来なかった。
「天龍川。天龍川。」

と駅員の呼ぶ声が、物懶げに聞えて来た。

天龍川駅からは、二等車に一人も乗車して来る人はなかった。下車する者も居ない。で、彼女の瞑想は破られず、彼女は孤独のまゝ（彷彿）と、呟きつづけられた。夜気がすうと吹込んできて

彼女の尿意を誘う。彼女は、身顫いしながらこらえた。二等車内は暖かそうな灯りと雰囲気を感じられる。

佐登子は、いよいよこらえられなくなってきた。目の前のドアの向うにW・Cがある。ドアのガラスには二等車と記されてある。

彼女は起上ってドアに手をかけた。が、開ける勇気がなかった。汽車に乗ったことさえ、これが初めてであるので、彼女の躊躇も無理はなかった。しかし、生理的要求は、少しも待つてはくれない。そののみか、ますますつのるばかりである。

彼女は、内田と云う科学者の詩を想い出した。

それは確か、「俺は小便をしたい」と云う題で、数寄屋橋のところで小便をしたくなかったが共同便所がない。立小便も出来ない。ポウコウがはれつしそうだ。俺は小便がしたいが出来ない。俺は死にそうだ。と言う意味の詩である。

彼女も又、あたりをキョロキョロ眺めまわした。そしてすぐに適当なところを見付けた。連結器にまたがってあそ



こですればいいではないか。

彼女は他に考える余裕もなくなって、すぐに連結器にまたがり、ガクガク身体をゆすられながらズロースを下して、ふと、郵便車の方を見た。すると、丁度車掌室から車掌がカンテラをぶら下げてこちらへ向ってくるところであった。佐登子は腰全体の筋肉を必死に引締めて尿意をこらえ、元のところに蹲った。

列車は磐田駅にすべり込んでいた。

二、三人が彼女の前を通り過ぎて二等車内に消えて行った。すぐそこにW・Cがあるのがうらめしかった。

彼女は又一人になり、列車は動き出した。

佐登子は起ち上ろうとして、スカートの下にズロースが見えているのに気付いて、あわてゝオーバーの前を合せた。だが、誰もそこには居ないのに気付くと、素早くズロースを脱いでボストンバックにつめ、乗車口のドアを開け、暗い闇に向かって蹲んだ。もうこらえることは出来なかった。彼女は、乗車口を漏らし、心ゆくまでに放尿した。

「貴女。」

佐登子は肩を叩かれて、はっとした。しかし、放尿は一寸止っただけで、あわてて立上ったのでスカートを濡しつづけた。

「お氣持が悪いの？」

若い女の声である。が、佐登子は振返ることが出来なかった。彼女はかすかに頭を振った。

「お小用？」

「……………」

「トイレットがふさがっていたのね。」

女は彼女の両肩に両手を置いて、顔をのぞき込んできいた。佐登子は避けようと身をよじった。

「危いわ。ドア、閉めましょうね。」

女の香水の匂いが、ふわっと佐登子の鼻をついた。

「どちらまで？」

「東京。」

「そう。お一人で大変ね。席に帰ってお休みなさったら」

「私、こゝでいいんです。」

「どうして？こゝ、冷えるわよ。又、お小用よ。」

女は小さな声で快く笑った。その笑声は佐登子の何と云うことなにかたくなっている抵抗を芯から解かしてしまふ力があつた。

「私、三等切符なんです。」

女は又笑った。そして、強く彼女の肩を抱きしめて、彼女の耳を軽く噛んだ。

「貴女、可愛いゝのね？あら、スカート濡れているわ。お脱ぎになった方がいゝわよ。オーバー着ているからわからないでしょ。お席へ帰ったら私のお借しするから、間に合せて着替えなさったらいいわ。」

「でも……………」

「デモとおっしゃっても、ぬれているんですよ。」

女は、有無を言わず、屈んで佐登子の腰へ手をまわし、スカートのかきホックを外して、シユミーズのない彼女の、その下に何もつけてないのを知ると、むっちりとした小さな温い掌を、素早く引締めようとした佐登子の膝頭にあてて、含み笑いをした。

「濡れたまゝだと毒だわよ」

「いや、いやです」

佐登子は、激しく身を揉んだ。

女は素早く佐登子のスカートをはぎ取ってポストンバックの中に押込み、バックを提げて二等車へ入って行った。佐登子は、オーバーの前をおさえて女の後につづいた。

二

「私、志津、二俣志津子。おかしな名前でしょ？」

「いゝえ。私、林佐登子。宜しく願います。」

「さどこ？ どう云う字？ 虹の世界のサトコって云う映画あるでしょ。」

志津子は自分のオーバーを脱いで二人の膝にかけた。

「佐は、佐藤の佐。」

「すけ、って云う字ね。」

「登は、のぼる。」

「いゝ名前ね。で、東京はどちら？」

佐登子はうつむいた。

「家出？」

佐登子はこくりと肯いた。

「御両親が心配なさっているわよ。行先のあてがなかったら私の家へいらっしやい。そして、東京見物でもしてすぐお帰りなさい。」

「私………帰らない」

「そう強情張るんじゃないの。東京駅には、あなたのような娘さんが降りるのを待っている悪い男の人が沢山居るのよ。そして、うまくあなたを欺して、身体を弄んで、荷物はみんな取上げて、特飲街

へ売り飛ばしてしまうのよ。そこへ一度入ると、もう出られないのよ。悪いことは言わないからお帰りなさいな、帰りの汽車賃位なら、私が都合つけてあげるから。」

「でも………」

「また、デモ。」

志津子はくつくつと笑って佐登子に寄りかゝり、片手で彼女の腰に手を廻して、耳に口をあてた。

「いゝ身体してんのネ。」

佐登子の耳のつけ根は真赤になった。そして、しなやかな指先が身体にふれる度に、背すじがぞくぞくとするのをどうする事も出来なかった。

「寝ましょ」

志津子は、佐登子を自分の膝の上に引き寄せた。佐登子は志津子の温かい腕に抱かれながら、淫乱親父から同じようにされた時のように、嫌悪の情が湧かないのを不思議とも思わなかった。列車の震動は快く彼女の身心をゆすぶりつづけた。最早やどうなってもかまわないほどに睡魔が佐登子を捉え、意識を吸収していた。

——眠っては、いけない。

——このひと、早くスカートを借してくれないかな。困るわ。

——検札に来たら、どうしよう。私は三等切符しかない。お金もない。——やっぱり三等車へ行った方がいい。

——このひと、何ていい匂いがするんだろ。

佐登子は温い掌が全身を静かに撫ぜまわしているような錯覚に捉われた。不思議な幻覚である。掌は自由に佐登子の肉体のすみずみまで、快いリズムを以て、或いは軽く叩き、或いはゆすぶり、或

いはつまみ、忽ち、一直線に雲の間から空中をすべって深い紺青の淵へ落ち込んでゆく。抵抗の意識は崩れ、肉体はしびれるような忘我の空間の中に漂ってゆく。

——いけない。こんなところでお小用してはいけない。

と、夢中で筋肉を引締める。

——佐登子さん。佐登子さん。

その瞬間、佐登子は、はつと目をさました。志津子はいいた片方の膝の上へハンカチをひろげてミカンの皮をむいていた。そして、その一とふさを佐登子の口に押し込んだ。

「佐登子さん。あなた、うなされていたわよ。おみかん、おいしいでしょ。」

佐登子は、この見知らぬ女の膝の上で、子供のようにな素直に肯いた。

「もうすぐ東京よ。私も序でがあるので東京を少し御案内しましょうね。」

「いいえ、いいんです。」

「あらすぐに、お帰りになるの？」



「私……」

「そうそう、東京へ着いたら、私の服をあげるわ。きっとよく似合うわよ。私のところでお食事してからお帰りなさいね。家の人が心配しているから」

「私……帰りたくない。」

「では、どうするの？」

「仿きたいんです。あの……奥様のところで、女中にでも、使っていただけないでしょうか。私、一生懸命仿きます。」

志津子は微笑した。

「まあ、奥さんだなんて。」

「お願いします。」

「お給料なんか、払えないわよ。」

「いいんです。どんなことでもします。奥さん、私を見離さないで下さい。」

「困るわ。」

「私、奥さんのおそばに居られるだけでも幸福です。」

「やっぱり、お家へお帰りになった方がいいわ。」

「いいえ、私、帰りません。帰る家もないのです。私は山奥から織屋へ売られてきたのです。鬼みたいな親です。私が織屋の主人の妾になるのをすゝめるんです。それがとても出世だなんて……。」

佐登子の眼から涙があふれ出た。志津子はハンカチで彼女の涙を拭き、ミカンの一とふさを佐登子の唇にあてた。佐登子は幸福であった。こんな幸福感を味わったことは今迄に一度もなかった。そして、佐登子はこのひとのためならどんなことでもしよう。と、心に誓っていた。

三

春とは言え、まだ桜は咲いていない。明方の空気は冷え冷えとしている。佐登子は二俣志津子の後に従って東京駅を出た。

客待ちのタクシーの一つが、ドアを開いて彼女達を待っている。志津子は少しのためらいもなくタクシーに乗った。その動作には、

一分の隙もない。佐登子は彼女のそんな態度を羨しく思った。到底自分の及びもつかない力を志津子に見出した。と、羨望は憧憬に変わり、あわてて彼女の後からタクシーに乗込んだ。佐登子にとっては昨夜からのことがすべて夢のように思えた。タクシーなど、ついぞ乗ったこともない。バスに乗ることさえ惜まれて急用の時は近所から自転車を借りて、切通しの岩くれ道をガツガツと走るのが日頃の生活であった。

そのような彼女にとってタクシーが何処をどの方向に走っているのか全然判断のつきようもない。たゞ、目を閉じている引締った美貌のこの二俣志津子に魅せられて、その肩に肩を寄せうっとりその横顔を眺めていた。

——何故に、この人は物を言わなくなったのだろうか。

——まるで、この人は永遠に沈黙してしまうようだ。

——奥様。奥様、私はあなたの奴隷になります。お目をあけて下さい。

——奥様、奥様、私のすべてはあなたのものです。この髪も、この目も、この唇も、この乳房も……胸も……すべて……

——奥様私はいのち迄も捧げます。どうぞ私を自由にして下さい。

——奥様。それから佐登子、と、おっしゃって下さい。

その時、美しい横顔のま……

「運転手さん。その角でいいわ」

と歯切れのいい声で車をとめさせた。そして志津子は金を払って降りた。

「佐登子さん」

「は、はい」

「疲れたでしよ。お風呂、湧かしてあげるわよ。」

「いいえ、奥様、私が湧かします。薪割りや水汲みはなれておりますから。」

「あんだ。可愛いいのネ。薪割ったり、水汲んだりしないでいいよ。」

「は？ どうしてですか？」

志津子は眼を細めて佐登子を見た。両手に荷物を持った佐登子は颯爽と歩く志津子におくれまいと、腰を振り、大股で歩き始めていた。

佐登子はオーバーの下が素裸であることをすっかり忘れていた。

「荷物を一つ、私が持ちましょ。」

「いゝえ、いゝんです。奥様。」

「疲れるでしよ。」

「いゝえ、なれておりますから。これよりもっと早く歩けますワ。」

佐登子はオーバーの裾をひるがえして更に急いだ。志津子は時々振返っては彼女を待った。

街にはまだ人影もない。志津子は久し振りで兄の二俣三郎の家の玄関に立って、ベルを押した。静寂な家に、こもったベルの音が鳴っているのがかすかに聞える。ドアが開き、松葉杖の音が廊下に鳴り、近付いてくる。玄関の灯りが点く。

「志津か？」

「えゝ、お客様なの。一人。」

鍵が外され、松葉杖の音が去って行った。佐登子は、どんな人だろう。と、思った。が、志津子が玄関の手を開けた時は、もう、そこに人影はなかった。

「バス付のお部屋にしましょうね。」

「え？。バス？」

「ほゝ、お風呂のあるお部屋よ。ホテルみたいでしよ。」

佐登子には、何が何んだかさっぱりわからなかった。が、部屋に入ってみると、成程、洋画で見たことのある様な風呂があり、ダブルベッドがある。

「さあ、オーバー、お脱ぎ。」

「はい」

佐登子は、何の気なしにオーバーを脱いで、と、気付いて両手で前を覆った。志津子はお腹をおさえて笑った。

「そうだったのね。私、すっかり忘れていたわ。ごめんなさい。」

しかし、彼女は、何も忘れていなかったのだ。ドアの鍵を内からかけると、笑いをこらえながら、

「ごめんなさいね。でも、もう、こゝには私とあなたより他に誰も居ないのよ。それに、お風呂に入るのだし、すっぱりお脱ぎなさいな。」

「はあ」

「何もそんなに固くならなくてもいいでしよ。それとも脱がしてもらいたいのか？」

「いゝ、いえ」

「ねんねエネ。さ、ママが脱がしてあげる。いい子ちゃんね」

志津子は、佐登子を抱きしめて、顔中にキツスをし、つ、と、離して、手ぎわよく佐登子の服を剥ぎ取って、それもボストンバックの中につめ込んでしまった。

「あんだ、いい身体してんのね。羨しいわ」

「さ、お風呂にお入りナ。あんだ。何度ぐらいのお湯に入るの？」

「私、知りません。」

「でも、いいから、言ってごらん。」

「三十六度位い。」

「そう？」

志津子はバスに湯を満して、温度計を入れた。

「はい。三十六度。」

佐登子は片足を入れて、三十六度のぬるさに驚いた。

「四十度にして下さい。」

志津子は又笑った。

「丁度よくして下さい。でしょ？ 少しきゆうくつだけど、一緒に入りましょうか。いいでしょ？」

志津子は佐登子の思惑など、考えてもいない。思ったことをズパズパやってのける。佐登子は、志津子の磨かれた美しく裸像に呆然と見入った。少しの無駄もない、均勢のとれた彫刻像を見るようで、しかも、そこには血が流れ、力がすみずみにあふれ、幻惑され志津子が近付いた時は全く息をひそめ、胸がおののいているのを覚えていた。

——映画女優でこんなひと、いたかしら？

「ちよっと失礼、あんだ。いい足、してんのネ。」

「石ケン、じゃんじゃん使ってよ。私、不潔な人、きらいよ。」

「は。」

「心臓まで洗ってよ。」

「はい。」

「馬鹿ネ。心臓なんて洗えないわ。ホホホ……あんだ。今日、帰

る？。」

「奥様。」

「ミスよ。私。」

「すみません。」

「今夜、お帰り。どこ。浜松？」

「は。」

「くどいようだけれどね。」

「奥様。いいえ、あの……私を捨てないで下さい。いつまでも、そばにおいて下さい。お願いですから。」

佐登子は志津子に手を合せて見せた。

「私。情深い女じゃないのよ。それでもいい？」

「ええ。給料もいりません。昼も夜も働きます。」

「あら、何んにもしなくてもいいのよ。でも、あんだ。我慢出来ないワ。」

「どんなことでも、我慢します。」

「本当？」

「ええ、必ず。」

「私、あんだを縛るわよ。」

「いゝんです。」

「叩くわよ。」

「いゝんです。」

「もっとひどいことするわよ。」

「いゝんです。」

「本当ネ？」

「本当です。」

「じゃ、いいわ。さ、洗ってあげる。」

「いゝんです。」

「言うことを聞きなさい。」

志津子はバス一杯に泡をたゝして、佐登子の身体を洗いはじめた。

四

「痛い?。」

「いゝえ。」

「ではもう一寸締めていゝ?。」

「えゝ。」

佐登子の素肌は藤できりきりと巻かれていた。首と乳房と腰の一部分が、素肌のまゝで残されているだけである。

「一寸、素敵じやないの。」

志津子は時々離れては、藤で巻かれた佐登子を眺めた。脚も腕も曲げられると自分では真直にのぼせられない。

「男の人と組合せると、もっといゝんだけれどな?一寸したアクセサリーになるワ。乳房と腰はビロードを張ろうかしら?幾人も組合せたら面白いものになるかもしれないわね。」

志津子は、幾人かの女をこのようにして、仰向けに、或いは四ツ這いに、様々な姿勢に並べた部屋を作り、ドアにW・C、紳士専用と、記すことを考えている。勿論サービスである。特別珍客用だ。

志津子は、佐登子の腹のあたりに腰掛けてみた。

「苦しい?。」

「いゝえ。」

「正直に言ってよ。」

「えゝ。」

「お腹、空かない?。」

「少し、何かたべたいわ。」

志津子は肯いて部屋を出て行った。そしてしばらくすると、松葉杖の音が近付いてきてドアが開いた。佐登子はそのに、志津子によく似た容貌の跛の青年を見た。

青年はドアの鍵をかけると、無雑作に近寄ってきた。佐登子は声をあげて逃げようと藻掻きあせった。しかし、どうにもならない。青年は、当惑したような、照れたような表情になった。

「今、こゝに、男って僕しか居ないんです。妹が、兄さんでもいゝから行ってやってくれ。と、言うので来たんですが……僕でいいませんか。僕は跛なんで、どうも、女の人に嫌われ通しです。」

「あの……」

「私、何か喰べたいんです。」

「いゝです。」

「そう。本当ですネ。」

青年は顔を輝やかして松葉杖を捨て、佐登子に這い寄った。

志津子の兄三郎は、この日から、志津子の目を盗んではこの部屋へ来るようになった。佐登子は、志津子が兄のためにわざと留守にするのではないか、とさえ考えるようになった。そして、今では、留守にしてもらいたい、ひそかにねがうようになっていた。

志津子はいつもと変らない。彼女は、どんな大事件がまき起っても、狼狽しないのではないかと思わせる静けさが、いつも表情のど

ここにたゞよっていた。

「どう、佐登子さん。藤を解いてあげましょうか?。」

「いえ、いいですッ。」

「御不自由ではないこと?。」

「は?。」

「そうお。その藤がやがて、あなたの肌そのものになるのよ。私今



本質的にブラトニツクなものなり。ってね。」

志津子はきびすをかえた。

五

三郎はともすると藤を編む手を洩らせた。と、すぐに、後に立っている志津子の手から鞭が飛んだ。

未亡人、有閑マダム用の男の藤人間を作っているのよ。需要が多くて、材料が間に合わない位いな。あなたはその中で一番可愛いから、兄の専用になっているのよ。他の人は、それはみじめよ。一度見せてあげましょうか?。」

「結構ですわ。」

「兄は余程あなたを可愛がっているのね。よく掃除も行きとゞいているし、お化粧も上の部だワ。そのうちに、男の藤人間と組合せて装飾品にしてあげるから。腰をきりきりと巻き合せ、胸は反らせて永久に顔が合わないようにするの、ちょっと、象徴的じゃないこと。人間、生ある限り苦しみは絶えず、愛とは

三郎は、佐登子の周囲を藤で網代に編んでいる。佐登子は次第に藤にくるまれてゆく。彼女の肉体に巻かれた藤は遂に解かれないうちに、まるでカイコのように、藤の中に姿を消しつゝあった。

「ナゾナゾよ。この中にあるものを当てた人にこの中のものをあげるの。実験用はもう私には不必要なのよ。兄さんはお名残惜しいでしょうけれどね。」

佐登子は目を閉じたまゝである。自分が他人の玩具になることは嬉しいようでもあり、悲しくもあった。

「私の肌は本当に、藤になってしまふのかしら？」

「さあ、また触手をのばして材料集めに行こうかな。」

——触手！魔触だわ。

——魔触。魔触。

佐登子はそっと目をあけて志津子の手を見た。が、むっちりと可愛らしいことに変りがない。容貌は、やはり、人をして魅せしめずにはおかぬ妖しさのたゞよった、美貌だ。

「もう大分編めたネ。最後の接吻を許してあげるわ。」

【浣腸通信】

私は浣腸に対して強い興味を持って居るもので御座居ます。奇ク六月号に「浣腸願望」三月号「高庄浣腸」我が少年時代の犯罪「等は、全く夢に描いて居た事が現実となって、マニアたる私に取りましては耐らないものです。幼い

頃腸が弱くて、よく浣腸された事も大いなる原因と云います。また最近では病院生活で浣腸をされた事も、入院中同室の若い女性が浣腸された事を目前にした記憶も脳裡より消え去らず、幻想にかられて居る次第です。浣腸願望もありますが、異性に対しての浣腸をして見度いのが現在の偽らざる心境

志津子は、そう云い残して部屋を出て行った。三郎は佐登子の首を抱いた。彼の眼から、佐登子の頬へ、熱い涙がぽた／＼と落ちてきた。が、佐登子は涙も出ない。彼女は三郎の唇を軽く噛んで微笑した。

「泣いちゃ、おかしいわ。」

「うん。佐登子さん。僕の舌を噛み切ってくれ。」

「いやよ。」

「じゃ、僕があなたの……」

「いやいや。私、生きたいのよ。それに、いつか、魔触を滅したいの。」

「え？ マシヨク？」

「こっちのことよ。うわごとよ。生きていたらきつとお便りするわ。」

志津子はなか／＼帰って来なかった。佐登子には彼女の私生活は計り知ることの出来ない蒼い蒼い淵の底とも見えてきて、自分の手にとどかない人の様にも思えてくるのであった。

——終り——

です。浣腸の面も少々コレクして居ります。大半は婦人雑誌の附録の子供のが主です。画によって浣腸器具も色々とあり、趣も又入異なり、時々開いては満足感に侵って居ります。

存じます。勿論、写真、絵画の交換も願わしう存じます。私は入院中に見聞した、若い女性の魅力的なヒップをあらわにし、羞恥と苦痛に歪んだ美しい表情、呻き等の未だ記憶から去りきらぬ中にと、一つの文にまとめて居ります。浣腸ばかりでなく、赤ちゃんの様にオシメまでさせられて居たあの女

性の姿は、今でも忘れる事は出来ません。
(S・A生)

御誌七月号の「フレンチ・カンカン」では沼田扶二世様が強制的に浣腸される少女たちの様模が書いてありましたし、又、六月号では山田芳枝様が「浣腸願望」で浣腸をしたいというメイドさんの告白が載っていました。その他にも男の方の浣腸についての記事もあったようですが、私は御誌を拝見する事によつて、自分だけがこの様なことに関心を持っていたのかと心配しておりましたが、他にも同じ方がある事を知つて大変心強く思つております。

私は本年二十二才の地方の小都市に住んでいる者ですがまだ高等学校に通つております時胸を患つて養生に来ていました従姉がひどい便秘で、朝起きた時、冷水を飲んだり、冷たい牛乳を飲んだりしても一向にお通じがなく、いつも頭痛がするとか、肩が凝るとかばかりいつておりました。

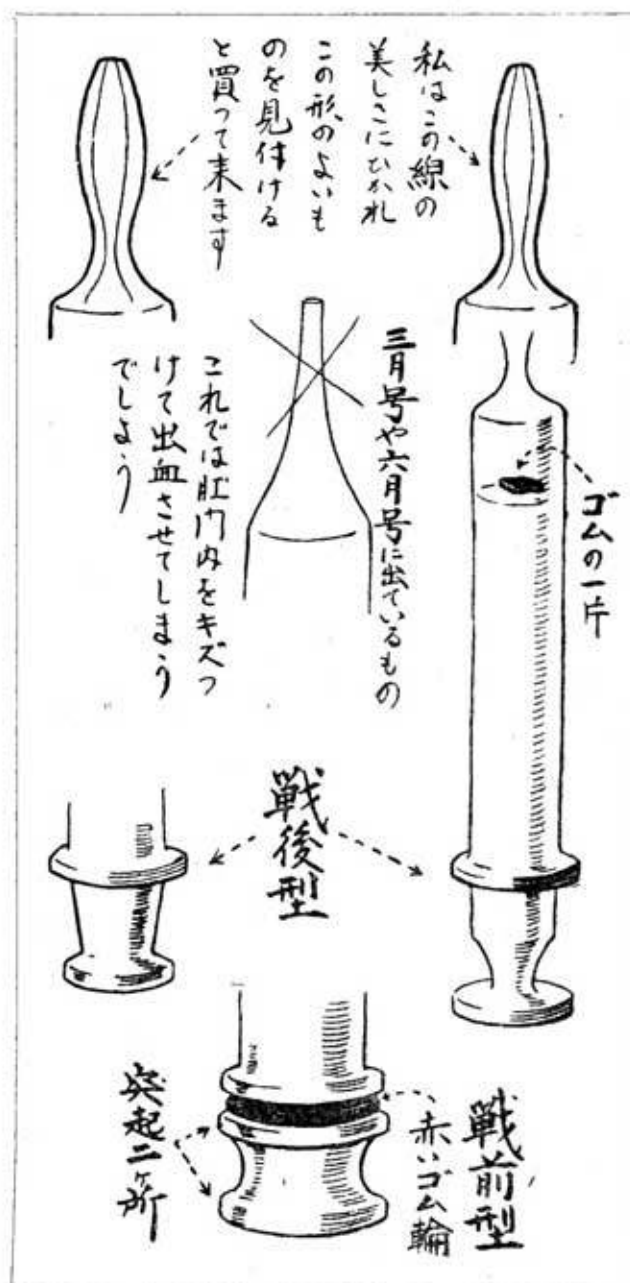
とうとうお医者のおすゝめで浣腸をする事になりましたが、神経質な従姉は、どうしてもお医者へ行

って看護婦さんにそんな事をされるのは嫌だといつてきゝいれませんで、私の母の案で、私が毎日一回づゝ浣腸の役目をひき受ける事になったのです。私と三つ違いの従姉は、最初は私が浣腸をして上げるといっても、承知しなかったのですが、学校ではバレーやラソニングの選手で、家では湯上り一枚で庭を歩き廻る位の私の開け

放しの性質に感化されてか、或は便秘の苦しさで耐えかねてか、いつの間にか、従姉の方から、「澄ちゃん、頼むわよ」というようににさえなりました。従姉は精神的に何か刺戟や衝撃があつても身体に変調をきたすらしく、浣腸によつて、うまくお通じがついてもすぐ便秘になつてしまひ、もう浣腸することが習慣のようになって

本誌三月号の「我が少年時代の犯罪」、岸本氏の文章中「二五CCの全量はVとあつたが八全量Vとは浣腸器のもつ目盛の全量であり一般に浣腸器は規程の目盛以上五〜十CC余ゆうはあるが、これを全量とするのはおかしいと思います。

矢崎 龍一



しまひました。初めのうちは、従姉も私も、うまく浣腸が出来なかつた、とそればかり心配で一生懸命でしたが、次第に慣れてくるに従つて事務的になつて、時に忙しい時など「お姉さま御自分でなさつたら」と答える時もありました。

内気な従姉は別にとり立てゝ強要するといふような事はございませんでしたけれど、初めの恥しき等けりど忘れのように、私でなければいけないように、せがまれるのでした。

その頃より、私も看護学の本や家庭医学の本を読んだりして、その方の知識をひろめ、次第に浣腸に興味を持つてきました。しかしその頃はまだ、自分で浣腸されてみたいといふような気持は少しも湧いてきませんでした。最近自分も、従姉のように年下の同性から浣腸されてみたいという気持を抱くようになって参りました。

(兵庫 三田澄子)

海外サディズム雑記

「服装の利用」

吾 妻

新

風変りな服装

空想の産物にせよ現実の試みにせよ、ひろい意味のアブノーマルな服装がそれぞれどんな意味をもっているかは、一概に断定できません。それは一に考案者の好みによるからです。本誌にも現われた眼帯やマスク、コンビネーションなども、ノーマルな眼でみれば何の変哲もないものだが、ある種の人々には特殊のセクシュアルな意味をもってくるし、その場合にも同一対象がフェティズム、サディズム、マゾヒズムに利用される。たとえば女のズボンは沼氏と私にとって正反対の性衝動をあたえることができます（氏の言われ

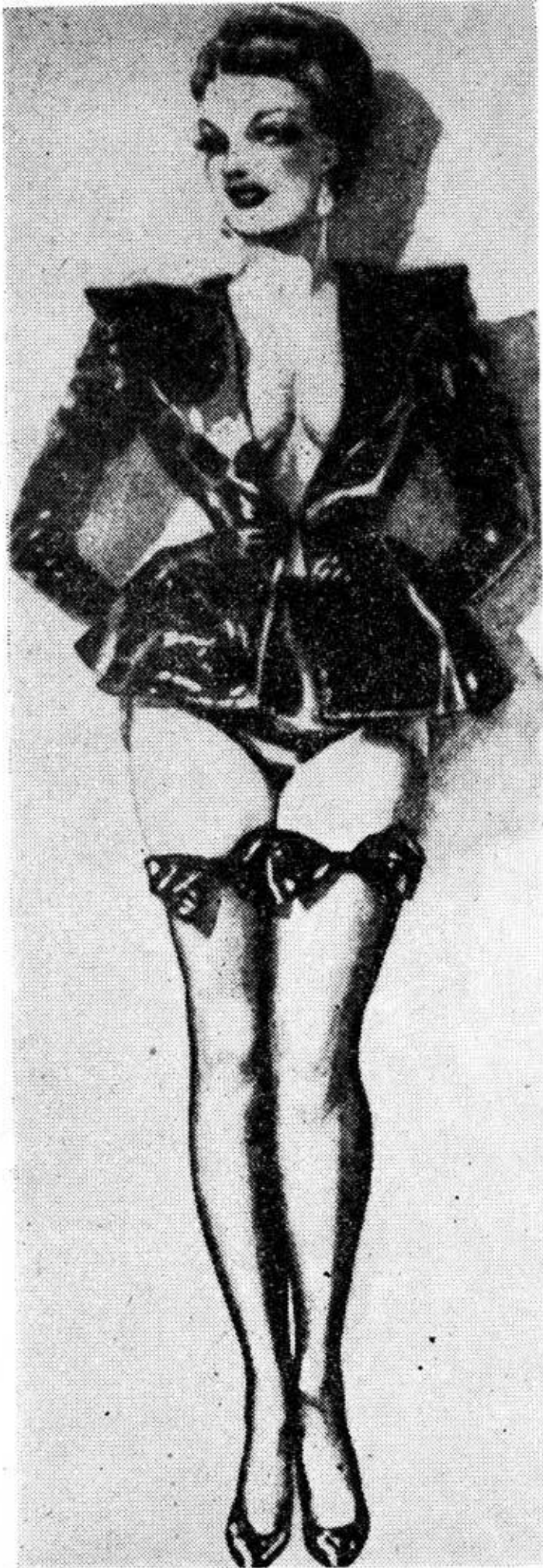
るように私の場合は珍らしいにしても）。だから、今まで述べてきた服装の例もさだめし異論が多いだろうと存じます。おそらく、私はサディズムの色眼鏡をかけているのでしよう。そして他の立場から解釈すべきものをサディズムに帰しているかもしれない。ただそれは私が私自身であるかぎり免れがたいことだと思っています。

だが考えてみると、一眼で明白に意図の分るようなものは別として、一般には同一の服装がちがった解釈を惹き起すのは、アブノーマルな場合にはある程度自然だといえます。私は女の赤い腰巻などには、なんの興奮も感じない。だが汚れたズボンを穿かせると興

奮する。これと正反対の場合もありうるわけで、リビドの結びつきが極度に分化していることそのものがアブノーマルな人間の特徴だとすれば、私がこの雑記のなかに、自己の感じないものは書けないし（サディズムと感ぜないし）、感ずるものは書かざるをえないということもお許し願いたいです。したがって読者の方々に、私がサディステイックだと述べることは吾妻新一箇の主観であって何等一般性を強調するものではないこと、またそんなことは不可能だと信じていることをおことわりしておきます。

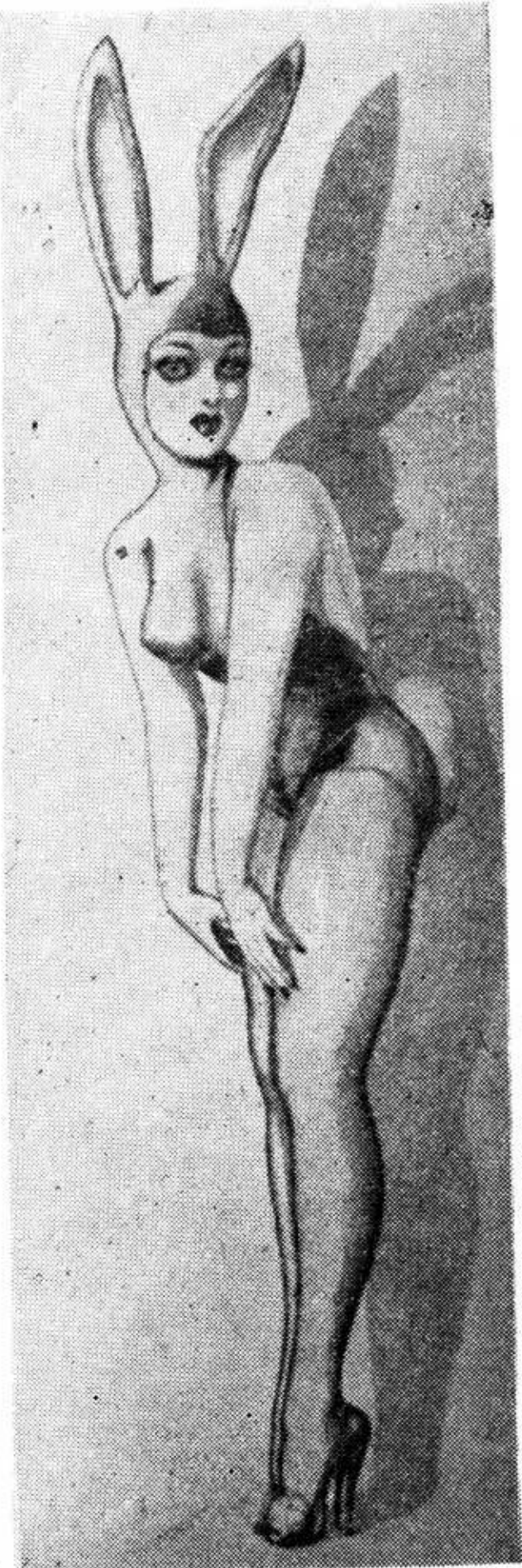
そこでさっそく風変りな服装から二、三抜いてお目にかけますが、1の「兎」なども、

日劇の踊り子がこんな装りをしたところで変哲のない仮装とも云えます。然し、ある種の人々にとっては通常の仮装以上のものです。たとえば大きな耳を立てた頭布がすっぽりと頭と咽喉を掩い胸部につづいている点、それと短いタイトの対照、兎の意味する柔順さなどから連想されるものがあるのです。たぶん特殊な集りの席では、この「兎」は



狩り立てられる運命にあり、また人々に「狩獵ごっこ」の欲望を起させるための服装のように思われます。

3 は本誌六月号の口絵で紹介しましたが、いま一度こゝに採録させてもらいます。おなじみの「ポニー」で、アクセサリが議論の余



2 は「雨」と題する空想的な服ですが、濡れた感触のしなやかなビロード(?)の上衣は、わずか一カ所で留めてあり、リボンが両腿を縛っているのではないかと疑わせます。さらに、うしろに廻した手と手は手錠でつながれているかもしれません。



「どうしてすぐ約束を破るんだろうねえ。よしよし、お前が鈴を鳴らすたびに、そのむっちりしたお尻も音を立てることしよう」

彼は尻尾をつかんで持ち上げ、みじかい鞭で叩く。こうして走るこ

もできず、ゆっくりと、一足ごとに澄んだ音と鈍い響きとが入れまじってゆく……。

こんな光景が浮びます。

リボン手錠

「御誌の予約広告のなかでみた女教師は、私が数年前フランスで知った人と、とてもよく似ています——彼女が脇のあいた膝までのスカートを穿いているのを別にすれば。彼女はとても踵の高い靴をはいて、上級生たち全部のものにそれを見習えというのです。非常に美しいけれどこの上なく厳格で、いつも軽い咎をもっていました。だが、彼女が上級生

役をすませたいので、いそいで駆け出そうとするが、そうはいかない。たちまち手綱を引かれて、奇妙なうめき声と共に顔が仰向けになる。

「ずるいことを考えたってダメだよ。ゆっくりと、どの隅々も落さないように歩かなくっちゃいけない。それから断わっておくが、少しでも声を出したり音を立てたりしてはいけないよ。分ったね？」

だが、声は出さないにしても、足首に結びつけた鈴が鳴るのをどうして防ぐことができようか。彼女は注意深く、そつと足を動かしてみよう。やはり鈴は鳴るのである。

地なく服装の意味を物語っています。私の非常に好きなポーズで、後手に縛り、猿轡から手綱がつづいている。ぴったり密着した服を締めつけるバンドの中がひろいのも、その下を通して細いバンドを縦に締めたのも好みに合っています。（股間を縛るのは着衣の上からというのが私の持論です）

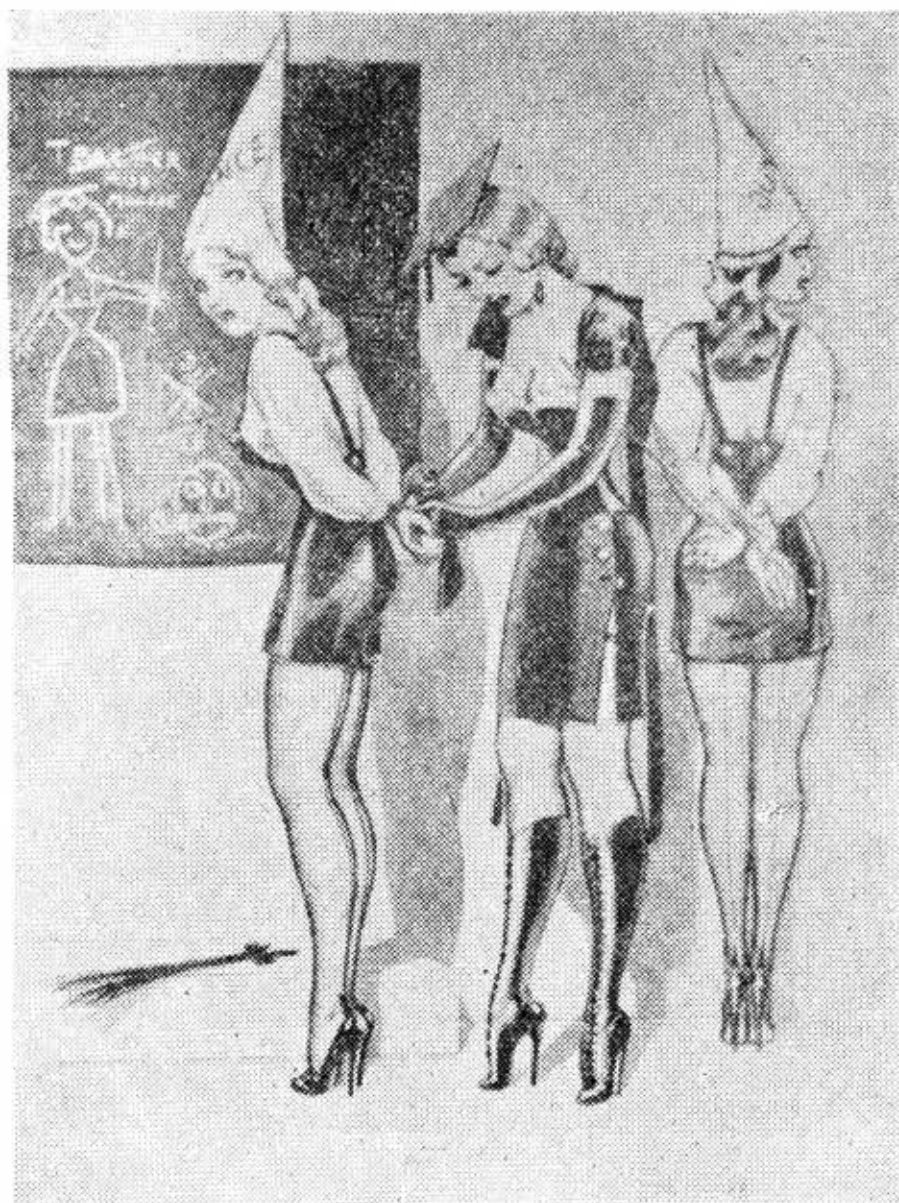
このようなポーズは当然夜会などの公開の集りよりも家庭での、二人だけの遊びとして楽しまれるべきでしょう。

「さあ、家のなかを、一廻りしてもらおうかな」

と云って、夫は手綱をとる。彼女は早く苦

を罰するいちばん好きなやり方は赤ん坊のよう
に扱って教室の隅に立たせる——ときには
まる一時間も——ことでした。低脳児とかい
った帽子をかぶせ、リボンで後ろ手に縛り上げ
て」

もちろん作り事でしよう。だが帽子は凌辱
的であるし、美しいリボンで縛るのはロマン
テイックです。緊縛の意義を、苦痛を与える
よりも自由を奪うことに置く人ならば、荒縄
で高手小手もいゝかもしれないが、リボン手



錠もわるくありません。その意味では、
この挿画はなかなか
楽しめます。

虐げられる よろこび

「私たち女が肉体的
によわい性だとい
うことを存分に思い知
らせてくれるような
男」にめぐりあいた
いという女の手紙。
「……そういう男
を識るのが私のたっ

ちを這い寄らせてください。

あなたのE・V・E」

次は相互的な楽しみについて。

「御誌六月号の『カロライン』は、男が絶えず女に窮屈な服装をさせ、控え目になるように訓練したり其他いろんなことを課するのを嘆いています。彼女は、男というものは天成こういう趣味をもっているのだと思っています。」

多くの場合そうなんですよ、カロライン！
たとえば、私と妻とはある協定を結んでいる
んです。その協定によって、一週間のうち六
日間は私が支配者になり、七日めだけ、妻が
支配者になることにしています。その七日め
には、私は完全に二十四時間、女の服を着な
ければなりません。そして私はすっかり女に
なり切っているのです、そのまゝ一緒に買物や
映画に出かけることができます。

この日は、彼女は私をシェーンと呼び、私
は彼女の命ずることを何でもしなければなり
ません。もしも私のやり方にちよつとでも不
満を感じたら、彼女は自分がいちばん良いと
思う懲罰をなんでも課します——そして、時
によるとそれはとても厳しいのです。ある時
など私は、両手を頭上に縛られてまる一時間

た一つの望みです、彼は私を無力な囚人にし
てしまい、ありとあらゆる方法で私を羞かし
めるのです。ああ、いつ、いつ、いつの日の
ことか！ 彼等は私たちがたとえ美しく女ら
しかろうと、否応なく無力にしてしまわぬか
ぎり決して無抵抗な人形みたい扱われたが
らないことを、実証してくれるでしょう。
どうか私たちに花なんか捧げず、代りに紐を
もってきて縛ってください、膝まずいて嘆願
したりせずに、あなたの命令に従うため私た

立たされた揚句、長い定規でピシピシ打たれました。しかも私のスカートはまくり上げてピンで留めてあるので、鞭打の苦痛はたっぷり味わうというわけです。

その日に、おきまりのルールが一つあります。それは、私が床につくとき、手足を縛られ、かたく眼かくしされることです。時には解放されることもあります、そのまゝ寝込んで、一晩じゆう縛られたまゝのこともあります。

だが、云うまでもなく、私がジエーンの役割を演じているときに過度にひどい折檻を妻が絶対に加えないことだけはたしかです、彼女は、翌日になって私がそれと同じひどいことを、いや、もっと厳しい折檻を加え得ることを知っているのです。

鎖につながれたジエーン

これらの投稿の信憑性について私は何ひとつ保証できません。というのは、最近このアメリカの雑誌の事情に精しい人から厚意ある警告を受けたからです。したがって私がこの「投稿」を訳したのは、たれが書いたかなく、このような欲求が活字の形で現われているという点にあります。

加虐被虐の要求はこの国にもあり、重要

な性生活の領域として潜在的にも顕在的にもみとめられています。むしろそれを前提としなければ、このような雑誌も生れず、右にあげた「投稿」も生れないわけです。そしてこれはデモクラシイだの専制主義には関係がありません。なぜなら人権の問題でなく、趣味の問題だからです。

この二つの投稿の中、特に後者の相互享樂は、サディズムおよびマゾヒズムが同一人のなかで巧みに調整され、六対一の形でバランスを保っているのも面白いと思いますが、それが反社会的な危険な衝動とならず、愛し合う夫婦の間の無害な楽しみとなっていることに注目して頂きたいのです。マゾヒズムはともかく、サディズムは一般に危険な有害なものとして、ヒロポン患者の犯罪の責任まで背負わされていますが、火薬の外装を強めれば爆発力が増すように、抑圧は危険性を増すのみです。いかなる権力をもっても性衝動の根元を亡ぼすことはできないのだから、それを遊戯的な形で発散させることはいちばん賢明な現実的なやりかたに相違ありません。こゝではサディズムの大勢が次第に個人的な無害な遊びの方向を辿っている一例として、この「投稿」をかゝげました。

ズボンについて

服装のことを大分かいたので、最後に私はズボンについても語りたいと思います。もちろん特殊な意味に用いられる場合のズボンであって、衣服論とは関係ありません。自由且つ解放的、活動的で合理的な服装が、こゝでは肉感的な拘束衣として扱われます。

おなじ人間である私にそんな心理の使い分けができるかという点に関しては、理性と感情があると答える外ないのです。女学校の教師かならずしも異性に魅力を感じないわけではない。だが美しい女生徒を教育する資格がないとは云えない。或はまた、ニーチエの人および思想に尊敬は払うがその思想に承服できないということもありうる。さらに私は色情狂ではないから、すべての女に欲望を感じないと同様、すべての女のズボンに血を騒がすわけではない。

しかも女のズボンは、サディズムの世界においても殆ど問題にされていません。スカートやキモノはさまざまな道具立てに使われるが、ズボンはまず、無縁のものとされています。だから私の場合は二重に特殊なのであって、一般に興味ありや否や、すこぶる疑問で

す。だが、他の服装の利用を語ってズボンを語らぬことは私には絶対に不可能です。それほど私の性生活における比重が大きいからです。主観色の濃いのは十分に承知の上で、吾妻新内心の声をすこしお聞き下さい。

まず、女のズボンをサデイズムの色眼鏡で見ると、第一に拘束という性質が意識されてきます。だから私は半ズボンや七分ズボンを好みません、かならず足首まで達する長さでなければなりません。これは密着感と大きな関係があります。つまり腰から足首まで、つねに布で掩われているという感覚がなければならぬのです。これは足首を締めることによって達成されます。

次に長ズボンのすぐれているのは足と足をつなぐ場合です。裸の足首を紐で縛ると、緊縛感が強すぎて感覚はその部分に集中され、全体としてのズボンと皮膚との触感を消してしまうのです、これでは後に述べるようなズボンの効果は半減してしまふので、どうしても長ズボンが理想形となるのです。その場合でも、ただズボンの上から縛るのは拙劣なので、実際にやってみればわかりますが、あまり裾にもってゆけば、足首に迂り落ちるおそれがあり、余祐をみて位置を高くすると、ゆ

るやかなズボンなら格別だが、細みのものは膝から下が突っ張って触感は単調となる上に、距離が短くなって七分ズボンに近くなります。そこで、いちばんいい方法は裾の最下端にいくつも小さな穴をあけ、それに細い布紐をくぐらせて軽く締め、必要に応じて左右の足をつなぐのです。穴のあけ方は広い間隔と狭い間隔が交互になるようにする。そして布紐が表に多く出るようにする。これは紐が少しでも皮膚にじかに触れぬためで、私のつくったものではズボンの裏を通る紐の長さは三分づつ四カ所、計一寸二分にすぎません。紐に布を使うのも当りを柔げるためです。こうして締めると、足首はすこしも痛くなく、裾の最下端の布全体のしっとりした圧迫だけで、もちろん外れる心配もなく、見た眼も刺戟的です。

裸ばかり縛っている人には分らないでしょうが、着衣のときは（特にズボンは）布のデリケートな触感を傷けるようなことは大の禁物なので、けっして痛く縛ってはいけません。部分的の痛みは、常に全体の触感をこわします。それでは着衣の意味をなさないので、衣服そのものが部分々々のアクセント（緊縛部分ないし単に締めた箇所）の扶けを

かりて、全体として拘束具の感覚を呼び起さねばならないのです。

次に布地ですが、これは目的に応じて二通りあれば理想です。当事者が肌触りで悩ましく感ずるには薄っぺらな人絹やあまりに柔いウールではダメなので、ざらついたデニムやラシヤ地がいいのです、ただデニムのブルー・ジーンズなどは視覚的に勝れている割にこわつきすぎて布が宙に浮き、触覚的にはそれほどでもありません、むしろ粗末なラシヤズボンの、縞子の裏地を剥ぎとってしまったのが最上のようなです、それはある程度しなやかでよく肌につき、ある程度ざらついており、もっとも触感を刺戟します。

ところが本人でなく第三者の触感を主にすると、もちろん薄いものもいいのです。パジャマのごときは、丈夫である程度バリツとした上質のポプリンなどが好ましく、ビロードなどは見た眼に美しいのみです。

次に形状。これこそは人それぞれの好みによって千差万別ですが、主観を申し上げれば、あまりにゆるやかなものも、あまりに細いものも不可です。一方は肉体の線を失い、他方は即物的すぎて空想の余地がないからです。ズボンの場合にシワやヒタがいかに関情を表

現するかを経験したものはすぐ理解できることです。魅力的なのは、腰から腿までぴったり詰め、膝のやゝ上部（または腿の中間部）あたりから膨らみをもたせたものです。従来の女のズボンは裾廻り38センチほどで、膝位はそれに8—10センチを加えた位ですが、最近ヒップから裾までの曲線に膝位でアクセントをつくり、膝から下を同寸に近くしたりライフ誌のオードリ・ヘプバーン特集に見るように、極めて細い形のものが流行しはじめていますが、これらは諸種の理由で一般化しないだろうし、この場合には関係のないことです。ただ腿まで密着させた意味から、従来の裾口の広さを膝位に移すと適当に美しく、且つ肉感的となります。

さて、このような布地と形態をもち、手首や足首を締め、上衣をズボンの中に入れて、バンドで腰をかたく締めた姿は、それだけで「準備」として完成しているのです、私のように次の動作との関係に馴れすぎた人間にとっては、いまでは連想が排他的となってしまうて、既に刺戟的です。それで今やそれなしに遊戯を行うことは興味がなくなっています。だがそうでない人々でも、この姿にしておいて足首をつないだり、手足を縛ったり、猿ぐ

つわをはめたり、縦に紐を掛けたりすれば、潜在的なこの服装の効果を一挙にして感ずるでありましょう。

ある特殊な服装にたいする特殊な感覚を推しひろげる危険は、誰よりも私自身を知っています。しかし、意識化されぬ広い欲望が——程度は別として——こうした服装と漠然と結びつくということは、私は昔から感じていました。ズボンの性的魅力については比較的簡単です。だがその魅力と、多くの人々の胸の奥にまどろんでいるサディスティックな欲望との関係について論証することはきわめて困難です、それは心理学上のいろんな側面をもっていて興味あるテーマにかゝわらず、ある人々にとってはこじつけに思われるであろうし、豊富な資料によらなければ独断に陥ります。だからこゝでそれを論じようとは思いません。ただ「色眼鏡」を通しての推測にとどめることにします。

5の写真は、一九三一年ニューヨークのチエスター・ヘイル舞踊団が上演した「機械化時代」の一場面です。前にボタンのない密着した上下衣服（ズボンと接



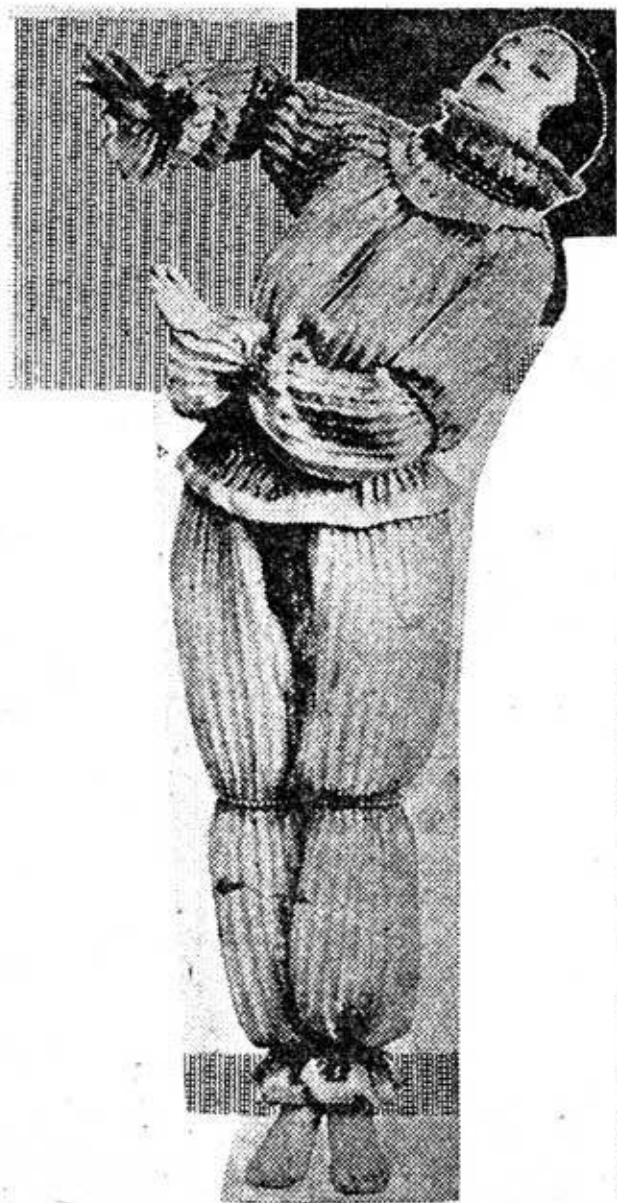
続している)は、まず自分一人では着ることも脱ぐことも出来てはありません、腹部を締め、金属性胴衣やバンドから、金輪が吊られ、腿に嵌められ、あるものは股に接しています。そのため両足を揃えて立つことは困難であり、かなり足を開いてもその接触から逃れられません。さらに注目すべきは、大半が手の自由を失っていることです。あるものは金属性の大きなマスクをかぶせられ、手を袋に包まれており、前方の三人の両手は金属球の中にすっぽり入っています。おそらく球の内部に把手があつて、踊子はそれを握っているのでしょうが、みたところは確実に拘束されているとしか思われません。

機械化時代の象徴だということは一眼みればわかるのだが、これを人々はどう見るでしょう。最も無難なのは、奇抜だという印象です。だが、この奇抜という印象を分析すると、おそらく単なるエロティシズム以上の、くすぐりに似た名付けがたい興奮が出てきます。そしてそれを、ある人々はサディズムと名づけるのです。なぜならば裸体を連想させる密着したズボンに、股間縛りを連想させる金属の輪が嵌まっており、その触覚は直接観客を「くすぐる」ものだからです。しかもそ

れを阻止することを許さないかのように手先の自由を奪われている。この異様な着想はどこから、なぜ生れたのでしょうか？

この大胆な服装が、ホンの思いつきで決つたとは信じられません。またかくしようのないズボンと金輪の効果が無関係でもありえない。原図を描き、手を加え、振付者とも相談し、書き改め、身長や輪の寸法を計って決定するまでに、漠然とした大衆の欲望は正確に予測し計算され、ハツキリした言葉に出たと思います。またそれを踊子たちに着せるとき、彼女たちが羞らったり、批評したり、監督がそれを叱りとばしたり、冗談を吐いたりまたその姿を楽しんだりしたことも想像されます。

次に掲げた写真
6は一九二七年春
(月は不明)パリ
でサントスという
ダンサーの踊った
「未来派の妖婦」
の一場面です。解
説に曰く、「なご
やかな線と迫るよ
うな音律の交錯で



春の夜を倦かず讚美する感傷的なパリジアン
の心を捕えずに措かなくなった……」とありま
す。なごやかな線と特に記されてあるのが、
私の注意を惹きます。それは舞踊の動作ばか
りでなく、肉体の線が印象的だったという推
測を刺戟するのです。この服装をよくみてく
ださい。肉体を露出している部分はほとんど
ありません。わずかに顔と指先と足先をのぞ
けば、全部が包まれています、その顔すら仰
向かなければ埋まるばかりに咽喉を掩われ、
縄のように数珠紐がかゝっています。それが
単なる首飾りでないことは、二の腕、手首、
膝、足首(そしておそらくは腰)を締めたも
のと全く同じであることから言えます。

これらの数珠紐のアクセントは、なんたる

強烈さでしょう！ ゆるやかな上衣もズボンも、この緊縛のために引きしまり、この上ない効果を示しています。しかもその位置はなにを暗示しているでしょうか？ この写真を見ればわかるように、足をそろえて立つと完全に縛り上げられたような錯覚をあたえるのです。つまり、脚の活動を全く奪うに適切な位置に紐が締めてあるのです。同様に上体も、ふつう両手を縛るところです。もし両手をうしろに廻して手首を重ねれば、やはり縛り上げられたとおなじ印象を与えます。

私はこの一場面しか蒐集できなかったのですが、舞踊がいかに複雑多様なポーズをとるかを考えてみましょう。たぶん、おなじ位置を縛った左右の腕は、ある動きのなかでシンメトリカルに置かれ、密着した脚に似た錯覚を十二分に与えたと思います。なぜなら、腕にせよ脚にせよ、深く食いこんでみえる紐の効果が前もってどんなに理解されていたかを疑うことは到底できないからです。そしてその場合に、私には、どんな他の服よりも裸体よりもこの緊縛効果がズボンによって最高度に発揮されていると感ずるのです。

次に、サディズムにおけるズボンの利用に汚辱という方法があります。これは「感情教

育」でくりかえし述べたことで、私も結城章三郎とおなじ傾向をもっています。だから彼の耽溺もわかるのですが、要するに「汚す」ことは凌辱の昇華された形にすぎません。黒ずんだ、油じみたズボン。つぎの当たみじめなズボン。それらは脚の皮膚が接触から逃れられないという点で、じかに身についているという点で、汚れたスカートやキモノよりも残忍さを帯びています、肉体的苦痛でなく不快さはまったく精神的のもので、たとえばみじめな境遇に陥ったような錯覚ないし空想の効果であって、その残忍さは擬制的であるが故に、合意の遊びにはいちばん適しているようです。つまり実害がない。しかも空想の範囲がひろい。いかに無害かは、どんな汚れた服装をしても世界中のもっとも厳しい検閲官ですら眉一本動かさないであろうし、いかに豊かな空想の余地があるかは、章三郎のように懲罰服にもできれば小説や映画でさまざまな事件と組み合せて使えもすることです。

無声映画時代に、ルイズ・ブルックスという女優の主演した「人生の乞食」という映画がありました、津村秀夫が「異常な美貌と肉体をもった大根女優」と評したように、彼女

はこの作品の他、「カナリヤ殺人事件」「パンドラの囑言」「倫落の女」に出た位で消え去ったのですが。その暗い、ヴェデキントを想わせるアブノーマルな妖気はいまだに生々しく私の胸にあります、パプスト監督が好んでこの大根女優を使い、好んでアブノーマルな作品（「パンドラ」では同性愛者にいどまれる陰惨な場面があり、最後に殺人鬼に殺される。「倫落の女」では淫獣そのもの、のような男に冒される）に出演させ、異様な迫力をあげたことに私は私なりの嗅覚が働くのたが、横道に外れるのでやめましょう、とにかく「人生の乞食」では義父に処女を奪われようとして誤って殺してしまった娘が、少年に変装して浮浪者（リチャード・アーレン）と一緒に逃げだす、そのときの服装が汚ないよれよれのズボンで、断髪の美しい顔とおよそ対照的なのです。貨物列車をねらって飛び乗ろうとするが、もんどり打って坂の下まで転げ落ちる。次の列車にやっと乗ったが、見廻りの男にみつかつて直ぐ下りると云われる。

男は飛びおりたが、汽車のスピードが早くて彼女は下りられない。半泣きになるのを容謝せず、監督は棍棒で彼女の尻をいくつも叩く、とうとう飛び下りたが、また思い切った

転び方をする。

問題は尻を打たれたり転げ落ちたりする即物的描写にはないので、全巻に漂うサデイス・ティツクな空気と汚れた服装との有機的結合にあると云えるのです。継子で育った彼女が義父に羞しめられようとした冒頭からはじまって、警察に追われ、浮浪者の群に入り、疲れきって波をひきながら線路を歩いたり、薬束の中に寝て熊手で追いかけられたり、女と見破られて森のなかで浮浪者のボスにころがされたり、貨物列車のなかで全浮浪者の淫虐な視線の集中攻撃を受けたり、やがて彼女の肉体を賭けて眼の前で二人のボスが乱斗をはじめたり、要するに映画の筋全体がサデイス・ティツクに組み立てられています。華かな場面、明るい場面はただ一つもなく、終始汚れた世界です。アメリカ映画共通の落ちとして最後に恋人と結ばれますが、その附け足りのホンの数カットに、スカートの登場するのみで、服装も終始汚れたズボンです。そして、その筋と服装にふさわしく、彼女の表情もきわめてマゾヒスティックです、一時間半の間にただ一回しか笑わない、断髪の美しいその顔は妖しい愁いを帯び、大きな眼は訴えるように湿り、かたく結んだ口唇はふしぎに肉感

的です。この映画の筋と、扮装と、ルイズ・ブルツクスの魅力とは、いわば切り離しえぬ三位一体なので、それが意識的にせよ無意識的にせよ人々を惹きつけたのです、純粋な芸術の意味をはなれて私は場末の小舎まで追いかけて、この映画を八回みました。

「キング ソロモン」(最近でなくその前に作られたトーキー)でも、名は忘れたが小柄な女優が蠻地に向う途中、馬車のなかで男のズボンを切りつめて穿きます。やはりよれよれのズボンで、バンドもなく、紐をバンド代りにしたひどいものです、やはり「人生の乞食」のように疲れきって男にひきずられて歩くのですが、その脚が大写しになって印象的です。そして槍をかぎ

した土人の群にかこまれたり、いろいろの冒険にぶっかるのですが、このような苦難と汚れたズボンと

の結びつきが一般に自然に思われるのは、その服装がサデイス・ティツクな心理反応を程度の差こそあれ惹き起すからではないでしょうか。

衣服の汚辱が苦難、逆遇、転落、受難などの要素と心理的に結びついて、それがさらにアブノーマルな性体験と結合する場合には、汚れたズボンそのものが極めてセクシユアルに映ります、写真7は外国の例でなく、昭和六年の立川飛行場における日本飛行学校女生徒の一例ですが、油によれた作業服で機体の掃除をしているところです。

汚辱には汚れの他にツギ当ての方法があります、二例ほどお目にかけます、写真8は



「珊瑚礁」でジャン・ギヤパンと共演したミシエル・モルガン。これも薄倖な娘の生活を表現するために、こうしたズボンを穿かせたのです。

写真9はパット・パターソンという女優。年代不詳なのが残念ですが、英国からフォックス社に招かれて渡米し「Bottoms up」という映画に出演し、シャルル・ボワイエと結婚した直後の写真だから、調べれば分るかもしれませんが、これはツギの当て方、裾の裂き方から、わざわざ作ったズボンに相違ないので



が、たとえ戯れにせよ女優がこの様なズボンを穿くのは珍らしいのでお目にかけました。



私は意識的にこのような写真を蒐集したのではなく、衣服資料として集めた写真の中から拾い出したにすぎないので、率から云えば数千分の一にすぎないし、衣服そのものの意義とは、なんの関係もないことを重ねてことわっておきます。ただ私を含めてある種の人間は、これをアブノーマルに利用できるのだという事、また汚辱その他の方法によって利用しうる条件をもっているのだということを書いたのです。

次にフィクションを一つ、10図は水夫シンバッドの筆名で書かれた「印度の綱の魔術」の挿画です、文章はあまり永いので訳しませんが、要するにアメリカの水兵たちがカルカッタの大道でみた魔術の話です、地面に打ちこんだ棒に美女を縛りつけ、カーテンをひい

て、再び開くと、そのまゝの姿で他の棒に移
置している。ふしぎでたまらないので、水兵
はじぶんでその女を縛り上げるが、やはり移
動してしまう。その彼女は東洋のズボンをは
いています。

「彼女の背は五呎六吋位らしいが、正確には
云えない、というのは、私が今まで見たこと
もないような高い赤い踵のサンダルを穿いて
いるためもっと高くみえたからだ。その他の
点ではその靴は有りふれたモロツコ風のサン

サディズム
小説の例に洩
れず、魔術の
説明はどうで
もよ
いの
で、
結局
はこ
の魅



ダル・スリツパーで、足先のまくれ上った奴
だった。白い縞子の紐には宝石がちりばめて
あった。身装りにについて言うと、彼女は透き
とおるような白い絹のハレム式ズボンを穿い
ていたが、その横に裂目がついている……」

力ある服装をした美女を丹念にぎっちり縛り
上げることや、綱が皮膚に食いこむことや、
それが弛みはしないかと身体を撫でまわすこ
とが細かく書いてあります。そして最後に一
緒に酒をのむのですが、そのときも彼女を縛

って撫でたりさすったりする
のです。

この中にも、フリーディニの
名が出てきますが、映画「魔
術の恋」でも魔術王フリーディ
ニがロンドン監獄を破ると賭
をしたとき、待ち切れない観
客をなだめるためにフリーディ
ニの妻が夫に変装して舞台に
あらわれます。すると客の一
人が舞台にかけ上って、「こ
の手錠を外してみたまえ」と
いやがる彼女の両手をうしろ
に廻して手錠をかけてしま
う、本物のフリーディニではな
いのだから外せる道理がない
困り果てゝもがく場面があり
ます。これも、フリーディニの
場合には必ず前手錠なのに彼
女にかぎって後手錠をかけ

られることゝ、男装ということゝに、なにか
大衆にアツピールするものがあり、そのXを
分析してゆくとサディズムが顔を出します。
ただそれとズボンとの関係だけが究明されず
理解されていないだけです。だがもしこれが

背広でなく汚れたオーバーウールなどであつたら、ある人々は興奮の秘密の所在を突きとめるかもしれません。無数の中間段階にならぶ生きた男女を説明するためにワイニンゲルが男女の窮極概念を設定したように、あらゆる

段階のサディズムとの関係を明らかにするため、私は誰の眼にも理解される形のズボンをもってきて、置き換えてみたいのです。

この雑記も純粋な紹介にとどめるつもりだったのが、つい自己の趣味に淫する結果とな

ってしまいました。書いてしまってからいさゝか気がさすので、このへんで一応幕を下そうかと思っています、気が回いたらまた書くことにします。

(完)

元憲兵の手記

(本誌五月号所載)

林田直樹さんの告白に答えて

南 川 和 子

文 と 画

平凡な家庭生活に倦怠を覚え始める毎月下旬。いつもきまって「奇ク」を拝読し、その度に本当の生甲斐を感じている私。中でも切望した告白手記が掲載されていた時の喜びはどなたでも同じと存じます。

林田さんもその意味で「私の拙い手記に共感して下さった有難さを抜きにして……」お喜びはよく分ります。

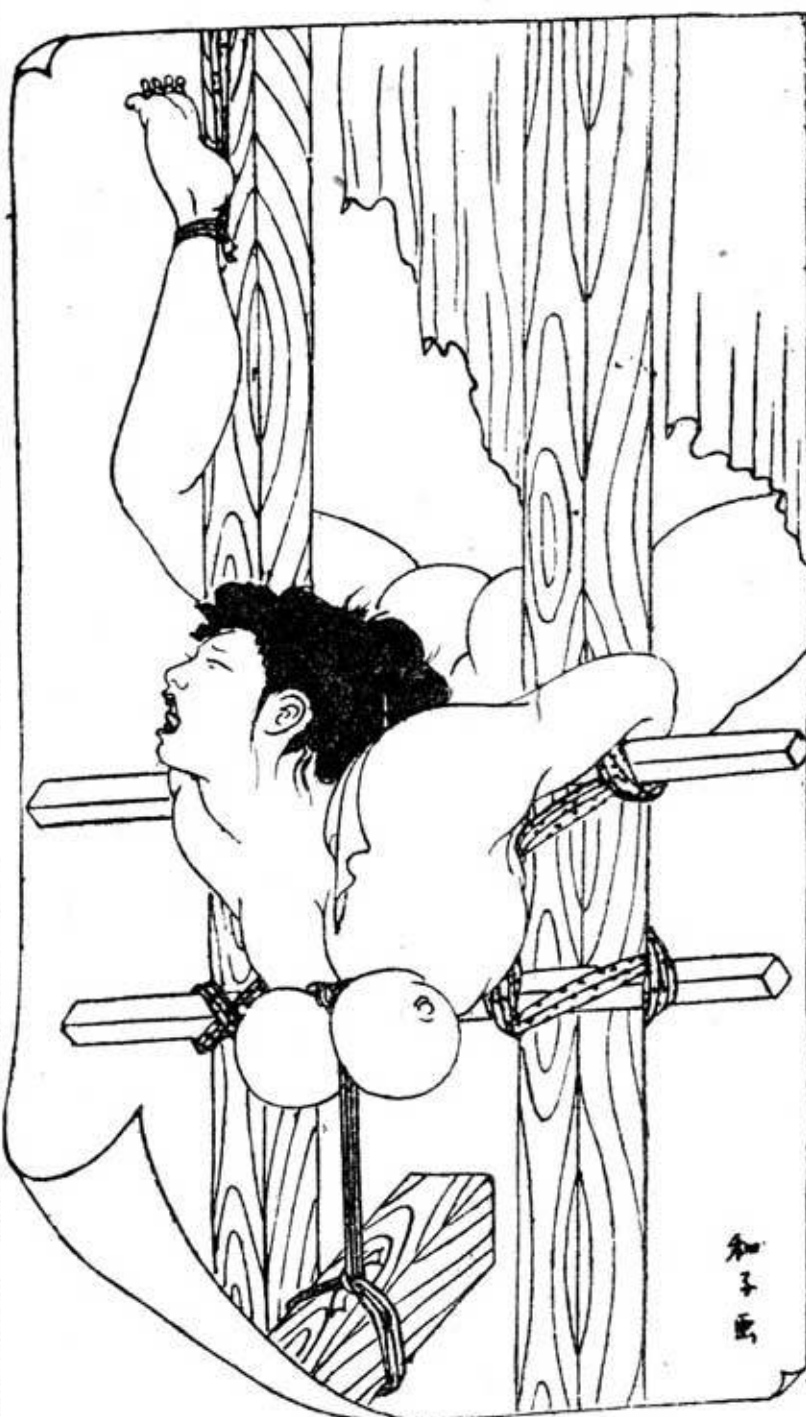
私の責め絵が、初めてKK通信に発表され

てから、もう半年にもなりますが、どれといって満足して頂ける絵は一枚もございませんのに、毎号、本誌の読者通信欄では何かと、御批判頂いておりますこと、この上もなく感謝しておりますが、こんなに大きく取り上げて告白に共鳴して下さった手記は御座いません。

あゝ——所は違っても、やっぱり同じ終戦の苦しさをなめてこられたことと、戦争の無

謀さと女性の命の哀れさを随分高く謳って下さった事を衷心から、厚くお礼申上げたい念で一杯でございます。

「私は何故責絵を描くか」は、ちようど〃灸をすえられる女〃を描いておりました当時、箕田さんからぜひと勧められましたので、不馴れな告白記を書いてみる気持になったのですけれど、女性として受けた最大の羞恥の告



白を卒直に筆で書くのは、余りにも心が寒々として、妊娠の体であり乍ら裸にされて、残酷な方法でそれは／＼筆絶につくされない凄惨さで息を引きとった美貌の人妻よし子さんの死の模様は、どうしても発表することが出来なかったのです。それ程、私自身の痛手も大きく当時の様子がありありと事ある毎に眼前にちらつくのです。

サンダカンにおりました頃、飼いならしたボルネオ猿を主人の友人達が面白がって責めたて、はては私の描きました「煙草責め」(二月号のポーズです)にしたのです。円柱に縛

「ツ」と猿は絶叫したはずみに、僅かばかりのお小水を出しました。こんな現象は最も男の人達の欲望を満足させたらしく、好奇の眼を見はって動こうともしません。私は思わず「いけません。」と叫び、私自身が責められているような気持ちに襲われて、いきなりその巻煙草をはたき落していました。

するとその人達は、私の蒼白な表情を見てとって奇妙な笑い方をしました。空虚な何かカラカラと乾き切ったカン高い笑い声です。「いやあね」と私は少女のように頬を染めました。そばにいた主人と一番親しい五十年輩

りつけ
た雌猿
のむつ
ちりと
した真
赤なお
尻に煙
草の火
を当て
たので
ござい
ました
「ギヤ
の加藤さんが「はは、奥さんもうです。」と顔をほころばせて、巻煙草を突出したのをいまでも覚えております。いじめつけられた猿は興奮してかなり長い間、激しい叫声を続けていました。

そんな想いが「美女折檻図」(十二月号)となって私の描きたい欲望を満足させたのでございましょう。肉体の悲しい生理とはいえ私もこの猿のような酷い目にあって、屈辱に悶え狂うような羞恥は、九年前に味わいましたが只今でも決して私の脳裏から離れようとならないのでございます。外地で終戦に会った日本婦人の殆んどが、経験された様に当時の惨めな検査には、不覚にも涙と一しよに……水も洩したものでした。それ以前にも度々羞かしい思いをさせられました。それはいずれも日本人同志の間のことでありましたので恐怖心はなく、たゞ穴があれば入りたい様な羞恥がするだけです。気持ち大変に楽であつたような記憶がいたします。

○
当時は軍国主義のはなはだしい時代でありまして、軍人達の横暴は目に余るものが多くありました。外地では林田さんも御存知のよう、男も女も同一視され特に婦女子だから

といって、区別なく一般の方達と同じ様に身体検査を受けねばならないのでございます。そんな場合はいつも下級の衛生兵達が軍医の代りになって、興味本位の検査を行います。そうなる所そこに居合せた男の人達は、女性の後にまわってじろくといやな眼で眺めるのでした。

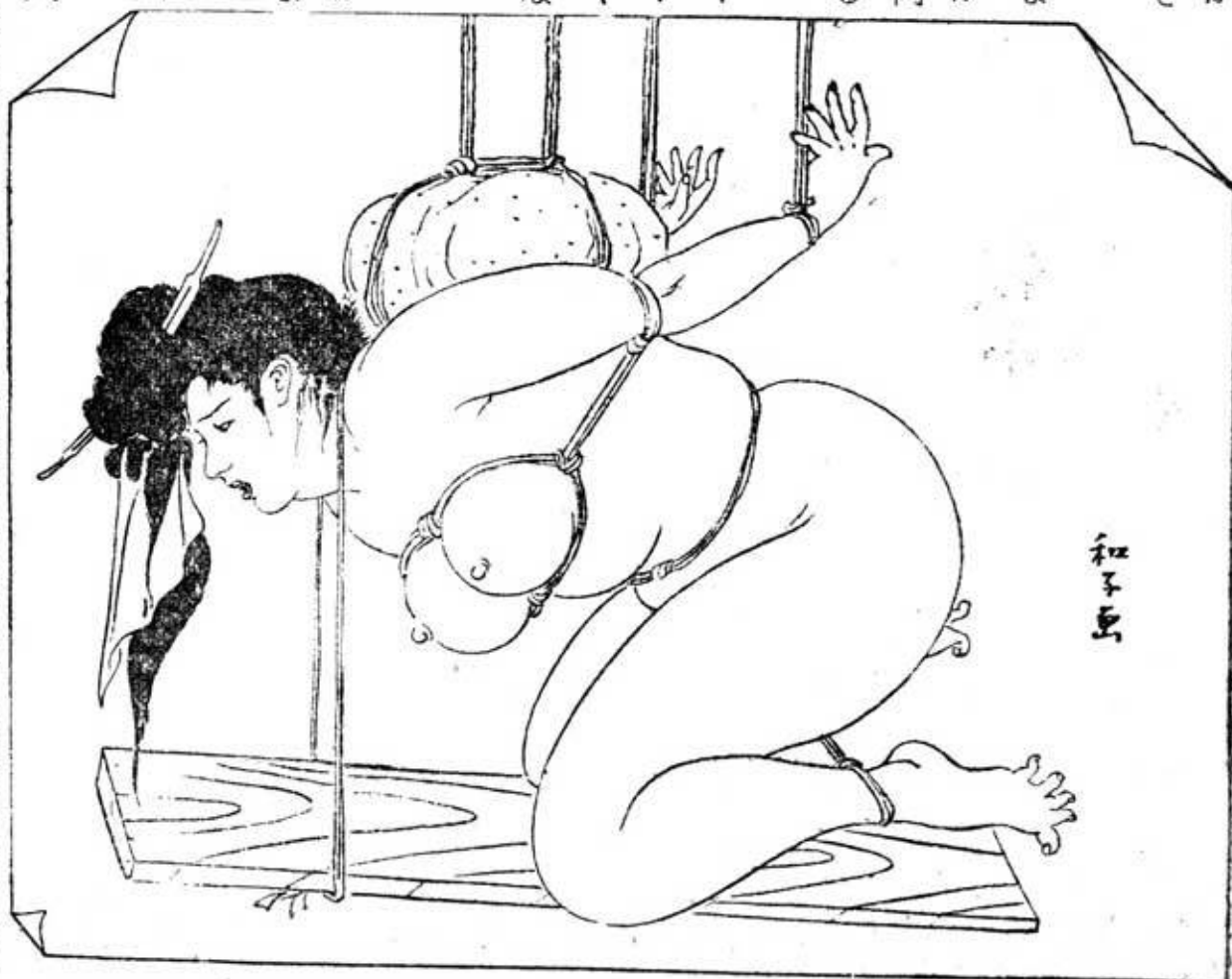
これはマニラの検疫所でのお話ですが、米軍の反攻作戦が激しくなった頃。ミンダナオ島やセブ市から内地へ引揚げてくる婦女子の数が増え、マニラはその集結地となり、そこで乗船させるのにどうしても、検便しなければなりません。場所をえらばず男女混合で行ったので、いつも軍人ばかり検査をしている兵隊達は、興味深く見物するというふうでございませう。普段なら林田さんのおっしやる様に話すことさえ出来ないお金持の夫人や美しい未婚のお嬢さん達も混っているのです。またその引揚者の男子の中には、失礼な云い方かも知れませんが、本当の出稼ぎ階級の低俗野卑な方たちも混っていました。紳士的な殿方ばかりでしたら問題外なのでございますが――。

上流夫人の方たちも、一般の女性と一しよ

に別な所だと、哀願するのですが聞き入れてくれず、結局泣き泣きそろくくと下着をとり始めたのです。

この猟奇的な検便風景が展開されますと、好奇心な目をみはる男の方達が少くありません。四ツばいになり両手を前につきます。私の知っているS夫人が真先にさせられました。一人の衛生兵がまだ………とめく裾を上げようとしないう夫人………の肌着を握って………とめくりました。夫人は「あッ」と悲痛な声を出しましたがもう一人の人が、豊かにウエーブする夫人の髪をもって強引におさえつけました。ですから自然、両手を地につけざるを得ません。

「ぐつと張って、そう、………と矢つぎばやに、命令され、夫人は頬を真赤に染めながら、懸命に姿勢をとるのです。私はそれを見るといい知れぬ恥しさがこみあげてどうしようにもならなくなりました。すると班長格の衛生兵が、おもむろに検便消息子のガラスをもちました。夫人は



スカートの顔を埋めてじつと唇をかみしめていましたが、それだけに悲愴なものでございました。又、十六、七才の女学生の方達もこの様な検査に仕方なく応じていました。その時の口惜しさは、とうてい忘れる事が出来な

いのでございます。

○

こんな経験は以前から、私にはございました。初めて主人と九龍から香港に渡った時のことです。そこには連絡船がありまして、特に伝染病の烈しい頃には、乗下船の際、必ず検疫をうけるのです。乗船者は船の甲板にずらりとならんで、先ず男女共にペロリと舌を出して見せ、それから検便されるのです。私は四ツばいになるのも恥しいのに、スカートをめくられ下着をとられるのがたまらなく、いやだなアとっている中に、軽い痛みを覚えたと感じますと「よろしい」といって裾を下して下さいました。しかし、真昼の甲板ですから余計いやな思いがいたしました。子供ではなく成熟し切った一人前の婦人が見事に熟れた、両の乳房を鐘乳石のように下着からみせて丸い太股を大きく張って半裸の姿態で四ツ這いにされる——。思っただけでも身がよじけそうです。サド的な傾向の男の人でしたら興奮せずにはいられない光景なのでございます。

戦勝の頃。しかも同胞の女性がこの有様なのでございますから、中国人や一般原住民、娼婦の人達にいたっては言語につくしかねる

ことが沢山ありました。

○

最後に澄子さんがマゾ化した為に、離婚なさったと告白なさいましたが、この点、私は澄子さんに同情致します。何故なら私自身、いつかマゾヒスト化しているのでございますもの。「KK通信」十四号に発表された第二回の告白「羞恥のヴェールをぬいで」を書いております頃には、あれほど嫌悪し思わず頬を染めていた私ですのに、それが次第に好ましくなり、今では人前も憚らず………ので、主人はそんな私を烈しく叱責し、そんな夜は二階の一室に閉じこめた上声の洩れない様にサルグツワをして、責め折檻するのでございます。私はその快よい疲労の後にくる倦怠に酔い乍ら、脳裏に浮んだ私の幻想を直ちに責絵に描いて見るのでございます。主人は黙念と私の責絵を観察いたします。そして不思議なことに「針をさされた女」(十月号)を描いていた頃には、決して針や釘など刺道具は使わず、「楽屋裏の咎責め」(新年号)などを描いていると、その幻想を裏切るかの様に新たな拷問を加えて来たのでございました。その模様は又、次にいたしたいと思います。この様に私の描く折檻図は決して使用せずに

別の新しい責め方をする主人だったのでございます。私は不満と怒りの交錯するまゝに、何物か求めてのたうち転げまわります。主人は林田さんの様にマゾ化した私を嫌っていたので、私は満されない不満を責絵を書くことに依って満し、そうして生甲斐を求めていたのでございます。

私は澄子さんに稚拙でも責絵を描きなさいとお勧めいたします。それから林田さんにはあなたの責任に於て、マゾヒスト化した奥様の為に新たなサディストとして、発展すべきだと申し上げたいのでございます。

それはちようど私のマゾ化を嫌って、新たなサドを求めようとしている私の主人のよう——。そしてもう一つはあなたの「奇ク」に澄子さんの責絵や、憲兵として体験されたあなたの身震いするような、内外人のサド振りをぜひ発表して戴きたいのでございます——。最後にお二人の御幸福をおいのりいたします。(おわり)

×

×

×

×

私 刑 (リ ン チ)

子 代 喜 場 菫

1.

妾が宮本と手に手をとって、正木の許から逃出したのは、妾が正木の情婦となってから丁度一年目でした。妾はその頃、初恋に破れた自暴自棄からキャバレー勤めをする様になったばかりでした。金離れが奇麗で、恰幅がよく、その上表面だけでも女に優しい。そんな正木に口説かれて、その世界では初心の方に属する妾が、簡単に肌を許してしまったのも決して不思議ではありません。不覚といえませんが、妾は正木の正体を知らなかったのです。知った時はもう遅かった。何故って、妾は知らず／＼のうちに、彼の手助けをしていたのですから。

彼は麻薬の密輸入者でした。そして時々何気なく妾が頼まれて預ったり運んだりした品物は殆んどそれだったのです。然しそれは店をやめ同棲する様になってから、始めて知った事でした。

横浜の廃屋の様な洋館にとじこめられた一年。目付きの悪い乾分達がいつも出入して、酒と賭博と喧騒のむせかえる頹廢の世界。そのくせ始終、何者かにおびやかされている憂鬱の一年。

本性を露わにした正木は、決して優しい紳士ではありませんでした。彼にとって女は、単に性欲を処理する方便物でしかありませんでした。

全く気まぐれにお相手させられ、一寸氣に喰わないとすぐ紫色の痣が出来る程打たれる事も一度や二度ではありませんでした。

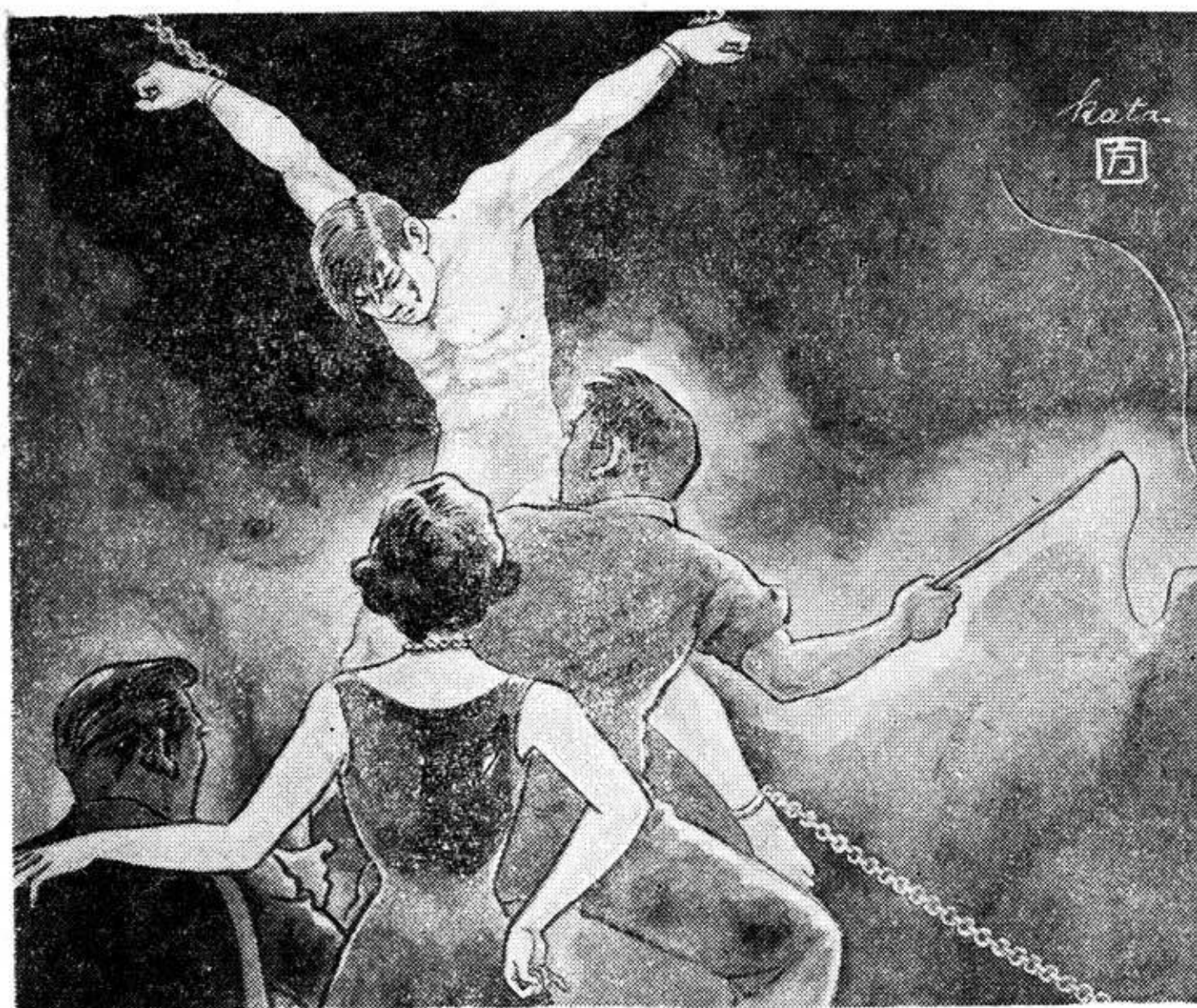
幾度逃出そうと思ったかと思いますが、逃げ損なった時の事を考えると結局足がすくむのでした。

宮本は彼の乾分の一人でした。まだ童顔の残った二十一。でも、身体は五尺六寸、十八貫の逞しい青年でした。彼はこの泥沼から足を洗おうと始終考えているらしいのです。いつも口数の少い憂鬱な顔をしていました。

妾も二十一。以心伝心といえますか、いかそんな心をお互に見抜き、それが仄かな愛情となり遂に或夜、妾達は手に手をとって横浜を逃出しました。

池袋に近い或るアパートにかくれて、楽しく、それこそ生れて始めての切ない情熱の三カ月を送りました。

だが、そう／＼金はつぎやまません。戸外に出たくなくとも、そうしなければならぬ日がやって来ました。職を探さなくてはならぬ



かったのです。とう／＼或日は決心して部屋を出て行きました。そうして八時になり、

九時になっても帰って来ません。たまりかねて妾はその辺まで迎えに行つて見る積りで、

アパートを出ました。道の傍に一台の車が止つていましたが、何の気なしに通るすぎようとして

「あつ」

と声を呑んで立ちすくみました。声もなくすつと近づいて来た黒い影が、妾の脇腹に冷たいジャック・ナイフの刃先をむけているのです。

「とう／＼見つけたぞ」

ぞつとする笑い。正木が現われたのです。

2.

車は京浜国道を猛烈なスピードで

突走りました。途中で、幾人も警官の姿を見かけました。交番の前も通りぬけました。その度に妾は大声で叫びたい衝動にかられましたが、然し妾の横腹をこづくナイフの無気味な光にきつと唇をかみしめて声を呑まねばなりませんでした。仮りに叫びをあげても、相手に聞えるかどうか判りません。妾はもう成行に任せるより仕方ありませんでした。妾は殺されるかも知れない。どうせ殺されるなら、悪足掻せずに奇麗に殺されてやる。そう決心すると幾らか心が静まってくるのでした。

やがて車は横浜の市内に入り、そこを突きぬけて海岸へ出ました。記憶のある洋館の建物がぐん／＼と近づいて、も少しで衝突と背筋をひやりとさせた時、グンとシヨックを感じて車は停りました。正木たちの本拠なのです。葛が一面にからみついた古ぼけた洋館を冴えた月がおどろ／＼しく浮上らせていました。

ぎぎ／＼とぶいきしみをあげて重い檻の扉が開き、妾は正木にこずかれ乍ら、暗い室内へ踏みこみました。

懐中電燈をつけた正木が先に立ち、地下の揚げ蓋をはねて、黴臭いじめ／＼した階段を

下りて行きました。此処は密輸品を入れる場所になっていのです。然し入口の扉をまたいでみると、今は品物を捌いて了った後とみえコンクリートの床は広々と空いてガラんとしています。

椅子が二つ置いてあり、正木はそれに威勢よくどすんと腰を下し

「おい、まあ坐れよ」

妾の方を顎でしやくりました。乾分が妾を後から押したので、妾は一寸よろけ、然しすぐ故意と太々しい態度で腰を下しました。正木は洋煙草に火をつけ、妾にも差しました。

「まあ一本どうだ」

妾は彼の顔を睨みつけ、首を振りました。負けるもんか、お前なんか。妾はともすればふるえようとする身体を懸命に力を入れてさゝえていました。

「大分、機嫌が悪いようだな」

彼は毒々しく笑いました。

「どうだ。俺が恐ろしくねえか」

「誰がッ」

妾は齒をかみしめて、そう言いかえしました。彼の目がぎよろっと光りました。

「尤も俺にとんだ恥をかゝせる位の度胸だからな。いや大したもんだよ。だが少々ふるえ

てる様だな。この陽気に寒いのかね」

にや／＼と気味の悪い笑いをうかべながらからかいます。

「よししてっ。判ってるわよッ。妾を殺すんではよ。えゝ殺して頂戴。さ、早くあッさりやったらどうなの」

妾は叫びました。

「所がそうあッさりいかねえんだよ。今夜はお前にゆっくり楽しんで貰おうと思つてな。色々趣向があるんだ。ま、酒でも呑めよ、丁度酒が来たようだから」

彼の視線の方を妾も一寸振かえました。胸を露わにして桃色のイヴニングドレスを着た女が、片手に五六本ゆわえたビール瓶をさげ片手に重そうなバケツを下げた女が、今しも入って来る所でした。その顔をみて、妾はアツと声をあげました。以前、同じキャバレーで働いていたユミという女なのです。前から正木に気があり、だが妾と正木とわけのあってからは、一言も妾に口を利かなくなつた女色んな意地悪を新米の妾にしかけた女、それが此処に来ているのです。きつと妾が逃げから、後釜に坐りこんだのでしよう。

「ホホ。とう／＼捕まえられて来たわね」

山椿みたいな唇をあけて、それが彼女の最

初の挨拶でした。

「ユミ。昔の仲間に一杯さしてやれよ」

妾は頑強に首をふりつゞけました。正木と四人の乾分、それにユミはなみ／＼とコップに琥珀色の液体をつぎ、さもうまそうに呑みだしました。

「さ、お前も呑みな」

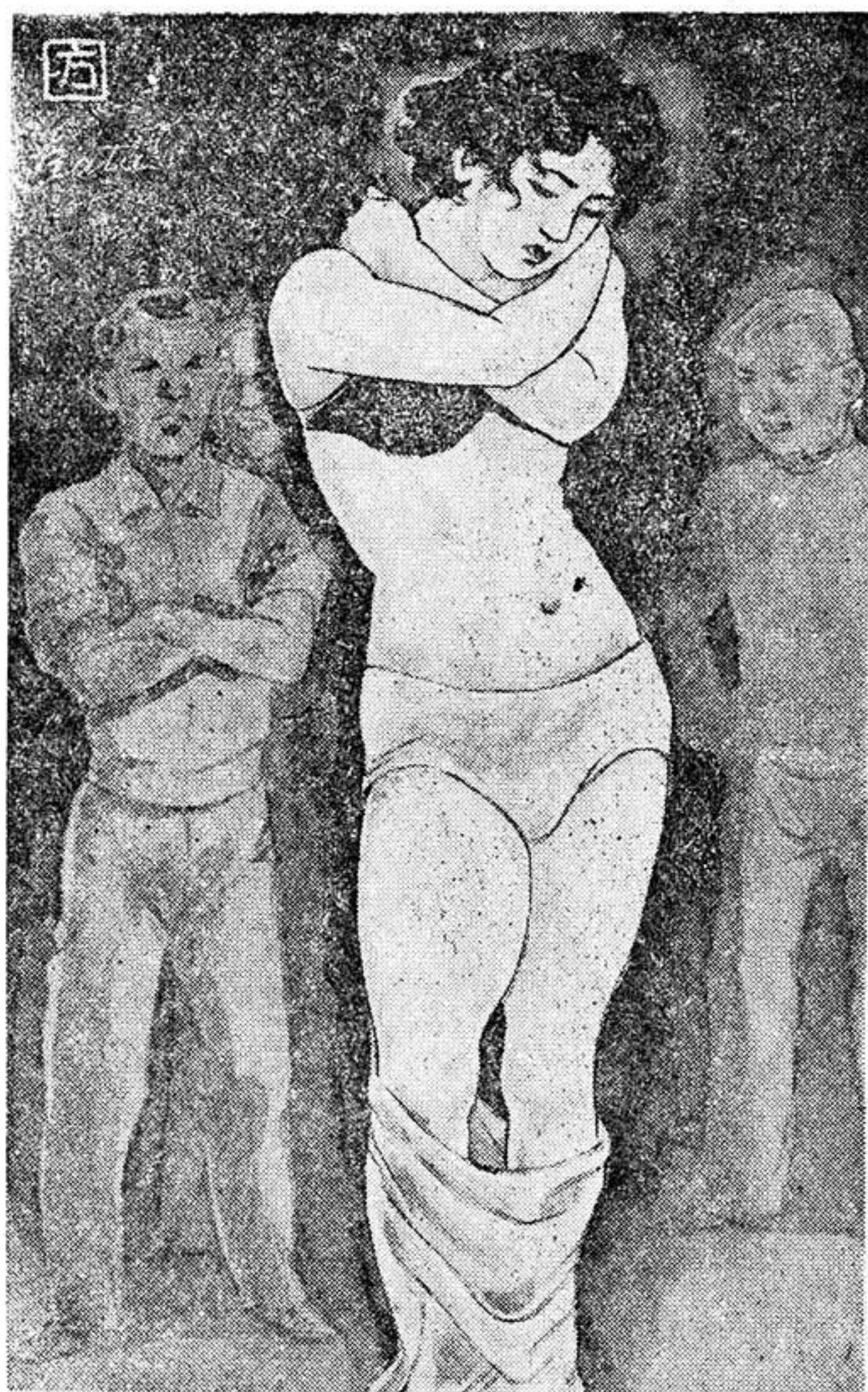
ユミが妾の鼻先に、コップをつきだしました。妾は精一杯の力で彼女を睨みつけてやりました。

「おや、睨んだね。昔の朋輩の盃がうけられないというのかい。相変らず、小生意気な女だね、妾をなめてるんだね。よし、どうあつても飲ましてやるから」

彼女は妾の口を無理にこじあげようとかゝりました。妾は思わず手を上げてコップをはねのけようとしたが、忽ちその手はぎゅつと乾分の強い力で握まれてしまいました。残る手もねじあげられました。

「ざまあ見な」

ユミは毒づき乍ら妾の鼻をつまみあげました。息苦しさに思わず口を開くと、ドク／＼音を立てゝ苦い液体が一息に腹まで流れ込みました。膾高き声をあげて正木が笑いだしました。ユミもそれに合せて小気味よげに笑う



のです。妾はむせて、せきあげました。元から酒は弱い方なのです。それなのに、立てっけに三杯も吞まされました。天井の明るい電燈がぼっと二つになってゆれました。

「もうその位にしとけ。酔わせて了っちや折角の見世物も楽しめねえだろうから」

正木が声をかけました。

「ほんにそうだねえ。じやこの位で勘弁したげる。目をよくあけて、ゆっくり見物しな」

ユミが相槌をうち、妾の頬をびしゃっと叩きました。妾は身体中がぼか／＼火照り、頭がぐら／＼していましたが、ガラ／＼と合の仕切戸を押す音にはっと目を見張りました。次の部屋は真暗です。パチツと音がして、電燈がつかしました。その途端、妾は

「アッ！」

腰をぬかす程驚きました。そんな不安な予感がないでもなく、でもすばしこい彼の事だ

からまさかと自分で打消していた、その不安

が今、現実となって妾の目の中へ飛びこんで来たのです。彼です。宮本です。天井から下りて来た二本の鎖に、張りさけんばかりに両腕を吊上げられ、両脚も床の鎖に左右に引しぼられて宙に大の字になっているのです。頭はがっくり前に垂れ、その額からは叩かれたあとか、血が流れて頬にこびりついています。正しい身体の胸にも腹にも太腿にも、痛々しいみゝずばれと、どす黒い血のねばっているのが判りました。もう余程責められたのでしよう。彼は氣を失っている様子でした。

「どうだい。マヤ。氣に入ったかい。いゝ恰好だな。手前の色男は」

あざ笑う正木に

「畜生っ、人非人っ、悪魔っ。」

妾はあらん限りの罵言を投げつけました。「ふっふっ。いかにも俺は悪魔だ。人でなしだ。それを知らないお前じやなからう。今夜はゆっくりその悪魔ぶりを見せてやろう。おい！」

正木が合図すると、鞭を手にした乾分が、ずか／＼と宮本の前に進んで行きました。鞭が大きく振りあげられました。

「きやっ」

叫んで妾は目をとじました。手で掩いたくとも、その手はまだしっかりと乾分に掴まえられたまゝなのです。びしっ、肉のはじける音がしました。

「うーむ」

宮本はうめいて、ちよっと頭をふり、きつと顔をあげました。腿に痛打を喰って正氣に返ったのでしよう。カツと目を張りさける程開き唇を歪めた凄まじい形相です。その爛々ともえた瞳が妾を捕えました。愕然とした狼狽の色が走りぬけました。口がぽかんと開きかゝりました。その時、又もや鞭がうなりました。びゅんという無気味な風を切る音。ぱしっとなに力一杯はねかえる響。

肉の盛り上った皮膚から血がほとばしりました。身体全体が弓なりにそりかえり凄まじい絶叫が空気をふるわせました。

妾は胸板を射ぬかれた様な激痛を感じました。気が狂いそうでした。

びしっ、びしっとな鞭はつゞけ様にうなりました。ひきつる様なうめき、脂汗をしたゝらせて苦悶する四肢のけいれん

「やめて、やめてーっ」

妾は叫びました。

「やめてお願い。ね、あの人死んじゃうわ。」

殺さないで。助けて。何でも言いなりになります。どんな事でもきゝます。お願い、妾を叩いて、妾を殺して。ね、そしてあの人を許して頂戴。」

妾は泣いていました。必死に懇願しました。正木はそんな妾をさも憎々しそうに暫く睨んでいましたが、不意ににやっとな笑い出し「どんな事でも、大人しく言う事をきくんだな」

「きゝます。ですから助けて。」

「ようし。じや男の方はこれで勘弁してやろう。今度は手前だ。同じ様にぶん殴るつもりだったが、それじや曲がねえ。よし。何でも聞くといたな。じや、裸になれ。」

3.

「裸に？」

妾は屈辱に青ざめました。妾の身体の隅々まで知っている正木だけならまだしも、乾分達やユミまでいるこの中で。躊躇している妾を、又しても嘲笑を浮べた正木がおっ被せて「なれねえのかツ？」

妾は決心しました。ならないと言っても、どうせ、よってたかって裸にむかれてしまうでしょう。思い切って立ち上りました。

「なります」

きっぱりと言い、腰のバンドに手をかけました。ふっと血走った宮本の目とぶつかりました。口をもぐ／＼させ何か言いかける彼に妾は首を横にふり悲しい微笑を送りました。

黒いワンピースの裾が傘の様に拡がり、首を包みました。一寸前かゞみになった妾の身体が元へ戻ると同時に、それは只一枚の黒い布きれになって足元へ落ちました。皮肉なユミの目、そして息をのんだ男達の目を妾は強く感じ乍らシユミーズの肩のホックに指をあてました。それが足にからんで山になって落ちると、もう乳あてとパンティだけしか身体に残りません。妾は目を床に落して、流石に上にあげられませんでした。やっとな手を背にまわしてブラジャーをとりました。びったり胸に押つけられていた、ふっくらとした双の乳房は解放されてゆらりと重くゆれました。もうパンティ丈になってしまいました。そしてそれを取る気にはどうしてもありません。

「おい。それもとるんだ」

「か、勘忍して。これ丈は」

「何だ。何でもきくと言ったのは、ありや嘘か」

遂に――妾のすんなりした脚が代る／＼そ



切腹研究夜話

中 康 弘 通

執筆と勤務を並行さす生活の過勞から、

思いがけず床に就いたため、暫時休載の止む無きに至ったことを、深くおわび申し上げますと共に、お見舞状を賜った各位には厚く御礼申上げる。未だ充分でないのだが書房の迷惑の程も察せられるので、口述筆記でお許し願いたい。いつも以上に読み応えの無い雑談は右の次第に他ならない。

おわび序でに今一つ、四月号第三回に於て解説した映画「にこりえ」の源七は、山村聰所演と記したのは誤り、正しくは宮口精二の由。また五月号に和田克徳氏の著書「切腹哲学」が博文館？ 発行と記したのも正しくは修文館だそうである。お知らせ下さったK氏並びにS氏のお蔭で訂正出来

たことを附記しておく。

忙しく時計に追われていた人間が、寝ることを強いられた結果、毎日ラジオと新聞それに肩の凝らぬ本だけが、時間を消す手段となったのは当然のことである。そこで眼に触れ耳にしたことでも書き止めてみよう。

此の一月から百回に亘って竹内逸氏が、夕刊読売新聞大阪版に連載された「女さまさま」は、軽妙な筆致と世態に徹した批評眼とで毎夕楽しく拝読したものだだったが、その中でも特に注意を魅かれたものに、第五回「泉岳寺の墓碑」がある。

竹内氏が偶々泉岳寺に立寄り、居合せた

四十五才位の夫婦と其の息子らしいアメリカ人に、赤穂義士に就て色々説明された時の話で、例によって一部分引用させて頂く。

「十四才？ 十四才！ 十四才のボーイが腹を切ったの？ 可哀相なことをしたのね！」

彼女はハンカチを取り出して鼻を伏せた。吾々も彼女の声が余りにも悲愴だったので悲しくなったし、線香の灰がポロポロと落ちる。

「ヒドイわね。そんな子供になぜ腹を切らせたの。誰か止めてやる人はいなかったの。」

そこで拙者（竹内氏）はそのワケを話

した。万一フラチを仇く者が出ると、折角の義拳を傷つけるからと、そのワケを話した。「それは尚更ひどいわ。フラチを仇くか仇かないか判らないじゃないの。それをフラチを仇くモンと決めて殺してしまうなんて僅か十四才の子供：噫：ナシという無慈悲：」もう彼女の顔は涙で濡れ切ってしまったし、亭主の肩に額を押しあてて泣いた(略)氏の簡潔な文章からも情景は容易に想像出来、こゝに種々の示唆を含んでいることが感じられる。日本人ならば仮令女性でも、主税が十四才で切腹した事実に対し、一概に無慈悲とは感じないであろう。我々は極端な例として八才若しくは九才で切腹した少年があったことを、知っている。武家時代の道徳律は少年に対しても責任行為能力を認めていた、と云えよう。そして斯かる事実を我々は、既定の事実として単純に受け容れているからである。アメリカの女性なるが故に過去の事実を、その現在性に於て把握し、批判していることに我々も亦、考えを潜めねばならないのではなからうか。

彼女の發言の力点は、

第一、十四才の少年が腹を切ったこと、
第二、かゝる無惨な情景が看過されたと、

第三、少年と雖も死刑に処したこと、
此の三点に驚きと悲しみを咬られたもの
のようである。

然し第一の点は、当時既に切腹は儀式化し、前後の作法に於て故実を重んじ実際に刃を腹に加えることは少かった、殊に赤穂義士になつては、約百六十種の関係文書を集録した「赤穂人纂書」全三卷(国書刊行会刊)によつても僅か二、三名が傷付けたにすぎないようである。即ち、「浅野仇討記」の村松三太夫と「赤城士記」の岡野金右衛門は腹に刀を突立てた旨、記載されて居り、「赤穂浪人御預之記」の間新六郎が、六七寸ほど腹を切った由記載されている他は、当の主税に就ては「浅吉一乱記」のみが、二文字に腹を切ったことを述べているが、その他のより信憑すべき文書には見当たらない。恐らく作法通り腹に刃先を差し当てるか当てないかで介錯を受けたものと思われる。

第二、第三の点に就ては、前述の如く切

腹は名誉保持の刑罰であり、主税のような少年に在っては一点の懷疑も無く受け容れられたに違いないのである。

(「浅吉一乱記」が紙上でのみ主税の壮烈な切腹を遺したのは、色々理由も有ろうが、一種の英雄愛情心理では無いだろうか。是も著述の事情を検討するならば当時の武士道精神に就て、一個の資料たり得るであらう。)

さて、こういう記事に付けても、学識深い方々が、新渡戸稲造博士の跡を継いで、海外に日本の歴史や風俗習慣を紹介されることを願うのである。筆者の研究動機の一環も亦、時の流れと共に消滅して行く文献を今日に於て一冊でも広く渉猟し、一行でも多く記録しておきたいからであると同時に、是が契機となつて、日本と日本人が外人により深く理解されるために著述される方が出来れば、と念ずるところにもある。

勿論一面に於て日本人の切腹に対する外人の感想や意見記の類は決して少くない。例えば古くは「日本西教史」「紅毛雑話」にも、見えるし、幕末の神戸事件に際しては、ミットフォールドなる英国公使館書記

の著「往時の日本」に、滝善三郎の最期を悲壮なる切腹として記述していることは、新渡戸博士の「武士道」や、土師清二氏の「切腹雑話」にも見える。そして是らの記述は必ずしも日本人の切腹を一方的に野蛮視せず、勇烈なるもの、悲壮なるものとして観ているようである。何れ「外人の観た切腹」として一章を設けようと、書き止めておいたことどもを此の機に紹介しよう。

まず「日本西教史」の例話は、「川角太閤記」などにも見える秀次自刃の際の殉死を説いている。即ち、広文庫所収抜萃による。

一六五九年秋八月ノ初メニ当リテ、太閤ノ使命到来シ、関白及侍者若干名、悉ク割腹ヲ命ゼラレタリ。此ノ使命ノ恰モ雷撃ニ等シク、惘然ノ至リニシテ、主従平日ノ希望斯ニ尽キ、直ニ自尽ノ準備ヲ為セリ。第一ニ此ノ愁嘆スベキコト、一劇ヲ演ゼシハ関白ノ従者十九才ノ少年ナリ。此ノ人剛勇ノ者ナレバ、関白ノ面前ニ於テ一小刀ヲ握リ、自ラ腹ニ刺シ、鮮血混々ト湧流シケレバ、関白ハ其ノ苦痛ヲ憫ミ、自ラ佩刀ヲ抜キ、厚ク忠死ヲ賞シテ其ノ首ヲ刎セリ。

是二次デ一人ハ十六才一人ハ十八才ナル従者伴ニ其ノ腹ヲ割キ流血泉ノ如シ。関白ハ又同シク之ヲ刎セリ。其ノ次ハビユスユルトト称スル人ナリ。一刀ヲ腹ニ刺シ而シテ猶ホ足レリトセズ、幾度モ之ヲ搔廻シ流血席ニ溢ルル時、関白之ヲ視テ一刀ヲ拳ゲシガ、其ノ首ハ忽チ地ニ落チタリ。(下略)

「紅毛雑話」は天明七年森島忠良の筆になるもの。その巻二に「切腹の事」がある。

キユーレルと言へる蛮人、西何某に問て曰、日本の刑法に、士人罪を犯したる時、死を賜れば、人の手をおろすをまたずして自七首を取て腹を切ると伝聞せり。誠に然るや否やと。何某その偽ならざるよしを答ふ。キユーレル舌を巻て曰、日本の人気がくまで猛烈なり。外国には見も聞もせざる事なりと云しとなん。

筆者が嘗て所蔵していた神戸クロニクル社発行の小冊、「英文神戸小史」にも滝善三郎の死を名誉ある自刃として記述していたことは記憶しているが、是が著者は邦人であったか外人であったか、今は記憶に無いし検索の術もない。

外人の切腹観に就ては此の他、幕末開国時来日した外人の手記や近くは「菊と刀」など、此の方面の資料も多いこと故、不日まとめられることが望ましい。

小泉八雲は日本びいきの外人で有名だが彼の「心」(岩波文庫に収録)にも、「近江源氏先陣館」の小四郎の如き悲痛な少年の切腹を取り上げている。彼に就ては改めて又述べることもあろう。

昭和21年6月号「新小説」に於て、「若杉慧論」を編集部から求められた清水基吉氏は、次の如く記している。

「淡墨」は神戸事件に関連した日本の一青年が異国人の前で切腹して果てる経緯を描いたものである。(略)若杉氏は「淡墨」に於て重点の多くを書記生の手記に注がれてゐる。最も緊迫したハラキリの場面をも、手記中に描写せしめてゐる。(略)

此の「淡墨」は「文学界」に発表の由だが、引用を省略した部分に見えるところでは、若杉氏の附記によれば書記生は実在の人物では無く、従つて其の手記も全くの創作だとある。勿論若杉氏の如き想像力の逞

い力作家にあっては、氏自身ミットフォールドと無関係に創作されたものである。神戸事件や堺事件を日本人の側から描いた作品は多い。然し英人の見た切腹を描写された此の作品は、深い興味を感じしめ、一読したいものと思うが、なか／＼見付からないのである。

四月二十二日付の大阪新聞演芸娯楽の頁「話題のぷりずむ」欄は、「衰えぬ浪曲ブーム」を謳っていた。民間放送の進展に伴い、戦後一時

下火だった浪曲は目覚ましく興隆したもので、最近耳にしただけでも、と言いたいが、実は時間の都合で筆者は新聞で梗概を知ったにすぎないが、切腹を扱ったものが二つある。何れもNHK第一放送である。

秩父重剛氏作「さむらい」は、芭蕉の「幻住庵記」にも見える曲翠菅沼外記を扱う。



近江膳所藩主本多氏に仕える曾我権太夫は殖産奉行を勤める赤木半之丞の不在に不正を計った。半之丞は主君の面前で彼の曲を語り、却って切腹を命ぜられた。半之丞の叔父菅沼外記は、享保五年七月二十日、自宅に権太夫を招いて刺殺、自ら切腹して果てた。然し斬奸の志も空しく、権太夫の娘を寵する主君の命で、外記の息子内記も

亦命ぜられて十七才の身を、腹一文字に切って果てねばならなかったのである。

中田比良夫氏作「新花守」は、浅野内匠頭が愛宕下田村邸で切腹に際し片岡源五右衛門が田村右京大夫の好意で、花守の名目を以て内密の対面を叶えられるという筋である。

一体浪曲というものは鶴見兄妹以下の「思想の科学」のグループが取り上げているらしいが、それも主として所謂、やくざ道、マドロス氣質、義賊気取りなどの庶民的傾向が主なのではないかと想像している（若し違っていたら御海容を乞う）声調による切腹描写に就ての検討などは、恐らく未開拓の分野である。かくいう筆者自身メモも取っていないので、乏しい記憶に頼る他はない。文献として残っている記録も余り無いようである。

ある。

その題材中特に切腹に関連あるものとしては、一々の演題は記憶していないが、概ね左の如きものであろう。

1 赤穂義士もの

浅野内匠頭田村邸に於ける賜死、

萱野三平の義死、

四十七士の賜死、

小山田庄左衛門の父の憤死、

村上喜剣の自刃、

大体以上が主なものと思う。浄瑠璃に於ける塩谷判官、早野勘平は浪曲には取り入れられてはいないかと思う。赤穂義士ものに限らず、浪曲には実録的傾向が強い。たゞし、矢頭右衛門七の老母が、彼の決心を堅固ならしめるために切腹する、という浪曲が有る由、知人から注意されたことを附記しておく。是は完全に創作だと思ふからである。尤も村上喜剣なども架空の人物という説があり、浪曲の写実性の限界も此の辺りにあるのかも知れない。

上記の内、喜剣に就ては雑誌所収の筆記があるので、こゝに一部引用しておこう。

△張良陳平孔明と云へど、よも御身に

は及ぶまじ、せめてもの申訳に、今御身の墓前にて、腹かき切つて冥府に参り、

お詫び致す吾が所存、…(略)…双層脱いで用意の白布、鞘を払うた小剣に、キリ

と巻いて切先出し、吾と吾が左の横腹へ、「ウワツ」とばかりに突き立てたり。

…(略)…

事新しく述

べるまでもな

く村上喜剣は

祇園で遊蕩中

の大石内蔵助

を罵倒した不

明を恥じ、二

十四才で切腹

した薩摩藩士

ということに

なっている。

尚、目下民間

放送数社が、

サス・プロで

浪曲忠臣蔵を

連続放送して

いる。

2 幕末もの

白虎隊

桜田の変(高橋父子)

神戸事件(滝善三郎)

堺事件(土佐十二烈士)

是は殆ど説明を要しないであらう。殊に



堺事件や神戸事件は、戦時中は屢々上演されたものである。此の他、生野義孝の南八郎以下自刃のこと、桜田の変に連座した有村雄助のことなども上演されたかも知れないが、今は記憶にない。

3 合戦もの

源頼政（扇の芝）——「平家物語」

村上義光（吉野城軍）——「大平記」

清水宗治（高松城水攻）——「太閤記」

一体軍記、合戦記の類に取材したものは不思議に少ないが、右に挙げたものは割合頻繁に上演されたと思う。

4 戦争もの

須知中佐（常陸丸）

菅船長（長崎丸）

以上二曲は記憶にある。やはり二十年ほど前の話だが、日露役に際し農家の一青年が即日帰郷を恥として、家に入らず納屋に砥ぎ上げておいた鎌で腹一文字に切る物語は、女流浪曲家だったせいか、印象に残っている。

5 文芸もの

時代小説、歴史小説に材を取ったものとして、例えば先述の「さむらい」もその一

例だが、尾崎士郎氏「村上六等警部」行友李風氏「月形半平太」などがある。稀少な女性の切腹を取上げたものとして、吉村礼津を描いた恭平氏の「乙女桜」も、昭和十九年夏ごろ放送されたと記憶する。

此の間発行された朝日新聞重要記事縮刷版の広告欄、「女武士道」というのがレコードの広告に入っていた。どんなものか。寝ていたおかげで可成り雑書を読み漁った中に朝日新聞の縮刷版は有意義だった。先に触れた、外人の「切腹」に対する考え方、という問題とも関連するのだが、乃木將軍の壮烈な殉死を報道した大正元年九月十七日付紙面は、貴重な文献である。

香港電報として、香港英字紙が

斯る壮烈無比の最期は武士道の権化日本サムライの典型として世界の讃嘆する所なり

と感嘆したことを伝えている。

將軍の最期は日露役当時従軍武官だったドイツの一將軍の崇拜するところとなり、後日歐洲大戰に際し、彼が守る西部某要地の撤収を命じられたとき、彼は洋刀を以て割腹、一命を以て責を償った、という話

柄が、今も記憶に残っている。多分、昭和十三、四年ごろの雑誌「キング」だったと思う。

外人では大平洋戦の末期、内蒙古の青年が短刀で割腹、憂国の自刃を遂げたことが当時の紙上に伝えられていた。

古くは川上音二郎、近くは法村友井バレー団が、欧米巡遊中、演劇やバレエに切腹の型を入れて外人の好奇心を唆ったことを伝えられているが、是も昭和十三年夏ごろの大阪毎日新聞学芸欄に面白い隨筆が出ていた。題名も筆者名も失念したが、フランス遊学中の洋画家のものであった。細かいことは忘れた。

画家はフランス人に度々切腹に就て質問された。何の部位を如何に切るか、ということが質問の要点であった。画家は一々形をしてみせ納得させると、人々は驚異と恐れを示すのが常だった。一日、ある宴席で質問された画家は、有り合う果物ナイフで薄く腹を一文字に切ってみせた。すると婦人も多い席のこととて、真蒼に顔色を変える人も多く、忽ち座が白けて、画家は後悔した。

こういう物語である。此の画家の方、今何うして居られるか、拙文中に引用したことをお許し願いたい。

話を乃木將軍に戻して、將軍の殉死はあらゆる階層に一つのショックを与えたものと言える。實際此の年十一月三日には、十六才の中学生が山口県下で將軍を慕い、短刀で割腹している。現実に切腹しないまでも何らかの感激、感嘆を禁じ得なかった人々は相当多かったに違いない。文学者は本質的に時代の旗手である。其の文学者の中でも、今日も文豪の名を壇にしている、鷗外、漱石に於て、將軍の殉死は大いなる時代の象徴的終幕として受け取られたのではなからうか。

鷗外は「興津弥五右衛門の遺書」を書き「阿部一族」を綴り、やがて歴史文学の道を真直に歩いて行った。鷗外に取って、然し將軍の殉死は明治という短い期間の終焉に止まらず、武士道精神の最後の発露として映じたことは、彼の歴史文学が、明治を超えて、江戸時代初期より中期に至る武士道倫理の爛熟期を対象としていたことから、比較的容易に想像出来るのではなからうか。

うか。それに反して漱石に在っては、それは明治そのものの象徴であった。彼が云う所の「明治の精神」は、彼の内に在って形象されて行った。

大正三年四月から朝日新聞に連載された「こころ」は、彼の乃木將軍觀を、というより「明治の精神」觀が表れている。

「こころ」の主人公先生は「明治の精神」の終焉、「明治の永久に去った報知」として、御大葬の夜の号砲を、將軍の殉死を、耳にし眼にするのであった。彼は、「明治の精神に殉死」したい気持で、將軍が死ぬ機会を待った三十五年の永きと思うのであった。彼は言う、

生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

それから二三日して私はとうとう自殺する決心をしたのです。(下略)

漱石に取って、殉死は歴史でなく、精神の問題であつたとも云えよう。

五月号に沢山切腹の絵が出ていた。その中でクリスチャン女性の切腹を描いたものがあつた。クリスチャンは信条として自殺はしないものである。細川ガラシャ夫人は随分勇烈な女性であつたが、決して自刃してはいない。従つて歴史風俗画としては一寸奇妙である。然し、神戸の池長コレクシヨンに在ったと思うが、南蛮屏風で血痕の飛び散つたものがあるという。キリシタンの一武士が、教団の衰微を嘆き此の屏風の前に端座、割腹したものだといふのである。記憶に頼る話だから、或は織物だったかも知れない。

六月号で瀬川泰子さんが挙げて居られた芳年の、「烈女自刃図」は何ういふものか、切腹を描いたものなら稀らしいものだと思う。毀損しない内に、瀬川さんのお手許で複写しておいて頂きたいものだ。

読者の方から沢山絵の投書が有るそうだが、今まで拝見したものは濺機さんのものだけで、濺機さんのものでは一番最初の絵が美しく描けていたと思う。作画の動機などお聞きしたいものである。

最後に一言お断り申上げておきたいのは新聞でも屢々見える未成年者と読物の問題

◆告白と手記と体験◆

懸賞募集

★賞金★

優	秀	佳
作	作	作
一篇に付き	一篇に付き	一篇に付き
三千円	二千円	一千円
若干篇	若干篇	若干篇

規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで。
- 一、必ず未発表のものであること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作は最近号に発表いたします。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

◎告白記の募集◎

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦まで八円にて御願ひ致します。

(編集部)

である。本稿は「切腹」の歴史及び文芸に於ける資料を集録するのが主目的であるから、その性質上、問題はむしろ武士道精神の鼓吹を以て目される恐れの方が多分に有ると思うが、興味本位の読み方をされぬよう、旧に復して文章も読み辛くなるかと

思う。お許し願いたい。

(附記) 著作権法第三章第三十条により

御著作より節録引用させて頂きました先生方に、厚くお礼を申し上げます。

未だ床を守って居りますので予定が立

ちません。口述によってでも続けたいと思つて居りますが、随時休載をお許し願います。

(梅田 淳二・画)

非 小 説

性 液 (七)

伊 藤 晴 雨

勝沼の駅を出ると人ツ子一人居ない。こんな筈は無い。自分は座長同様の主役をとって居る役者だ。それに座員の一人や半分、出迎えに出て居ない事は無い筈である。少し可怪しいと思ひ乍ら予て聞いて居た駅前の白い道、一方は断崖になって居て勝沼の町の人家が一目に見渡される高台を葡萄棚の石垣に沿って歩いて行くと、薄く減った山桐の下駄は前壺が割れて、前鼻緒がスポンと抜けた。

「落ち目になると下駄迄馬鹿にしやがる」

豊吉は口の中でこんな事を云い乍ら、別れる時友江に貰った裏梅の手拭を出して、下駄と足を縛った。〃折角貰った手拭を泥だらけにするよ〃



と心の中で詫びたい気持ちになった。

駅に待ち合せの人力車が居ないので勝沼の町迄廿町近くある処を足を引き摺る様にして歩いた。(よしやあったにしても車賃は無いのだから歩くより他に方法がないのである) 始めての道は遠く思われるのが普通である。

まして今日の主役を勤めなければ芝居が開かないという責任のある自分としては一時間でも早く芝居小屋に着かねばならないとイライラし乍ら町の中央にある勝沼座へたどり着いたが、座の前の看板を見るとアツと計りに呆然としてしまった。〃明××日東京浪花節籠甲齊虎丸一行〃一座は何処へ行つたのかと途方にくれて仕舞った。座主の家は往來の荒物屋だと教えられて腰の抜ける程落胆した豊吉が座主に会って聞くと急に此興行がグレて一行は塩山(えんざん)の中央座へ乗り込んだという。塩山迄これからの位あるかと聞けば二里近いだろうと云われて豊吉は途方に暮れてしまった。

下駄を買う金の持ち合せが無いので事情を話して藁草履を一足貰った。興行をグラした損害金は虎丸の先乗りの番頭から細野座長に渡してあるから草履の金は塩山に着いたら送ってくれという。興行ともなれば金銭には馬鹿に細かいのが普通だ。

貰った古新聞に下駄を包んで恩借の藁草履を履いて教えられた道を一直線にダラ／＼坂の甲州街道を下って山梨県の指導標のある十字路を右へ切れて桑畑の中をトボ／＼と歩いて居る豊吉の姿はトボ／＼して活気がない。それも其筈で桂村以来の空腹が然らしめて居るので……

「友江と勝次を食い物に譬えたら、友江は茶碗蒸の玉子へ箸を突込んで居る様に柔らかだが、云うに云えない味があり、勝次は捕りたての章魚の足へ生塩を打つ掛けて噛って居る様に歯応えはあるが、噛るのに骨が折れる。茶碗むしがいゝか、蛸の方がいゝか、一体どっちがいゝのだろう」

こんな事を考え乍ら歩いて居ると、勝沼から塩山へ通う乗合馬車が後ろから来て追い越して行った。ヒドイ砂埃りを浴せられて豊吉は田圃の中へ転げ込んだ

甲州盆地の山から吹きまくる風を夏のマンクトに防ぎ乍ら塩山の町へ這入ったのは町にランプの灯って来た頃であった。

中央座の楽屋へ這入ると頭取りは喜んで飛んで出て来た。豊吉が来ないので狂言をつけ替え様か、それ共喜劇を一幕出してつないで居様かと相談中だった。

見物は三分計り入って居た。豊吉が着到版に釘を指したので二丁を入れた。

初日の満員が利いて二日目は八分の入りで分金が三十六円二十銭也、細野と豊吉の二人分の開盛座の給料の正に三ヶ月分に該当するのだ。田舎廻りはこれだから止められない。

此上に二人に女が出来、それから身の廻りが出来れば大手を振って東京へ帰れると二人は喜んで居た。

人間万事塞翁が馬で、塩山の一つ先の日下部の日下部座から此一座を買いに来た。塩山と日下部では汽車で十分、距離にして二里である。

日下部の座主は一冊の台本をもって来た。台本の表紙には〃差出の磯怪談小松怨霊〃と書いてある。而して此狂言は差出の磯に昔あった実話の怪談で、これを出せば満員になる事請合いだから是非急務古で演ってくれという申込みである。

座主の話によると、日下部町の西端を流れる笛吹川の橋を渡ると橋畔に富貴亭という旅館がある。今は座敷を建て替えたが此川沿いの座敷に怪談がある。

今から四、五年以前の事で、此附近の在方

に豪農の一人息子があって甲府柳町の小松という美妓といふ仲になって末はお約束の夫婦と斗り、二人はやがて幸福になれる事と思つて居たが身請けをされて若旦那と同棲する様になる。物堅い農家とソリが合わず、小松は旧式の姑にいじめ抜かれて家に居たまれず息子と二人家出をして此「差出の磯」の旅館で男は女を短刀で刺し殺して自分も咽喉を突いて死んでしまった。女は死ぬ迄姑を怨んで死んだが其時女の血汐が釣つてあつた紗蚊帳の天井に一滴斗り飛んだが、着いたのを、蚊帳が余り上等なので、其血を洗い落して使用して居た。これが此怪談の発端であると。茲で座主の渡辺さんは冷えた茶を一口飲んだ。

其蚊帳は紗に秋草の描いてある上等な蚊帳なので捨てゝしまうのは如何にも惜しいというので客用として使つて居ました処が、如何です、其一滴の血が夜中になると段々に拡がったと見ると同時に何処からとも無く「お前と妾しが差出の茶屋で」と地の底からでも湧いて来る様な物哀しい声が聞こえて来、それと同時に寝て居る人の胸に大きな石の様に重み加わつて来るので、これが毎晩続くので大評判となつて誰も此家へ泊る者が無くなつてしまいました。甲府の警察では「迷信打破

」の建前からでしょう、警察の柔道師範の先生を其蚊帳の中へ寝かして試しましたが矢張り幽霊に悩まされて一晩で兎を脱いじまつたのです。勿論其前だつて東京の梅ヶ谷や常陸山の一行の力士が甲府の興行中、面白半分には泊りに来ましたが、何れも同じ事で、幽霊の蚊帳として有名になりましたが、甲府の警察では、「こんな有害な蚊帳があるからいけない、イツソ燃してしまえ」という署長の意見から此蚊帳を所有者と警察署長立会の上で、甲府警察署の裏庭で焼いてしまいましたのは今から五、六年前の事です。ナント珍しい話でしょう。処で此小松という芸妓のいじめられる処を責場にして一つやつて見たら如何かと思ひますね。

「差出の磯の怪談」は甲州路へ入れば誰でも知つて居る事実話で、これを一夜づけに仕組めば大入りをとるに違いないと、其処は御方便に一夜つけの掴みで筋立てをする事にして日下部へ乗り込む事にして此次の乗り場の上諏訪の都座へは頭取を出して二日間グラセる事にした。豊吉が勝沼でグラされたのを茲で又グラした事になる訳である。

其頃の新派の女の責場は旧劇の「敷島物語」の焼き直し風でこれをソツクリ小松怪談へ

はめ込む事に、細野と豊吉は相談をした。如才なく脚本料を日下部の太夫元へ請求したら婉曲に断られてしまった。田舎芝居には脚本料は無いのが普通で、佐藤紅緑の「潮」でも行友李風の「月形半平太」でもドシ／＼無断上演が普通になって居た。

一夜づけの「小松怨霊」は土地柄だけに大入りをとつた事は云う迄も無い。一座は懐ろ豊かに次の興行地、上諏訪の都座へ向つて出發した。

東京丸の内の有楽座は伯爵柳原保恵氏の出資で支配人は新免弥継氏で（現松竹合名社員）現在の東京朝日新聞社の一部にあつた建物で、明治四十年十月開場式を挙げた高等演芸場で定員約八百人、舞台幕吊り五百、当時としては極めてハイカラな建物であつた。「ハイカラ」という言葉が「モダン」という言葉に変わった頃にはカラーの無いがなくなつてしまつた。其後寄席まがいの演芸では興行する様になつたのはそれから後の後がある。

曾我廼家五九郎一座開演という立看板が数寄屋橋の横に立てられて華々しい装飾をした絵看板が掲げられて往来の人の目を驚かした。

曾我廻家五九郎とい
うのは五郎の弟子で最
初は大昔しの壮士で板
垣退助の玄関番をした
事があるのを自慢にし
て居る男で、其後、俳
優を志して曾我廻家五
郎の弟子となって、五
郎が二度目の上京の
時、新富座でお目見得
狂言にしようと思って
書いた新作の「日本橋
」(これは新橋演舞場
に上演されて人の知る
処である)一幕三場の
台本を盗んで一足お先
に此有楽座を開けたの
は、役者になる以前テ
キヤをして居ただけに素早い男で、其頃漸く
政府の専売になった煙草がまだ半官半民の
頃、牡丹煙草で有名であった千葉松兵衛の未
亡人を瞞着して有楽座の蓋を開けた。

友江が其美貌を五九郎に見込まれて入座し
たのは母親が病気で困って居る際であったの
で、渡りに舟と狼の口に飛び込んだのであつ
た。それは友江が豊吉と別れて東京へ帰って
から三日目であつた。



ものらしい二重廻しを
脱ぐと五九郎の化粧前
へ弟子の出した座蒲団
の上へドツカと大胡座
をかいた。而して汲ん
で出した茶碗を取るが
早いか突然五九郎目掛
けて投げつけた。それ
でも流石は五九郎は曲
者、
「イヤ先生、いゝ御機
嫌でござす、どちらの
お歸りで、ワテ五九郎
でおます」
「ヘッヘッヘ、曾我廻
家五九郎とは仮の名、
本名は武智故平、一銭
蒸気の中で船中毎度
お喧かましう御座います」
とインチキ絵葉
書を買って居やがって五郎の所から台本を盗
み出して来やがった事を新聞に書いたら面白
えと思うんだがナア」
「書きなはれ、よろしおまっしゃろ、ワテか
て只の喜劇役者やおまへんよって何なと書き
なはれ、市村はん、あんた五九郎に小遣い貰

いに来やはったのんか」

「馬鹿ッ、誰が小遣をよこせと云ったい、今日は初日で新聞記者の招待日で朝日の水谷と都の伊藤みはると青々園、毎日の幸堂得治とおエラ方が並んで、これから精養軒の食堂へ行くんだ、其時に手前の前身を己れが皆ンナにシャベって見ろ、手めえの一座は一人だっで見物は来ねえからそう思っている」

五九郎の弱点を捉まえて市村演芸記者はタシカを切って居る所へ這入って来たのは五右エ門と云う芸名も実は元開盛座の中野信近の弟子の森田信次という役者で市村の顔見知り丈けに留男の役を買って出て、結局何程かの金を擲ませたので、部屋のれんを潜って市村記者は出て行こうとすると

「アラ先生、お久し振り、どうなすったの」と声を掛けたのは新加入の中村歌江で、此座では曾我廼家胡蝶といって居る。

「氣をつけ給いよ、五九郎の奴、何をするか判らねえ男だからナア」

「大丈夫よ、先生」

「時に歌扇も此頃浅草公園で売り出した様だナア、遊びに行くかい」

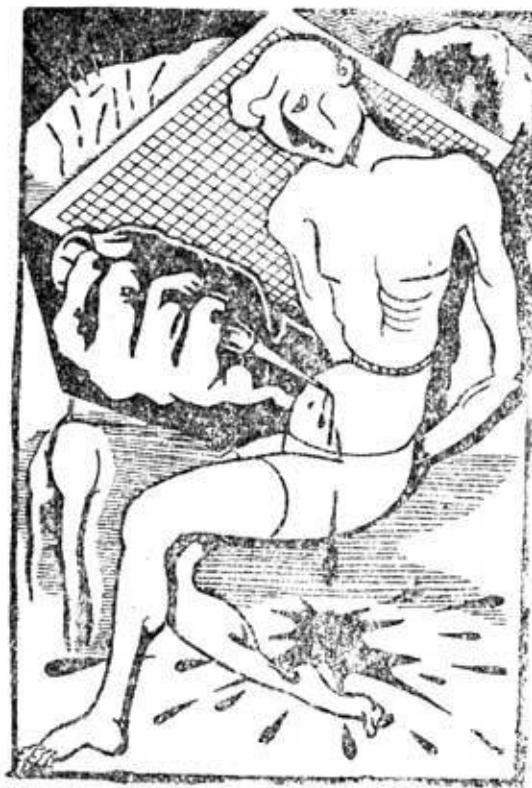
「暇が無いんですもの先生、こんだ妾しが此座へ這入った事、新聞に書いて下さる？」

「書くさ、序でにあの事もかい」

「いやな先生ッ」

友江は、市村記者の腕をギューツとつめつた。ニヤ／＼笑い乍ら市村記者は奈落を通って記者席へ帰って行った。二丁の橋の音が聞えて来て新大橋の大道具を組立てる音が騒々しく聞えて来た。

現在でこそ一坪何万円という価値が出たが其頃の有楽座は地理的に恵まれて居なかった



ので、興行はいつも失敗に終わった。有楽座へ見物を引きつけるにはどうすればいいかと支配人の新免氏が新聞記者に相談をかけた時、或人がそれは有楽座の前へ橋を架ける事だというので、座の私費を以って木橋を架けたのが現在の有楽橋の前身である。そんな時代で此五九郎劇は散々の失敗に終り、胡蝶の友江は舞台から姿を消してしまった。

腹部

自虐の訴え

野崎

純

こんな話は、恥しくて誰れにも話す事は出来ない。ノーマルな人達にとっては恐らく想像も及ばない馬鹿氣な話だからです。然し私

にとっては、それは丁度年頃の青年が異性に憧れて、ある種の衝動にかられるその氣持と一緒に、誰かに訴え、そして誰かに思う存分

弄ばれて見度い。――

夢遊病者の様に、あてのない相手を求めて繁華街を幾度さまよい歩いた事でしよう。それは過去に於て度々繰返され、それがその都度徒勞に終る事を充分知り乍ら。

この広い世の中に、自分の様な人間が只一人とは思えず、又これと反対の立場にある人も決して無いとは信じられなかったから。……まだ上野が今程やかましくなかった折、職業的な男性とフトした機会から交渉を持つ様になって、六七回、勿論その都度満足はしたが何かしら物足りなさが残った。しびれる様な感覚、羞しめられ、責められ、そして弄ばれて。……………

それが、昨年十月始め本屋に奇譚クラブを発見して、文字通り胸がつまる思いでした。矢張り同傾向の方々が、然もこの様に手近にたくさん居られるとは。そして毎月の発行日以待たれKK通信が待ち遠しい様になって来ました。現在相手のない儘にこの本が唯一の私の為めの慰めではあるのです。

私は極く幼少の頃より至って内気で女性的な性質でしたが、小学校の上級になって、身体的一部分が正常でない事が解るにつれて、他の人の前に身体を曝すのを極度に恐れる様

になり、次第に内攻的な性質が昂じて、しかも単なる自己愛だけでは満足せず、臍を中心にした縛りによって、更に逞しい男性、丁度軍隊当時の古参下士官の様な意地の悪い相手によって、辱しめられる事を想像して僅かに慰められるのでした。

そして、その際、相手には仮令緊縛されても、されなくても絶対服従の上、若し命令にそむいた時は、どの様な責めに遭うかもしれないという事を仮定するのです。或る時は、腹部を瓢箪のように緊縛され、或は又全々緊縛せずに、全裸で立たせて腹部に注射針を次から次と、十本、十五本とさして行きます。

又、腹の上に碁盤をのせて、その上げ下げを何度となく繰返してさせ、少し上げ方が弱いと「もっと足を引っばって、それ脹りが足りないもっと力を入れるんだ」と叱られます。それが終ると洗濯バサミを臍のまわり十ヶ以上はさまれます。そして脹る事を命じます。臍を残して全部とれる迄何回となくさせられますが金属バサミなのでそれが外れる時の痛み……

私の腹部への自虐は日増しにつのって、或る時等相手のない儘仮病をつかい、毎日遠方の指圧療法に通い、腹部の指圧によって多少

の慰めを得ていましたが、何分腹部と局部の不具故に知らない土地の知らない指圧を選んだ訳です。読者の中に、不具者に対する責めに異状な興味を持つと云う文章の散見する様子、私も又大いなる期待を持って（一目も早く良き相手を得られる様）います。

只私はもう四十に近く、果して喜んで相手になって下さる方があるかをどうか恐れま

す。最近羽村京子さんの様に、尿道にカテーテルを挿入して尿を出したり、或はエマナシリンチーで空気を送入したり、汐水を注入したり、そしてその膨満した腹部をなでられたり、次第にその想像が複雑化して来た様ですが、それすらも、ノーマルな妻の前では口に出すことすら出来ず、一ヶ月の内の数日のチヤンスを捉えてはこれを行っている状態です。

最早や、私からこの様な悦虐の感覚を取り去る事は不可能に近いと思ひ乍ら……然も平凡な社会人として日常を送る苦しみ、意を決してこの拙文を送り、同好の方々からの御指導御批評を賜り度いと思ひます。

× × ×

私のこの拙い稿が貴誌へ発表されるかどうか分かりませんが、現在私の生活の一部の様になっている貴誌に、

私と同じ事に悩む人達の事が目にはいる度に嬉しくなり、何か書いて見たくなりなりました。私は満二十才になる青年ですが、異性に對しては全然関心がな

いと云うより、ちよつと触れただけで寒気がすると云えましょう皆様おわかりでしょうが「同性愛」マニアなのです。それでこの頃、私は果してこのまゝ成人して結婚が出来るのかと疑問しています。いえ、現在のまゝではとても不可能です。それは結局不幸な結果になる事は火を見るよりも明かです。さて、では私の希む男性との結婚——これも不可能かも知れませんか。私の変態的な性質は一体直るだろうか。それともいまのまゝでしようか。それは私にもわかりません。本当にわからないのです。

女性の恋人を作る事より、何百倍も困難な

同性愛マニアと自縛

村 里 柴 一

事なのです。しかし貴誌を手に入れて同じ悩みの人達が数多くおられるのに驚き、又元気づけられました。私は此の普通人とは異った本能的な自己の要求を、如何にして解決しているかは同好者の皆様のみ知る事でしよう。私はそれを貴誌並に、KK通信に出ている自縛自縛が唯一の解決なのです。週に二、三度夜中に家の人が寝静まるのを、待って行くことにしているのです。ギシ／＼と音のするのを気にしながら肌に縄をかける快感は、まるで天国そのものです。そして素肌にくいいる縄を見るとふと同好の男性が、いてくれたら

どんなに幸福だろうと思います。そして、そのひとときが過ぎると幼き日（中学時代）始めて同性に、いたずらされた時のことが手にとるように頭に浮びます。そして私の同性愛的なものの起因たる事件が、はっきりして来るのです。それは昭和二十年の七月頃でした。

私が疎開していたS市は東北有数の大都会でしたが、家のある所は、新寺小路という其の名の通りの寺町で、道をはさんで両側に十何軒かの寺が並んでいました。私は疎開先の小学校を卒業して、県立の工業学校に入学しました。元来気の弱い私は、東京弁とは全然違う東北弁が使えず、相変らず東京弁を使っていた為に、それが女性的に聞えたのかも知れません。さんざんひやかされたものです。そんなわけで、全然友達が出来ずいつも一人で居りましたが、ここへ私の一生を完全にくつがえしてしまったと思われる生徒が転入

して来ました。それはOという疎開者でしたが色の黒い何となく陰険な感じのする生徒でした。それに尚いやな事は、Oと私の家が近くで通学には必ず一しよという習慣が出来てしまいました。そのOは入学するとたちまち、クラスの勢力家の一人となりました。そして通学の途中や、

下級生の前であろうと皆の前で私をいじめるのです。私はそれに対してけんかも出来ず、先生に云いつける勇氣ありませんでした。家人の者にも見栄が手伝ってとうとう訴える事が出来ませんでした。Oはそれをいい事にして、増々私をいじめなぶり者にします。そして或る日

「おい、皆なこいつをもっと男らしくきたえてやろうでねえか」



と云いますと、軍国調の頃ですから皆すぐ賛成し私を近くの寺につれて行きました。そこは大きな名の知らない寺で、奥深い墓地でした。私はもう観念していました。他に四、五人の生徒も只、車座になって見ていました。草の上にくるがされた私をとり囲んで次々にあざけりの言葉を投げかけます。私は泣顔になって、そこに倒れますと、一人がOに何か耳打ちをしました。するとOはいやな笑

いを浮べて私のそばによって来て「さ、起してやる」と云って手をだしました。私はその手をためらっていますと、急にとびかゝって来て私の上着のボタンをはずしかゝりました。すると、さっき耳打した生徒が飛びこんできてズボンのバンドをとりました。私は草の上をころげ廻って逃げましたが、多勢に一人遂に、パンツ一枚にされてしまいました。「さあ、縛るんだ」

とOは汗をにじませながら、縄を持ってきて私の手をわりやりに後手に縛りました。それを見ている生徒達が、げら／＼笑いながら墓石の前へつれて行き私を、墓石にしばりつけました。そしてかわるがわる私の体に、いたずらをし最後にOは、私に自分の小便を引っかけました。私……は、なまぬるい小便が当る度に何故か次第に、快く感じてくるのを覚えました。それは、どう云ってよいのか私自身にもわかりません。以上が私の同性に縛られた第一回目の経験です。その後、度々Oにいじめられました。が考えると結局私の男子の同性愛の起因は、以上書きましたあたりにあるのではないでしようか。

ソドミア小説

美

少

年

の

秘

密

山口 幸一

雪夫は教員室の中に入っている。友人も四五人いるが誰だかはっきり分らない。

雪夫はこれからどうされ様とするかはっきり知っている。

これから行われようとする未知の経験に対して、逃げれば逃げられるのだが、思い切ってやってみようと云うさゝやかな勇気の心で口をきつと締めて、期待と緊張に胸を高鳴らせている。

それは宮様が雪夫達の学校に行啓になり、角力を御覧に入れるのである。一年の選手に選ばれて出るのは級長である雪夫と、あの角力大会の時の美少年である。その少年は既にあの角力大会の時と同じ白い締め込み姿で、横

のストープにあたっている。

先生が入って来た。先生は手にピカピカ光る、厚い締め込みを重そうに持っている。その布地は縞子の様でもあるが、芯は固いものらしく、本式の大相撲の廻しの様にも思われ、如何にも締めて見ると心持良さそうである。先生は雪夫の上衣を脱がせた。そうしてズボンのバンドに手をかけた。

やがて白いパンツ一枚になつた雪夫は、先生に向つて後向きになると、パンツの紐を解いてパンツを思い切つて下へ落した。心臓は早鐘の様に波打っていた。先生は雪夫の股から廻しを差し込むと、前に当てゝ尻から腰の廻りに締め始めた。雪夫は見習つて知つてい

た通り、左手を後禪の下にはさむと、右廻りにぐるぐ廻った。最後に一端を二つに折ると全部の禪の下を通してグーツと締め上げられた。

その時、柔かい純の様な肌ざわりの良い締め込みは、……グーツと締め上げたので恍惚とした気持ちになり、今迄味わった事のない夢幻境に十秒ばかりさまよつたかと、思うとパツチリと目をさました。

あゝ、夢だったのかと、雪夫は生れて初めての経験を反芻してゐるのだった。十四才の雪夫の身体に初めて起つた現象には勿論、雪夫は何が何だか分らず大変驚いたが、しばらくは夢の続きを見たいものと目を閉じるので

あった。

流石に翌日母に見つかったら大変なので、帯はこっそりと自分で洗って簀司の奥深くしまい込んでしまった。雪夫は正式の角力の廻しを自分のものとして隠して置きたかった。

日曜日に雪夫は約束した友達の家へ行って今日は都合が悪いから学校に行けないと断ってから、一人で学校へ行った。雪夫はひそかに重大な計画をめぐらせていた。それは運動具倉庫にしのび込む事である。

休みの朝の学校は静であった。雪夫は体操場の裏口から中へ入って行ったが、日曜日の事とてガラシとした講堂は不気味に静まり返っていた。宿直室も小使室も反対側にあってこゝは誰も来ない所である。雪夫は足音をしのばせて、講堂の裏の暗い廊下を通って、運動具置場の倉庫の前に行った。戸には小さな錠



前がかゝっていた。

すべての判断も性の魅力を押えることは出来なかった。家庭も良く優等生の雪夫は何一つ不自由な事は無かったが、今度だけは絶対に盗み出さなければ、手に入る品物ではなかった。雪夫は持って来た錠束から、合いそうな錠を取り出して入れてみた。うまく開くか

あった。

その脇には、まだ一度も使用しない新しい白の廻しが五、六枚、きちんと折り畳んで置いてあった。雪夫はふるえる手で、その新しい廻しを一つ取上げると上衣の中へ隠した。ゆつくり戸を閉めて元通りに錠をかけると、飛ぶ様にして裏口から山へ行って入った。

どうか、ぶる／＼ふるえる手で息を殺して、錠を挿し込んでいる時もし見付かったらどうしよう、と云う様な理性心は失われていた。

錠がうまく合って錠前がパチンと開いた。雪夫はあたりに気を配って、静かに戸を開けると倉庫の中に入った。

木馬や、ズツクのマツトや、高跳びのバーの間をすりぬけて奥の窓際に行くと、暗がりの中に白い廻しが、所々に土がついて汚れて、三十本位折り畳んで室の隅に重ねて

幸い誰も気付かなかつたらしい。

学校の裏山は奥深かった。小道を二、三丁登ってから横の藪の中へ入った。

しばらく行くと空地があつて、赤い粘土が十坪ばかりむき出しになっている平坦地がある。周囲は林であつて誰も来る人がない。この場所は、雪夫は前から調べて置いた所であつた。

雪夫は一休みして、四圍に人が居ない事を確かめて上衣を脱いだ。はだしになり、そしてズボンも脱いでパンツ一枚になった。

そうして褌を取り上げ腹にあてゝみた。

厚い帯芯の様な廻しは固くすべくとして、ぞく／＼する程心持がよかった。

そこでパンツを脱ぐと此の前、角力大会で上級生が締めていた様に、尻から廻して締め始めた。新しい廻しはしつとりと

冷たく、雪夫の柔かい腰の肉や、尻の割目に喰い込んで行つた。

廻しを締め終ると雪夫は、固い粘土の上に裸で立って四股を踏んでみた。

初めはそつと、次に段々元氣よく踏んだ。それから蹲んだり、仕切りの姿勢をとつてみた。褌はごわ／＼とした固い緊縛と刺戟を絶

え間なく送つて呉れる。全く心持良く宇頂天になつてしまつた。

それから雪夫は、思い切り投げられてみた。かつたので、倒立して逆に倒れてみた。

雪夫の白い褌の後の結目と、二つのラツキヨウの様に盛り上つたお尻に、赤い粘土がついた。



それから雪夫は繰り返

えし倒立したり、でんぐり返えったり、横転したりして、ゴム毯の様な柔かい身体を大地に打ち付けて遊び狂つた。終いには、転つた時に打つた肩の柔かい肉がかすかに破れて、一寸血がにじみ出たが、雪夫は一寸もかわず転がり続けた。

疲れ果てた雪夫は、冷たい粘土の上にうつむけに這つて、お尻を持ち上げる様にして休んだ。

服を着てしまうと、流石に雪夫は身体がグツタリしたのを感じた。動揺

する心の静まる迄、しばらく草原に休んでいた。禪は家へ持って帰って母に発見されるのが恐しかったので、こっそり山の石垣の間にしまい込んだ。そして何喰わぬ顔で家に帰った。

其の後、時々山へ来て、こっそり石垣の間の禪を持ち出しては、山の空地で秘密の快楽にふけるのが、最大の楽しみとなった。

雪夫の級には、漁師町の生徒が七、八人来て居た。その中で一人色の白い、女の子の様な美少年が居た。

漁師町の子は夏は勿論だが、半分位は冬でも白い晒木綿の六尺禪をしめていたが、その子は網元の子供だから白いパンツをはいていた。他の子は、見るからに色の黒い逞ましい体格なので、いくら六尺禪をしていても雪夫の興味をそゝらなかつた。しかしその子も禪をする事があるだろうと、ひそかに雪夫は期待していた。

体格検査の日、講堂にはストロブが赤々とたかっていた。雪夫はその色の白い美少年を最初から注目していた。彼が下着に何を着ているだろうか、と云う事に付いて、さっきから想像を逞ましゆうしていた。

パンツだろうか、それとも普通のメリヤス

の猿又だろうか、それなら雪夫の興味は失われてしまう。やがてその子の順番が近づいて来た。その少年は片隅に行つて上衣を脱ぎ始めた。

雪夫の情熱的な視線がその後を追う。少年はメリヤスのシャツを脱いだ。下には白いランニングシャツを着ている。それからランニングシャツを脱いで上半身素裸になった。白い肌が雪夫の目にまぶしく映つた。ズボンはまだとらない。

それから少年はバンドに手をかけて、静かにズボンを脱いだ。下はラクダの股引をはいている。その下に隠されたものは何だろう。パンツか、猿又か。或は短かい黒いキヤルマタの様なものだろうか。

雪夫は胸をドキ／＼させ乍ら、そのくせ人に気付かれぬ様にじつと視線を少年の身体に集中し、どんな状景をも見逃がさぬ様に見守つた。少年は股引の紐に手をかけて、一寸左右を見廻してから、用心深く股引を下へずり下げた。

その途端、雪夫の呼吸は止るばかりの衝撃を受けた。足下にずり下げられた股引の上には、少年の白い尻がこちらに正面を向いてありありと現われ、晒木綿の六尺禪がそのお

尻をきりつと結んでいる。ほつそりした少年の身体には、やゝ不釣合いな程のその禪は、太くそして巾広く見えた。

少年はやがてこちらを向いて、秤量台の方へ歩いて来た。

雪夫は自分の心の動揺を人に気付かれない様に注意して、何処迄も少年の後姿を追っていた。

其の日家へ帰って床に入ってから、雪夫はその少年の姿が灼けつくように瞳に残っていた。

自分もあの子の様に網元の子に生まれて、少年時代から四六時中禪を締めていたいと思つた。あの子は今頃は風呂から上つて、あの白い禪をきりつと締めて、寝床に入っている事だろうと想像しながら、妖しい妄想に耽つてしまつていた。

雪夫は母に対して一つの計画を考えた。それは雪夫のはいている三枚のパンツをなるべく早く汚し、又破いたりして、朝登校する時に新しいパンツの手持の無い様にする。そうになった時、母はきつと今日だけ禪をして行つたらどうかと、云い出しはしないだろうかと思像した。

お母さんは雪夫が小さい頭の中で、母親迄

を自己の性慾の芝居の相手役にしようと云うたくらみのある事等は、少しも感付かずにくまなく計画にかゝってしまった。

二日位前から計画的に準備した、少年の計画はまんまと筋書き通りに運んで、或る朝。

「お母さん、今僕パンツを便所に落してしまつた。代りのパンツ下さい」と言つた。

「昨日洗濯したのがあるでしょう」

そのパンツは、昨夜物干し竿に干してあつたのをそつと下に落して、二枚共泥水をつけて置いた。

お母さんは何も知らないで、物干し竿にパンツを取りに行ったが、困つた様な顔をして帰つて来た。

「おや、まあ、風もないのに竿が落ちてすっかり汚れてしまった。困つたねえ、一寸お待ちちすぐ洗って乾かして上げるから」

「だって、もう時間がないんだもの、間に合

わないよ」

「一寸、だからお待ちなさい」

「だって遅刻したら、僕困るなあ」

雪夫は胸の動揺を押えながら、尚も母を芝居の中に引き込んで行く。

「そんな無理を云うもんじやないよ、だってもう洗濯をしなければ無いんだもの。今度も一枚買つて上げますからね。一寸お待ち」

「僕困るよ、おくれるよ」

「お母さんも困つたよ。じゃ今日一日だけ我慢して、ふんどしして行つてみない。それでも良いだろうね」

その声を聞くや、雪夫の胸の動悸は高鳴りもはや返答する事が出来なかった。

「うん」

と、一言云えば良かったのだが、折角此迄計画的に運んで来ても、いざと云う時になると引込んでしまふ。

一杯です。

私はつい最近迄、こんな思いもよらぬ雑誌があるとは夢にも思いませんでした。貴誌KKを古本屋で偶然発見した時は、自分が今迄、井の中の蛙で居た事の残念さと、こんな素晴らしい雑誌に会えた歓喜とで一晩中眠れませ

お母さんが晒を取りに簞笥の抽出しをあけようとすると、雪夫はあわてて。

「お母さん良いんです。僕待ってますから洗つて下さい。甘分もあればいいでしょう」

「おやお前、おふんどし嫌い？ 水泳の時には皆するでしょう。」

「でも、わざ／＼新しいものを下さらなくていいです。待ってますから」

「おや、そうかい。じゃ急いで洗つて上げますからね」

とお母さんは、出しかけた晒をしまつて台所に立つて行つた。

雪夫の動悸はまだ高鳴っていたが、それが治つた頃には、又取り返えしのつかない事をした様な氣持が起つた。どうして自分は計画の方は周到にやるがいざという時には決断がつかないのだろうと、残念でならなかった。

(未完)

んでした。そして今更の様に生甲斐を感じる次第です。

然し、玉に傷とか云います様に、貴誌の様な玉の如き雑誌でもよく見ると傷があるものであります。この傷の為に貴誌が(と申しますと、何か大變な欠点の如く聞えます

拝啓、私初めて貴社に投書させて戴く奇譚クラブの一愛読者です、私は今迄この種の雑誌を見ましたが、KKが一番私の趣好に合ったものが載つて居る雑誌だと思つて居ると同時に、編集の諸先生方の御苦勞を拝察し、その並々ならぬ御尽力に対し、全く感謝の念で

が) 大分損をされて居るのであります。こんな事を貴社には誠に云い難いのでありますが余り煩悶すると健康上良くありませんので、思い切って次の悲願を記述させて戴きます。

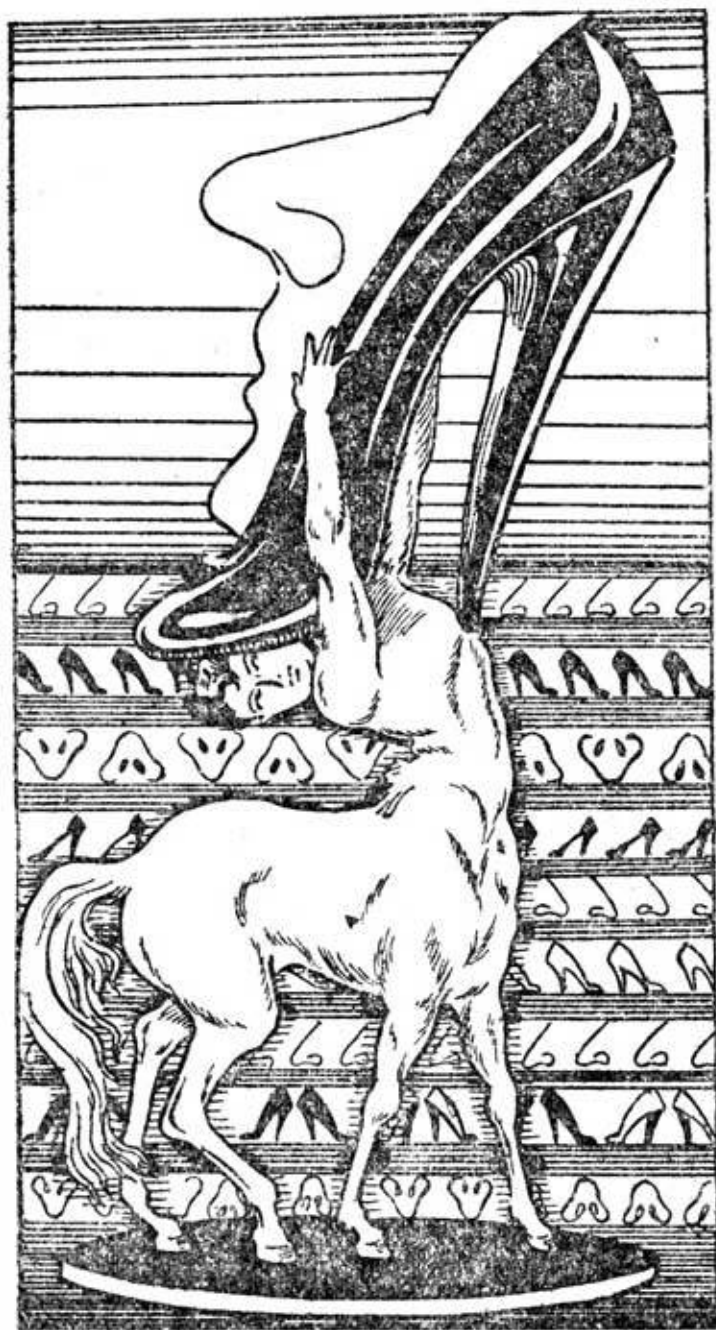
私は西洋(殊にアメリカが大部分)に沢山見られる様な、フェチシストであります。

(例えサドやマゾでなくとも、おまけに拙文で恐縮ですが、どうか我慢して最後迄読んで下さい) 貴誌に執筆されている先生方の名を拝借して申しますれば真鍋四十六氏、及び升岡金吉氏と吾妻新氏、そして芳野眉美氏と同好であります。もうお判りでしょう。

先ず、貴誌編集方針について云いますと、貴誌は主としてS又はM的な記事ばかりで埋

フェチシストの悲願

春 山 唯 一



められて居る様ですが、これで貴誌は今迄に多大な損失をされています。と云いますのはアブノーマルと云いましてその種類が非常

性癖を告白してしまうのですが、フェチシストは、SやMの様にあまり先輩がない為、あまり自分の異状性癖を告白しませんから、余計

に多い中で、唯SとMにしか重点を置かれなないので、KKのファンも当然S又はM的な人達だけに限られてしまい、その範囲は非常に狭いので、これが貴誌の今後の発展の為の妨害となって居るのであります。

アブマニアの中で一番多いのが、S・Mで……等と一般に考えられ勝ちですが、どう云うわけか、今迄はSやMは割合に簡単に発表されて来た為、世のSやMの人達は「自分の様なS(又はM)は案外多いのだ」と云う先入観念が仇いて、割合に苦もなく自分の異状

に人に告白しがたくなり、遂にはアブノーマルの代表はS・Mである等と云う事になってしまったものと思います。

故に、世のフエチシストは自分の性癖が他に発覚するのを極度に恐れて居ますが、その数は決して少なくはないと思われまゝ。この社会通念を改ためることは容易な事でないと思いますが、私の意見が間違つて居りましたら即時に訂正致します。

世の中にはまだ沢山の未知のフエチシストが、日々煩悶して居られるのかと思えば、私は早くこのKKを発見して愛読なされば、この問題はすぐに解決出来ますと、叫ばずには居られなくなります。

又、フエチシストの中でKKは見たが、あまり自分に適した記事はなかった。と見逃された方々も大部あると思います。一度手にされながら見捨てられるなど云う不名誉な話はありません。

そんな理由ですから、貴誌の今後のより以上の革新的発展を望まれるならば、この傷を直ぐに修さねばなりません。即ち、このフエチシスト達の悲願をかなえて下さる事です。今以上に、出来ればS・M等と半々位いに、民主的にはSもMもフエチも其の他も、皆公平

に同じ量に編集して載きたいのです。

では、フエチフエチと一体フエチの中で何を記載してほしいのかと云いますと、それは婦人靴、殊に High heel の pumps で、次には女性の鼻（外鼻）です。

フエチの中で、普通多いのは私の調べた範囲内では、第一に High heel で、この事は変態性慾の大研究家クラフト・エービング博士の調査でもよく判る事でありまゝ。

次は、私は女性の鼻であろうと思われまゝが、これは真鍋先生の記事でも判ります。（日本では、これはあまり正しくなくとも、西洋では正しいと思います）

次は、毛髪、下着類、耳、口、パンティ、ハンカチ、エプロン……等ですが、日本では封建思想に災いされて、フエチはあまり重大視されませんが、真実は洋の東西を問わず、この事は云えると思うのであります。

西欧諸国でも、アメリカ、フランス等は、High heel の賞讃国である事は、アチラの雑誌の広告などにデカ／＼とフエチならまぶしくてまともには見られない様な写真や、絵図がお／＼びらに印刷されている事や、吾妻先生の文でも判ります。（私は GLAMOUR, McCAIL'S, COMPANION, COSMOPOLITAN, 等あちらの High heels や、鼻の高い婦人の顔のクローズアップ等の出ている洋雑誌を買って持って居ります）

私は、SとかMとかフエチ殊に女性の鼻と靴以外の異状な記事を見ても、少しも興味が湧出しないばかりか、却って嫌悪の情を感じます。（あまり云いたい事ばかり云って済みません）これは私ばかりではないでしょう。

諸先生方、奥谷さんいかがですか、今後の編集にはフエチの中でも特にこの女の鼻と、High heel に力を入れて戴き度いのです。

今迄は、一つか二つの小文は出て居ましても、写真はSやMの様に出ては居らず非常に少ないですから、写真や絵画もどし／＼お願い致します。この際に本文と一緒に紙に印刷されるのでは、印刷は不明瞭で細部は全く潰れて判らず、せっかく貴重な資料がその価値の半分も發揮出来ませんから、表の方の紙質の上等な、グラビア（オフセット）頁の中に出来得れば天然色にて入れて戴き度く。この場合は実物大と云う事も大切ですが、それよりも、色々角度を変えた、又モデルを変えた数多くの写真や誇張した絵画がよく、少々小さくても紙の質さえよければ印刷が鮮明に出るので数多く載せて下さい。少しクダ／＼と

長くなり過ぎましたので、今後の希望や編集部に対する質問を、箇条書きに致します。

一、真鍋先生の撮影された、大阪北のキャバレーEのステージダンサーの写真と云うのを表のグラビア頁に、出来れば全部発表して下さい。その出来ない場合は、次の順序で載せられるだけ載せて下さい。

イ、手を加えない自然の儘で、真下から、穴を覗いた写真。

ロ、直横から見た写真。

ハ、真正面から見た（少し仰向気味の）写真。

ニ、正面から四五度廻った位置から見たもの（少し仰向アングルで、これは丁度本年六月号の真鍋先生の発表の中で出ている写真のテープをはずしたもの）写真の大きさは、大きいのに越した事はありませんが、あまり大きいのを所望すると、数が少なくなりますので、そこは適当にして下さい。

三、一九五四年三月号の倒錯と告白の欄で真鍋先生が「……本誌では升岡金吉氏の鼻腔礼讃や、女性の鼻の穴の美しさについての小論を見ましたが……云々」とありますが、後者の「女性の鼻の穴の美しさについて」の小論とは、本誌の何年何月号に出て居るので

すか、お教え下さい。

三、KK通信の中で、女性の鼻と High

heelに関する記事の出で居るものは、出来得れば全部購入致し度いのですが、何号と何号で何冊あるかをお知らせ下さい。尚この時、半年分（六冊の事）壹百円で戴けるか、又より抜きで寄せ集めて呉れるかどうかもお教え下さい。（異趣味のもの不要）

四、一般に真鍋氏も升岡氏も遠慮勝ちなせいか（失礼）いつも小文でものたりません。もっと深く突込んで云い度い事をどしどし書いて下さい。芳野眉美氏の「黒いHigh heel」は、詩的で一向に面白くありません。もっと告白的な散文で真に迫る様に書いて下さい。

五、一九五四年六月号の読者通信欄の奥谷氏の御意見に大賛成です。出来れば文通も致し度いと思います。真鍋先生、芳野先生、升岡先生、その他この同好の諸先生に心から讃意を表し、今後どしどし研究発表して下さいませ。吾妻先生にはどうかなるべく沢山、海外のこの鼻と靴に関する資料を発表して下さい様にお願い致します。

そして、世の中には奥谷氏や私だけではなく、もっと多勢の同好者が、真鍋、吾妻、芳野、升岡、其の他同好の先生方を支持してい

ると云う事を、この拙文を通じて知って戴き今後益々御奮闘下さらん事を切にお願い致します。それから貴社に集りました女の鼻と靴の資料は、もみ潰さず（失礼）全部載せてほしいのですが、これは少し我儘が過ぎた様でお許し下さい。

私もチヨツトした資料や、体験は持って居りますが、これを発表告白したものか、やめ様かと迷って居ります。と云いますのは、若し発表すれば「お前は本当は誰々と、違うのか」等と照会が舞い込み、私の将来の生活に破綻が来る怖れが多分にあるからです。然し発表して同好の知人を得たい事は確です。

色々和我儘な事ばかり並べたので、呆れ返ってしまわれた事でしよう。どうかその点和平にお許し下さいまして、この私の実現しそうな悲望を、一秒でも早く適えて下さいます様切に／＼お願い申し上げる次第です。そしてこの投書をも併して発表して下さいまして、御回答も同時にして下さいますならば（七月号にでも）これに越した喜びはありません。恐々百拜。

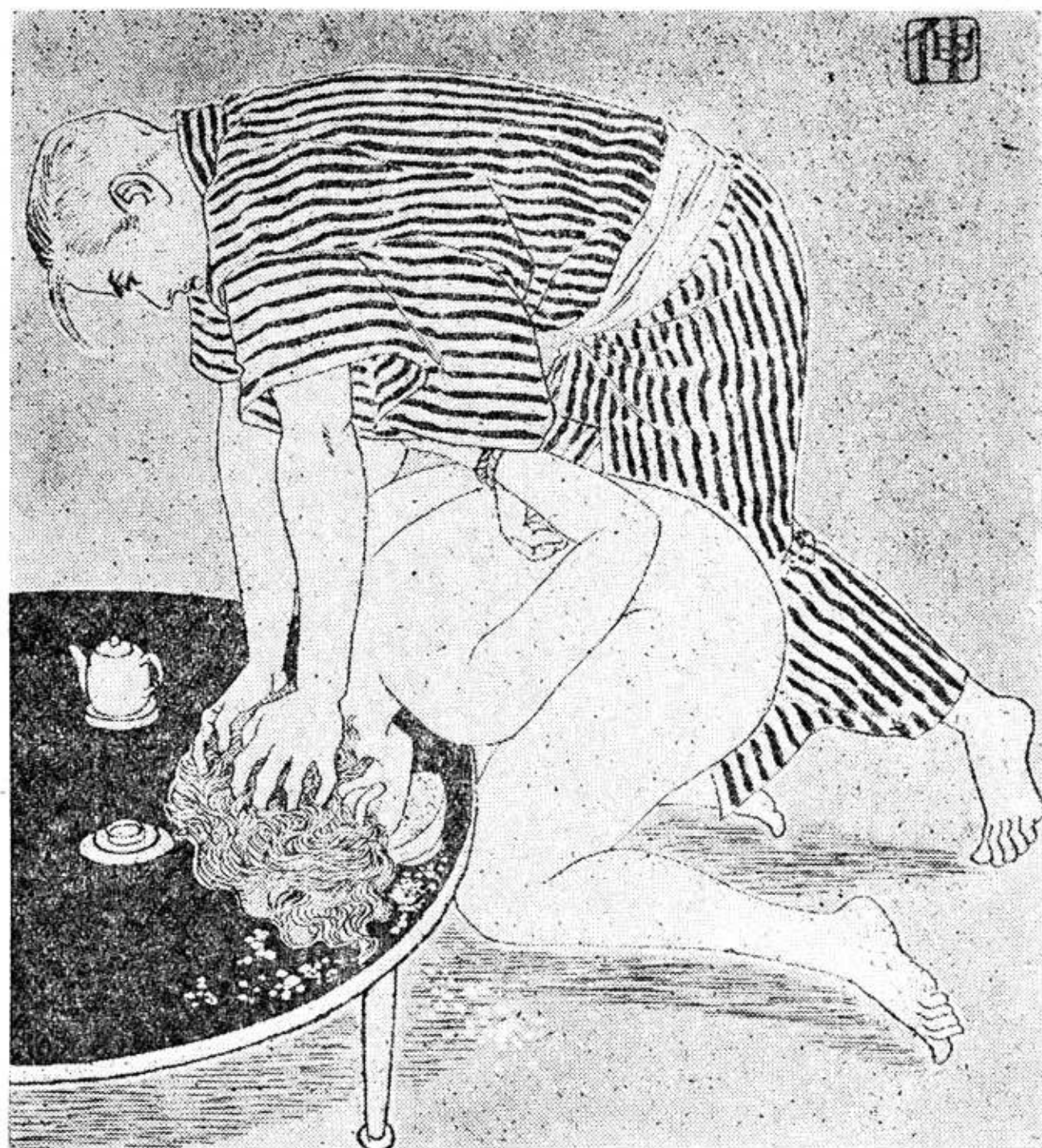
（終）

×

×

×

松 井 籟 子



窓をあけると雨がふき込むので閉め切っていた。硝子戸にあたって、粒になってしたたり落ちる雨は冷たそうだったが、部屋の中はむうつとして暑いのか寒いのか戸惑うような日だった。

美沙子は花が欲しいと思った。百合でもいい、水仙でもいい、匂いの強い花を花瓶にあふれる程いけたら此の部屋の饅えたような空気を吸い取ってくれそうな気がした。けれど、勿論、美沙子には花を買うお金もない。せめて雨があがって、初夏の陽ざしが、古畳の上にまでさし込んでくれるのを願うばかりだ。

「いるかい?。」

ドアの外で声がしたのと、ドアが細目にあくのと同時だった。

「まあ、こんな降りに——。」

美沙子はいそいそと迎えた。

裾をはしよって長靴をはいた老人が立っていた。

「相変らずね、お父さん。」

はしよった裾から、ねずみと黒の細い三島菊の長襦袢がのそいっている。音羽屋びいきの母親が、わざ／＼染めさせた小紋の錦紗を、母が死んでから、長襦袢にして着ている父だった。和服が好きで洋服を着ると肩がこるといふ。そのくせ、もう雨の日に齒のある下駄を履くほど足もとがしっかりしていないのだが、

蒼

つぼみ

朽

く

ち

て

尻はしよりをして長靴をはき、それで歌舞伎座へでもどこへでも出かけて行く。江戸ツ子は見栄坊のようにいう人もあるが、美沙子の父のように、お江戸の真中日本橋で、三代つゝいた江戸ツ子にも、大阪人のような飾り気のないたちもあるらしい。

「角の喜代川で、うなぎをそいつてきたからな、お昼の心配はいらないよ」

と、父は言った。こんな点もさっぱりしていて話が早い。

しかし、そう言われて、美沙子の顔をさっと影が走った。

「お前、うなぎきらいだったかい？」

目ざとく父が言う。

「いいえ、そんなこと……。私、今、ごはんすましたところだったので、一寸残念だと思つたの」

美沙子は急いで明るく言い直した。

「そうかい。まあ、若いんだからいくらでも食えるだろう。これ頼

むよ」

父は腰にくつつけてきた水筒を出した。中にお酒の入っていることは、あけてみないでもわかる。

妻を失ってから、妻に甘えるように美沙子に甘えて世話をやかせる父だった。美沙子が結婚して家をはなれ、兄に嫁が来て父の面倒を見ているが、父はやはり、美沙子の酌で一杯のものが一番嬉しいらしい。

「どうだい、佐久間はやさしくしてくれるかい？」

「ええ」

美沙子は下を向いて答えた。何でも気のつく父に「ええ」と答えた嘘を見ぬかれそうで恐かった。

「ナニはまだ出来ないか？」

父のいうナニとは赤ちやんのことだ。

「ええ」

と答えながら、美沙子は父に背を向けて、食器戸棚から徳利や盃をとり出した。

もし、母が生きていて、同じような質問をしたら、美沙子は本当のことを打ちあけたかもしれない。

「子供の出来るようなことはしていませんのです。」と……。

「毎度あり……喜代川です」

美沙子は大急ぎでドアをあけると、重箱を二つ受けとって、まるで悪いことでもしているようにあたりを見廻した。隣も前もドアがしまつて、アパートの廊下には人の影がなかった。美沙子はほっとして、うなぎ屋にそっとささやくように言った。

「あの、あいたお重はあとで出たついでに届けますから、とりに来

「ないでもいいですわ」

「へい、毎度あり……」

と、うなぎ屋は帰って行った。

一一

持参のお酒を娘の酌で、うなぎをさかなにのむと、重箱の御飯を御茶漬にしておいしそうに食べてから、父は帰って行った。

美沙子はわざと送らずに、父にひと足おくらせて、からの重箱を風呂敷に包んで、うなぎ屋までかえしに行った。食べなかった自分の分は、夫の為に別の器にうつしてとってある。うなぎの代は父が払ってくれていた。その他にも、「お欄代だよ」と言って、千円札を一枚置いて行ってくれた。

美沙子はそれでバラを二輪買って帰った。食べてしまいたいようなバラの香りに郷愁があった。

アパートの玄関を入ると、横手の炊事場から、声高な女の話し声が聞えてきた。

「なあに、本当のおやじさんかどうかかったもんじやないよ」

「困る困ると言いながら、来るたんびに、うなぎだ、おすしだ、やれ支那料理だって……。まあ、かりにさ、本当のお父さんにしたって、佐久間さんのお父さんならそれも嫁の義理ってこともあるでょうがね、そうじやないんだから、いい御身分だよ」

「おまけにいつもお酒までつけているんだつてさ。この間、寿司幸の若い衆が言ってたよ、さし向いでさ」

「だから本当のお父さんかどうかかったものですか」

「此の節は、若いもんよりおじいちゃんがもてるんだとき、ハハ」

「ムム」
早めに夕餉の仕度にかゝっている、アパートの奥さん連中の会話だった。

此のアパートは会社の寮になっているが、事務の方で入っているのは佐久間だけで、あとは皆、現業の方の人達だった。子供にかまけて髪の手入れ一つしないことを、自慢のようにしている奥さん連中は、子供もなく、いつもきちんとしている美沙子を異端者のようにみているのだった。

うなぎ屋の重箱一つにも、美沙子が気を使っているのは、かげ口をきかれたくないからだだった。

雨の中を、わざわざ重箱をかえしに行ってきたのに、ドアに耳があるように、うなぎ屋の来たのが、もう今日中にアパート全体に知れてしまうのだろう。

美沙子はふきぶりの雨に濡れたバラを、体でかくすようにして、部屋へ戻った。

花びらの中に顔を埋めるように近づけて、バラの匂いをかいでいると、美沙子は女学生時代にかえったような気がする。そして、涙ぐんでくるのだった。

美沙子は便箋をひろげてペンを走らせ出した。

——自分でお金を先払いして、うなぎを御馳走してくれる父の心づかいが、反って私を苦しめます。いくら本当のことを話しても、本気してくれない人達なのです。では、父に、本当のことが言えるかという、それも言えません。私はまだ処女なのです。佐久間という夫がありながら、私は生れたまゝの清い乙女です。でも清い……と言えるかどうかはわかりません。このことを、私はどう説明

したらいいのでしょう。とても、父には言えないことです。あなたにも……。でも、たとえ、あなたにくわしく説明出来なくても、ただこれだけのことは申せます。私はどんな苦しい毎日でも、結婚しているということで父を安心させ、そして、結婚しているというのに処女でいることに、あなたに対する私の初恋を守っていられることを喜んでいのです。奥さんのあるあなたを、私の恋人と、暗れておよび出来ない私には、一方的に愛をつらぬいていく、これが一つの方法なのです。なつかしいあなた。私のお誕生日に、いつもバラの花束を贈って下さったあなた。私は今、バラの香りの中であなたのお姿を偲んでいます。お声さえきけそう……。もうじき夫が帰えて来ます。灰皿の中に、父が吸い残して行った煙草が入っています。これが私の夫に対するサービスなのです。吸いがらを夫が吸うかとお思になるのですか？ そうではありません。私が処女を守るこれは手段なのです。悲しい手段……。煙草の吸いがらが、何故私の処女を守る手段になるかとお思いでしょう？ あまりに関連性がなさそうですけど、今にわかります。誰にも言えない私の秘密……。こうしてあなたに便りを書いていると、私の心はなぐさめられるのです。出しもしない便り……。書いては破り、書いては破り……。私は結婚して幸福なのだと思っていられつしやる……。そうですわ。幸福かもしれない。あなたを愛しつづけていられるということ、私にとって、此の結婚が仕合せであったよりも、もっと幸福なのです。そう、私は私に言って、今日も、夫を待つ恐ろしさをごまかさなければなりません。ああ、私の夜を……。どうお話ししたらいいでしょう。――

三

美沙子の夫の佐久間は部屋へ入るなり、先ず机の上のバラの花を見た。それから灰皿の中を見て、

「フーン」

と、口もとをゆがめて皮肉な笑い方をしたが無言のまま「日本橋のお父さんが、うなぎを御馳走して下さったので、とおきましたのよ、さめたけど、うなぎ茶漬けになさいますか？ それとも御はんごと蒸し直しましょうか」

美沙子が言うのに、それも、

「フーン」

と、言っただけ返事をしない。

いつものことなので、美沙子はしいても聞かず、おぜん立てをした。佐久間は夕刊をひろげている。

「どうぞ」

と、箸をとることをうながしても、知らん顔している。

「めしあがらない？」

もう一度うながすと

「さめたうなぎが食べられるかい」

と、はき出すように言う。此の前、同じうなぎを蒸し直したら、「お茶漬の方がおいしい」と怒られたので、今日は聞いてからと思ったのに、又、どなられた。

そのくせ、美沙子が台所へ立とうとすると、

「腹が空いてるのわからないのか。いつまで待たすのだ」と、どなる。

美沙子は涙がこみあげてきそうなのを、ぐつとこらえた。

「何を変な顔するんだ。お前が他の男と仲よく食べたものを、俺がだまっておしよばんしてやろうとしているんだ、何が悪い？」

「他の男だなんて、父じやありませんか。」

「わかったもんか。花なんか持ってくるような男、どうせ青くさい奴だろう」

「バラは私が買ったんですわ」

「金もないのにね」

「お金は父がくれましたの」

「フン、いつでも主人の留守にこそそと来て、はした金で遊んでいけば世話はない」

「そんな人でしたら、私、あなたにうなぎをとっておいたりしやしません。灰皿の煙草だってまだ捨てないでいるのは、来た人があなたにかくす人ではないとわかっていただきたいからですわ」

「まあ、いいさ、主人の留守にたのしんだだけのことは、ちゃんとお返ししてやるからな、はだかになれ」

「はだかに？」

「そうさ、お前のいうことが本当かどうか、俺が此の目でたしかめてやる」

「そんな……」

「俺は、此の部屋へ一歩入った時から、此の部屋の匂いでわかるのだ。バラの匂いなんかでごまかそうたって、そうはいかないよ。はだかになれと言ったらなれ」

美沙子は部屋の隅で着ているのを脱ぎ両手で乳房をかゝえて、うすくまるように座った。

佐久間は立ってくると、美沙子の手を後手に一つにした。抵抗しなくてもかなわないことを彼女は知っている。美沙子はぐるぐると縄をかけられて、茶ぶ台の前へ座らせられた。

「そこにじっと座っている。ゆっくりしらべてやる」

佐久間は縛られた美沙子の体を、なめるように見ながら、おぜんの上に用意されているウイスキーをグラスについだ。

「お前も一緒に食べろ」

と、佐久間は美沙子の茶わんに御はんをよそって、彼女の前へおく。しかし、後手に縛られていて、どうして食べられるだろう。美沙子はだまって下を向いていた。

「昼間来る男とは一緒に御はんを食べても、俺とは食べられないのか」

「食べますから、縄をといて下さい」

「そのまゝ食べろ。食べないか」

佐久間は美沙子の首を、御はん茶わんの中へつけるようにおさえた。美沙子の鼻や口のまわりに御はん粒がついた。

「ハハハハハ」

佐久間は面白そうに笑う。

美沙子は御はん粒のついた顔を、自分でぬぐうことも出来ない。せめて立って行って、部屋の隅の手拭掛へ、顔をこすりつけようと思つて立ちかけると、

「動くつもりか。よし、素直にしないな」

佐久間は立って来て、美沙子の座つた膝をきっちり一つに縛り、足首と、手の縄とを一つに結び合わせてしまった。美沙子はおぜんの前に御飯粒をつけたまゝ、動けなくなつてしまった。

「なめろ、口のまわりの御飯粒をなめろ」

佐久間はいう。

美沙子は泣きそうに顔をゆがめながら、道化のように、舌をのばさなければならなかった。

「ハハハハ」

佐久間は上機嫌で笑い出す。そしてウイスキーのグラスをあけてだんだんに酔ってくるのだった。

四

長い食事が終わった。

美沙子にとって肉体的苦痛は薄かったが、精神的な苦しさは、涙が胸にかたまってしまうような気持だった。

佐久間は食後の一服に火をつけると、灰皿の中から短い吸い草を拾いあげて、美沙子の口にくわえさせた。

「好きな男の残して行った煙草だ。ゆっくりたのしめ」

佐久間は言った。

「本当に父が来たのです。お父さんのなのです」

美沙子はくわえさせられた吸い草を、口から落して言った。

「もう、かんにんして下さい」

「じゃあ、ちゃんと吸ってみろ。そうしたら、お父さんのだと思っ
てやる」

佐久間はもう一度美沙子の口に煙草をくわえさせて、マッチをす
った。短い吸いがらに火をつけるマッチの焰は、鼻さきを焦して熱
かった。しかし美沙子は「熱い！」とも言えず、じっとこらえた。

吸うまいとしても、煙はのどへ入ってくる。美沙子はむせて、吸

いがらを口から落した。はだかの膝の上に落ちた吸いがらは、彼女
の肌をジイツと焦した。

「もう許して！」

美沙子は訴えた。

「これからだ。弱ねをはくな」

佐久間は言った。

「ほら、お前の男の持って来たバラだ。嬉しいだろう」

佐久間は花瓶からバラの花をぬき出すと、縄目の間へ、枝ごとお
しこんだ。

「痛い！」

美沙子は思わず叫んだ。尖ったバラの刺が、彼女の裸体を突いた
のだ。

「ほら、もう一本」

佐久間はわざと刺を押しつけるように、胸にまわした縄の間にさ
しこんで、乳房の上へバラを飾った。

美沙子が息をする度に、胸が波立ち、バラも刺を肌にさしたまゝ
動く。

「痛い、痛いわ」

美沙子は呻めくように訴えた。

「さあ、体をしらべてやろう」

佐久間は平手で彼女の体をこすった。くすぐるようにこすられる
と、美沙子は、

「ああっ！」

と、身悶える。身をもがけばバラの刺はよけいに痛かった。

「痛い、ああ、やめて、苦しい！」

美沙子は呻めく。

佐久間の息づかいが荒くなつて行つた。さされたバラの刺ごと抱きしめられて、思わずその痛さに、美沙子は悲鳴をあげた。バラの花びらがハラハラと散つた。

「本当にお父さんかどうか、電話をかけてくる。それまでそうしていろ」

佐久間は湯道具を持って外へ出て行つた。

ドアが閉つて、廊下を去つて行く足音に、美沙子はやっと、涙があふれ出し、安心して泣き出した。縛られたまゝ、花の散つたバラの枝が、まだ肌に痛く刺をさしているまゝ美沙子は泣いた。畳の上に散つた花びらから、甘い匂いが漂っていた。

——あなた、私の愛しているあなた。これが私の生活なのです。

私はこれで今日も処女のまゝなのです。夫は風呂から帰えると、もう満足して寝てくれます。私は縄をとかれ、傷痕に薬をぬり、そして、自分の身を抱きしめて眠るのです。夫には普通の夫婦生活が出来ないので。悲しい夫のさが……。ある時は鞭打たれ、ある時はローソクの焰で身を焦され、そして、私は虐げられながら、娘のまゝの体でいるのです。滅茶／＼に傷つけられた体は、まだ男を知らないのです。あなた。私の愛しているあなた。いつか一度、あなたの膝で、私は思いきり泣きたい。いいえ、それより、私はあなたに私の処女を破っていただきたい。私を女にしてもらいたいです。女のよろこび……。ああ、私はそれを知らないのです。夫がありながら、私はあなたと初恋の手を握り合つた女学生の時と同じなのです。それなのに、此の悲しい姿……。縄をかけられ、刺に傷ついた肌から血をにじませ、此の痛さをこらえる顔は醜くゆがみ、痩せて

みるかげもない私の姿……。縛られた腕はしびれて、息するのも苦しいのです。ただ、こうして、あなたに呼びかけているのが、せめて私に許された幸福なのです。誰も知らない、あなたも知らない、私だけの幸福な一時……。でも、もう夫が帰ってきます。私はだんだんに衰弱し、今に死ぬかもしれません。死ぬようなら、その前に一目だけあなたに会いたい。ああ、私はもうあなたに会いに行かないで、夫に殺されてしまうかもしれません。首に巻いた縄が、私の呼吸を止めたことだって何度かあるのです。そのうち、そのうち、私は死んでしまう。その前に会いに行きます。もう一度会ってから死にたい。あなたにもう一度会ってから……。あなたのお声を聞いてから……—。

五

——チチキユウビヨウスグコイ——

という電報が来たのは、それから四五日たってからだった。

美沙子は驚いて着物を着かえるのもそこそこアパートを出た。一分でも早く実家へ行きたかったが、もう退社時間に間もない頃だった。美沙子は父を案じる心を押さえて、駅前の公衆電話で夫を呼び出した。父の容態によつては、佐久間も見舞に行くのが当然な間柄だった。出来れば会社の帰りに、真直、実家へ廻つて欲しかった。それなのに、美沙子の父の病気を心配してくれるよりさきに、佐久間の言つた言葉は、

「では、今晚のめしはどうするんだ？」

ということだった。妻というものは、ただ御飯の用意をさせ、自分の思うとおりに虐める為のものなのだろうか。しかし美沙子は夫



の冷たさには慣れていた。

「今日だけで召上って下さいませんか？ それとも、日本橋の家へよって下されば、あちらで召上っていただけると思いますが……」

……

「お前の家に何の用があるんだ？」

「父の工合もどんなかわかりませんし……」

「医者がついているのだろうか？ 素人が何人集ったって仕様がなないじゃないか、ばか」

美沙子は電話口で唇をかんだ。

「何時頃帰えってくるんだ？」

「父の工合でわかりませんが……」

「そんならいい」

はき出すように言うのとガチャンと電話を切った。

美沙子はそんな佐久間の態度を悲しく思うよりも心は実家へとんでいた。電報をくれる位だから、それほど悪いのだとは思えない。父が死ぬことを想っただけで、彼女は涙がこみあげてきて、電車の中で顔もあげられなかった。旧市内まで電車で出ないとタクシーを拾えない場所なので、いくつか停る停留所ごとに、美沙子はいらいらして、電車の中で走りたいくらいだった。

やっこの思いで日本橋の家までくると、玄関に靴や下駄が一杯ぬぎそろえてある。その数にハツとした。しかし、その時、家の奥から笑い声が聞えてきた。

美沙子は喜んでしまうのがこわいように、眉をよせたまま、履物をぬいでいると、女中が出て来た。その顔にかげがない。

「父さんは？」

ほっとする思いを、ため息のように口に出すと、

「三途の川でことわられた、なんておつしやって……。急にお倒れになったので、一時はどうなることかと随分心配いたしましたんですけど……。」

「そう、そんなら……。」

座敷の方へ行きかける美沙子の後から、女中の声が追った。

「築地の坊っちやまもおみえになっていきます」

美沙子は急に背中がカアツと熱くなった。

立止ってしまいたい位全身に電気のようなものが走って通った。

「築地の坊っちやま」と、女中が呼ぶ人こそ、美沙子が心の中で、

「あなた」と呼びかけている人なのだ。

築地の伯父の養子で、小さい時から伯父の家で育てられていた近江志郎というその人こそ、美沙子の初恋の人だった。しかし、ゆくゆくは伯父のひとり娘の婿になると知っては、彼女の初恋も悲しくあきらめなければならぬ恋だった。学生服の志郎と二人、人目をさけて築地河岸を歩いたこともよくあった。父に相談してみようかと何度思ったかもしれない。けれど、父と伯父との兄弟仲にも、もつれた義理もあって、志郎と美沙子が自分達の意を貫くには、あまりにその為、悩み、苦しませる人が多すぎた。「あなた」と、心の中でよびつづけながら、美沙子は今の夫の許へ嫁いでしまったのだ。それっきり志郎と会う機会もなく、今日まですごしてきた。

「でも、伯父さん、本当によかったですね。電話がかゝって来た時にはあいにく父は旅行中だし、どうしたらいいかと思って……。」

ふすま越しに聞えてくる声は、志郎の声だった。なつかしいその

声……。

美沙子はその声をのみこむように、一瞬、ふすまの前で息をつめたが、やがて、ふるえる手で、静かにふすまをあけたのだった。

六

来客で忙しい家人のかわりに医者の家まで薬をとりに行く美沙子とつれ立って、近江志郎は一と先ず家へ帰えると席を立った。

二三日ふりつづいた雨のあとで、夜気が香ばしい程初夏の風にふくらんでいた。

どちらからともなく道を暗い川添いにとって、歩いて来た。

「お忙しいのでしょうか？ 電車道へ出て、車を拾ってお帰えりになりませんか？」

美沙子は気がついたように言った。家を出てから、だまって歩いて来てしまったのだが、ふと、自分だけの思慕の心を、何年も会わなかった志郎に、同じように求めるのはひとりよがりではなかったかと思ったのだ。

「あなたこそ、早く薬をもらって、帰えらなければいけないでしょう？」

「いいえ、今しがたお注射していただいたので、薬は今度目がさめてからでいいんですって……。」

「そんなら、もう少し歩いてくれますか？」

「ええ」

美沙子は答えながら、「歩いてくれますか？」という言葉の中に、志郎と一緒に歩きたがっている心がにじんでいるように思われて、嬉しく心がはずんだ。

「久しぶりだなあ、チャコちゃんとうして歩くの……」

美沙子をミチャコと舌たらずに呼んだのは美沙子自身だった。それから転じて、チャコちゃんという愛称で呼ばれてきた。今、志郎から、娘時代の呼び方で言われ、急にページをめくりかえしたように、現在の境遇の苦しさが薄らぐような気がした。

「チャコちゃん、痩せたなあ」

「お婆さんになったでしょう？」

「お婆さんて年じやないじやないか。痩せたけど、きれいになった」

「変ったわね、志郎さん」

「僕は一寸も変わらないつもりだけど……」

「だって、おせじがいえるようにおなりになったもの。」

「ばか……ああ、ごめん、ごめん、こうしていると一足とびに昔に帰えってしまうようで、つい乱暴な口をきいてしまう。ひとの奥さんに失礼だね」

「意地悪よ、そんなこというの……」

美沙子は足元に目を落した。志郎の口から「ひとの奥さん」と言われたのが、過去に甘えていた今の今だけに、心に痛くひびいたのだ。

急に二人とも言葉をなくしてしまったようにだまってしまった。

ポツポツポツと、発動機船の音が、夜の川に遠く聞える。

昔とかわらない言葉づかいで話合えば、昔と同じに愛し合っているような空気が漂い出す。それに気がついて言葉を切れば、重い沈黙の中に、妻がある男と人妻という、お互いの位置がはっきりして愛してはいけない人だと押さえる心の中に、やっぱり、お互いにお

互いの愛情を感じられるのだ。

「チャコちゃん、幸福？」

しばらくして志郎が聞いた。

美沙子は答えなかった。

「僕はもう少し大胆になるべきだったと思うんだ」

志郎が足元に目をおとしたまゝ言う。

「言わないで。もう……」

美沙子は志郎が自分を愛していてくれることを、はっきり知った「幸福よ、私。あなたに会えただけでも……」

いつしか昔別れた橋の近くに來ていた。

「ここから帰えるわ。お元気でね」

「チャコちゃん」

志郎の手が美沙子の手をとって引きよせた。その橋のたもとの木影で、唇と唇を軽く合わせる接吻をして別れたものだった。

美沙子はふっと錯覚した。或いは習慣がよみがえったのかもしれないし、それが愛情でもあったのだろう。引きよせられるまゝに、志郎の腕の中へ身を投げかけた。

しかし、それはもう、淡い接吻ではなかった。二人を一つの黒い影にして、ただ月だけが、昔と同じように照っていた。

七

泊っていけと父は引きとめたが、美沙子は終電車でアパートへ帰って来た。一晚実家へ泊つたら、それっきり帰えるのが厭になるだろう。父に心配かけたくない。アパートで待っている夫の冷たさが、今夜は恐くなかった。むしろやさしい夫だったら、志郎との接

吻の味を舌の根に残したまゝ、とても、その晩、夫の許へ帰えることは出来なかったらう。

「おそくなりました」

美沙子は夫の寢床のわきへ手をついた。眠っているのか夫は知らん顔をしている。起してもいけないと思って、美沙子はそっと寢巻にきかえた。

一間しかないアパートだから、寢床も一つしか敷けない。美沙子は夫のわきへ身をちぢめるように入ろうとすると、いきなり佐久間はガバツと起き上って、彼女をなぐりつけた。

あまり不意だったので声も出ない。本能的に逃げようとするのを寢床の上へねじふせるように押し倒されてしまった。

「今までどこへ行つて来た？」

「どこって……お父さんの所ですわ」

「うそつけ！」

「本当です。さっきお電話したように電報が来て……」

言っている口のはたを佐久間の指がひねりつぶすようにつかんだ

「ああっ！」

美沙子は痛さに声をのんだ。

「うそをつくか！」

本当ですと言いたくても、佐久間の指の強さにただ顔をゆがめ、思わず自分の手で、佐久間の手をゆるめようとするばかりだった。

「俺が電話をかけた時、何処へ行っていた？」

では佐久間は美沙子が薬をとりに出かけた留守に実家へ電話をかけたのだろうか。

「お父さんはいしたことがなかったのじゃないか。親爺が病気だな

なんて口実を作つて、何処へ行ってきた？ 誰に会つて来た？」

美沙子の頭を志郎の顔が走って通った。

美沙子は言い訳をするのが厭になつてきた。

「あなたのお気のすむようになさつて下さい」

美沙子は静かに言った。

佐久間にとって、その美沙子の態度は意外だった。今まで佐久間は火のない所へわざと火を作り、煙をたてて美沙子を責めて来た。それが佐久間の変つた愛情の表現だった。

それなのに、美沙子は罪をみとめたように首をたれている。佐久間の胸は新しい嫉妬の炎がメラ／＼と燃え立ち出した。

「お前は夫を裏切つたのだな」

違ふと答えて欲しかった。そんなことありませんと、美沙子が必死に弁解してくれることを望んだ。

しかし、美沙子はだまっていた。

「姦通罪はなくなつても、夫を裏切れば、罪は罪としてお前の身に残るんだぞ」

美沙子は目をつぶった。志郎とした接吻は肉体を許したことの同じではないか。まして火あそびではなかった。むしろ人妻の一寸した浮気心で身を汚した方が、罪は軽いかもしれない。美沙子は夫を愛さなかった報いが、今、身にふりかゝるのをさけようとは思わなかった。

「よし、寢巻をぬげ」

美沙子はパンツ一枚になった。

「それをとって、腰巻をしめろ」

美沙子は言われたとおりにする。

「このシャツを着ろ」

佐久間は自分の夏のシャツの、汗であかく変色してしまっているのを出した。

「それで囚人らしくなった。さあ、手を後にまわすのだ」

薄いクレープのシャツを透して、乳首が見えて、衿のつまった男のシャツはみすぼらしく美沙子を囚人らしくみせた。

佐久間は高手小手に美沙子の手を後手に縛ると、首縄をかけ、胴にも腰にも縄をまわした。

「さあ、歩くんだ」

縄尻をとられて美沙子は立ち上った。

此の部屋には床柱がなかったが、前にも机の脚に縛りつけられたこともあるし、箆の鐙に縛られたこともある。

美沙子は今夜は一晚中責められるだろうと覚悟していた。責められればむしろ志郎との思い出を胸に抱きしめ、志郎の名を心の中で呼んでも、夫に済まなく思わないでもすむ。

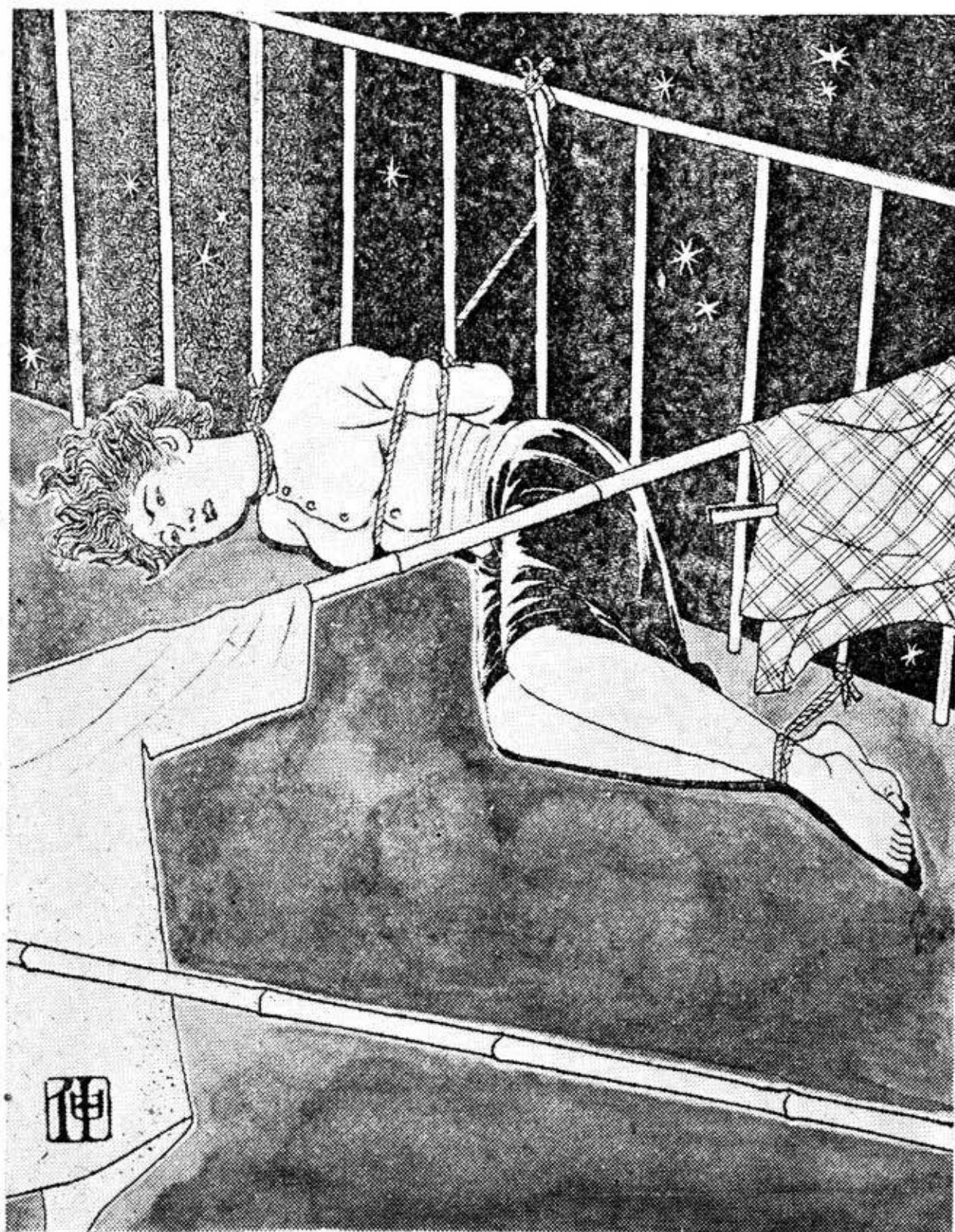
しかし、佐久間は引つ立てるように縄尻をとって、後から肩を押すと、ドアをあけて廊下へつれ出した。

美沙子は急に後ずさりした。二人きりの部屋の中なら、どんなめに合わされて

も恥しさは我慢出来る。けれど、アパートの人の目に、みじめに縛られた姿を見られたくはなかった。

しかし、佐久間は邪慳に背中を突いた。

美沙子はドアから外へ転ばされてしまった。



そのまゝ彼女は這うように、膝で、ドアの中へ入ろうとした。けれど、佐久間は転んでいる美沙子の体を蹴とばして、廊下の外へ出そうとする、両手の自由をうばわれて、縄尻はしつかり握られ、足のさきで所きらわずに蹴られては、立ち上ることさえ出来なかった。

「どんなことでもおとなしくされます、部屋の中へ入れて下さい」
美沙子は哀願した。

夜更けたアパートの廊下はしんとして、人影はなかったが、いつ、どこの部屋から便所に行く人がないともかぎらない。腰巻の上に薄いシャツを着せられ、短い袖からむき出しに出ているこの腕にまでしっかり縄をかけられた自分の姿を、美沙子は人に見られると思うと、恥しさで死にそうだった。

それなのに、佐久間は隣の部屋の前まで引きずるように美沙子をつれてくると、彼女が逃げないように縄を持ったまゝ、片手で「トン、トン」

と、隣の部屋のドアをノックした。

「やめて、おねがい、やめて！」

美沙子は何とかして、佐久間の手から逃げて部屋へ帰えりたかった。けれど、それは空しい努力だった。

「トン、トン」

と、再びドアを叩いて、隣室の人の名をよぶ佐久間の声に、眠そうな目で隣の人はドアをあけた。

そこに縛られている美沙子の姿を見ると、忽には誰かわからないらしかった。

「こいつは今日、私を裏切りました。私でさえ裏切る女です。何を

するかわかりません。こいつに注意して下さい。ほら、こんな顔をしています」

佐久間は美沙子の顔をぐっと仰向けさせた。美沙子は唇から血が出る程ぐっと噛んで、こみあげてくる鳴咽をこらえた。

隣の人は何か言おうとしたが、佐久間はいんぎんに、

「夜分お邪魔しました」

と、頭をさげて、自分から隣のドアをしめると、美沙子の背を押して、次のドアへ歩かせた。

しめられたドアの中から、しのび笑いの声が洩れて来た。いつも美沙子に反感を持っている人達だ。「変ってるよ」と、佐久間まで嘲笑っているのだろう。

そうして美沙子は罪人の引き廻しのようにアパート中を歩かされた。寝入りばなを起された人達は、皆不機嫌そうな顔で出て来ては美沙子をじろじろと見て嘲った。誰も美沙子の為にとりなしてくれない人はなかった。男の人達の中に、何か云いかけようとしてくれた人があったが、女房に耳許でさゝやかれると、「さわらぬ神にたゝりなし」といった顔でドアをしめてしまうのだった。

歩かなければ打たれ、蹴られて、美沙子の顔は涙と汚れてきたなぐ縞になっている。

佐久間は追い立てるように、屋上の物干場へつれて行つた。

夜空に星が降るようだった。

美沙子は人気のない物干場で、さんざんに打たれた。のどがかすれて、笛を吹くような悲鳴をあげた。

「今晚一晚此処にいる」

佐久間はぼろ布のように物干の板の上に身を投げ出している美沙

代理部月報(今月の新版と先月の分)

◆後手高手小手

二面体◆

大鏡を利用して、高手小手の後手の緊縛と胸に掛った縄目とを同時に一枚の画面におさめた責めフォト・マニア待望の珍しい作品、モデルは肉体の豊満と瑞々しさを誇る伊吹嬢

◆ローソク責め三態◆

責手の厳しい手は容赦なく燃える蠟涙が柔肌をやく、マゾ女の被虐の表情とポーズの美しさ

◆ホータイ縛りの

特選◆

アメリカ某社の注文により、そのアイデアを活かしたエキゾチックなホータイ緊縛の中の優秀三態

各キヤビネ版 三枚一組

送共 三百円

血紅使用の

切腹擬態写真

第一集 手札型

六枚

三百円

第二集 手札型

六枚

三百円

真刀を用いた

切腹擬態写真

手札型

六枚

三百円

マゾ・フォト…新作

○足舐 三態

○凌辱 三態

○犬の折檻 三態

○足蹴 三態

○人間椅子 三態

○人間馬 三態

春日ルミ嬢構成

各キヤビネ版 三枚一組 三百円

○モデル 中富綾子嬢

◆股間縛り三態◆

○ニューフェイス 浅野末乃嬢

◆さるぐつわ三態◆

○モデル 萩千恵子嬢

◆海老責め三態◆

◆猪吊り三態◆

◆レインコート三態◆

◆腰巻三態◆

◆縋帯三態◆

各キヤビネ版 三枚一組

送共 三百円

〔毎月新鮮なる新版発表の予定〕

子の体を、さらに手すりに縛りつけた。何本かの物干竿が、くずれ
 そうな彼女の体に、交叉して結えつけられた、竿に咽喉を押しあげ
 られて、下を向くことも出来なくされた。

「いいか、それで許されると思うと大違いだぞ。俺は決してお前を
 離婚しないからな。朝になって雀が突つくように、屑米でもお前
 の体にまいておいてやろうか。ハハハ、いいさまだ。とんと案山子
 だね、そうだ。あしたは一本足の案山子にして縛ってやろう。今日

はもう俺は疲れた。まあ、ゆっくり泣いておいで」

佐久間は憎まれ口をきいておりて行ってしまった。

「苦しい、といて！ 痛い！ もうかんにんして！ 痛い、痛いわ

！ ああ、ああ！」

美沙子はうわ言のように言いつづけながら、体中がしびれて、意
 識までしびれて行ってしまいうように思いながら、スーッと星が流れ
 たのを、うつろな目で見送っていた。
 (おわり)

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第六十 ワンダの朝食

肉台盤は一歩進めば文字通りの人間食卓即ち裸かの背中を水平にさせてその上に食器を並べる趣向になるが、これは後で人間椅子のテーマなどと関連させることにし、本項では、前項のような手で支える肉台盤サービスの古典的な一例を引用しておく。

それはマゾツホの「毛皮を着たヴェヌス」の一場面である。戦後割合に良い訳本が出ていたので、既に御存じの方も多かるうが、読者の全部が読んでおられるとは思えないし、この作品自体は何度読んでも飽きることのないマゾヒストの永遠の古典なのだから、本邦未訳のものは別に扱うが既訳のものは手帖の一項に入れるという今迄の例に従って、こゝでその一部を抜萃することにしよう。がその前に少し説明を――

セヴェリンが恋愛遊戯のつもりで署名した奴隷契約を恋人ワンダは文字通りに受取り、昨日までの愛人を本当に奴隷として扱うことにする。縛られ、鞭うたれ、足先に接吻を許された揚句、彼は庭仕

事をする奴隷に貶されてしまう。一ヶ月間彼は園丁の手伝いをしており、彼女は彼のことを忘れてしまったように思える。

その中にワンダから書面が届く。

この書面によって、奴隷グレゴールに対し、吾が一身上の奉仕を命ずる。 ワンダ

グレゴール (Gregor) というのはセヴェリンがワンダから貰った奴隷としての名前だ。一身上の奉仕 (persönlicher Dienst) というのは、主人の身边に常時侍って手足の労を省く侍童や腰元のするような仕事だ。一ヶ月前迄は対等の人格者として相愛の仲だった恋人の許で明日からは側近の奴隷として召使われるのだ。

さて抜萃しよう――

翌朝は胸をワクワクさせて綾織のカーテンを開き、まだ心にくい薄暗に蔽われているわが女神の寝室に入った。

「お前グレゴールかい？」

私が煖炉の前にしゃがんで、火を起している間にワンダは声をかけた。私が心を打込んでいる声を聞いて、私の身体は震えた。



姿は見えない。ベッドの帳の奥深く休らとほりっていて、近づき難い。
 「ハイ、左様でございます、奥様」
 「何時だい？」
 「九時を廻りましてございます」
 「朝御飯」
 私は急いで取って来ると、コーヒーの盆を差出してベッドの前に跪いた。

気がつくくと、ワンダは傍のテーブルにおいてあった鞭に手をやっ
 た。

「気をつけないか、奴隷」
 眉をひそめて言った。

私は目を伏せてワンダを見ないようにし、力の限り盆を押えていた。その儘でワンダは食事をとると、あくびして、素晴らしい毛皮の中で豊満な手脚をぐっとのびをした。……

「朝の御食事を持って参りました、奥様」
 ワンダは帳を引き開けた。不思議なことだが、解けた髪の毛を波打たせながら、白い枕に休んでいるワンダを見ると、全くいままでに見たことのない初対面の人のようであった。麗人たるに変わりはないが、目鼻立ちも私の憧れているものではなく、その顔は何か堅い薄気味悪い表情を浮べ、倦怠、豊満といった感じが強かった。
 或は私は前にはこれに気がつかなかったのかも知れない。

彼女はその碧い眼でじっと私を見つめたが、例のおどかさような様子よりは、何か物珍らし気な又同情するというような風であった。そして身にまとっていた薄黒い毛皮を、物愛げにむき出しの肩にひっかけた。

この瞬間彼女の姿態は全く心をかきむしるようで、血がかった頭に上り心臓に集るのが感ぜられた。手に持った盆ががたがた揺れ始めた。これに

これが奴隷になったセヴェリンの最初の奉仕なのである。この日以後、ワンダはいつも彼に跪いて盆を差出させた儘、自分はベツトの中で半身を起した恰好で朝食をとるのが例になっているのがこのあとの文中で明らかであるが、このセヴェリンの奉仕は、特にワンダがセヴェリンを苦しめるためにさせているのではなく、よくある奉仕形態を召使の一人としての彼にさせているに過ぎない。西洋貴族の日常生活では召使にこの位のことをさせるのは何でもないことだったのである。しかし貴族の人使いの荒さについては項を改めて説くこととしよう。

附記 本項では輓馬志望のマゾヒストのことを紹介するつもりで前に（二月号の人耶馬耶）そう予告したが、このテーマは他の資料とまとめて、もう少しあとで説くことにする。

第六十一「毛皮のヴェヌス」の邦訳

前項の「毛皮を着たヴェヌス」Venus im Pelzに関しては、書きたいことはいくらでもある。然し作品自体については又別の機会に触れることとして、本項では、本邦における翻訳について一寸書いておく。

この小説は一八七〇年（明治三年）に完成しているので、柳田泉氏、木村毅氏のような明治翻譯文学研究家に聞けば、全訳はないにしても、抄訳位のものは明治年間にあってもよさそうである。独乙文学に精通した上、性慾の学にも医学者としての水準以上に理解の深かった森鷗外などがさしあたり適訳者だったであろうと思われ、事実東大図書館の鷗外旧蔵の文庫中にはマゾツホの作品が多少存す

（毛皮を着たヴェヌスのブック・タイトル）

Venus im Pelz

Novelle

von

Sacher-Masoch

Mit Illustrationen von Felix Buchholz.



Leipzig

Georg O. Olshausen'sche Verlagsbuchhandlung

るので、関心はあったようだが、結局食指が動かなかったと見えてマゾツホを訳したものは鷗外の訳業中にはないようである。

私の知っている所では、大正末期に、青樹繁という人の訳がありこれが一番古い。「性の受難者」と題して刊行され、相当に版を重ねたものである。然しこの訳本には缺點が多かった。第一に、当時の検閲を顧慮して削除部分が非常に多い。接吻という単語の出るセテンスを丹念に一々伏字にしたのなどはむしろ滑稽感もあるが、ワンダが鞭撻によってセヴェリンを折檻したり、彼を家畜の代りにして犁につないで畑を耕させたりする最高調の諸場面が削除されているのは、この訳本の生命の半ばを失ったものである。

第二に文法的誤訳が少くない。例えば、ワンダがセヴェリンを奴隷化し、グレゴールと命名する時、以後は召使として、女主人たるワンダの命令なしに部屋に入ってはならない。と言渡すのであるが

この訳者はそれを反対に、勝手に部屋に出入りできるように訳してしまっている。その他一々数えあげないが、何にしてもあまり信用できない訳本である。

第三に、一番軽く考えられそうなことで、実は最もこの訳本の価値を傷けているのは、ワンドのセヴェリンに対する言葉遣が馬鹿に叮嚀なことである。勿論日本語におけるように婦人語と男子語とが完全な分化を示していない西欧語から日本語に訳すのだから、訳者が女性であることを示すためには、或る程度女らしい言葉遣に訳すことは必要である。然しワンドはセヴェリンを対等に扱っている間は Sie (あなた) と呼び、彼を奴隷グレゴールにしてしまってから du (お前、そち) と呼んでいるのであって、ここを訳し分けないのでは、この小説の一番大切な味が伝えられないことになる。ワンドはグレゴールに対しては、主人として口を利いているのである。そして、日本語ではこの区別は西欧語以上にはっきり出てくる。日本の淑女は同じ身分の男女に対しては「遊ばせ」言葉で話すが、目下の者には「……しておくれ」「……なのかい」といった調子で話す。Sie と du とはこの区別に対応せねばならぬ。それをこの訳者は無視しているのである。

戦後、鷗居堂書房から「毛皮を着たヴィナス」として出た治洲嘉明氏の訳本は、誤訳が全くないのではないが、右の三点には略難がないので、先ず〱推賞しうるものである。(前項の抜萃部分も、会話を除き、手取り早くこの訳本によった)。

マゾヒストの共通の地盤を作ろうというのは私の以前から提唱するところであるが、共通の地盤を建設する時のセメント見たいな意味を持つ共通の話題という点では、この「毛皮を着たヴェヌス」な

どは第一に数えられるべきもので、真に文字通りマゾヒストの共通財というべき古典である。もしマゾヒストを以て任ずる諸君にして、まだこの小説を読んだことのない人があったら、いかようにもして、是非一度は読まれるがよい。治洲訳は神田の古本屋で捜せば入手しうる筈である。(青樹訳も捜せば手に入らぬこともあるまいが、右の次第だから、わざわざ捜して読む必要は全くない。)

尚、右の治洲訳の出でからずっと後、昭和二十七年三月頃に、やはり「毛皮を着たヴィナス」と題し、原色の装釘までそっくりの本が店頭に出たことがある。然しこれは、右の標題や、中の扉の「毛皮を覗くヴィナス」との副題にかゝわらず、毛皮にも、マゾツホにも、マゾヒズムにも、何等関係のない普通の好色本で、W・ヴェンドラという人の作品を藤井淳道という好色本研究家が訳したものであり、本物の「毛皮を着たヴェヌス」に対しては怪しからぬ偽物という外ないものである。恐らく、原題は他にあるのを、沽らん哉でこの題名を附したものであろう。三榮書房から出ている。今でも古本屋で見かけることがある。治洲訳本を購入しようとする人はだまされない様注意を要する。

第六十二 淑女とズボン

手帖第十五項で私は、ズボンは家庭内の権力の象徴であったので女がズボンを穿けば、それは亭主を尻に敷いていることを示すに外ならなかった、という歴史的なズボン観を引いて、スラックス流行が男に対し、マゾヒストに対して持つ意味を論じ、更に第十六項では、鷹司氏が夫人にスラックスを穿かせない、という言明を外人記者に対してなしたという話を引例した(昨年七月号)

この私の一文が衣服史家たる吾妻氏の批判を蒙ったことは読者の承知されるところである。氏はズボンに家庭内の主権の象徴を認めるのは「女はズボンを穿くべからざるものと信じられた時代の歴史的真理なので、現在には通用しません。」と断ぜられた(八月号) 私はそれが果して「現在に通用しない」ものであるかどうか、多分に疑問としたのだが、当時適当な引例なく、鷹司夫妻成婚当時の右の逸話に於て、外人記者が、妻の穿くズボンに対して吾妻氏とは



KS

異なる意味を与えていたことを知りつつも、その記事の出た雑誌名をあげないために、歯痒い思いをしたのであった(十月号)。

ところで、近頃こんな文章を見出した。――

久しぶりに冬の東京に来て、眼についたものの一つは、スラックスをはいて町の中を歩いている若い娘さんの多いことだ。

(中略)

このごろ、ロンドンで、たまに一人か二人、見かけるスラックスは、相当、スタイルに自信のある芸術家気どりの若い娘さんである。もう一年ほど前のことだが、イギリスのリヴァプールの町で、十三才の少女が、スラックスをはいて学校に通ったため、停学を命じられたことがあった。この事件が裁判沙汰になったことは、日本にも伝えられたようだが、この少女の場合は健康上の理由があった。けれども「女の子にスラックスをはかせるのはみっともない。あきれたことである」という学校当局の反対を支持した人も多かった。

(中略)

イギリスで、「あそここの家では奥さんが、ズボンをはいている」といえば、それは御主人が奥さんのお尻に敷かれているという意味になる。何時かこんな話をきいた。

年中、奥さんに小言をいわれて小さくなっていた御主人がある日、夫婦そろって、パーティに出かけようという時、急にズボンを脱いでしまった。そして「家では奥さんがズボンをはいているんだから、僕はズボ

ンなしで出かけるよ。一つの家で二人もズボンをはいてる必要はないだろう」といってきかない。とうとう奥さんが降参して「もう小言をいわないこと」そして「名実ともに貴方にズボンをはいていただく」と約束したそうである。

だからイギリスの男の人達も、奥さんのお尻に敷かれるのは真平だというわけだ。(下略)

○

これは週刊朝日別冊昭和二十九年四月十日発行中間読物号に、朝日新聞ロンドン特派員伊藤あい子女史が「ロンドン・ファッション」と題して書いている読物の冒頭の一部である。She wears the breeches. (彼女はズボンを穿いている。嬖天下である。)が現在も通用する成句であることを、よく語っているように思われるので先に忘れていてあげられなかった雑誌名の代りに、右の一文を前記十月号の私の文の引例として補っておきたい。

×

×

×

又先の十月号(更に十二月号)の文で、私は、私のような「女のズボン」観の是非についての意見を(吾妻氏のような反対傾向の方よりも)、同好マゾヒストの諸君から伺いたいのだと希望した。

近頃りべらる誌六月号巻頭の「女にかしづく男たち」という特集記事の一つにある乗馬クラブの馬丁の手記と称するものを見出した虚構であるかどうかは知らぬが、乗馬する女性から鞭たれたり、靴でふまれたり蹴飛ばされたりして、動物なみにコキ扱われていることを敘して、「動物になりたい気持を感じる」と告白しているこの筆者が、マゾヒストの一人に数えられることは確かである。その中で次のようにいっている――

西洋では、嬖天下のことを「ときをつくるメンドリ」とか「ズボンをはく女」とかいうようですが、思いあたることがあります。馬に乗るには、なんといってもズボンをはいて貰った方が便利ですよ。(中略)

ズボンをはくと、ほんとに女の気持が、ガラリと強くなることは、私も経験で知ったのです。身体を自由活潑に動かせるからでしょう。私の小屋でスカートをズボンにはきかえて出て来たときに、女の態度が、それぞれの血統にしたがって、荒っぽくなります。(下略)

×

×

×

かように、ズボンを穿いた女に荒々しい男らしさを感じるこのマゾヒストが私と同じような「女のズボン」観をもっていることも、私の説の一例証となるであろう。

×

×

×

断っておくが、右の二つの引用は、先の私の文の不備を追完したものであって、何等新しい論点を含まない。スラックスということばを使うことの可否、女のズボンの男に対して持つ意味、などについての吾妻氏との論争は、既に言明したとおり、私としては打切ったのであって、今更むしかえす気はないから、誤解のないようにお願いしておく。(ただ第三者の忌憚ない御意見は歓迎する)

◎ 次 号 ◎

- (六十三) 奥様の反吐 (六十四) 淨穢不二の修行
- (六十五) 返事 (その二)

女性腋窩譚



佐 次 浩 介

毎年、夏の候となると、女性の腋窩に関する戯文やマンガ等が「夫婦なんか」「○○実話」などという雑誌類に、よく掲載されます。その殆んど全部が、例の黒々と生い繁った腋毛が、ある種の幻想を伴って男性を刺戟

サチストの夢とでも申せましょう。だから、百人が百人、感じ得る感覚であるから、これ何れもアブノーマルな境地とは、言い得ないかもしれません。また、流石の奇譚クラブにも、腋窩に対する偏執を記した告白、或は、記事は、極めて稀か、殆んど皆無であったの

するというテーマで、又、事実電車の吊革などで若い女性の腕の附根を、チラチラと瞥視した経験は、大抵の男性なら、皆持っている事で、ないでしようか。

これは、男性側の窃視性が女性側の露出性に便乗して心の中で彼女を裸体にむいて様々の幻想を描いて見る一種のはかない

ではないかと思えます。しかし、私のように腋窩を対象としたサチスティックな境地を求めて来た者の告白を奇クを通じて、発表していただくと思うのは、やはり、私の経験や方法に、多少なりとも賛同して下さる諸兄姉が、居られるのではないかと思うからです。吊革の覗視に対しても私は異常な昂奮を感じますが、この程度の事は、誰にもある事で、強いてアブとは申されません

しかし、私の場合、現在の私の妻は、この事のために、結婚初夜以来、約三ヶ月間処女でいたという事をもって、私の腋窩に対する偏執の一端を御想像いただきたいと思うのです。が、現在の妻は、私にとって、あまりにもノーマルでありすぎます。私は再三、妻を、私と同じ境地に引き入れようと努力致しましたが、遂に私は満足する事が出来ずに居ります。私が、これから告白しようとする事は、主として前の妻、といっても、私の学生時代、内縁関係で同棲していた、好子という女性との事なのです。

二

私が、好子を知ったのは、彼女が十七才私が「ことり座」という素人の児童劇団を主宰していた頃の事でした。「劇団」など、称し

ても、最年長の私が新制高校卒業早々で、他に、座員七名というのですから、今でいうティーンエイジャーの交際グループと言った様なものだったのです。しかし私たちは、一ぱし芸術家の卵を気取って、大いに演劇論や芸術論を討論しておりました。もっとも今から考えて見れば、その日その日に観た映画の評判程度のものでしたが――。

そうしたグループの中で、私が、何故好子の腋窩のみに心を奪われたかと申しますと彼女が其後腋窩露出症のマゾヒストとして、

ぐんぐん成長して行ったからに他ならないのですが、当時は、他の女学生達と比べて、彼女が、非常に濃い腋毛を持っていたという単純な動機からでした。

それが、私がやがてN大学に入学し、新宿のアパートに下宿する様になると、続いて好子も上京して、浅草橋の近くの運送会社に事務員として通勤しながら同棲する様になって初めて私達の本格的アブ



・プレイが始ったのです。それまでは、両親の眼もきびしく、お互同志、未知の世界の事でもあり、精神的な愛情といった面が強く、唯、私が好子の腕を高く上げさせ、その腋窩に接吻するといった程度のものでありました。それでも、若い私は、好子の腋臭を、むっと吸いこむだけで、たちまち感覚の爆発の起るのを、どうする事も出来ませんでした。

こうして、両親の眼をはなれ、無分別な若

い身空で別天地に放置された私達の毎日の生活は、幼い、しかし、真剣な悦びに充ちたアブ・プレイの連続であったのです。だから、私達の場合は誰に教えられる事もなく、全く独自の技巧を発見していったと申しても、そう潜越な言い方ではあるまいと思います。

好子の腋臭は、決して特異なものではありませんでしたが、ねっとり、すえた様な鼻にからみつく甘さがあって、この甘さ丈は、

其後私が腋窩に手をさし入れた何十人かの女性の中にも、彼女に匹敵する者は居りませんでした。私達のプレイは、この腋臭を嗅ぐ事から始ったのですが、同棲してからというものは、これが急速にサチ対マゾの関係に発展して行ったのです。

私達のアパートは、四畳半の間でしたので、私の発見？したしぼりには、最も都合の好い広さでした。両手をそれぞれ別の二本の縄――私達は、色彩と幻想的な雰囲気を増すために、好子の下紐や、

しごきを用いました。――を結び、部屋の隅に取りつけた金具に、くくりつけてぎゅっと張ると、好子の身体は丁度大の字に伸びきって、思う存分、腋窩を拡げる事が出来るのです。

縄の緊迫による苦痛が全然ありませんので長時間そのまゝの状態で楽しむ事が出来る点が、第一に私の気に入りました。こうしたあまりにも開放的なポーズをとると、好子の露出慾も十分満たされて、羞恥と、満足感とに桃源境をさまよう様な気持ちになるのです。私は、好子の腋窩に頬をすりよせ、その素晴らしい腋臭を胸一杯、吸い込みます。頭髪のように雑物の臭いの混らない純粹の女臭、それは、どの様な高価な香水よりも強く私を魅了して

私がもらい子であると云う事を、はっきり知ったのは五、六才の頃からで、七才の頃には、はっきり其の事を理解して居ました。

他の兄弟と何の区別もなく温かく育てられましたので、世間によく云う哀れな継子物語りの主人公の様な所は少しもなく、すく／＼とC県の海浜の村で、毎日潮風に吹かれて育って行きました。

姉は私より六ツ年上で、私が一年生に入学

しまうのです。しかも不潔感は全然ありません。腋窩を、ぐいっと露出させて、そこに、びったりと掌を押しつけた時の感覚は、乳房のその様に、頼りない柔かみではなく、ぶく／＼とふくやかな中にも、コリツとした手触りがあって、私にとっては、何物にもかえ難い喜悅なのです。

私は、決して、好子を後手に、縛りませんでした。それは腋窩の美を損う事が、唯一の原因でありましたが、その代り、両の手首のみの吊し責めの様な、相当苦痛を伴うプレイも、ある程度までは行いました。勿論吊し責めの場合は、足が十分畳の上についているのですが、それでも足首を縛っておくと、重心の支えがつかず、一寸した拍子に、非常な苦

した時、彼女は六年の級長をしていました。海辺では珍らしく色の白いぶく／＼と太った、どちらかといえば、きかん気の性質でした。気の荒い兄は、余り私には好意を持っていない様に見えましたが姉は何となく私を温かい気持ちで抱いて呉れる様に子供心にも思えて、日増しに姉への思慕はつのるばかりでした。そして平和な日が毎日続き、いつしか姉が十八才になり、十二になった私の眼にも姉の

痛を与えるのです。その事を好子はよく「腋の下がねじ切れそう――」

と申すのです。――以下五十三行略――

三

そして、大学生活の四年間を終ると、私はある事情から、遂に好子と別れる事になりました。郷里へ引込むとすぐ、現在の妻と平凡な結婚を強いられ、現在に至っています。しかし、私にとって、首筋、乳房、腕に向っての女性の最も複雑な線を内蔵している腋窩こそは、永遠に憧れの的であり、女性の焦点なのであります。

【編集部註】 腋窩に対する告白としては、本誌二十七年九月号に三富浩生氏の「白い腋窩の幻想」があります。

成熟した肢体がまぶしく思えて来る様になりました。他に何の娯楽もない風紀の乱れた漁村の事ですので、垢ぬけのした男好きのする姉に対して村の青年の眼が集らない訳がありませんでした。

姉には夢の様な青春の毎日が続いた事でしよう。夜床に入っても隣りに寝ている姉の体からは、むせる様な甘酸っぱい体臭が発散して、健康な白い胸のふくらみが浴衣の襟から



浜 辺 の 唄

三 村 春 夫

あやしくはだけて見えたりします。そんな時私は思わず顔を赤らめて背を向けて寝ながら胸の高鳴りを聞いた事もあります。

或る日の事、学校の友達に教えられて、マツチ箱に軸をあてゝ、はねとぼしながら火をつけるいたずら遊びをして居りますと、突然箱に火が移って右手に火傷をしてしまいました。痛さに耐えられず夢中になって家へ飛込むとお茶の間で一人裁縫をして居た姉の膝にすがりついて泣きました。暫くして姉が洗面器に入れて持って来た黄色ばんだ液体が火傷の妙薬だと云うので、姉の云う通りにその中

へ手を浸すと、気のせいか痛みもなくなった様に思えました。それは生温かい番茶の様な色をしていました。

翌日、姉に薬の事を聞いたら、姉は顔をぼっと赤く染めて笑って居ましたが、誰にも云ってはいけないよ、と云いながら、昨日の薬は「私の小便なのよ」と小さな声で云いました。その時の私の驚きは、今でもはっきりと覚えて居ります。

そんな事があってから後、私はなんだか姉と変な関係になった様な気がして、子供なりに小さい胸を痛めて居りました。

誰も居ない所で、そっと火傷のなおった手を見つめて居ると色々の妄想が湧いて来て、思わず頭がクラ／＼する様な事も時々ありました。

そんなわけで私の幻想はいつも姉の白い肢体と、むせ返る様な体臭でした。そしてあの黄金色の液体の生温かい感触でした。私の物狂わしい迄の思慕も知らぬげに姉は、子供の私には何んの警戒心もなく、まるで肉身の弟のように無邪気で何事もあけすけでした。

或る寒い冬の夜、母家から離れた湯殿で姉の呼ぶ声があるので行って見ると、姉は首迄湯につかり乍ら、ぬるいから火をたいて呉れと云うのです。パチ／＼音を立てゝ柴を燃している私の顔は火の色の様だろうと自分で思われました。姉は白い背を向けてごし／＼自分の足を洗い乍ら「背中を洗ってやるから一緒に入れ」と云うので、私も思い切って、「うん」と答えてふるえる手で着物を脱いで入りました。

二人で………ではいると、風呂の湯が溢れて流れ出しますが、私にはそれより恥しさと悩しさで、気も転倒しそうです。姉の逞ましい乳房は湯の中で私の胸にくすぐったくふ

れて来ます。そしてむせる様な私の神経を痺れさす体臭。

私は理性を失ったうつろな眼つきで姉の盛り上った肩を見つめて居ました。立ち上った姉のお尻の豊満な二つの半球は私の眼の前にありました。

次の瞬間、私はその……の様な………居ま

した。然しそれはほんの一瞬间の事で、ぴくっと身を引いた姉は、珍らしく恐い顔をして低い声で叱りつけましたが、其の眼の中には何時もの優しさがたゞよっていました。

それからの私は、もう完全な姉の虜になり切ってしまった。唯姉の白い肉体につかれて居ました。姉の歩く度にゆれる豊かな腰線、着物の上からそれはあり／＼と私には見えませんでした。あの湯殿で私の顔が………感触、そして甘酸っぱい匂いが――。

私は姉の体について、あらゆるものを知ろうと必死になりました。納屋の隅に置いてあ



る籠の中の汚れ物の中から、白い晒布の腰巻にぐる／＼巻いてあったゴム布の製品を見つけたのはその頃でした。妖しい期待と好奇心に胸を締めつけられ乍ら、その汚れ物を開いて見た瞬間、私は、ひざががく／＼して立っていられない位でした。桃色の薄いゴム布と白いネルの布は………になっていました。

それを鼻に押当て、舌を出してなめまわしました。生臭い匂い、女臭い匂い、甘くも辛くもない味、そしてゴム布の匂い、私はか

すかに便所の匂いもした様に思えました。

やゝ落付いてから、何喰わぬ顔で納屋を出て行くと、姉はうっとりした顔付で流行歌を口ずさみながらかまどを焚きつけていました。私は美しいなと心から思い乍らその横顔を見つめて居ると、こんなに綺麗な姉のどこにあのどす黒い汚れものにつながりがあるのか不思議になりました。

姉は、日一日と美しくぼってりと肉づいて行きます。或る時、昼寝していた姉の素足に口を押付けて、眼を覚まさないのを幸いに長い間、足の指を一本一本口に入れて見たり、指の股を吸ったりした事もあります。姉の体のどんな所でも私には汚ないと云う所はなく、唯美しく神々しいばかりです。

そうした毎日が続いて、私は本当に神経衰弱の様になってしまいました。親達も何かと心配して呉れ、医者に診て貰う様に云いまし

たが、其の儘で何が原因だか思い当らないで居る様でした。唯、姉だけは女の敏感さで感づいて居た様です。然し姉は黙ってそれを口に出そうとしないようでした。というより姉は、十九才の肉体のうづきに酔って居たのでしよう。

毎日美しくお化粧をして、夜等は何故か落付かない様子です。買物に出たり、些細な用事にことつけて外へ出るのが好きでした。時々、暗闇からピュー／＼と意味有りげな口笛が鳴ったり若い男達の笑声がしたりします。

私は私で、熱病の様に毎日姉につきまとして居ましたが、其の年の夏、思いも掛けぬ事から私の求めてやまなかつた悲願がかなった事を最後に告白します。それは私の現在に至る迄に最大の歓喜と感激に溢れた一頁です。

夏祭りのはやしが、あちこちの村から聞えて来る七月の或る日。

私と姉は他所行きの着物を着て並んで歩いて居ました。それは二里近く離れた隣村の親類の祭りに呼ばれ、一晩泊っての帰り路でした。姉は親類の人達に口を揃えて「綺麗になった」云われ、夢の様に過ごした楽しい二日間でした。

二人は田圃の中の県道から近路の山路へ入

り、疲れたせい口数も少なく並んで歩いていました。私は柔らかな姉の手をにぎって居ました。突然「痛い！」と叫ぶと姉は崩れる様にしゃがんでしまいました。驚いた私は、「どうしたの」と姉の肩を抱えた時に、姉はあの真白い腿を開けると桃色の腰巻を勢い良くまくりました。その時さっと小さな金茶色の蜂が飛立って逃げて行きました。

「蜂よ、痛い／＼、早く吸って吸って」私の村では蜂に刺された時は、すぐ口で吸ってやる風習がありました。

私は夢中で姉の押えている処に口を当てると、一生懸命吸い続けました。それは白いふくらとした太股でありました。他人が見たら随分驚く光景でしょうが、幸い体が全部完全に隠れる夏草の茂みの中ですので、人に見られる心配はありません。

姉は真青になった顔を苦痛にゆがめて居りました。私は息の根も止る程の嬉しさで、丸出しの姉の太股に顔を埋めて吸い続けて居ました。姉は低い声で何か云っていた様でしたが、私は失神した様に、その儘動作をつづけるのでした。

私が幾年月、気狂いの様に憧れた姉の柔肌が直接今私の顔に押しつけられて居るので

す。そして私の口は火の様に熱く、その柔肌に吸い付いている。私の舌は甘い／＼白桃の様な姉の肌をしゃぶって居る。そして私の鼻はあの悩ましい姉の体臭の、やるせないその匂いを、私の肺の隅々迄充滿したのです。強烈な匂いが夏草のいきれと共に、かげろうの様に立ちこめて、私はその夢幻の静けさの中でうっとりとして居ました。

告知板

○坂口潤子さま、五月十日付七月号が校了の日で残念乍ら連絡が出来ませんでした。資料は局へ行かれる日御一報あれば送ります。○川合伊都子さま、草双紙に見る女腹切、二篇拝受漸次誌上に発表してゆきたいと思ひます。○長谷川洋氏へ一読者の方から貴方へ現金入りの手紙が来ています。如何しましょうか。○マゾ・フォートの男性モデルの募集は先月号で一応打ち切りといたします。○責絵画家画募集に際し多数の方々から作品の御送付を頂き、誌上を以て御礼申し上げます。今迄の所、採用に至る作品はありませんでしたが、自信のある方々の御応募を期待いたします。○懸賞入選作品の中未掲載の分は目下書直し或は訂正依頼中です。

切^{セツ}腹^{ブク}曼^{マン}陀^ダ羅^ラ図^ズ絵^エ

法 谷 四 郎

第一章

何処かで犬の遠吠えが物悲しく聞えて来た。少女はベッドの上に坐った儘、膝を抱いて暫らく忍び泣きをして居た。

ほつれ毛が二、三本白い顔に涙と共に纏わりついて居たが、やがて苦しそうに溜息をつくと寝巻の両肩をぬいて双肌脱ぎになった。白い百合の蓐^{うな}を思わせる下腹に左の手を当てると、裾の乱れを直す様にもう一度坐り直した。

未だ年は二十も出ては居まい。すき透おる様な腰のあたりがぐーっとくびれて、やゝ円味を帯びた白い顔に大きな黒い眼が美しく戦^{おの}のいて居る。黒いたわわな髪に鈴のついた髪飾りが一つ、ぎゅうっと赤い唇が傷ましい迄に結ばれて居る。何時の間にかキラキラする短刀を右手に持った少女はもう一度ホツと苦しうに息をついた。

又犬が鳴いた。今度はやゝ近くなつて来た様だ、人でも通つて居るのか。少女は其の声にハツと目を覚めた様に左の手で青い刃を挟

むと、短刀の切先を左の下腹に当てゝ右の手を柄に持ちそえた。

息を深くした。下腹が大きく波の様に喘ぐ。と、いきなり

「ウツ、おお、おぼっちゃま」

と一声呻吟くと力の限り突立て前にうつ伏になった。青白い刃に押されてはちきれそうな下腹は、一瞬ぐーっと深く凹んだが、次の瞬間刃はズブツと腹中に入つて

「むうっ」

腹の底から絞り出す様な少女の声に、赤い血がベツトリと伝い始めた。

「ウーム、おぼっちゃま、許して」

切なげに少女は呻くとうつ伏せになった顔をあげた。あどけなしい顔。髪^{カミ}の簪の鈴が二、三度チリ／＼と鳴った。苦しみと闘う脂汗が額ににじんで、刀を握った手がガク／＼と震えて居る。

少女は目の前の燈火をみつめて居た。苦痛から脱れでもするかの様に喘えぎ乍らじっと見つめて居た。黄色い輪をつけて燈火は燃え

て居る。指に血がべツトリと伝ってぬら／＼して来た。そして指が固くなって来た。

「おぼっちゃま、許してね」

黄色く燃える光の輪に向って、少女は口に出して云おうとしたが喘えぐ様に簪の鈴が小さく音を立てたのみであった。少女はもう一度短刀を握り直すとぐっと唇を結んだ。

短刀の切先を左の下臍部に當て、
右手を柄に持ちそえた。



★
★
ベッドの上で腹を切って居る少女の部屋の窓蔭に、今少女から「おぼっちゃま」と呼ばれた一人の少年がそっと此の有様を見つめて居た。少年は燃える様にほてった手を額に当て、腹を切って居る少女よりも苦しそうに喘えいで居る。背は高く鹿の様にしなやかな身体。造化の神が悪魔の願を容れて造ったかの様な切れ長の瞳は

さっきから苦痛と戦って切なく喘えいで居る少女の白い下腹を、そして一筋二筋紅い紐の様にどろりと流れ出した血を恍惚と見つめて居る。そして少女のしぼり出す様な呻き声の度にハツと手を握りしめた。

その日の夕方、少年の可愛いがって居た白鴉が死んだ。少女のやった餌が悪かったのだらう。白子の貴重な鳥だった。少年は白鴉の腹を裂いて少女に見せた。「お前の過失だ、鴉は毒をうけて死んだのだ。」

「おぼっちゃま、許して。」

少女は白鴉の腹に引かれた、一筋の黒い血の糸にじっと目を落した。少年の指は其の傷口に触れて黒赤く生臭い匂いをする。

「おぼっちゃま、許して。妙子はどの様なお仕置きでも受けます。」

「お前が此の鴉の様に腹を割いて死んだら許してやろう。自分で、妙子がお腹を切ったら許してやるよ……。」

「おぼっちゃま、……切ります、妙子はお腹を割いて死にます。そしたら許して下さるわね……。」

こう云って少女は放心した様に唇をかねて居た。

少年は無言の儘、その思いつめた顔を見て居た。本当に切るだろうか、切るかも知れぬ、少年は半ば疑いつゝ窓蔭に潜んで居たのだった。

が少女の覚悟は本当だった。白桃の様にピチツと張りきった下腹を無惨に破って切先は一寸近く喰い込んで居た。柔らかい肉を裂いた切口は朱を引いた様にグイと開こうとして居る。少年はゴクンと息を飲んだ。その目の中に唇をかねた少女が、血にまみれた短刀の柄をしっかりと握り直して、ギリ／＼と右へ廻わそうとするのが見えた。

少年は其の時、思わず部屋に飛込むと血まみれの手を押えた。粘っこい生温かい血が訴えでもする様に手に切なく拡って行く。

「妙子……」

「おぼっちゃま、嫌や、……イヤ……妙子は……妙子は……死ぬの」

途切れ途切れに答えた少女は、少年の手をはらって尚も刀を右へ廻わそうとしたが、少年の姿を見てもう力が尽きたのか血まみれの左手をがっくりとシーツの上につくと、火の様な息をはいた。

血の気の失せた臘の様な蒼白の顔には苦しみと戦う暗い陰がさして額には脂汗がにじみ出て居る。少年は静かに少女の身体を支えると一枝の芍薬の花でも横たえる様にベッドの上にそっと少女を寝かせた。

そして血に染んだ短刀を一気に引き抜いた。固い手応えだった。一ウームツ」

死んだ様に見えた少女は其の瞬間腹の底から呻めくとガバと起き上って少年の手をとった。

「おぼっちゃま……、妙子を許してね……」

「……」

合わさった二人の手は血を抱いて真赤なカンナの花が咲いた様。下腹の傷口はやゝ外にはじけて脂肪層が見え、其処から血の糸が脂にはじけ乍ら噴き出して居る。

少年は手際よく傷口の手当をするとそっと少女の額に接吻した。キラ／＼と額にふき出した苦しみの脂汗は螺鈿らでんの宝玉の様に、少年の接吻する唇にまとわりついた。

第二章

翌日少年は自分の部屋で机に向って茫然と考え込んで居た。目の前には昨夜、少女の肉を裂いた短刀がおかれてある。

部屋の広さは約三十畳はあるうか、薄暗い部屋の明りとしては北に面した円窓から洩れ入るわずかな光があるのみ。どっしりとした王朝時代の風俗を画いた緞張と、アラビヤ模様の絨氈を背景に、あたりは少年の奇癖に依って集められたもろもろの物が雑然と投げ出されて居る。暗闇に不気味に光る鎧具足、古刀、鯨鞘を脱した小刀、人が入れでもしそうな金蒔絵の壺、羚羊や水牛等有角獣の頭の剥製、人体解剖図、鎌倉時代の作と伝えられる木彫りの千手観音、百虫図譜、絵筆、鉄の鎖、それから無数の薬品、鬘等得体の知れぬ物が所狭しと投げ出されて居る。



だが少年がさっきから見るともなしに茫然と眺めて居るものは紫檀の机の上に半ば開られた書きかけの絵草紙の文章であるらしい。開かれた頁、鳥の子和紙の上に黒々と書かれた文章の第一頁には「切腹曼陀羅図絵」と書かれてあり、其の次の頁を拾い読みするとそれには割に達者な字でこう書かれてあるのが見えたであろう。

——昔、北の庄、唐獅子家の姫君、或る夜愛猫を殺せるかどを以て己が身を慕う美貌の小姓に罪をきせ、申訳けは之にてせよと一振の短刀を与え給う。姫を生命にかけて慕う小姓は寧ろ欣然と自室に退って自ら腹を割く。其の時姫はつと小姓の部屋に入り、血まみれの手をとって罪を許し下腹から噴き出る血に汚れるのもいとわず、苦痛に堪える小姓の身体を支え介抱し給う」云々——。

★

★

同じ頃少年の部屋からわずか離れた病室で少女はうっすらと目をあけて、障子に映った庭先の梅の木陰をみつめて居た。

固くガーゼで巻かれた切口の下に血がドクンドクンと波打って居るのが感じられ、息をすう度に灼熱した鉄の棒をさし込まれる様に苦しかった。

「私は死ぬかも知れない、此の傷口がくさったら死ぬだろう……」

と少女は他人事の様に考えて居た。

「でもおぼっちゃまは妙子の罪を許して下さった。おぼっちゃま、妙子は心からおぼっちゃまをお慕いして居るの分

って下さるわね。

おぼっちゃまは妙子のお腹を柔しくいたわって下さった、妙子のお腹を流れた血をいやがりもせず拭いて下さったのだ……。」

少女の臉の奥に昨夜の事が美しい絵草紙をくり拡げる様に思い出されるのだった、吾と吾が腹に刀を突立てた時のうずく様な苦しみと幸福感、下腹一面をべっとりと染めた血の糸、臓腑に触れた鋼鉄の固さ、雪の肌を染めた惨虐な血模様。

少女はそっとかけられた毛布をめぐった。腹に厚く巻かれた白ガ―ゼにベツトリと血が固まって、大きく息をすると刺す様な苦痛が傷口を走った。

「むうっ」

思わず手をやって呻いた途端傷口が又離れたかパーツと血が走って、春に先駆た赤い花が見る見る中に下腹一面に咲きほこった。

第三章

それから十日程経った生温かい宵の事である。未だ蒼い顔にそれでも愛する少年と共に居ると云う包み切れない喜びの色を浮かべた少女は少年に寄りそって、あの書きかけの絵草紙を読んで居た。

少年は少女に云う。

「苦しかったらうね、妙子、本当によくも思いきって突刺した。女の身で年もいかないのによくもあれ丈覚悟をした。お前が刀をお腹に突込んで苦しみをこらえる様にのけぞった時、お前の姿は本当にぞっとする程美しかった。

でも、あれからお前は切腹の型通り、右腹迄切り裂く事が出来たろうか。」

少女はキラキラと目を見開いた、顔がぼーっと色づいて

「手が……手がもう動かなかったの。でも今度おぼっちゃまが側に居て励まして下さったら、きっと妙子は切れるわ、おぼっちゃま、きくと見事に。」

「そうか妙子、もういゝよ、でもそれはそうと、妙子此処を読んで御覧、これは僕が書いて居る或る昔のお姫様の話なのだ。」

「おぼっちゃまがお書きになったの。」

「そうだ、ほら此処から読んで御覧、お姫様がこんな事を切腹した美しい小姓に云って居る……。」

少年はそう云ってあの絵草紙の続きを少女に見せるのである。

——「のう、其方はさぞかし苦しかったであろう。今は最早痛うはないか、苦しうは無いか。それにしても氣丈なそちの事ゆえ妾が止めなんだら突立てた刀を其儘に右腹迄一文字に引き廻わして仕舞った事であろう。あの儘ズブズブズブと柔らかい下腹を切り裂くのを止めなんだら、美しい其の方の腸が下腹一面に溢れ出るのを見たものを……。」

だがそれでは其方は死んで仕舞う、それが妾には堪えられなかったのじゃ……。」——

少年は少女の胸を柔しく抱いて囁く。

「ねえ妙子、好く似て居るだろう。」

「本当に私達の事を書いてある様な。」

「そうだろう、其の先を読んで御覧。今度はお姫様が美しい小姓と不思議な切腹をする件なのだよ。」

こう言つて少年は又分厚い頁をめぐって見せるのである。

——「それから暫く経った或る宵の事、お姫様は小姓をつれて父祖

代々の倉の中へ連れて行く。薄暗い倉の中には鎧だとか刀剣、葛籠衣裳、能面等が雑然と置かれてあるが姫は目もくれず手文庫の前に小姓を坐らせると雪洞に灯をつけて、其のぼーっとした黄色い光の中で沢山の絵草紙を出して小姓に見せるのである。首斬りの絵、磔頭巾姿の侍に斬られてのけぞる若い女中、火あぶり、串刺しになった女等気味の悪い残酷な絵草紙の中から姫は一枚の絵をとりあげて小姓の前に掲げて見せる。

「のう、其方はこれを何と見やる。さぞ苦しく、それ丈に耐え難う程に快よいものとは思わぬか」

方五寸程の絵は美しい若侍と女とが両端が刃になって居る不思議な短刀をお互の下腹の間に懸け橋の様に渡して、其儘ウムと抱き合った物凄い絵で短刀は二人の腹に喰い入る様に突刺さって、白く清やげな腹一面を染めてどろりとした鮮血が溢れんばかりに噴き出して居る。

「のう、妾は此の通りやって見たいのじゃ。其方の美しい下腹を妾の腹を割き乍ら共に切り裂いて見たいのじゃ。刃の一方の切先が其方のまろやかな柔肌を無残に切りさく。されど妾は女子の肌、もう一方の切先はそれよりも早く妾の下腹を断ち割って中なる腸が溢れ出よう。

のう、妾は此の絵の儘に愛しい其方と腹を裂き合って果てたいのじゃ。さ、人目にかゝらぬ中に一刻も早よう……」

こういうと姫は帯を解き柄櫓の肩を滑らすと、さっと潔く双肌を脱いだ。ハツと息を飲む若小姓の目に、来る可き苦痛と陶醉に悶えて突立った固い乳房が切なく目を射た。――

其処で文章は一旦切れて居る。少女はジツと身を固くして少年の

手をとると其の言葉を待った。

「ね、妙子、凄いだろ。両端の尖って居る刀で愛して居る二人が二人のお腹を互に切り合うのだ。手で刀を腹の中へ突込む代りに愛する人の腹がそれを押込むのだ。そして押込む其の人の腹にも両刃の刀は容赦無く喰い破って血を吸うのだ。

苦しいけれど其の苦しみの悦ばしさ。妙子、ね、お前にも分るだろう。お前の可愛いお腹、お前が自分の手で切りかけた白い下腹を今度は僕が切って上げる、それも僕のお腹で……此の刀をよく御覧今の話の通りだろう。これは今日の為にわざ／＼作らせた特別の短刀なのだ。さあベッドにお上り、そして此の物語りのお姫様の様にいさぎよく裸になるのだ。そうだ、妙子可愛いお腹を出して裸になるのだ。」

少年の言葉に少女はハツと顔を赤らめたが、そう言う少年の一種威厳の有る態度に打たれたかの様に、ベッドの上におずおずと上った。そして躊躇い乍ら一枚づつ衣を解いて行った。媚めかしい肉体の線をむっちり包むシュミーズ丈になると、少女は傷口を包んだ白い縋帯を少年の目に隠れてそっととった、何か恥ずかしいものでも取る様に……。

少年の手に依って少女は一匹の若いつやつやした動物の様に美しくベッドの上に横たわった。二つの乳房はむっちり突立ち、左の横腹に紅い血を湛えたふくらした横腹は惜し気もなくむき出された。少女の臍の下約一寸の所に冷めたい短刀の切先を当てると、少年は一方の切先を吾と吾が下腹にあてがった。

「妙子、我慢するのだ。そして力一杯僕のお腹へ刀を突込んで掻廻わしておくれ。僕の腸を引きずり出してもいいんだから。」

「おぼっちゃま、妙子のもそうしてね。」

こう少女の答えるより早く、二人は横になった儘お互のくびれた腰のあたりを両手で抱いた。短刀をピタリと当て、大きく胸が喘えぐとぐと力を込めて抱き合った。

「ウウツ」

「おぼっちゃま」

「むうーっ」

途切れ途切れに呻めき乍ら波打つ身体を寄せてしがみついて来る少女を少年はびったり胸に抱いて、火の様な激痛を下腹に感じて居た。

絶え難い苦痛に二人が力を入れてもがく度にズブズブと肉を裂いて冷めたい刃が下腹に喰込んで行く。

「ウーム」

少年の噛み緊めた口許から洩れる苦痛の呻めき。少女の髪に飾られた鈴が二度三度少年の胸の中で悲しく鳴ると、どちらの血か下腹をぬる／＼と染めた鮮血が、ベッドの上に真赤なしみを作って行った。

焼きつく様な苦痛と歓喜の交錯した不思議な陶酔に身をひたして二人は幾分かじっと動かなかった。二人の波の様に喘えぐ下腹に血の橋をかけた様に短刀は深々と突刺さって居る。血が脂ではじけ乍ら二人の下腹をどろどろに色どり、鋼鉄の刃は腹の中で固く感じられ、二人のどちらかの切口が苦痛に痙攣するのにつれて、ビク／＼と生あるものの様に動いて又血を吐き出した。

漸て少年は静かに両手をほどくと少女の身体を離し、そっと少女の下腹から刀を引き抜いた。少女は其の瞬間ビクツと動いたが其儘

少年の胸に顔を埋めると死んだ様に横たわり、唯一寸余り喰い入って居た刃の後を慕う様に鮮血がドクドクとほとぼしり出た。

少年は血止めの白い布を少女の腹に当て、心配そうにその顔を起した。蒼い顔、高くとおった鼻筋の下でぎゅっと噛む様に唇が結ばれて目は閉じた儘苦しみと法悦とが混り合った美しい顔である。

少年はうたれでもしたかの様に、ぼんやりと其の顔をみつめて居る。何か遠い此の世ならぬものへ郷愁を感じたかの様に……。そして其の時少年の鼻に少女の髪からでも匂って来るのであろうか、香ぐわしい麝香の馨がひた／＼と迫って来るのであった。

少女は不図黒い目を見開き顔をあげると、

「おぼっちゃま……。」

と弱々しく囁いて、抜けもせず少年の腹に突刺さって居る短刀を引抜くと

「妙子は苦しい……もう苦しいの……此処を……此処を……。」

と喘えぐ様に言い終ると血に塗れた切先を苦痛の陶酔に紅潮してもたえる左の乳房の下にあてがって目を閉じた。

だが少年は柔しく短刀をもぎとると、こんこんと自分の下腹から流れ出る血潮をも顧みず少女の乳房をヒシとかき抱いた。掌の中に固い果実の様に感じられる少女の豊かな乳房を握り締め乍ら、少年は香ぐわしい髪の中に顔を深く深く埋めて行った。

第四章

少年も少女も相当な重傷だった。然し二人は其の苦しみを自分達の愛の歓びとして、あの口にも云い難い絶妙の歓喜の代償として耐え忍んで居た。

それから数日後、少女は手折られた一本の植物の髓の様に清らかな身体をベッドの上に横たえて居た。身体にかけられた純白の薄い毛布は、恥じる色も無く少女の肉体に纏りついて隆起した胸許からくびれた腰、やゝもり上った下腹と豊かな曲線をふっくらと画き出し、やゝ苦しそうな呼吸につれて息づまる様な美しさを周囲にふりまいて居た。そして黒く大きな目はつやゝかに光り、何か又あの悦虐の喜びを求めて居るかの様だった。

「おぼっちゃま……」

少女はそっと呟やいた。

「おぼっちゃまは私を愛して下さる、……死ぬ迄……。私はきっとおぼっちゃまと一緒に死んで行く事だろう。赫い焰がめら／＼と燃えて居るあの世へ、私はおぼっちゃまと一緒に旅立って行くのだ。」

私が死ぬ時、私はおぼっちゃまをこんなに愛して居る私の心をお腹を切ってみんな見て頂こう。私のお腹の中にのたうち廻って居る腸を全部おぼっちゃまの前にくり出して見て頂くのだ。血に染った腸を私のお腹からつかみ出して見て頂くのだ。きっとおぼっちゃまは私の心を見て、そして死ぬ迄私の事を愛して下さるだろう。私はきっと見事に切り割いて見せる。……」

少女はこう云ってじっと目をつぶった。眼蓋の裏に少年の柔しい顔が浮かんで来る。

★

★

一方少年は、又傷の痛みをこらえ乍らあの物語りを書き続けて行った。書いては消し、書いては消し乍ら美しく惨酷な絵草紙は少しづつ先へ進んで行く。それは二人の血を、生命を吸い取って書かれて行くのであった。

「此の物語りが出来あがった時、……」

少年はそっと呟やくのだった。

「妙子どうかお前の生命を私におくれ。お前は私を愛して呉れる。」

此の絵草紙「切腹曼陀羅図絵」の美しい男の小姓はお前で、女の姫君は私なのだ。

妙子、お前はきっと喜んで死んで行く事だろう。私達は丁度此の物語りの中の二人であるのだから……。妙子、本当なのだ、お前も私も時代を誤って生れて来て仕舞ったのは。

私は昔の大名達の生活が羨しくて仕様が無いのだ。あの惨酷な首斬り、火攻め、腹裂き、戦に破れ火に包まれ乍ら崩れて行く落城の美しさ、其の断末魔の火焰の中で黒髪を乱し白装束を朱に染めて自害するいたいけない女達、腹十文字に掻切って果てる若い城主と側近、或は又言葉一つで一片の義理で腹を切る侍達、私は之等の血生臭い陶酔の夢から脱れる事が出来ないのだ。

そしてお前も又不思議に其の通りの女なのだ。だから妙子、私達は此の物語りの儘に死んで行く事だろう。

物語りが私達なのだ、私達の死方が、又物語りの最後の一章なのだ……。

妙子、その日も、もう間近なのだよ……。」

第五章

こうして幾日幾週間の時が流れ、二人の生命をかけた少年の物語は次第に完成に近づいて行った。

吾と吾が腹をかき切る苦痛と其の悦虐の陶酔を画いた文章の間に、又詳細を極めた切腹の姿態が目を覆わせる程の惨酷さの中に悲

壮な美しさを湛えて幾枚も幾枚も画かれて行った。



短刀を前に置いた白装束の若侍、その悲壮な横顔、下腹に突立てた瞬間の苦悶の表情、臍の下約一寸をかき切って行く若い女の切腹図絵、右腹迄切り終えてがっくりと血まれみの手をついた苦痛の陶酔、腸が傷口に溢れんばかり、十文字腹、つかみ出す腸等々、あらゆる切腹の絵図が画かれて居た。

此の絵とそして緻密を極めた文章、これは恐らく貴重な切腹の一大資料となる事であろう。そして其の第一頁には黒々と筆太の字で

「切腹曼陀羅図絵」と書かれてあり、頁数凡そ百枚程の鳥の子和紙をとじたものであった。

こうした幾日かの後、少年は少女を呼んで物語りの完成が今宵に迫った事を告げた。それは同時に二人の生命の終焉をも意味して居る。だがそれが何であろう、愛する者同士腹を裂き合って共に死に行く歓びに比べれば生命を断つ事がそも何であろう。少年も少女も此の日の為に生れて来たとも言える。

こうして二人は遂に今、最期の時を喜びと苦痛への期待と陶酔の中に、死への悦唐の門を開く可き場所に坐ったのである。

「ね、おぼっちゃま、妙子に早く読んで聞かせて。それはきくと妙子の様に書いてあるのね。」

少女はこう云うと部屋の中央やゝ小高く白布をもって覆われた畳の上に何か花片の散る様に坐った。あどけなく少年に囁やく顔は覚悟の薄化粧か、ほんのりと紅色がさして匂うばかりに美しい。身に纏う薄衣は今宵を期して作った白絹の小袖であるうか、腰もとをぎゅっとくびれる程細く結んだ赤い扱帯がくつきりと目を射、黒々と肩にすべらす黒髪の根元にはあの鈴のつ

いた簪がさゝれて、其の金色が傷ましい迄に光って居る。

「永い間かゝった此の絵草紙も今宵は遂に出来上る事だろう、妙子はさぞ待ちくたびたろう。では読んで見ようね、よくお聴き。でも、最後の件りは僕達が二人でこれから書かねばならないのだ。二人の血で、流れ出す生温かい血で書かねばならないのだ。」

少年はこう云うと少女の傍にピタリと坐った。水色の死装束、黒い切れ長の瞳が怪しく少女の顔に注がれると、漸て「切腹曼陀羅図」と書かれた表紙を静かにめくった。

周囲は物音一つしない静けさである。唯少年の低い声と頁をめくる音のみが怪鳥の様に飛び交うのみである。

だが其の物語りの全般は今此処で詳細に述べる暇は無い、唯大要丈を記して行こう。

——「昔、北の庄、唐獅子家の姫君、或る夜愛猫を殺せるかどを以って己が身を慕う美貌の小姓に罪をきせ……。」と書き出された前半は或る姫君が、小姓に腹を切らせ乍ら、それを止める哀艶の一章に始り、漸ては両刃の短刀を愛する小姓の下腹と己が下腹との間にあてがい抱き合ってお互の腹を切り割くと云う件りに進む、しかしこうした悦楽の戯れは遂に主君の耳に入り、小姓は打首、姫は謹慎をおこせつかるが氣丈な姫君は「二人して腹を切って果てたい。」と恐れ氣も無く言上する。

折も折、此の国に外国からの使節が到来し、

「此の国の侍が腹を切って死ぬとは本当か、嘘であろう。」

と嘲けるので主君は吾が国人の名誉の為に、今は姫の願を容れて切腹させ、それを一場の酒の肴として使節に見せてやろうと約束する。

漸て当日酒宴の興漸く酣なる頃白装束の兩人は静かに設けの座に着き悽慘な割腹絵巻をくり拡げようとするのである。

「嗚呼、太平の世に稀有の腹切りを見んものと主君、奥方、使節、侍、腰元等、手を握り膝を押し進め綺羅星の如く立ち並び固唾を飲んで見守る最中、大広間には何時しか雪洞がともされて周囲は昼を欺むくばかり。

白装束に身を固め前なる三方に乗せられたる腹切刀を黙然と見守る兩人の姿は、一對の芍薬の花よりも愛とし氣に、哀れ骨肉の情に堪えかねてか主君、奥方は思わずほっと袖をば濡らし、又美貌の小姓と姫とに愛恋の情を寄する者は思わず溜息をつくばかり。

然し乍ら覚悟の兩人、今はいさゝかも動ずる色も無く漸て時移つてはと短刀を右手にヒタと持つ。小姓は顔をあげ、

「恐れ乍ら本日は夷人の前にて吾が国人の死様御覧に入れようとの御意、介錯人は御免こうむり、思うが儘にかき切って、真の武士の腸を酒の肴に御覧にいれよう。唯姫には女子の事故介錯人をお頼み申す」

と云えば姫も又首を振って、

「妾も介錯人は要らぬ。女子なれども武士の娘、きつと切って見せまする。」

との覚悟の声に満場居並ぶ人々も、さこそとばかりに汗を握り、じり／＼と膝を押立て、雪洞の灯りも声無き声にどっと揺ぐばかりなり……。」——

少年は此処迄読むと一旦言葉を切って少女の顔を見つめた。

「妙子……。」

「おぼっちゃやま、読んで。その先はどうなるの。」

「その先は……」

こう云い乍ら少年はつと立って火をともすと何時の間に備えつけたか大きな雪洞に火を入れた。

ボーツと赤黄色い輪をかい、周囲を照らす其の光に不図見渡すと、嗚呼これは何とした事であろうか、二人を取巻く唐獅子を描いた不気味な金屏風、龍虎相斗う唐紙模様、蛇の交尾する姿をあしらった七宝壺、赤毛氈の敷廻らした上に鎧具足、仏像等がキラリキラリと雪洞の光に不気味に輝き、恰も此の絵草紙の中で居並ぶ腰元、侍共を後にして紅毛碧玉の夷人が坐っても居るかの様。しかも己が坐して居る場所とは見れば白い布張り廻した腹切り場所。

「さて……」

と少年は雪洞の光をかき立て、読み続ける。

漸て白装束の衣を惜し気も無く打ち払い、臍の下あたり迄双肌脱いだ兩人の姿の美しさ、とりわけうら若き姫君の天女の如き柔肌は漂々と霞む雲の如く柔らかに、むつちりとした下腹は吐く息吸う息毎に艶めかしく波打って、固く突立つ乳房は苦痛を前にかすかに打震うとも思わるゝ。

愛する者と共に腹切る喜び、愛する人の前に雪白の己が腹を裂いて見せる欲び、しかも衆人環視の最中腸くり出して吾が国人の意気はこうよと見せる悲壮な幸福感にうたれて姫も小姓も目もくらむばかり、此の歓喜の前に腹断ち切る苦痛もゝのかわ、あわれ見事に此の柔肌をかき破ってよと九寸五分を握りしむ……」——

少年は此処迄読むと絵草紙の中の二人に習う様に少女の衣を静かにとった。読み続ける物語りの姫君其の儘の少女の美しい身体が、白い花の様に雪洞の光の中に浮かんで居る。少年はゴクンと深い息

を飲んだ、そして自分も双肌脱ぎになると少女の手に短刀を握らせて再び読み続けた。

——漸て時移ってはと兩人は白布巻きつけた九寸五分を逆手にとつて、降り積る雪よりも未だ清やげな左下腹にヒタと当つ。

居並ぶ面々思わず手に汗握り、ハツと息を止める間、唇を切れるばかり噛みしめた姫の手は、こうよとばかり力を籠めて下腹深く突立てる——。

少年は此処で言葉を止めると深く息を吸った。そして黙然と闇の中に溶け込む様に押し黙った、キラキラと輝やいて居た目の光が急に光を失うと白い横顔迄何やら幻影の月の陰かの様に薄く淡くあたりに溶け込んで行つて仕舞う。

ハツと息を飲んだ少女の目に雪洞の光が急に揺ぐと、暗い陰の奥底にぼーつとあの闇に包まれた鎧具足、仏像等のあたりであろうかキラ／＼とした螢火が舞って居るのがみとめられた、そして耳をすますと、あーそれは気の迷いでもあらうか、サラ／＼としみ入る様に衣ずれの音、腹を切る深い姫の呻めき声が聞え、絵草紙の中に居並ぶ人々の溜息さえも聞えて来るかの様。

白い衣を押下げて、腹切刀を握りしめふくよかな下腹をギリギリと右へかき切って行く姫の姿が、身を固くした少女の目にはっきりと見えたと思うと次の瞬間、其の姿はかき消す様に消えて、雪洞の光がもう一度強くゆらいだ時少女は今幻に見た絵草紙の中の姫君の坐って居た場所に、蒼白い腹切刀を左の下腹にあてがった死衣束の少年の姿を現実にとめた。

「あゝ、おぼっちやまは其処に。」

云いかける少女の言葉を払って少年は、今は夢のものとも現実の

ものともつかない何やらしやがれた声で、

「よく御覧、其の姫君は、妙子、こうして切ったのだ。」

と云うといきなり両手を柄にかけてズブツとばかり深々と突立て、仕舞った。

一瞬身体がぐっと前屈みになるとグサグサとぶう不気味な肉の切れる音が二度程少女の耳に切なく聴えた、そして腸からしぼり出す様な深いしみ入る様な呻き声が、今ははっきりと少女の耳をうった「ムムツ、た、妙子、そして……そして小姓も……」

呻き乍ら途切れ途切れ物語りの先を読もうとする少年の下腹は苦しみに大きく喘えいで其の度に血がドクドクと溢れて来る、押泳えてキリ／＼と右へ二寸余りかき切ると刀を止めてもう一度大きく息をした。血の気の失せた額に汗がにじみ、血が下腹から膝へと音を立て、流れ始めた、水色の死裳束の腰のあたりも、柄をにぎる指も真赤に染めて生温かい血は少女の身体にも飛び散って、息ふかじと噛みしめた唇からもスーツと細い血の糸が一本伝って来た。

「むうっ、妙子。見、見ているか、これが……、こ、これが。」

一言ずつ血を吐く様に云う少年を柔しく抱いて、

「おぼっちゃま、妙子も、妙子も今切ります、見て居てね。」

と少女は心の中で答へ乍ら少年の身体をもう一度ひと抱いた。生命よりも愛した少年は、今自ら腹を切り割いて死んで行こうとして居る。走馬燈の様に廻る懐かしい想出、だが今はこれ迄と少女はもう一度強く腰のあたりを締め直し、脱いだ衣を膝の下におり敷いた。「見苦しくない様に。」心に云いきかせて短刀を下腹にあてがった、深く息を吸った。下腹がぐーっとふくらんだ時、息を止めるのと力一杯柄を押した。

「ウツ。」

激痛を下腹に感じて思わず洩れる呻き声を噛みしめ、喘えぐ様に三息程、息をすると其儘ヒタと息をのんだ、そして両手で柄を砕ける程握り締めるとグイと刀を立て直しえぐる様に右の脇腹迄ズブズブと真一文字にかき切って仕舞った。

ふつくらとした下腹を朱の糸を引いた様に無惨に裂いた切口は、刀が右迄引き廻わされると上下にバツクリと口をあけ、噴き出す鮮血諸共に血に染んだ灰色の腸が見え隠れして居る、そして苦しみに悶えた切口が二度三度大きく揺れると、はじめの方からに／＼と押し出されて来た。胸が、腹が大きく喘えいでハツハツと吐く息ばかりが物凄しい。

少女は短刀を持った右の手をがっくりと前につくと泳えかねた様に其の時、腹の底から大きく呻いた。そしていきなり右の手を手首迄も腹の中に突込むと、

「お、おぼっちゃま、みて……、みて……、こゝこれが、た、妙子の……」

と云い乍ら血まみれの腸を、膝の上にズルズルと引きずり出して仕舞った。

引き出された腸は少女の真赤になった細い指に絡みつきた乍ら入道雲の様にのたうち廻り、少女の下腹が苦しみに喘えぐ毎にうね／＼と蠕動する、血は下腹一面を脂にはじかれ乍ら真赤に染めて無數の血糸の様に流れ膝も衣も真赤に彩どって居る。やゝのけぞる様に身体をそらし歯を噛み締めて苦痛と戦う少女の顔には、返り血と脂汗とが妖しく交わって、

「むうっ。」

腸を断つ苦しみを押泳えた蒼白の表情に、微かに腹を見事にかき切った歓びが浮かんで居る。

少年は今にも崩れ落ちそうな少女の身体をそっと支え、膝の上に引きずり出された少女の腸を手に持った。たった今迄あの清らかな白い下腹の中に隠くされて居た少女の秘密箱、それを惜し気もなく自ら切り割って少年の前にグサ／＼とさらけ出したのだ、生温かい血に染まり乍ら少年の手の中でもだえる腸をまさぐって少年は少女の身体をヒシと抱いた。

「どんなに痛かっただろう、かよい女の身で、だが妙子もうじきだ。もうじき終りになる、僕も今直ぐ切り終えてお前の後を追おうね。」

少年が心にこう呟いた時、少女はもう血の気の失せた顔をあげた簪の金の鈴が残り少し生命を刻む様に悲し気にチリチリと鳴った、もう定まらぬ眼をじっと愛する少年の顔に注いでかすれた声で

「おぼっちゃま。た、妙子は此の儘待って、待って居るの、死なずに。おぼっちゃまが切る迄死なずに待って居るの……。おぼっちゃまが切ったら、そしたら一緒に連れて行ってね。妙子は何処迄も何時迄もついて行くの。おぼっちゃまを愛して居るの、信じて、信じて



其の姫君は妙子、
こうして切ったのを
と云うといふ言ひ
両手を柄に
かけてスブツと
ばかり……

居てね……。」

少女はこれ丈を小さな声で途切れ途切れに云うと、少年の胸の中へ落ち込む様に倒れ、血にまみれた指で少年の身体をしっかりと抱こうとするのだった。

「妙子……。」

少年は柔しく少女の身体を抱くと、右の手にたった今少女が投げ捨てた短刀を持ち傷口に探り入れるとジリ／＼と臍の下一寸の所を

一文字にかき切って行つた、ぬる／＼と手が滑り指が固く固くなつて来た。

「うっ、むうっ。」

堪え難い苦痛をぐっ／＼と呟いて深々と押込み押し込みして右の脇腹迄、左の下腹から真一文字に六寸余り切目長く無残に切り裂かれた柔肌はバツクリと真赤な口を開けて、血まみれの脂肪がぐっ／＼と押出されそれにつれてムクムクと腸もうねり乍ら溢れて来た、これが最期だ、だが何と云う悦唐の歎びであろう、自ら思う儘にかき破った豊満な下腹に今鮮血が美しく流れて、引きずり出した内臓は美しく蠢めいて居る、少年は恍惚として一瞬吾が下腹の上にくりひろげられた此の曼陀羅図絵を喜びに満ちて見守るのだった、そしてあの書きかけの絵草紙を取ろうとして不図思い止まった様に止めて仕舞った、紙の上には書けない、唯肉を裂き血と腸をじかに叩きつける事によつてのみ始めて此の曼陀羅図絵の真の姿を見得る様に思ったのである、そして今はそれよりも少年は胸の中で次第に冷めたくなつて行く妙子をじっとかき抱いた。

「妙子、分るかい、僕だよ、僕ももう切り終えたのだ。手、手をお出し、これが、これが僕のなんだ。」

少年はこう心の中で呟やき乍ら、少女の手を自分の手に持ちそえて吾と吾が腹の中にユツクリとさし入れた、意識がかすんで来た。少女は其の時苦しみの中に最後の微笑みを浮かべると少年の腹の中で血まみれの腸をしっかりと握りそれを自分の腹の中へ押し込もうとした、そして心から嬉しように少年の顔を見つめて、

「おぼっちゃま……」

と云った様だったが、それは少年の耳に聞えたかどうか……。

やがて暗闇を照らす雪洞の光の輪は、その中に鮮血にまみれてすっかりと抱き合つて死んで居る少年と少女の姿を静かに照らして居た、双肌脱ぎの下腹をキリ／＼と真一文字にかき切った二人の傷口からは不気味な美しさに満ちた腸がうね／＼とからみ合い、今も尚下腹を伝つてボト／＼とした／＼と落ちる鮮血は、其の傍に置かれた「切腹曼陀羅図絵」の最後の頁を、一字ずつ一行ずつ書進めて行く様に赤黒くしと／＼と彩どつて行つた。

〔読者通信〕

最近の貴誌に於ける猿轡と縛りについて述べると、六月号の「欧米の縛りと猿轡」が第一にあげられます。この写真の良さは上品さがあることです。それに猿轡の掛け方はまったくすばらしいと思います。第二は伊吹真佐子さんによる「ストッキング」です。この表情、腕に喰い込む縄目、特に頬に喰い込む猿轡にはギクツとさせられ、最近の貴誌写真では一番良く実感が出ています。私は日本女性の全裸は好みません。むしろブラジリアンボディ姿のポーズの方を好みます。この事は日本人の肉体線の悪さ、貧弱さに関連しています。伊吹さんの今後の活躍を期待しております。私は二年前より愛する恋人に私の好きな

猿轡、マスクをはめて自分の性癖を満たしております。彼女も今ではすっかりマスク、猿轡の類になじんでしまつて、色々と注文をつけたりして私を楽しませてくれていきます。マスク、猿轡を掛ける時は必ず彼女を縛ります。七月号の狩井さんのマスクの上からの接吻は誠に良ろしきものでした。恋人をお持ちの方は是非一度お試し下さい。次は私の好きなポーズを経験上からみると、縛られた女性に男性が猿轡を掛け手拭で口を縛っている所です。構成は簡単ですがマゾヒスト、サジスト両者とも満足するポーズだと思います。機会があれば、私達の「轡プレイ」と「マスクプレイ」の体験を発表してみたいと思つています。

(佐田雪夫)

臍窩への省察 (三)

(私の女体偏執記録)

須 藤 律 夫



(発展途上にある池袋駅前東口全景)

昭和二十四年——。初夏の頃であった。社の卓球部のメンバーであった私は、その日行われた某銀行日本橋支店との試合に出場し、団体としては予想通り勝てた様なものの、個人戦としては一敗地に塗れて、散々に苦杯

を喫したのであった。そして其の夜招待宴が終ってからメンバーの一人と銀座裏を飲み歩き、池袋の駅に辿り着いた時には、既に終電車も出た後だった。半ば消燈された駅にたゞずんで暫く考えてはいたものの、未だ交通機

関としてのタクシーが今程復活されず、あるのは唯輪タクばかりだった。

「終電に乗り遅れたんだが、何処か泊る所へ——」

たじろ

駅前に屯していた輪タクの一人を捕える

と、私は無難作に車上の人となった。輪タクの不規則な動揺も然し酔いしれた体には快く、車は寝静まった舗道を走り、線路を越え薄暗い路地を走り等して何分かの後、と或る街角を入って私は降された。見ると旅館とばかり思っていたのに、其処は薄暗い路地裏で二階建三軒続きの仕舞屋である。

「旅館は何処？」

「へ、え、旦那、お泊りんなるんでしょ、今直ぐ参りやすから……」

何を感じていたものか、輪タク屋は私を所謂素人屋へ案内したものと見える。時計を見るともう午前一時を過ぎていた。まゝよ！然し別の好奇心も多分に湧いて来るのだった。

「いらっしやいませ」

予期に反した淑やかな言葉と共に硝子戸が静かに開けられると、二十歳前後の洋装の女が立っている。第一印象はすんなりと伸びたその白魚の様な指先、爪はきれいに剪られて、薄桃色のマニキュアが何故か夜眼にも判然

と見えるのだった。

「お靴は妾がお持ちしますわ」

胸を衝く様な急な階段を昇り詰めるときちんと整頓された六畳の部屋、片隅にミシンが一台、床の間の違い棚には数々の洋酒の罎が沢山、立ち並びその下に、主持ち顔のギターが一台淋しく置かれていた。(翌朝判った事だったが、其処は東京のカスバとさえ言われた池袋駅西口の一角であった)表替えしたばかりらしい青畳の上に体を投げ出すと、私は改めて彼女の容姿を見直すのだった。薄緑のスカートに灰色のスエーターは一寸地味で余りパツとした感じではなかったけれど、スエーターの下胸の隆起も充分だし、肩の辺りの肉付きも豊富だった。

「直ぐお寝みになるでしょ?」

一〇〇Wの電灯が消されると入れ違いに枕許のスタンドが点される。スカートを無難作に衣桁に引っかけると彼女はパジャマに着替えるべく、スエーターを脱ぎ、シュミーズを脱ぎ始めるのだった。何故か何の恥らいも臆する所もなく、パンティ一つになって婉然と微笑んだ時等私は寧ろ奇異な感じに打たれるのだった。凡そ成熟した乙女の肢体は殆んど全身的に魅力に富んでいるものだが、わけて

も双つの丘に咲いた乳房程蠱惑的なものはない。

世界で一番大きい乳房はポルトガルの女だと言われているが、彼女のもそれに劣らず大理石像に良く見かける様な美しい半球型の乳房、豊かに発達したそれは性情の円満さを物語っているのだろうか。然し私の想像に反して彼女のお臍は一抹の暗い翳しを投げるのだった。それは腹壁も適度に引き緊り、豊かな弾力性もあり乍ら、何故か小さな而も位置も低い平坦なお臍、そしてそれは腹部の唯一の美を害うばかりでなく私には何の性的な感興も湧かないのだった。

(こんな所が確かに常人と変っているのかも知れない。今迄にもそんな時、唯空しく時の流れを待ち夜明けと共に退散した事が幾度あったであろう?小人閑居して不善をなす——とか、その夜は小生感興なくして善をなした。)然し、果して善と言えるか何うか、兎に角、何等為す所もなく唯彼女の言う儘に三枚の紙幣は空しく私の手を離れた。

「洋裁学校の月謝など払うのに何うしてもそれ丈要るんです」

聞けば彼女は洋裁学校に行き乍ら洋裁の内職で母と弟を養っている由、そしてあと何ヶ

月か月三千円位あれば学校を卒業出来る、そして将来はさゝやかな洋裁店の開業が唯一の希望との事だった。憶えば敗戦後の厳しい社会機構の下にあって、然しあと何ヶ月かの間、彼女は何等の愛情も感じない男性の爲めに不倫の女体を投げ出そうとしている。

「先刻の輪タクの小父さんに頼んで置くんですけど……でも仲々お客さん来る事少いわ」

彼女は問わず語りに、そんな事も言ったりした。聞けば七歳の時、父を失ってから彼女が文字通り茨の道を辿っている。私はふと易学の中臍相学の事など想い出した。何故なら彼女の様にお臍が浅くて小さな者は一生辛酸が絶えないと言う、果して何の程度の信憑性のあるものであろうか?

茲で私は長い間様々の文献により識り得た事、或は見聞した事等を整理し所謂臍相学の一部を取り纏めて見度いと思う。(之は研究と言うより私の性来の偏執が譲し出したものかも知れない)臍相学も源は中国から渡来したものかも知れないが、雑事必辛〃〃臍相八碩〃等不幸にして私は未だ見ていない。然し宋の陳希夷なるものは稍人口に膾炙されているのではなからうか、その一節に曰く——臍を筋脈の舎となし、六腑総領の関と

なす、深くして闊きものは智にして福あり、浅くして狭きは愚にして薄し、上に向うは福にして智あり、下に向うは貧にして愚、低きは思慮遠く、高きは識量なし、大にしてよく杏を容るゝは名人耳に広まる、或は凸にして出で、浅くして小なるものは善の相に非ざるなり——と。その外、次に記すものは何れの文献によって見ても、大体一致して居り所謂臍相学の一部である。

◎臍の穴が大きく深さも充分あるもの

富貴の相であり、三十二相の一相である。又一国の宰相となる可き氣運を荷う。殊に深さ一寸に及ぶ時は、婦人なれば十子を得ると言う。又性器の円満なる発達を示現するが緊張度の無い時は淫乱に流れる。性器魅力が大きく子孫繁栄の相。

◎臍が腹壁の上部に位するもの

才智あり、然し性器の発達は鈍い。

◎臍が腹壁の下部に位するもの

本能的であり、智謀に乏しい。但し性器よく発達し、健康の相である。

◎臍の穴が仰向いているもの

性質が明朗であり、発達の相。

◎臍の穴が俯向いているもの

性質が暗愚であり、下賤の相である。又天

職の如何を問わず蓄財がなり難い

◎臍が小さくて穴が浅く殆んど平坦なもの

生活心労が絶えず、不幸の暗示であり、妊娠率も極めて低い、男なれば精力的な根氣に乏しく子孫に悩みあり。

◎臍が小さく、然し穴が深いもの

相当の福分はあり乍ら吝嗇であり、性器も不完全と言われている。以上の外、滑稽の代名詞に使われている所謂出臍へ（医学的に言う臍へルニアの場合が多いが）、之は審美的にも勿論戴けないし、生理的にも病弱の相で易学の立場からも浅愚であり、子の縁薄く夭折の相とされている。猶蛇足乍ら臍部の黒子に就いて言及すると、男女共



問題の東京の「カスバ」池袋駅西口飲み屋街の全景。左上方火の見櫓下辺りが中心地かも知れません。

臍窩の直ぐ両側に、又は上下にあれば良い子を得た暗示であり、殊に深い臍の窩の中心に黒子があればこれを龍関（又は含珠）と言って子供連の最も良い暗示とされている。又応症

（顔の黒子と身体内の黒子との対応的な存在）と言って鼻の下、即ち人中に黒子があればその人の臍窩の下にも黒子があると言われている。

扱、民間人の中、お臍の研究家として私の知っているのは彫刻家の朝倉文夫氏と福富織部氏（昭和四年八月刊行「臍」の著者）その他の二三に止まるが前記朝倉氏は十数年前、主婦の友「誌上に氏の「お臍の研究」を載せられたと記憶しているし、更に数年後れて東京某紙は

Das Grausame Weib

△ 残虐なる女性達 △

—1901年刊行の独文入単行本より—

森 本 愛 造・訳

訳者補充

セルヴィスムに就いて

(SUR "SERVISME")

「異性の酷使の許に棲息する」事の慾望は
M・ヒルシュフェルト博士の所謂METATRO-
PISMUS (メタトロピスム) の重要な一部門
とされて居る。単なる鞭打、踏み蹴りが性慾

充足の目的の為に、且つ、その為だけの方法を以って直接になされるのであるとすれば、恐らくマゾヒスト(女サディストも然り)はすぐに飽きてしまうと思う。そこにマゾヒスティックな性愛が他の性愛よりも明かに演劇的な要素を求める事が考えられる。セルヴィスムはその第一の段階と見做してよいであろう。

先ず、直接行為のみの性愛は強き「妻」と弱き「夫」の形へ移行する。此の状態は直ちに、主従関係へと転化するのである。主従関係も、当初の一部分の制約を持つ従属から、やがて、「絶対支配」の形である処の「奴隷」へと変ってゆく。私は此の様な移行をマゾヒスムの「昇華」と名づけている。即ち「昇華」(VERKLÄRUNG)はスタンダールの所謂結晶作用(CRISTALIZATION)の精神中での存在に匹敵するのである。勿論奴隷は「犬」「馬」へと変り、最も極端な場合は無生物、即ち「踏台」「石」等に化するのである。こういった「化身」の完成は尨大な精神上のエネルギーを必要とする。セルヴィスムへの移行を、若しマゾヒストであると自認する一人が感じるならばそれは通常性愛に満足せず、私の所謂「高貴な精神」性愛への精

神のの混合を求める徴候である。勿論サディスムやフェティスムにも同様の傾向はあるにしても、マゾヒスム——純粹の——に於けるセルヴィスムへの移行の如き程の明白さと順調さを持って居ない。訳者自身はむしろフェティスムの方が強いのであるが、マゾヒスムに於ける急速な精神的要素の混入については確認せざるを得ない。此の意味でも今迄訳し、且之から訳出をつづける「奴隷所有者としての女性」の項に現われる實在の女性について私は「セルヴィスト」達にとって、こよなき贈物である事を期待して居る。之等の女性が実在した事はひいては、現代も猶同質の婦女の存在を意味して居るからである(補充以上)

広く流布され、拡がって居る奴隷制度採用の国々の中で、多くの報告の中からまず、ベーメン(Böhmen)についての敘述を引用してみよう。スヴァチック(SVATEK)の報告によれば、(著者註=KULTURHISTORISCHE BILDER AUS BÖHMEN=ベメンに於ける文化史的解剖) WIEN 一八七九年版) 当時のこの国の状態を端的に証明する一つの引例を見出す事が出来る。カレニツク(KALENICO)生れのアンナ・ホツスラウエル(ANNA

HOSSLAUER) という一人の女性に対して成された裁判についての報告である。

「アンナは彼女の下僕マルクス・ムレーナ (MARCUS MRENA) の娘、エリザベト (ELIZABETH) を連日、暴君的な鞭打と、

赤く灼いた鉄の拷問によって死に至らしめた故に五万ベエメングロツシ (500 Schock Böhmisch Groschen) の罰金とブラーグ (PRAG) のフラアドシンに在る白人牢獄に六週間の禁錮を申渡されている。」

スヴァチェックは言を以て如何に多く償われる事無き残虐行為が当時、同地だけでなく一般に蔓延して居たかについて慨嘆して居る。

一世紀程前の事であるが、洪牙利の伯爵夫人エリザベト・バトリ (ELIZABETH BATHORY) は之まで知られて居た残忍な行為の中で、最も深刻且、空前の規模を持った残虐行為を行った事が知られて居る。

彼女の目下の者に対する不断の数え切れない程多くの加虐はサード侯爵 (Marquis de sade) の精神を以って、着実に行われたのであった。

併し、聞くだに恐ろしい虐待について詳述する事は遠慮しよう。其は現在流布されてい

る「血を好む伯爵夫人——その倫理と性格」一八九五年プレスラウ版 (Die Blutgräfin, ein sitten charakter bild, Bre-lau, 1895) によって充分に知る事が出来るからである。

世界中で最も徹底的な自由を好む民、ジプシー達 (ZIGENER) 洪牙利に於て地主や地主の妻達によって、如何に取扱われたかについて、私は幾つかの報告を提示しよう。之等の文献はその誠実さに於て充分信頼に足るものである。

南東ジープンビュルゲン (SIEBENBÜRGEN) の地主ラディスラウス・ツァクスヴァイ (LADISLAUS SZACSVAY) の一七六〇年の日記の中から左の部分を参照されたい

「今日、奴隷として使つて居た三人のジプシーが逃亡した。併し、領主の召使の一人であるファアラ・ヤーノス (FARA JANOS) がアンギアロツシエル・ハッテルト (ANG-YALOSCHER HATTERT) に於て捕えた。

三人の中の一人クツチュシイ・ペーター (CHUTSCHDY PETER) はこれで二回目脱走である。愛妻のすゝめ、私は彼の足跡を血が出るまで太い棒で打たせた。血が出て来たので、私はその足をもっと痛い目に遭わせる為に濃い塩水に浸けてやった」

其の後で、ファアラ・ヤーノスに対して妻の発案によって加えられた様々な刑について私は之以上引用する事を避けよう。其は明らかに現代人の細い神経に余りにも烈しい嫌悪を催させるからである。

(著者註、——以上の引用は次の著書を参照せられたる。

Doktor Heinrich von Wislocki: <Vom wandernden Zigeuner Volke Bilder aus dem Leben der Siebenbürger Zigeuner, > Hamburg 1890. 「ハインリッヒ・フォン・ウリスロツキ博士著「ジプシー風俗の遍歴——挿絵はジープンブルグのジプシーの生活から採集——一八九〇年ハムブルグ版」

最後にモルドウ (MOLDAU) に於ける奴隷制の状況を敘述の対象とした或る新聞の記事を引用しよう。

(著者註 Leipzig Allgemeine zeitung Nr. 7, Vom Jahre 1845, Zitiert in Dr. A. F. Pott, "Die Zigeuner in Europa und Asien, Halle 1845 II Teil. Page 522—523. ライプツヒ新報一八四五年第七号より、A. F. ポット博士「歐洲及亞細亞に於けるジプシー」一八四五年版ハルレ版第二部五二二—五二三頁まで、より転載せるもの。)

訳者註—モルダウについて

ロシア民族がヴォルガ河に対して、母なるヴォルガとして愛すると同様、モルダウはチエコスロヴァキア地方を豊沃な土地であらしめた母体である。その流域は美しい風光に富み、常に小麦の豊かな稔りを約束する。古来モルダウに題した芸術作品は枚挙に遑がない。その中で、チエコスロヴァキアの生んだ大作曲家スメタナ (SMEETANA) の交響詩「モルダウ」は連作「我が祖国」の一部で、最も有名である。奥大利洪牙利という連帯王国の中で、モルダウとドーナウ (DONAU—DANUBE) とは共に自然の豊饒の象徴である。猶、前記スメタナの作はニュース映画等でよく映画伴奏として用いられる。

このモルダウを前提として考えるとき、そ



の流域の残虐な行為は誠に想像するだに印象的である。そして洪牙利の女性の風俗も。

対位法が完璧に作成されたとき、私達はこの幻想に極めて酷似した第六感的な感動を得る事がある。

モルダウ地方の女性達はその特色として優雅と温情とを持って居る。にも拘らず、彼女達の相手が召使や奴隸であるジプシーであった場合、事情は全く異って来る。

彼女達は手ずから其等の男女を半裸にしてヴァタープ (VATAV—EN) 即ち監督に鞭打たせ、次に興が乗ってくると自ら羊用や馬用の鞭で打ちのめすのである。而も、彼女達が自から鞭を振り出した時は、相手が片輪になるまで鞭を振るのである。彼女達はそれでも女らしく同情を以って、鞭で打ち殺す事は滅多にないのであるが—以下略—

十九世紀に入ってから未だに、或程度の奴隸制は残って居たが、併し、一般的な風潮から諸国が次々と奴隸制を抛棄した

為に、婦人達の集团的加虐は段々見られなくなってしまう。フランス革命の精神は早くも全欧にみちて来たし、自由と人権の思想は、人間が人間に圧制を加える事(の中で、特に個人的に鞭等の方法による場合)を容易に許さなくなったのである。

その為、そうしてそうした思想の流れが、更に発展した為に、現在(一九〇〇年初)にはすでに北米合衆国でも、ギアナ、ブラジル、ロシア、トルコ (GVAYANA, BRAZIL, RUBLAND ETC) 等の諸国の他、前述した洪牙利に於ても、集团的な且、法律の保護の下に行われる残忍行為は漸く跡を絶った様である。女性の残虐行為の発現は常に、その時に政治的・法律的保護の如何に正比例して現れるからである。(但し之は表に現われるという点について—訳者) 併し乍ら若し、之等の女性達の中で眠って居る本能を、発現の容易な環境においてみると、その結果は、余りにもはつきりとした対比を見せるのである。

こうした場合は特に現代に於ては、文化的な国の婦人が、文化的に遅れた国に住まねばならない時、即ち、植民地等に在住する場合が考えられる。勿論婦人達は、在住した当初から、残虐行為に対する烈しい嗜好を示しは

しない。併し、或程度、時間が経つてくると彼女達は明らかに曾ての奴隷所有者であつた女主人 (DOMINA) と同様の容相を示して来る。之等の場合は確かに「奴隷所有者」(SKLAUEN HÄLTERIN) ではないのであるが、その実体には著者は、本章に於て記述するのを最も適当と考へるので此処に其を引用し註解してみようと思う。

植民地の白人達に取つて、原住民達を革鞭で叱正したり励ましたりする事は、彼女達が馬や牛を急がせる為に無意識に鞭を当てるのと何等変りないのであるし、又鞭が原住民達に最善の良薬である事を彼女達は信じているのである。彼女達の優越と権力への意識は仮令、原住民達が肌色だけが異つて居るにしても、同じ人間とは見做さないのである。

(訳者註「白人崇拜症」について)

沼氏が曾つて「マゾヒストの手帖」で一項を設け、白人崇拜症について述べたと思う。そして吾妻新氏がたしか一、二行ではあつたが之に対して、反対の意向を持つて居られたと思う。丁度本書が白人女性の原住民に対する——私達も彼等にとっては、殊に現在には原住民なのである、残忍行為とその心理について言及して来たので、特に余談乍ら少々誌面

を借りて、簡単に白人崇拜症に対しての私見を述べたいと思う。

本書に於てヒルリッゲル氏が述べる様に、

彼女達自身の心理の内奥にある意識を先ず探つて見なければならぬ。即ち、テエヌ (THEENE) の説による通り、此の場合、作品 (作品製作の根源をも意味するので一般人の場合は「心理上の考え方」という意味にとつてよいと思う。) は環境 (MILIEU) に従属すると考えられる。即ち、白人女性にとつては曾つての蒙古侵入の時に植えつけられた反感——黄禍思想——に根ざし、亜米利加、亜

弗利加、及び近東諸国、東南亞細亞諸国の住民の非文化性を考へるとき、烈しい侮蔑の印象を得る事は必然である。白人達にとって、殊に男性の中の或者達は東洋の持つ特殊な枯淡な文化に対して憧憬の念を持つとしても、東洋人及黒人は家畜の様な家にすみ、家畜の様な餌を喰ひ、家畜の様な顔をした動物であると考えらるであらう。其の上、東洋人の持つ特殊な傾向である権力への忍従と、感情を殺す表情とは益々白人女性達にとっては不思議であらう。然も地理的な条件からして、彼女達は所謂、文化的服装というよりは旅行用、又は探険用の服装をして来る事が多かった。

此の服装に由来する意識が強く仿いて、彼女達の意識の中には原住民に対する獸視の觀念が判然と確立する。

「白人女性の持つ、有色人侮蔑の意識」は逆に私達マゾヒスティックな精神の持主にとつては一つの権力的存在である。其は女性という弱さを表現した性別の上に重なる特別な感覺を形成する。この奇妙な調和 RICORD —

ATA ARMONIA は彼女達の持つ、一般的に印象の強い容姿、美しい肢体と、粘液質の体臭等によって、極めて強いものとなつてゆく、此の為に、白人女性はマゾヒストにとつてヴィナス的存在となり況してや、彼女達が男性的な服装をした時にこの傾向は益々決定的になる。一方、吾妻氏の如き傾向にある人々にとつても、右を否定する事はいけなないと思う。というのは強いサディスティックな魂の持主は前述の如く外側に強い感じを持ち、内的に弱い (女性という性別) ものを持った存在の弱い方を見て、この強い方の部分をも破壊し去る事に興味を持つのではないかと思う。

結論的に、少くともマゾヒストに関する限り、沼氏の説は前述の通りの考え方なら正しいと思う。

植民地加虐秘史

ベンガルの黄昏

川野京輔

神の摂理によって、他国から分離せる国の領有を指定される国があるとすれば、それは海洋を国境とし、国内には、偉大なる商業国民を生むに必要な凡ゆる鉱物、植物の資源を豊富に有する吾が国（英国）である。

然るに吾々には、此の天恵に満足することなく、吾が国の自然の国境をも軽視して破廉恥にも吾が力を誇り、羨望せる敵の攻撃を待つこともなく、征服、掠奪を擅にして、地球の至る所に流血の惨事を捲き起したのである

——リチャード・コブデン
（英国植民政策史より）

(一)

植民地に対して苛酷な政策を強くしたのは何もイギリスだけではなく、殆んど烈強が本国の利益のみを考えて、不幸な植民地住民には全く無関心さであった。

過重な税金と云う具体的な形を取るのが普通だが、印度に於いては、最もひどく、イングラントの二倍、スコットランドの三倍に相当する額であった。

税の中で、最高を占めるのが、塩に対するそれであったと言うから、如何にイギリスが印度人を虐待したかが分るう。

文化生活に欠く事の出来ないのみか、保健上、絶対に必要とされる塩に高率の税が課せられたから、印度人の死亡率が目に見えて高くなり、同じ地域に住みながら、白人と印度人の死亡率は一对四となっていた。

今でこそ、印度は独立し、極めて特異な地位を東西両陣営の間に保つ大国であるが、イギリスの圧政に服従する事、三世紀に渉り、その間、絶えず反抗の歴史を繰り返して来ている。

それらの大部分が、飢餓に原因していると言われ、旱魃の為であるとイギリス当局は説明して、自らの責任を回避するのが常であっ

た。

だがアメリカ人チャールス・ホール博士によれば、如何なる年でも、生産物が生産地に止め置かれるなら、印度に食料の欠乏など起らないと云う事である。

印度は常に充分な穀物を生産しているのがあるが、イギリス政府が、これに五〇%の税を課し、農民は実収の三倍にも上る金を、しばしば搾取されるので、彼等には食物を買う



金がないのであった。

十九世紀には、千八百万の印度人が餓死したと伝えられている。

ある地方では二年間の内に、全人口の四分の一が餓死した事もある。

路上に、幾千と言う死体が積重ねられていた。

大方は、やせ細った老人の死体であったが中には若い男女や子供のもあった。

骨と皮ばかりになった妊婦が、腹だけを異常にふくらませて死んでいたが、やがて、その腹も、禿鷹に喰われて仕舞うのだった。飢えた野犬の群が、死骸に、むらがって、屍肉をむさぼり喰う様は、正にこの世の地獄とでも言うべき光景であった。

白人達は、鼻をつく腐臭に顔をしかめながらも、次々と路上に投げ出される新らしい死骸に猟奇の眼を走らせるのである。

一八五七年。

史上に名高いベンガルの叛乱が、こうした背景を以って、自然発生的に起った。

祖国を飢と病から救い、英国の圧政を覆そうと、土民兵は革命旗を先頭に、蜂起したのである。

(二)

武器もなく、訓練もないベンガルの土民兵は、最新銃の装備をほどこしたイギリス軍隊に、所詮勝てる筈がなく、翌年の一八五八年に至って遂に鎮圧されてしまった。

此の戦争で英国のとつた行為は、鬼畜にも等しいものであった。

土民兵であろうが、なかりうが、印度人ですえあれば、片端から虐殺して行った。

村落を住民共々、焼き払い。火を逃れて、飛び出した者は、待ちかまえた兵士の一斉射撃を浴びせられた。

ある土人達は、英軍の兵士と出会い、顔を背けたと云う理由だけで殺された。

女達は、あくなき兵士達の凌辱を受けた後で、思い思いの殺され方をした。

ある街の通りには、絞殺された女の屍体が恥ずかしい恰好のまゝ、ずらりと並べられてあった。

英軍兵士と白人市民が刑事裁判を執行したが、殆んど名目に過ぎず、実際には何ら裁判の形式を踏まずに、処刑された。

ケイスと言う人の報告によれば、こうである。

「……老人や子供でも暴動責任者と同一に虐殺せられている。絞殺されない場合は、村落で無難作に焼き棄てられる。時には一人、二人が射殺せられたこともあった。英国人は憚ることなく誇らし気に言うのである。吾々は一人も免さなかったと、又、有色人を苦しめる事は非常に面白く、愉快な時間潰しであった。」

鎮定後、捕えられた印度人の行列は、ウムバラからデリーまで達したと云われ、彼等は

疎な裁判も受けず、絞殺か銃殺される。

ある時、二、三人の子供が、捨てゝあった革命旗を弄んでいた処、官憲に捕えられ、死刑になった。

こうして六千人と言う男女が、無意味に殺されたと報告されている。

此のベンガルの叛乱については、色々な説物もあり、映画にもなったりしたが、いずれも英国軍隊の活躍をたゞえた武勇譚でしかなく、その真相は歪められている。

デンマークのある雑誌は、一九一六年にこう書いている。

「英国はこと一度、冒険、権力、利益に関することであれば自己の身体、その他のあらゆるものを賭しても恐るゝことのない国民である。……インドの叛乱では、印度人を砲口の前に縛りつけて、微塵に粉碎せしめた。……英国人は敵を敗ることだけでは満足しない。敵を粉碎しなければ止まぬのである。敵兵を戦場に倒すばかりでは満足しない。好んで婦女、子供、非戦闘員を倒し、飢え且つ衰弱せしめねば止まない……。」

この様に、イギリスの植民政策を非難したのは他の国にもあり、これから見ても、ベンガルの叛乱に際して取ったイギリスの残酷さ

が想像出来よう。

こうして、暁を夢みて兵を挙げたベンガルの住民は、一年とたゝない内に、以前にも増して暗黒に包まるべき、死の黄昏をむかえたのであった。

(三)

ベンガルの叛乱鎮圧は、英国に対する反抗を表面上、阻止したかに見えたが、一時的なものであり、抵抗運動は、随所で爆発した。

一九〇八年のマニクトラ事件もそうであるが、翌年の一九〇九年には、イギリス印度省の大臣秘書が、白昼ロンドンで印度人に惨殺されると云う事件が起った。

その他、現地では、英国官吏や軍人が頻々として襲われ、生命をおびやかされた。

そして、その度に植民地政府は、大がかりな検挙をして投獄されたり殺されたりする印度人は数限りなくあったが、印度人の独立への意欲は死より強固であった。

第一次世界大戦後、英国はローラツト法と云う法律を制定、施行した。

警察官が危険だと認めた人物は、逮捕状はおろか、何んらの裁判手続を経ずとも、監禁投獄されると規定する此の法律は、明らかに

革命運動者を目標としたものであった。

反対を叫ぶ群集が、一丸となって反抗するのを恐れて政府は、印度国民運動の主唱者、ガンジーを逮捕してしまった。

消極的な抵抗を説いて、納税拒否等、自ら率先して実行したガンジーであるから、この時も、群集をアジッて武力闘争を指導する筈はなかったが、植民地政

府は、不穏な大衆の動きに、事よせて、この機会に、ガンジーを葬り去ろうとかゝったものの様である。

数千の群集は、ガンジーの釈放を要求して、英国官憲の役所にデモンストレーションをした。

英人警官は、すみやかに退去する様命じたが、人々は、口々に指導者の釈放を叫んで退かない。

警官は、無法にも武器を持たぬ群集に向けて実弾を発砲し二十名余りを倒した。



血を見て猛り狂った人々は、同胞の屍体を踏み越えて、殺倒したので、警官隊は、軍隊の応援を求めた。

間もなく到着した英軍は、一斉射撃をして数千名を死傷させ、ようやく群集を追いはらう事が出来た。

累々たる死屍が後に残され、暴動は鎮圧さ

れたが、英軍の飛行機は、罪のない婦人、子供達の上に爆弾を投下して虐殺したりした。これがアムリツツアル事件と呼ばれるものである。

(四)

アムリツツアル事件の目撃者であるオコナ

ー夫人は次の様に言っている。

「……群集は激昂していた。ひよろひよるとやせた男達。――どうして印度人の男は、どれもこれも、やせているのか不思議である。かって支那人やマレー人の如く、太っていた時期もあったのだろうか――彼等は素手であつたが、仲間が警官の手にかゝったのを知ると、掴みかゝらんばかりの勢で、突進していった。

あちこちで警官と、悶着が起つたが拳銃を持たつた警官は、発砲しながら

徐々に退却していった。

その為、死傷者の数は更に増加した。一人の男は頭蓋骨を砕かれた。ある若い印度人の女は、警官に掴まり楯にされた。

一瞬群集はひるんだが、再びせまって来たので、警官は、女の頭の後から弾を打ち込んだ。

ぐったりとした女の体を、長い脚で、蹴ると、更に彼は数発の弾を無意味に撃ち込んで走り去った。

全身から血をふいた女の屍体が、いつ迄も忘れられない……、云云。

同じく目撃者のカーター氏（アメリカ人）は、次の様に語っている。

「……私が来た時、既に暴徒は去った後だった。だが、路上に横たわる男女の死骸の数を見て、如何に凄惨な光景が、くりひろげられたのか想像する事が出来た。

思ったより女の死骸の多いのは、後方に控えていた彼女等に、兵士達は面白半分で、一斉射撃を浴せたものだと言ふ事だった。

逃げ惑い、泣き叫ぶ有色人種の女達を、彼等はスポーツの代りに虐殺したのである。

イギリスの兵士達が土地の女達を、弄んで人間扱いをしないのを聞いていたが、累々と

横たわっている女達の屍体を見ると、泌々と、この国の民族の悲哀を感じさせられる……」。

事件が決着した後では、例によって厳しい捜査が開始され、暴動に関係のあった者は、片端から逮捕された。

処刑の模様については、K・フランク氏の記述がある。

「……軍事裁判所は、余りにも多数の容疑者が逮捕されて来たので、満足に調査する暇もなく、その殆んどに絞首刑を宣告した。

一般に印度人は狂信的であったから、死を怖れると云う事はないと信じられているが、実際には、そうでない。

死刑を宣告されると彼等は大声をあげて泣き叫んだ。

裁判官は、好んで女を処刑する傾向にある様だった。

女が逮捕されたのは極めて少数だったが、大部分がもれなく、絞殺されているからである。

カーマストーラの国の豊艶な女性が、断末魔の表情もいたましく、吊される姿に、嗜虐的な興味があったのたろう。

英軍の兵士の中には禁止されているにもか

ゝわらず秘かに、写真機で、処刑の様子を写す者もあった。

処刑された死体には、いずれも生々しい、傷があったが、これは、監禁中に、狂暴な白人達から受けた苛虐の跡であると云う。

私が見ている間に、三十人余りの男と十数名の女が処刑されたが、死骸は、無雑作に、抛り出されたまゝであった。……」。

(五)

以上、植民地住民に対する支配者の暴虐を綴って来たが、参考としたのは主として、レエツフ原著の「英国植民政策史」並びに、オルバート原著の「英国——奴隷所有者及び奴隷商人」であるから、ことさらに英国を悪く書いたと思われる向きもあるかも知れない。

多少誇大に記述された個所もあるやも分らないが、最後に、今度は、印度にとって少々迷惑な話で、すこぶる猟奇的な宗教について、英国官憲の報告をお知らせしよう。

古来より印度には「シャクティ教」と云う狂的な宗教があり、カーリーなる女妖神を信奉するのである。

信者をヨニーチタスと呼ぶが、これは一種

の露骨な性崇拜の怪教である。

信者達の団結は堅く、しばしば一致して、植民地政府に反抗するので、政府は、まず、「シヤクテイ教」を邪教だとして弾圧した。

この取締は当然であった。

ヨニーチタスは月一回、人里はなれた寺院に集り、彼等の言う聖なる儀式を挙行するのである。

信者の内で、けがれのない処女が、カーリー女神の代りとして信者に接するのである。水々しい肢体をもつ処女が聖壇に坐ると、僧侶は、供物を直接、女の体に触れさせて、これを信者に分ち与える。

それから、灯を消して、男女それぞれに、「愛の遊び」を分ち合って神に捧げると云うのだから、当局が神経をいらだたせたのも当然前であらう。

だが嚴重な取締りにもかゝらず、「シヤクテイ教」は根強い勢力を持ち、偶々それが、民族的な意識に結びつくと、驚くべき力を発揮するのであった。

類々として起るイギリス要官の暗殺や、白人婦女子への凌辱は、いづれもカーリーを奉ずる狂信者供の仕業だと見られた。

「シヤクテイ教」としては、その内容の淫猥

さの故に余り知られていないが、印度の怪教に関連して、カーリー女神の名は、知っている人も多いだろう。

今日の印度に、果して、かゝる宗教が存続

しているかどうか知らぬが、こうした狂信者達も十六世紀に始まる印度の黄昏を、栄ある黎明に導いた偉大な功績者の一員であると言ふのは、考えれば面白い事である。

◆ 奇譚クラブのバックナンバー在庫 ◆

◎日本唯一の特色ある雑誌として、真摯な編集内容と文献的価値を高く評価されており、必ずや貴重な資料として後生に残るものと信じます。

奇譚クラブ 最近号

昭和二十七年	戦争と性欲特集号	品切
〇六月号	女天下時代特集号	品切
〇七月号	男色と責特集号	品切
〇八月号	倒錯の告白特集	品切
〇九月号	切支丹迫害特集	品切
〇十月号	宗教刑罰戦慄画譜	品切
〇十一月号	惑溺の愉快特集	品切
〇十二月号	昭和二十八年	品切
〇新年号	縛った女を描く在庫僅少	在庫
〇二月号	責め小説特集号	在庫
〇三月号	東西拷問くらべ	在庫
〇四月号	錯倒の告白特集	在庫
〇五月号	男性マゾ特集	在庫
〇六月号	緊縛の一表情	在庫
〇七月号	猿ぐつわ五態	在庫
〇八月号	被縛女体の研究	在庫

〇九月号	灸をすえられた女	在庫
〇十月号	偽らざる告白	在庫
〇十一月号	あぶまにやの手記	在庫
〇十二月号	甘美なる倒錯の花園	在庫
昭和二十九年		
〇新年号	私の生活体験	在庫
〇二月号	悦唐の家	在庫
〇三月号	倒錯の告白と手記	在庫
〇四月号	告白と手記と体験	在庫
〇五月号	懸賞入選発表	在庫
〇六月号	特集告白と手記	在庫
〇七月号	特集告白と手記	在庫

昭和二十七年の分は一冊送料共九十円、昭和二十八年以降の分は一冊送料共百円にて急送申し上げます。六冊以上まとめて御申込みの方へは景品を贈呈いたします。

バックナンバーの御申込みは直接発行所へ

○本誌は一覧表御覧の通り休刊等しておりませんので、欠号なく毎月ずつと取揃える事が出来ます。各月号の詳細目次は先月号以前の本誌に掲載してあります。

異	隨
色	筆

女性愛慾面の斷層

林 弓 志 雄

ま え が き



日本の封建制度の特徴は家である。家を中心として成り立っている封建制の残滓は、今もなお滅びずして、我々の生活の中に生きている。

我々の個人としての、どんな自由も權利も家に随従してのみ許されているのであって、純粹な人間性は、家の圧力の前で抹殺されて

しまっている。

そのことは、殊に女性においては、慘酷なほど顕著であって、女性のもつ人間性は、そのために極度に歪められて畸形化しているのである。

新らしい憲法が、日本の女性に自由と權利を与えた日までの、長い世代に亘る女性の歴史は、格子なき牢獄に等しい家に縛られて、犠牲と奉仕の生涯に甘んじるほかなかった。「家」は、世襲的な家系を基本としている。妻の座は、子孫をつくるための分娩道具としてのみ価値づけられていた。

子なきは去る、という不法なる人権の剝奪は、それが当時にあつては誰疑うこともない道徳でもあつた。女は、姑と夫に仕える以外

には、少しの人格も認められなかった。従順は婦徳のすべてを意味していた。夫は外に女を囲ったり、或は遊里に入浸って享樂三昧に耽つても、妻は抗議することすらできなかった。

それでも、なお、夫の機嫌を損じぬように笑顔で奉仕することを強要された。

こうした数々の、不合理な男尊女卑の思想と制度は、いかに女性を陰鬱な「家」の生活に沈淪させたことであろうか。

そして、かゝる時代における女性の愛慾生活は、勢い單調、無味、素朴であることを免れ得なかった。男性は横暴であつたし、無法者でもあつた。彼らは妻が肉体をもつ人間であることすら忘れていた。

男性は経済力を自由に掌握して、淫蕩な生活に思う存分耽溺したが、家にある妻の性的な飢渴にはいささかの同情ももたなかった。飢えたまま、妻はかえり見もされなかった、ただ、わずかに子供を分娩するために、実にあっけない、交尾が形通り行われるに過ぎなかった。

封建社会に生きた女性は、それでも、女とはこうしたものだという運命的な諦めに生きていたのである、思えば悲惨な限りであった日本の女性が、外形的には世界に誇ってよいほど美化されていながら、その内奥のものが死灰に等しい味けなさであるのは、こうした生活の圧迫が然らしめたのである。

男性は、妻に対して、洗練された官能の遊びと、ラール・デーメ（愛の術）の神秘で玄妙なことを教えなかった。なぜならば、妻の官能が、空腹に耐えられなくなって、夫以外の男をツマミ喰いする不品行をせられてはたまらぬからである。これは男性のキツネのような狡智である。

男性自らは外で安心して享楽するために、妻を家に縛りつけて、外界との接触を禁じ、姦通罪という刑法の手械をはめておいたのである。かくして男性は純粹なる自分のタネが

保全されることの安堵を求めたのである。妻とは家の飾りものなり、という不文の憲法は、日本封建社会に強い力で生きていたのである。

妻が、もし、この不合理な制度と思想に反逆したときは、自ら家を出るか、追放されるかであった。

封建社会は家から一旦出た女の生活を保証しなかった、墮落と貧困と飢餓の生活が、その前途に横たわる運命であった。こうした封建制度も、日本の敗北によって根底的に覆された。女性は求めずして自由を得た。願わず



赤熊の手で剥れた

日本女性の封建性

旧き酒を捨てなければ、新しい酒を革袋に入れることはできない、日本の女性が、民主的になるためには、封建性の脱皮がなされなければならぬ。

満鮮地区で抑留二年間、日本女性はソ連兵

して解放されたのである。

終戦は、女性に関する限り、突然異変であったと言える。休火山が活火山に、一夜にして変貌した、自由の巨火は噴煙とともに天に冲した、解放の歓びは地鳴りの如く大地をゆすった、眼を瞠るべき女性愛慾の断面は、豁然としてその頁をひらいたのである。

終戦以来ここに九年、日本女性の封建性の脱皮の種々相と、次第に高まる新女性の誕生と生長の過程を、私は尽きせぬ興味をもって記録しておきたいと思う。

との接触で、いちおうの脱皮をおえたのだと云えば、或は諸君は訝るかも知れない。大陸での抑留生活は、暴行凌辱の恐怖と、飢餓と敗亡流さんの生活以外の何ものでもなかった如く、いな、事実上環をかけて誇張された現

地の報告をしか聞かされていない人々にとって、私の見方が奇異に感じられるのも無理はなからう。

だが、事實は、よほど違っている。歴史の正しい記述の、いかに至難なるかを知るのだが、満鮮の終戦時の模様を概説しておかなければ、ここに語ろうとする、日本女性とソ連兵の接触の真実を把握することができないのである。

植民地戦争で、勝利に酔うた軍兵が、当然の権利として敵国の婦女を凌辱するのは、何も珍らしいことではない。

戦地における人間心理は、到底信じられないような野獣化の、ぎりぎりの限界まで歪められてしまうものである。日本の兵隊が南京その他支那各地で行った鬼畜の行為も、こうした獣的な人間の仕業として理解されなければならぬ。洋の東西を問わず、兵隊が自ら凌辱した犠牲者を、その場で虐殺する心理は常識では判断ができない、南京で強姦した女の………してあった例は、その好個なものであろう。

満鮮においてソ連兵の凌辱はかなりはげしかったが、虐殺事犯は一件もなかった。これはソ連兵が他の国の兵隊よりも質が良かった

ということではない。

ソ連兵が実際に日本女性を見たのは、すでに日本が降伏して、戦火がまったく熄んでしまってから後のことであつた。

ソ連兵は、史上かつて見ざる、凄惨無比の独ソ戦を生き抜いてきたのだから、日ソ戦で死にたくなかったであろうことは十分察せられる。いかに関東軍が貧弱であつたと言っても朝鮮が手薄であつたと言っても、全軍玉碎の決意で立ち向われたとしたら、相当な犠牲者を出したことは予想されるのである。

殊に、ソ軍が編集して兵士に配った「日本のはなし」という小冊子には、日本兵はサムライ精神が旺盛で命を惜まず突撃してくる。剣道と柔道は実に優れた武技である、夢々油断するな、と書いてあつたのだから、おそろしく頑強な抵抗を予期したことであろうに、案に相違して、あっさりと降伏したのだから向うさんは拍子抜けの態でもあつた。

日本降伏の報にわが命全し、と狂喜した兵士たちがワイナー・ザ・コンチル（戦争は終わった）と祝杯に躍り上つたのもむべなるかなであつた。

この安心感が、異常に昂っていた戦争心理に鎮静収斂作用を及したのであつて、この瞬

間からソ連兵は野獣から人間へと還元過程にあつたことは推理できるのである。

もし日本軍が降伏せず、戦火が全満、鮮に波及していたなら、日本女性の受けた惨虐さは、筆舌を絶したことであろう。

平和がきた、と云う和やかな空気こそ、戦争の惨虐を救う女神であつたのだ。その一つの証拠に、ソ連兵は朝鮮の女に対して、私の知る限りでは、一指も触れなかった。もちろん、朝鮮の女に暴行を加えたら、彼らは忽ち軍法によって極刑に処せられたのであるが、それにしても、もし戦争中であつたならば、いくら峻厳な軍規でも、あままでは厳肅に格守されなかったであらう。

その中であつて日本の女に対しては、凌辱してよろしいとは、さすがにソ軍は公言はしなかったが、目こぼしは随分あつたし、万に一つ運悪く検挙されたとしても、営倉位で事はすんだのである。

たいへん不公平のようではあるが、一方はレニングラードの勇士金日成の人民であるから、ソ連兵にとって北鮮の人民はダワリヒツチ（同志）であつた。一方日本の女は、反共の親分天皇の赤子だから、この差別待遇は己むを得ないことであつた。

平和な環境と、戦争異常心理の緩解とがソ連兵をして、無辜の日本女性を虐殺する鬼畜行為を妨げたのである。

かかる状況下で、日本女性とソ連兵と接触



日本の女は

世界一のお城をもつ

あるソ連兵に、君達はなぜ日本の女に興味をもつのかと訊ねて見たら、
「日本の女は、世界一素晴らしいお城をもっているからさ」

と真顔で答えたが、まったく、これはおどろきであった。もし真実にそうならば、我々日本の男子は、造化の神に感謝を捧げねばならない。

私は今ここに、その真偽の程を明らかにすることはできないが、そんな世界的ゴシップがソ連兵の興味を唆っていたことは事実だった。

平壤から北東に走る満浦線に龍源里という

したのであるが、私はその第一期を、ソ兵の暴行期とし、第二期をソ連兵の好色ワイセツ期とし、第三期をソ兵と日本女性の変愛期と分けることが理解の上に便宜だと思う。

小駅がある、四方を禿ちよろけの、低い山々に囲まれた寒村で、低丘陵の谷間のようなところに、ちよっぴり猫の額のような田畑がひらけている。山肌の赤茶けた岩盤が、腐った動物の骨のように露出しているのが痛々しく目にしみる。その山麓に、人家が建ち並んでいた。ここにトンネルがあって警備のためにソ連兵が十数名、仮小屋に駐屯していた。こいつらの不品行は、実にお話しならぬほどで、憲兵の目の届かないのを幸いに、暴れ廻って村人たちのひんじゆくを買っていた。ちようど村の旧校舎に満洲から避難した日本の女子ばかりの団が收容されていたが、これ

がソ連兵の好餌となったのは条件が揃い過ぎていた。

彼らは酒を飲むと娼妓でも買うような手軽さで日本の女をおそった。收容所の前と後から侵入したソ連兵は、悪童が浅瀬で魚でも手掴みにする安易さで、日本の女を捉えては、御意に召すまで凌辱した。

この女子避難民団には、引卒の男子が五、六名居た、毎夜の如く襲来する赤熊のようなソ連兵の暴行には、女よりも男の方がヒステリーになってしまった。

ある日のこと、例によって酔っ払いのソ連兵がやってきて、Sという男の前で日本の女を掴え、あわやに及ぼうとした。

むらむらとしたSは、矢庭にソ連兵を蹴飛ばして、おとなしく縮み上っている女に「逃げろ」と叫んだ、蹴飛ばされたソ連兵は、怒ったのか、身の危険を感じたのか、自動小銃を持ち直してダダダとSを狙撃した、Sは顔死の重傷をうけて、ぼったり仆れた。

事件は、龍源里から六里ほど北東に位する价川邑にあった私のところに急報された、私はそれをソ軍憲兵隊に通報して、シブで、憲兵隊の将校と龍源里に急行した。

幸いSは命には別条なかったが事の次第に

憤った憲法将校のガラニツチエン中尉は

「こいつらは、これだ」

と言つて、両手の指で柵の目を作つて見せた、営倉に入れて軍法会議にかけるといふのだ。そして私に、今まで凌辱された日本の女についての聴取書を作つて提出してくれないかと云つた。私は、自らの意志によらずして不名誉を荷つた婦人たちを呼んで、人を遠ざけて、凌辱の事実について聞いたのである。

A夫人は、いきなり私に

「スパシーボって何のことですか」

と訊いた。私は、それは英語のサンキユウと云うことだと教えると

「なるほど、それで分りました。あの晩、私は昼間の疲れで深い眠りに落ちていました。

夜中にすゝと表戸があいて、朝鮮人が案内役でロシアの兵隊が入ってきました。逃げる間もありませんでした。私はあまり……

だからち……よ……早く……

思ったのに、呆れたことに……居……で

……や……と……ときスパシーボって何べ

んも云いました、え？朝鮮人ですか、その間

……いたようですが、あとで、仕方な

いんですもの、せがまれて」

何たることだろう。いやはやと言うの外は

ない。B夫人は

「あの晩の兵士は、そうですね、何しろ私は氣も動揺してしまつたので……でも、ちよつと東洋風のきりりとした、面長のいい男でした」という前置きで、いかにも恐ろしいことに会つたと語つた。

C夫人は

「あの晩、Dさんと二人で逃げ損なつて、攔りそうになつたとき、Dさんは、私は先にも一度あつたんだから、一度あつたことは二度あつたつて同じよ、あとは引き受けるから私にだけ逃げなさいと仰言つたんです、でも私そんな災難を平気でDさんだけにおかけするのも悪い氣がして、ぐずぐずしている間に私もDさんも攔つたんです」

呆氣にとられた私はしばらく穴のあくほどの氣の毒な夫人の顔を見直したのである。

かかる幾つかの事例の中に見るように、日

本の女性には、この貞操の危急に際して「自

分を守る」という、当然の権利思想が、ぜん

ぜん頭の中に浮んでこなかつたということが

不思議に思えるのである。

だがこれは長い世代に亘つて、權威の前に屈従することを、最高の婦徳であると教え込まれた、悲しい習性の然らしむところであ

つたのだ。

ある精神病の大家は、この場合の日本婦人の無抵抗状態は、終戦のショックによる精神の破局反応で、自我の一過性喪失だと説明されたが、現地の平和的環境は、硝煙の中に全滅の過程を辿つたドイツの場合とは、全然趣が異なるのであつて、破局反応を呈するほど、敗戦のショックは強くなかつたことを、体験として私は知悉している。彼女らが強度の病的精神状態にあつたとは思われない。

私は、日本婦人が受けた暴行事件を通して幾つかの封建性の脆弱面と、見せかけの精神を見破ることができた。

封建制の下では、男が自分のタネが純粹であることを保証するために、女には極端な貞操の潔白さを強要した、一婦二夫に見えずということがそれだ、辱しめを受けんとするや死を撰べ、と云う掟に従つて、日本の女は結婚の時に短剣を身につけて嫁入つたのである。こうした女の夫に捧げた貞操の潔白は、戦時下にあつては動員した兵士の士氣に關るもので、政府はこれを日本精神の昂揚ということで大いに教化したのであるが、ソ連兵に凌辱された有夫の日本女性で、一人だに自殺した例を見聞しなかつたことは、不合理と人間性

無視に満ちた封建的思想が、看板だけのもので、すでにこの時、日本女性の心の中では滅び去った思想であったことを証明している。

もし、この際に、日本女性の心の中に、中世的な殉死の考えや、肉体の純潔を人間性よりも優位に考える思想が生きていたならば何百、何千の女が自殺したことであろう。

幸か不幸か、ソ連兵の前での日本女性は、すくなくとも、大部分の者は、おとなしく、静かに、彼らの意に従ったのである。

つまり、死を以て対処するという毅然たる古代女性の精神がすたれてしまつて、奴隸的な屈従精神だけが残っていたのである。

日本女性は、ここにおいて遺憾なく奢侈的装飾品としての脆弱さを露呈したのである。

あるソ連兵がこう述べたことがある。

「ドイツの女は手強いよ、榮螺のように固いので随分手こずったが、日本の女は、優しく猫のように従順だ、」

「どうしてだろうかね」

「つまり、育ちがいいのでしよう」



葦芽は燃ゆる

日本女性の黎明期

そのうちに、北朝鮮における共産主義的建設は着々と進行して、明るい希望と落着きの色が輝きはじめた。

もっとも、いかに治安が回復したとはいえ革命將軍金日成のいる平壤は、依然として、夜の十時以後は一般の通行を禁止して、平壤に入る動脈的要衝には猫の仔一匹通すまいとするが如く、バリケートが築かれ、そこには北鮮兵士が、キラキラと剣付銃を光らせて立哨していた。

この首都の戒嚴令下のようなきびしきにひきかえ、地方は至極のんびりとしたもので、まずまず順調な歩みを見せていた。

こうした国内事情は、ソ連兵の生活一般にも反映して、今まで着ていた汚らしい軍服も脱ぎ捨て、日本軍の倉庫から取出した服地でさっぱりと衣裳替をすまし、見違えるように

男前になった。もっさりしち田舎紳士の風格は持ち前のソ連兵ではあるが、いちおう、乙にすましたものだ。

こうなると、ピストルに物云わせて、マダム、ダワイなんていう下品で無粋なことはかりそめにも言い出し難い、そこで又妙な手を使いはじめたのである。

彼らは白昼何食わぬ顔で、ポケットに菓子や、パピロスという口付蓑などを用意してふらりと收容所にやってきて、日本語辞典片手に、怪しげな日本語を喋って日本の子供をあやしたりする。彼らに深き魂胆のあることも知らぬお人好しの日本の女は、片言交りのソ兵の日本語に打興じていっしょになって談笑する。ソ連兵は間もなく、サヨナラとか言っト消えてしまう。ちよっと見ると微笑しい日ソ親善風景だが、これが夜ともなれば話がガラ

リと変る。

私のいた价川收容所の前を流れる溪流は、水が冷く澄んでいた。夜ともなれば森閑とした静寂の中に、せせらぎのしぶきの音が、時には私たちの懐郷の心を搔きむしるが如くきませたものだ。

昼間きたソ連兵は、この小川を暮夜ひそかに涉ってくる。そして收容所の中へ吸い込まれる如く入ってきて女たちの寝所に現れる。

一部屋には四十名ほどの女たちが收容されているのだが、背の高いソ連兵の影に呀々と驚きの声が上がると、シーとソ連兵が制する、そして消灯された部屋の中を静かに匍いながら、犬のように昼間の女の体臭を求めて探し出す。猶犬そのけの芸当だが仲々適確である。こうしてソ連兵は周囲の女たちが妙にドキドキする胸を搔い抱いて狸寝入りする中で一夜の快楽に酔い痴れるのである。

何のことはない、日本の里で行われる夜這いである。ここでも慎み深い日本の女は、みんなで騒ぎ立てれば怪しからぬ男は這々の態で逃げ出すものを、邪魔立てもせずにおとなしく、静かにしているのである。

翌日ともなると昨夜の男は昼間来た男だと思ひ当って、ソ連兵はそんな手も知っていた

のかと呆れ顔だ、それにしても、夜這男のお見舞をうけた夫人は、顔赤らめて「キツスだけして帰ったわ」とはにかんでいる。ところが、お隣りに寝ていた夫人が「あの音はキツスだけじゃなかったわ」と、そっと他の人々に力説するのであった。

味を占めたソ連兵の夜の訪問が相ついだので困ったものだと思兵隊に通報の上、取締ってもらったが、あちらでも人様だけがヨイことをするのは苦々しいものらしく、ぴたりと来なくなったから、軍規は仲々厳正である。「あらツマンないの」と言った日本の女も、現にあった程だ。

この時期までを私は日本婦人の無抵抗の時期と見る、唯々諾々、お人好しの日本女性であったのだが、この頃になって、静から動に変る自覚が生れたのである。

收容所の裏山で起ったソ連兵と日本婦人の一騎討の活劇は、この自覚のあらわれであった。その日A夫人は薪木とりに一人で裏山に入った。そこへ、ひよっこり若いソ連兵が現われたのだ、あたりに人影もない山の中だ、好機逸すべからずと、ソ連兵はA夫人に挑みかかった。

このときA夫人は、日本にも巴御前のあつ

たことを想い出した。憤然、逆襲して手にもった一本の薪で、突く殴る、阿修羅の如く奮闘した。何と言っても相手が女を大切にする風習の国の男だから、遠慮勝ちに応戦したのか強く打ちすえられて、これはかなわじと、膨れ上った頬を痛そうに押えて退散してしまった。折柄山へ薪取りにきていた朝鮮の女の人、この物凄い格闘を見て、私たちのところに急報してくれたので、直ちにA夫人救援に赴いたが、意気揚々と下山する無事なる彼女の姿に一同大いに喜んだものだ。

はじめて日本女性が自分を守るといふ強い信念を实践したということにおいて、A夫人の行為は、全般の日本女性に強い衝動を与えた。

自分を守るといふことは、人間の独立性と人権への自覚である。この自覚は自由と権利を尊重する民主主義に通じているのだ、封建性の脱皮は、このようにして日本女性の上に訪れてきたのである。

自分を守るといふことは、すでに自分の意志によって生活するといふことの、偉大なる自覚を包芽しているのである。

その頃收容所にあつた日本女性の三十パーセントの人たちが、敗戦のショックで、一過

性月経閉止と云う生理異変を見せていたが、忽ち再開を見て、潮来の状況はまことに熾んであった、閉止から再開まで大体六カ月であった。

ここにおける、全部の女性について言えることは、彼女らが夫を戦地に送って以来、久しい空閑の寂しさに、総じて軽度のコノマニア的傾向にあったことだ。

彼女らの生理自体が、この自己の神経症的傾向を医す道を、肉体的に知りはじめていたのである。

ある夫人は、微熱と盗汗に衰弱を見せて「私は夫と一緒に生活していると、丸々と肥って健康なんです、別離生活をするこの通りです」

と告白したが、一度すでに男を知った女体は、男を離れては生理上に障碍をうけるものであることは、何もこの夫人に限ったことではない。

自分の意志で生きよう、と自己の人間性を肯定して自覚したときに、彼女らが急に空腹感を覚えたとしても、私は当然の生理現象だっただけで、又、何人も彼女らにそのひもじさを医すことを咎め立てする権利はなかった筈だ。

原始時代の掠奪婚的なソ連兵の暴行に屈した日本女性が、甘いソ連兵の桃色トリツクの求愛を一蹴して起ち上り、積極的にソ連兵との間に花も狂わんばかりの熱烈な恋愛の絵巻

きを繰展げ、思うさま官能のよろこびを味わい、繊細に微妙に逞しく生長して行った姿は近代女性愛慾面の断層でなくて何であらう。

「読者通信」

心待ちにしておりました御誌七月号、胸躍る思いで早速拝読いたしました。その一頁一頁をめくる愉しき、期待を満してくるその瞬間の気持ちを何と形容したらいいでしょう。いつもながらの興味あふれる企画、本当に編集子の皆様に感謝したい気持ち一杯です。私百を数える間、その他の一連の写真、パンティ姿の二人の女体がからみあう美しい線、ポーズに私はうっとりさせられてしまいました。

それから懸賞入選の「華々しき凌辱」男の心理と女の心理とを剥き出しにして火花を散らし乍ら進められる物語、それから、フレンチ・カンカンですが、短い体験発表でございましたが、面白い題名に引かれて一気に読んでしまいました。しかし読むうちにその残酷さに私は眉をひそめてしまいました。お恥しい話ですが、私も以前、お姉様に無理矢理に浣腸された事があります、その時の恥しさ、今思い出しても顔が赭くなります。それを一列に並べられて衆目の前で浣腸されるなんて何というひどいことでしょう。

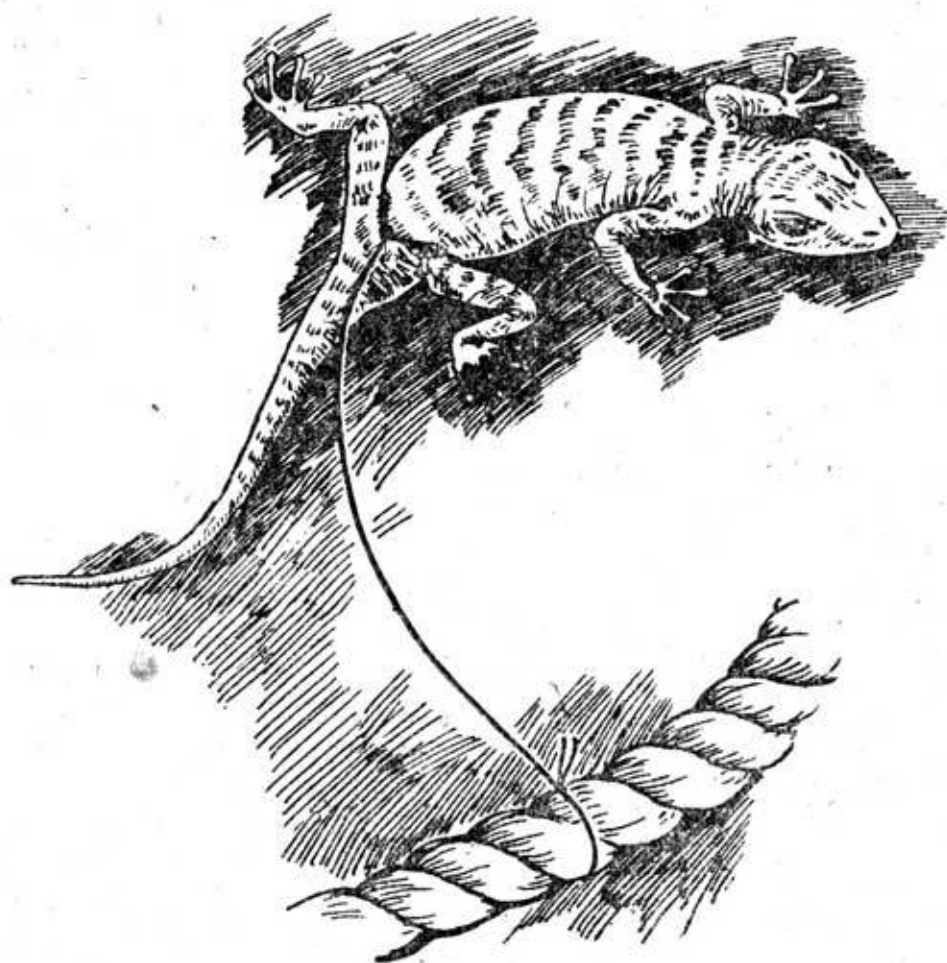
私だったら屹度卒倒していかたかも知れませんが、その上赤ん坊ならともかく、娘の体温をあんな所で計るなんて私は読みながら、思わず顔を手で蔽ってしまいました。

沼田さまは十五分もトイレに行くことを禁ぜられたと申しておられますが、そんな長い間、本当に辛抱出来るものなんでしょうか？ 薬の量が少いのならともかく、普通ならとても我慢出来るものではないと思います。精々五分位が

精一杯ではないでしょうか、それから通信欄で、福岡の方がびったりした、パンティより裾にひだが寄ったズロースを讚美されておられました、が、パンティにも裾のしまったものや下の括がつたものや色々とございますのよ。上穿パンティ、下穿パンティ、ブリーフ（股の付根までの短いもの）ショーツなどその型もサイズも沢山あります、ズロースもよく穿きますが、外出や通勤の時は、スタイルの点から私たちは普通、パンティかブリーフを使用しています、が、男の方は無理もありませんが、どれもみんな一緒にされておられるようですね、それにして。男の方ってどうしてこうもズロースやパンティに興味を持たれるのでしょうか？ 悪趣味な方々ね、思わすいろ／＼と書いてしまいました。いづれ又。（角 皓子）

青色の

螢光灯



川 田 進

京都市伏見区の或る製薬会社の研究室に務めている僕は、相思相愛で一緒になった今年二十四になる美しい妻（僕がそう思っているのですからお目出度い奴と思わんで下さい。）と、東山の閑静な住宅地に家を持って居た。結婚生活五年になっても、子供に恵まれず家族と云っても、一匹の愛犬と夫婦だけの淋しい中にも楽しい家庭であった。しかし蜜の様に甘かった新婚生活も、それが濃厚であれば濃厚であつただけに、そろ／＼と飽きて来て、ぼつ／＼夫婦の倦怠期に入りかけていたが、この子供の無い夫婦二人の危機を救って呉れたのは他でもない、何時しか二人の間に芽生えたアブノーマル・プレイであつた。

そして、お互いに信じあい愛しあふ夫婦の仲で、責めたり責められたりする遊戯は、またと無い新しい悦楽の境地を無限に開拓して呉れた。回を重ねるに従つて趣向の変わった責めの方法に、二人は或る時は書物からヒントを得たり、又、独自の考案にと楽しい生活に熱中した。

初めは唯型ばかりに掛けていた腰紐が、回を重ねるに従つて段々きつくまとい、そして縛った縄の跡が素肌に残る程に実感を求め、それが又、お互いの楽しい愛情の痕跡とも成

もなくミシンを踏む音がして来た。

僕はそっと、先程の瓶を取出すと、小さな孔を五ツ六ツ開けた瓶の詰めを静かに取ってピンセットをつつ込むと、手近かの一匹をつまみ出して頭と胴を押えておいて、用意をして置いた太い木綿糸を三〇糎程の長さに切って、其れを夜守の尻尾にくくりつけた。そして窓の外に固定して置いた細い竹竿に結び付けた。すると夢中で逃げ様として暴れた夜守は、アツと云う間に尻尾を切って逃げてしまった。後には糸の先に切れ残った尾の先がビク／＼とまだ動いていた。

これではいけないと気付いた僕は、次の奴を慎重に取出して、今度は夜守の胴にくくり付けて後脚の股まで引き下げて縛った。こうすると絶対逃げない事がわかったので、後は次々と合計十二匹の夜守を苦心してや々と全部に糸を着け終って、窓際に下げた竹竿に互の糸がもつれぬ様に一定の間隔を置いて結び付けた。此れで全く準備が終った。

ホツとして、一服煙草を吸って階下へ下りて行き、妻とお茶を飲んで何気ない話に暫時を過して、何時もの就寝の時間が来たので戸閉りをして、意味あり気に笑う妻に、
「さあ、今夜は少し趣向の変わった遊びをして

可愛いがってやるよ」

と云うと、彼女は何も知らずにニツコリ笑って、夜化粧をするべくトイレットへ立って行った。

僕は早速、先に洋室へ行くと楽しみの螢光燈のスイッチを入れた。青白い柔かな光が深海の底に蹲る様な雰囲気をつたよわせる。

間もなくほんのりと夜化粧をして、赤い長襦袢を着た妻が入って来た。

「ねえ！ 今夜は、何するの？ あんまりいじめちゃ嫌だよ」

と云って、先程の僕の言葉から半分の好奇心心と、半分の心配を混えた顔つきで尋ねる。

「うん、まあ僕の云う通り、温和しくして居れば、怖い事はないよ、さあ……」

と云うなり彼女に近づいて、赤い長襦袢に手を掛けて脱がせると、先ず彼女の口に猿轡をはめる。口内にガーゼを丸めて詰め込み、其の上から又ガーゼでギリ／＼と四、五回巻き付けて縛り、更にその上から自転車のチェーンを切り開いた幅広のゴムバンドでピツチリとはめて後頭部で締めつけて止める。此れでほとんど声が出ないで、低い鼻声のみもれる程度となる。

次は、両手首に自家製の皮手錠をはめて、

その両手首を縛った手錠の鉄鎖を部屋の中央に吊したシャンデリアの横に、天井より取付けてある鉤に引掛けてグイと下から引上げ、少し背のびした程度にして傍らの柱の止金にとめる。

それから両足首にも皮製の足枷をはめて、十糎位開らく程度に鎖をしめて、今度は太いロープを取出し、一方の端を首にくくり付けて其処からぎゅ／＼としめつゝ、グル／＼と螺旋状に胸から胴へ、そして腰から両太腿迄廻して巻きつけて膝の関節部で縛り止める。此れで下準備が出来上ったわけである。

「さあ、此処迄は前準備だよ。これからが本舞台に移るが、一寸用意をして来るから楽しみにして温和しく待っていておいで、きつと今迄味った事のない程、楽しませて、踊り狂う程喜ばせてやるよ、ウフフ……」

と云いつゝ部屋の隅に置いてある大きな三面鏡を引張って来て、彼女の全体が映る位置にドツカと置いた。

さて、これから演出する怪奇なる責めが、彼女を最初から驚かせては面白くないので、白布で目隠をして僕はそっと部屋を抜け出すと二階へ上り、窓際の手摺にく／＼とある夜守がピン／＼とはね狂って居る竹竿を取りは

ずして階段を下りて来た。

洋室では、青白い螢光燈の下で、天井から鎖で釣り下げられた妻が、白く輝く美しい肢体をくねらせて待って居た。その傍らに無言で近付きその竿から一匹はずすと、其の夜守を彼女の身体に巻いたロープに糸をしっかりと結びつけた。

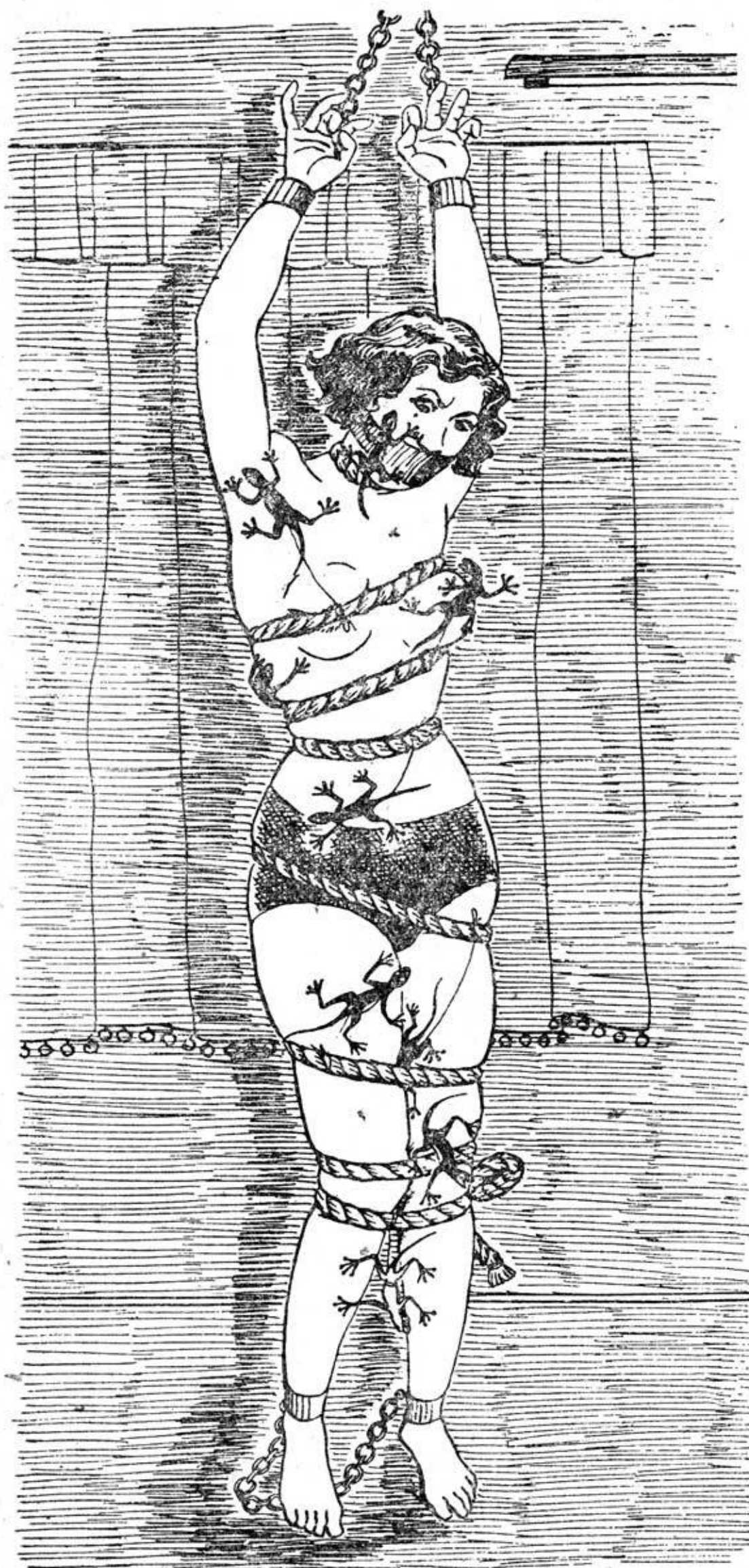
夜守は忽ち彼女の白い膚にピッタリ四本の

足に付いた吸盤で、吸いついたかと思うと、ゾロ／＼這い上って糸の長さ一杯の所を逃げ様ともがく。

「アラ！ 何よ、何なの？ いやよ、いやよ 気味の悪い。は、早く早く取ってよ、いや／＼ん、ね、早く……」

と、吊り下げられた身をくねらせてもがい

る居る彼女の首のロープに二匹、胸に二匹、そして胴に二匹、両太腿に一匹づゝ結び付けて、今度は後に廻って、背中に二匹、腰に二匹と、一定の間隔を開けて次々と結び付けて行った。その頃は彼女も自分の膚をゾロゾロと這い廻る小さな動物が何であるか、臆ろげ



ながら感じて来たらしい。

「いやよ！ 何よ取って、いや、早やく、ネエ、お願いやめて……早く取って！」

と、猿轡の中からかすかにもれる声も段々と悲鳴になって来た。そこで、サツとそれ迄しめてあった眼隠の白布を外した。

そして初めて前の三面鏡に映った自分の真白い全身に、ゾロ／＼とうごめいて居る数匹の夜守。日頃から見るだけでも寒気をする嫌いな夜守のグロテスクな姿を見た彼女は「キヤ！」と真剣な悲鳴を上げた。(よくもしかったら一町四方も聞える様な絶叫であつた)

そして、見る／＼真白な肉体の膚の毛穴が一つずつ数えられる程に鳥膚になり、ガタガタと全身をふるわせ、必死で逃れ様と鎖で吊し上げられた身をもがきくねらせて振り落そうとするが、自由を束縛されている上に夜守は一匹ずつ糸でロープにつながれて居り、又夜守の四本の足にある吸盤でしっかりと膚に吸い付き、各々がこれ又必死で胴に結ばれた糸から逃れ様と、彼女の柔かい白い膚の上を糸の遊動圈内で所嫌わず這いもがく……

首のロープに結び付けた二匹の夜守は、彼女の肩からゴムの猿轡のはまった頬へ、型の

よい鼻に這い上り額迄登ろうとして時々足を滑らせてずり落ちては又かけ上る。胸の二匹も両方に膨らんだ乳房の上を這い廻って、腋の下にもぐり込もうとする。胴の二匹もお臍の回りからピチ／＼動く腹の上を駆け廻る。太腿につながれた二匹も太腿の内側から股にもぐり、背中と腰の四匹も、広い背中を所狭しと、上は肩から下はお尻にまで暴れ廻る。

彼女は今はもう声も出せないで、息苦しい猿轡の下でヒ／＼と悲鳴を上げて、キリ／＼と吊り下げられた身を右に左に廻し必死でもがくありさまを、青白い螢光燈の光の下で僕は傍らの安楽椅子に腰を掛けて、葉巻にゆっくり火を付けてこの美しい拷問を静かに眺めて楽しんで居る。この葉巻が全部灰になって落ちる迄、自分の苦心して考案した責めの演出の効果の素晴らしさに恍惚として、その情景を眺めているつもりで、香り高い葉巻の紫煙を楽しんでいた。

それから約小半時経って葉巻が半分程白い灰になった頃、彼女ももがき疲れてグツタリとなり、風の無い軒先に吊り下げられたテルテル坊主の様に静止してしまつた。じつとりと脂汗の滲んだ肩で息をしながら恨めしそうに僕の方をにらんで居る。その両頬に二匹の

夜守がピツタリとくっついて、これも又今は逃れられぬとあきらめたか、じつと糸一杯の所でとまって居る。他の十匹の夜守も同様に静まって細い腹を膨らしたり縮めたりして呼吸をして、思い／＼の場所でピツタリ彼女の白い膚にへばりついている。

しばらくは青白い螢光燈の光の中に沈黙が続いた……何か奇怪な映画のスチール写真を観ている様な錯覚に陥る。そして時々吊された両腕が大分しびれて来たのか、ピク／＼と彼女の肩が痙攣するとその部分にとまっていた夜守が驚いて、又一生懸命にうごめく、するとそれに習って数匹の全身にとまっていた夜守が一齊に暴れ始める——彼女も又堪らなくなつて身をよじらせて暴れる——そして暫くするとどちらからともなくとまって静かになつて、又ピク／＼と、その光景が数十回繰り返えされて、遂に、

「ねエ、もう許して、お願い、堪忍して……」と猿轡からもれる低い声も、悲鳴から泣声になって来た。何時か興奮に葉巻を持った指の股がじつとりと汗ばんで来た。まだ三分の一程の葉巻が残って居る。

翌日、彼女に前夜の感想を聞くと、「ひどいわ、私、初めは恐怖で全身の血が吸

い取られて今にも気を失いそうになったんだけど段々と慣れて、噛みつきも何もしない唯這い廻るだけだと解って来ると、後はむしろ堪らない様なスリルがあったわ。でもあの小さい四本の脚に付いた吸盤と、冷たい様なお腹と、そしてよく動く尻尾で膚の上を動き廻われる時は何んとも云えない感じよ。特に顔や腋下それと太股の所を這われるとくすぐったい様な……嫌だワ。でも今迄のあなたの考案の中では傑作の中ね、ウフフ」

と笑って甘える様に僕の膝に乗って、

「今度する時はあの両手を吊るのはやめて、終りの方で手が痺れて痛かったの、あれさえしないなら幾時間でも、私頑張るワ」



と云った。

「あは、でも、初め目隠しを取ってやった

って来て、台所の隅の薄暗い処に置き、毎日蠅や蚊を与えて飼育し始めた。そして一方、

時は真蒼になってガタガタ震えて、暫くは悲鳴もよう上げなかったじやないか。あの姿は本当に傑作だったよ。僕は胸がスーとした」

と云ってやると、妻がギューと僕の膝を掴って「あなたはひどい人ね、覚えていらっしやいよ。今度は一度あなたにしてあげるわ、どんなに初めは気味が悪いが、試してあげるわ、いゝこと……」

僕は慌て、「嫌だよ」と否定したが、内心は自分も美しい妻の手であの様な責めを受けて見たい様な好奇心が湧いて来ていた。

それから、あの夜に使った十二匹の夜守は翌日大きな金属製の虫籠を買

探し出しては獲って、その数も段々増えて三十匹以上になって来た。

それから数日後の、或る土曜日の夜。

今度は美しい妻の為にあの青白い螢光燈の下で、僕は妻が自ずからの体験に基き考案改良した新しい方法の責め手で責められていた。

上半身裸体にした僕を、後手に鎖で頑丈に縛り、両足も揃えて縛ると妻は細いロープで迄一定の間隔を置いて縛りつけた。そして今度は僕の首に犬の太い皮の首輪をはめて、その止金に鎖をつなぐとその先を例の天井から下った鉤に掛けて引きしぼって、僕の体を垂直に立てゝしまった。これで僕は動けば首がしまつて苦しくなるから、完全に体の自由を束縛された形になってしまった。(彼女は過日の自分の経験から、両腕を縛って吊り下げると後で手が痺れて痛いので、楽な方法として考えたのであろう)それにしても今夜のロープの締め方は痛い。

「おい、痛いよ、もう少しゆるくして呉れ」と頼んだが、

「駄目よ、男のくせに、何なの、この方が実

感が出ていゝのよ。さあ、文句の云えない様に猿轡をして上げましょうね。お口を開いて」

と云って無理矢理に口の中に、何時用意したのか小型のゴム鞠を押込んで、その上から絹布にゴム引きのした物でギュと締めて、後頭部で結び付けてしまった。妻ながら良い方法を考え付いたものだと思心した。

「少し苦しいか知らないけど、辛抱しているのよ」

と云って、今度は台所へ行って例の夜守がウヨ／＼して居る籠を持って来ると、一匹づつ取出しては上手に糸でく／＼り、次々と前日僕がした様に一定の間をとってロープに結び付けて行く。思わず膚がゾ／＼として寒気が立つ「ウウ！」と猿轡の下でうごめくと、彼女は面白そうにニツコリ笑って、

「どう、いゝ氣持でしょう？ まだ／＼これからよ」

と云って、次々夜守を僕の体のあちこちにロープに結び付けて、二十数匹の大小様々のグロテスクな夜守が所狭しと全身を駆け廻って暴れる氣味悪さ、籠にはまだ十数匹程残されてある。

「ウワ！ 堪らん、貞子、許して呉れ！」

と思わず悲鳴をあげてしまった。

「ウフフ、いゝ氣持でしょう。どう？ 此処迄は女の私でも辛抱したのよ……まだ、これから私の新案特許品を用いて、此間のお礼にいじめてキューとあなたに音をあげさせてあげるわ、いゝこと！」

と云うと、首輪で吊るされた儘で夢中になって、体に縛りつけられたロープを解こうと身をよじらせて暴れて居る僕をその儘にして部屋を出ると、暫くして透明のナイロンの大きな袋を持って入って来た。おや！ 何をやるのかな？ と見て居ると、其の口を開いてあとに残った籠の中の十四余の夜守を全部その中に入れてしまった。そしてそれをさげてもがいている僕に近づくと、

「ちよっと、目を閉じて居らっしゃいよ」

と云ったと思うと……スッポリと僕の頭の上からかぶせて、袋の口に付いた紐をキューと頸の所で締めて、グル／＼巻いて結び付けてしまった。

その瞬間、眼を開いた僕は「アツ！」と猿轡の中で叫んだ。

見よ目の前に、そして頸に頭に頬、そして額にベタ／＼と十数匹のグロテスクな夜守が逃げ口を探して、ナイロンの袋の中を駆け廻

るその気味悪さ——思わず臉を閉じて、

「こりや、ひどいよ、堪忍して呉れ……なあ貞子取って呉れ、助けて呉れ、あやまるよ、貞子頼む！」

と、さすがの僕も、これには完全に悲鳴をあげてしまった。

「オホホ……男のくせ怖いの、意気地なしネ心配しなくてもあなたの顔は噛まないわよ、噛まれても千枚張りの顔でしょう、ウフフ、本当に傑作だわ、苦しくない様に小さな孔を沢山あけて置いたから大丈夫よ」

と云った。怖る／＼細そ目をあけて透明なナイコンを通して見ると、彼女は戸棚からパーミントのグラスを出すと、チビチビ飲み乍ら安楽椅子に寝そべって、縛られた鎖をガチャ／＼鳴らして不自由な体をくねらせて暴れて居る僕の有様を、さも面白そうに笑い乍ら眺めて居る。

青白い螢光燈の光は、彼女を美しい妖婦のように見せた。

それにしても腋下や股を絶え間なくうごめく二十余匹の夜守には、全身がゾク／＼と寒気のする様な慄つたいとも気味悪いとも何とも云えぬ感じに、知らず／＼身をくねらさずには居られない気持……ナイコンの袋の中の

夜守には全く弱った。

こんな時は猿轡のお陰で口へ入るのは助かったが、鼻孔や耳に時々頭をつっ込むのは困った。——其の中、段々疲れて来てグツタリとなると、

「あら、もうストリップ・ダンスを止めたの——もっとして見せてよ、そうだわ、レコードを掛けて上げましょうか」

と云って電番をかけた。「コンパルシータ」の曲である。そして彼女はその曲に合わせて天井から鎖で吊され、裸体に十数匹の夜守のうごめいて居る僕の体の囲りを踊り始めた。先程から飲んだパーミントで少し酔ったのか、両頬を桜色に染めた彼女の肢体は艶めかしく、夜守が数匹うごめく透明のナイコンを通して見る僕には、異様な興奮を覚えさ

せるにあまりあった。

一曲のレコードが終ると又一曲、今度はボレロで、彼女の好きなレコードが次々とかけられて、約十枚程過ぎた時は、さすがの僕も身体の疲労と異常なる刺激の連続に、心身共にグツタリとなって、目がくらむ様な幻想に陥った。

「もうあやまるから止めて呉れ、貞子お願いだ、堪忍してくれ、頼むよ……」と降参した。

即ち此の「夜守責め」は、結局僕の完敗に帰した訳である。今、僕はこの面目を取り戻すべく、新しい責め手を考案して居る。新しい構想を実験した時には、改めて諸君に御報告したいと思う。

(おわり)

責めのアイデアを募る

本誌に発表する口絵の責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういった構図やポーズ、或はこういった趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。万難を排して御希望のものを作成の上、御送付申し上げます外、貴方の考案されたア

アイデアによって誌上を飾りたいと思います。採用分並に優秀なる企画に対しましては、写真或は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外に必ず略画、若しくは説明図を添えて下さる様御願ひ致します。機会を見て責めのアイデア・コンクールを催したい考えです。奮て御応募下さるようお待ちしております。

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

サド女性の覆面

山田正実

(私達夫婦生活の告白)

女性の顔の中で私にとって一番大切なのは鼻である。大切と云えば眉目口唇も決してどんなものでも良いと云う訳ではないが、のっぴきならぬ形の良否を問う場合、容易にゴマカシの効かないのが鼻である事は勿論だし、又私の場合他の条件がどんなに良くっても鼻の貧弱な女の顔には殆んど魅力を感じない。

女性の鼻は形良く、小鼻がキリツとした感じで、全体としては、やはり高く堂々としていて、下から見た場合鼻腔の形が整って、且つ相当大きい方が良いと思う。理想はグリア・ガースンの鼻。日本人では山口淑子など。此の点、私は妻のM子に或る程度、満足の意

を表す必要がある。

鼻腔を下からのぞかれる事は、日本の女性にとって気持の良いものではないらしいが、のぞかれて羞恥心を起す女を私は好まない。むしろ「あたしの鼻の腔をのぞいて御覧なさいな。随分大きいでしょう」と云わぬばかりに、挑みかゝるような女性であつてもらい度い。

鼻腔を完全な位置からのぞくと、小鼻のふくらみを裏側から観察する事になり、それより中心の側に腔の奥がのぞかれる。M子の鼻腔は殆んど鼻頭の近くまで切れ上って居るから、紅を使って鼻腔に化粧をしていて、光に

照らして見た時、不潔感は全くない。大体日本の女性は鼻毛が黒いため鼻腔が不潔に見え勝ちだが、それにもまして手入れを怠っている女が随分多いのではあるまいか。鼻毛も適当に抜き取り、紅をさして美しくして置く可きで、鼻の形に自信のある女性も接吻した瞬間に相手の男性に愛想を尽かされては気の毒だから敢て一言して置く。

女性の怒った顔は美しい。殊に凄愴な忿怒の表情は、それがやさしい美人である程魅力が加わる。吊り上った鋭い眉を画く事が一時流行したが、此んな流行も結局やさしさの中に一点の凄味を出す為のもので怒りの表現



に外ならない。怒った女性の顔を好むのは私一人だけではないらしいのである。

然し、幾ら怒った顔がよいと云っても譬若の面では色気が無い。元来譬若は「怒り」と「怨み」を表現しているもののようで、女らしいふっくらとした柔かい丸味に乏しい。私は女性の頬から頤へかけての丸味を帯びた線

と、ルーシユを塗った水々しい唇はどんな時でも飽迄女性的であってほしいと思う。眉を逆立て眼を吊り上げ、鼻筋にしわを寄せ小鼻を拡げた忿怒の形相。惨虐性の表現は豊かな頬の丸味と花瓣の如き紅唇とに对照して初めて倒錯感情を刺戟するのではあるまいか。

若い美婦人の、高く美しい鼻に対して、何らの方法を以て加虐的圧迫を加える事は、当然興奮を呼び起す問題である。

女を縛り、さるぐつわをする事を喜ぶ人があるし、又される事を望む女性もあるが、此れは男性サドと女性マゾの場合であって、若し逆に女性サド対男性マゾの時は此れがどのように変化し、どのような手段を求めるであろうか。勿論女が男を縛り男がさるぐつわをされゝば恰度逆となるが、私はサド女性の鋭く吊り上った眉と同じく、高慢な美しい鼻がそのまゝであるよりも、その鼻の魅

力を利用して、サド女性自体の何らかの扮装がほしいのである。勿論アイシャドウを使って鼻を一層立派に見せる事も考えられるし、芝居の役者の如く、「くまどり」をする方法もある。

然し、私の云い度いのは――。

さるぐつわをされた女が鼻孔を激しく圧迫されて表情を引きゆがめた顔にも、捨て難い魅力があるとしたらそれを見る相手がマゾの場合、サド女性が自分で自分の顔、特に鼻に対し何らかの手段を用いて絶えず圧迫するような方法を用意してもらい度いと思う。

私は少年の頃から女性の覆面に特別の興味を感じる性癖があった。青年に達するや益々それが激しくなり、女給、娼婦と云った階層の女達に対し手段を尽くして、色々な覆面をさせて見たものである。M子とは平凡な見合結婚ではあったが、漸次私の性癖を理解して呉れるようになったのは、私にとって一生の幸福と云えるかも知れない。殊にM子の容貌は私の理想に叶っているや否やと云う点では大体、八〇%を与え得るのである。

女性の覆面、特に頬を圧迫する最も手軽で且つ完全なものは手拭の頬被りである。昔風の盗人被りとか云われている被り方で、鼠小

僧式のやり方だが、此れは考えて見ると一番女のいやがる被り方だろう。然しマゾから見場合、その不気味な感じから受ける異様な恐怖観念、若しくは敗北感とも云えるところのものは中々得難い境地である。

女の顔を出来るだけ鋭くメーキャップを施して置いて、手拭を七分三分に頭にかぶせ、長い方の端をひねって鼻腔に引っかけ反対側の眼尻の辺りで結ぶ。少し強くしめると手拭は鼻腔を上の方へ圧迫し、口で呼吸をしなればならなくなる。手拭をしめつける時には一旦鼻に引っかけてある部分を外して、しっかりしめつけて完全に結んでから引っかけ直すと、鼻が歪まなくてよい。

鼻頭がグツとふくらみ、上の方へ吊り上げられて、小鼻がしっかりと手拭に噛みつく。

M子は、はじめのうちは、羞恥の表情を見せたが、此の頃は平気で、自分でさっさと被って見せ、さあこれで夫を征服し得ると云う自信に満ちた態度を示すようになった。

さて、此処で一応全体的の扮装



にふれてしまいが、私も女の覆面に附随してその服装に付いては、予々興味を感じていた問題で、女の男裝帶刀の姿も、又中々面白く思っている。但し現代風の背広やズボンなどは、全然興味を感じないのはどうした事であるのか。

結局、私の場合は女性が昔風の男裝をする場合に限られて興味を起すのである。

此の類被りの場合に於ける女性の服装は、女やくざの殴り込み（よく女剣劇にある筋書だ）或いは女の強盗と云う情況でやれば申分

がない。従って和装の方が良い事は勿論で、洋装では全然調和を欠いてしまう。出来るなら手甲脚絆を着け長脇差や七首も用意して置きたい。

又、此処で忘れてはならないのは、女が禪をした姿である。

豊かな乳房の隆起と細い腰。豊満に発達した臀部。その女性の裸身にガツチリとしめ込まれた相撲用の禪。

私はM子に色々な扮装をさせる前、必ず此の禪を力一杯しめてやり、そしてその感触に蕩然とした彼女の眼を見るのが好きである。

さて、そのしめ方であるが、女がしめる場合、臀部から股間を通して前へ廻す部分を、思いきりひねって太い一本の綱の如くにし、しっかりと喰い込ませて、更に前から後へ重ねる部分を拡げるようにする。

次に、さらし木綿を若干用意して置いて女の禪の上部から胸へかけて巻き上げる。胸の左の乳房の横へ白鞘の七首を差しはさむと、柔かい女の胸に抱かれた鋭利な兇器としての実感が倍加して来る。

着物は裾を後へまくり上げて帯にはさみ、いわゆる尻からげの恰好とし、片肌ぬぎの姿もよいが、赤いしごきで強くたすきをかける

のも、腋下と云う有力な性感部を刺戟して一興である。勿論、着物も帯も女物を使用するのである。

私は女剣戟を見る事もあるが、折角の女が態々男の着物を着て、ちよんまげ姿となり、男とも女ともつかぬしやがれ声でものを云うのを見ると、一体、何の為の女剣戟だか訳が判らなくなる。

女は飽迄も女として表現し、そのやさしかるべき女が男も及ばぬ惨虐性を發揮するところに、魅力の源泉が存在するのではなからうか。此の意味で考えればイヤリングやネックレスをつけさせて置くのも又効果的である。

さて最後に、長脇差を女帯の左脇のところへ落し差しにさせる。女に自分でさせると良い。やさしい左手で長い柄頭をおさえて見栄を切るような物腰をさせて御覧。下手な女剣戟など足許にも寄りつけないくらいな魅力を発散する。

美しい着物と帯。それに対照して長くて太い刀と云う殺人道具。美しい女の顔と不気味な頬被り。此処に倒錯的興味の極点が存在するのであるまいか。

M子は此の頬被りをした上、七首を抜いて口にくわえる。此の場合、鼻腔は手拭でふさ

がれているから口で呼吸をしている訳で、その口に七首をくわえるとすれば、普通では完全に呼吸が止まってしまう。そこで唇を大きく開き歯と歯の間に抜身を噛みくわえ、上下左右の歯の間隙からシェウシェウと呼吸をする事になる。その結果は歯を激しくむき出して、否応なしに惨虐性を表現した顔となる。此れは彼女の考えついた最高傑作である。

鼠小僧式頬被りに次いで興味のあるのは覆面頭巾である。

鞍馬天狗式の宗十郎頭巾を被ると、顔面、頬、頤、頭髮全部に対して重苦しい圧迫を感じる。殊に耳をふさがれるから自分丈別の世界へ這入ったような氣持にさえなってくる。

映画で時々、男装覆面の女優を見る事があるが、頭巾がまるではれ物にさわるように顔にまとわりついている恰好では、興味が極めて稀薄である。何と云っても、もっと強く顔面を目深に覆い圧迫した状態でなくては面白くない。此の頭巾を女が被ると鼻腔をのぞく事が出来ないのは、前の頬被りの場合も同様だが、更に鼻腔が上方に圧迫されている情況も見ることが出来ない。さりとて鼻を覆わなければ又覆面の価値がない。此の覆面の良さは眼だけ出した女性が、じっと頭や顔に対する圧

迫感を味うような内省的な眼つきをする——その眼に一種悩ましい魅力がひそんでいる点にあるのだ。

M子は手拭で頬被りをして、しっかり鼻腔を圧迫したその上から、更に此の覆面頭巾を被ると、重苦しく暑苦しい圧迫感の為に氣持が変化して来ると云っている。

此の頭巾を被った時の身体の扮装はやくぎや強盗では都合が悪いので、全体的な調和のためから矢張り侍姿が必要である。女の着物を普通に着た上から袴をつける。大小刀を腰にさす。ちよっと振袖若衆と云った姿が出来る。袴は男のものでもよい。胸の辺りの乳房の隆起の横に突き出した長い大刀の柄は中々良いものだ。

昨年の盆踊りに、M子は此の姿で踊ったもので、近所の人々は私が教えるまでM子である事が判らなかつた。

やさしい美しい女性が殺伐な覆面をして、刀を腰に差した姿の魅力は、更に飛躍して女に鎧を着せて見たい願望を起させるのは当然であろう。

私達夫婦が手に入れたのは、戦国時代以後の胴丸で、淡紫色の胴の正面に龍の蒔絵があって、桃型の兜と黒い鉄面が附属し、胴の背



はおかなかつたのである。

殊に黒い鉄面の鼻下にある白いかめしい髯と噛みつきそうな恰好の口部と、

そしてその口部からのぞき見える彼女の

部にはほろを着ける為の鑑があって、待大将級の用いたものと思われる。

M子は五尺八分、十四貫と云う女としては比較的体格のよい方だから、着せて見ると中々立派な武者振である。

然し鉄面で顔を覆い、頭髮も兜のために全然見えなくなってしまうので、女を感じが薄れてしまう。其処で手甲や脛当を着けた上に銘仙の赤味の柄の着物を着せ、その上から鎧の胴やくさずりを着けて見たら、長い赤い袂が淡紫の胴に反映して不思議なまでの倒錯感を味う事が出来た。

ともあれ、明るい螢光灯の下に出現した女武者の魅力は、私の興を絶頂に追い込まずに

ルーシユの唇との対照は益々以て倒錯感の極点とも云うべきで、又鉄面の凄まじい形の鼻部を仰向きにすれば彼女の紅をさした鼻腔が、激しい興奮に息づきつゝ頑丈な武張った孔の内側に生々しく露呈されるのである。

見るからに逞ましい胴の太さ。物々しいところやくさずり。威力と強さを表徴する兜や鉄面。そしてそれ等の物に包まれているM子と云う女の肉体。

「どんな気分だい？」

「どこからかゝって来い、と云うような気持よ。」

M子は柔道を習った経験を持っているし、又女学校では薙刀を習ってもいた。本年三十

才の油の乗り切った彼女の肉体は、胴丸鎧にガツシリと固められ、私をねじ伏せ組敷いて存分にサド行為を発揮し、私は満足の極点を味わったものである。

女性が私を虐待するのは、私の望むところであるが、さりとて無用の苦痛を味うのは、私はきらいであるし、又妻のM子も本意ではなからう。従って奇譚クラブを見ても、首や手足が千切れ、血が流れ、或いは傷が露出すると云った場面は凄惨で見る気が起らないのであって、「痴迷」の筆者、鬼山絢策氏が書き始めに記述された如く、女に自由自在に翻弄され遂に殺される男に私自身がなり度いのである。然も鬼山氏の如く私自身が何の苦痛も受けないような情況に於てゝある。絵を画いても女が男を組伏せ首をまさに切ろうとする場面で、出来得るなれば戯れに演じているような表現の手法が望ましく思う。少し我田引水になるかも知れないが、兎に角此れは性慾の分野に於ける問題であるから、出来るだけ無邪気で罪のないのが良いのではなからうか。

私が会社から帰宅し湯に浴して茶の間で晩酌を傾ける頃、M子は既に顔を鏡どくメイクヤツプを施し、時としては自分で着物の下に

輝すら締めている事もある。夫婦間の秘事に入る前には、必らず男女斗争の真似事が演ぜられ、その結果は例外なく女であるM子が勝つ事になっている。稀れに私がM子を組伏せると「口惜しいわ。あたしの方が強い筈なのに」と云い、或る時など、私の抵抗が執拗であった為に涙さえ浮かべてくやしがつた事もある。

女が男より武術力倆に於て勝れて居り、相手の男性を押し倒して組伏せ、自己の力を誇示して生殺自在の権を握り、「さあ、これからどうしてやろうかな」と云った情況が、私の好む筋書である。

そのモデルであり、相手役の妻のM子は元来海のものとも、山のものとも判らない見合結婚の相手の娘でしかなかったのである。

結婚当初は、妻も純心であり私も大分臆病で鼻腔をのぞき込む事位が関の山だったが、そのうちに接吻の際に於ける鼻腔の問題について、今から考えると幾分滑稽と思える意味の説明を一度やった後、M子の鼻腔に手を入しなればならぬ習慣をつけた。彼女は毎日鏡に自分の鼻腔をうつしてのぞき込んでいるうちに、自分の鼻の穴と云うものに対して羞恥を失って来たらしく、むしろ進んで露出的

態度に出るようになって来た。次いで私のひねり出したのが「寝化粧に対する夫としての私の好み」なる要求で、昼間は初々しい愛らしき若い妻としての表現は一応現在の儘で及第だが、夜間はそれに対照して逆に夫を取って喰い殺しそうな妖婦に早変わりする事の必要性——と云う題目で屁理屈を弁じて、遂に眉尻の半分を剃り落とさせてしまった。以来、思う存分吊り上った眉を引く事も出来るようになり、又青いアイシャドウを用いて凄いいメーキャップを施す事も始めたのである。

そうして「一度御芝居をして見ようじやないか」と云った処から頬被りが始まり、長い過程を経て今日に及んだのである。その間、慎重に時期を撰んで何度かM子に告白もし、納得の出来るように理解させて来たお蔭で、幸い夫婦仲も円満で且つ凡そ退屈と云う事が感じられないのである。書き出して見れば十年の夫婦生活に於ける此の問題は相当長文になり、拙い上に悪筆で、もう此れ以上の記述は次回にでも致し度い。

最後に私がM子の顔に合わせて拵えた仮面の事に付いてちよつと説明する。

此の仮面はアルミニウム製で非常な苦心をしたものである。その目的とするところは矢

張り鼻腔に対する加虐方法の一種とも云うべきで、唇を残して顔の上半面に被せるのである。鼻腔を上方と左右へ押し拡げようになつて居り、上と左右に带状の留め金があつて後頭部で、此の三本を合して錠前を附したものだ。

被った感じは勿論耳鼻科の医者が鼻腔を診察する時に使う道具の如く、然も左右の腔が同時に三方へ引っ張るように拡げられ、何となく呼吸が楽に出来るような錯覚も起る。拡がった腔から吞吐される鼻息は頗る荒いものでシユーと云う音が出る。

此の仮面の鍵を、私が何処かへかくしてしまひ、M子は仮面を自分の顔からとる為には否応なしに、私に鍵の所在点を白状させねばならない。其れが又戯劇のストウリーとなつて上演される訳だが、又此の仮面の上へ頬被りや頭巾、或いは兜を被ると云つた方法も、重苦しい圧迫感があり、又拡大された鼻孔にこよりを入れて、くさめをさせたり、イヤリングの金鏤をつけて見たりするのも面白いものだ。拙いながら別に面を添付して置いたが、幸いに掲載されれば諸兄姉の御参考となるう。

(挿絵は筆者描くもの)

(完)



マゾ男の 秘密レター

青 柳 謙 次

私には妻も知らない秘密がある。それは逞ましい同性に全裸のまゝ縛られ、責め苛まれて喜ぶと云う悲しくも宿命的な性癖とその体験なのです。

私は少年時代から思春期、そして復員後より妻子のある現在に至る迄、苦痛にゆがむ男性の緊縛残虐絵に堪らない魅力を感じ、全ゆる雑誌の中からその様な絵を求めては、大切に保存して来ました。

不思議に美しい異性を見ても、何の魅力も快感も起らず、女性の責め絵などは自分自身で男性に描き変えて模写し、私自身が全裸で責め苛まれて居ると仮定して、一人で楽しんで来た三十数年間でした。

或る時は人知れず荒縄を我が裸体に巻きつけて、深夜自虐しつつけて来た事も幾度か、その憧れであった責めの夢が、緊縛の熱望が一昨年の秋に、満されぬマゾヒストとしての苦悩を、奇ク読者通信欄から相対者を求めたいと書き送ったのが奇縁となって編集部男性最初の緊縛מוד、責めモデルとして使用され、永年の夢が実現されたのです。

そして更に、私の思春期時代の日記の一部と稚拙な画とを「秘密日記」と題し

て編集部の御厚意でKK通信第四号に発表して戴いた時の感激は今もって忘れる事が出来ません。

其の後緊縛への憧れが益々強烈となったのは云う迄ありませんが、現在ではサジストの相対者を得て、誰も知らない秘密の場所では被虐、加虐の世界を心から楽しみ合って居りますが、その彼と文通したアブノーマルレターの数々を、同好者諸兄の為に思い切って公開し、レターを通じてそのブレイの内容を多少なりとも御推察して戴ければと思い、此の拙ないペンを走らせます。

○
K様、突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。私も奇クの熱烈なる愛読者の一人ですが、幼少の頃より同性にのみ魅力を感じて、男性責め絵独特の妖しい魅力に憑かれて深夜人知れず荒縄を我が胸に巻き付けたりして来た、馬鹿なマゾヒストの男です。

はからずも、奇ク拾月号の読者通信で「サジストの男より」の貴方の通信文を拝し、嬉しさのあまり、思わずこの拙文のペンを取った次第です。と申せばお察し願える事と存じます。

私は本年数え年三十二才の或る農村の無学

な養子青年にて、現在では二児の父親ですが少し絵心があり、あられない男性ヌードの責め絵を描きつゝ、私自身が責め苛なまれて居ると仮定して一人で楽しんで居ります。

是非一度文通をお願い致し度く存じますが貴方の通信文ではモデル云々とありました。責め絵のモデルでしょうか、それとも写真モデルの事ででしょうか？ 私の職業は農業ですから色も黒く、指も筋くれ立って、決してハンサムな男では御座居ません。若し仮にK様には年下か中年の美男子との文通を望まれて居られるのでしたら、御返事は戴けなくとも結構なのです。

尚同封の拙ない責め絵は、私の描いた密画の一枚です。御覧下さい。 謙次より

○
御手紙心から嬉しく拝見しました。折り返し御返事載けるとは夢にも思っ居りませんでした故、その喜びは又格別でした。

奇ク十一月号での通信文は貴方の推察通りこの私です。十月号での貴方の通信文を拝見して、同好の友を得た喜びに、矢も楯も堪らず、編集部をお願いして貴方の御住所を通知して戴きました。早速御文通をお願い致し度く思っ居りましたが、見ず知らずの貴方に

突然、アブノーマル的な御手紙を差し上げては、御迷惑ではないかと、今日迄堪えて居たのです。

御書面を拝見して、私如き者にでも御文通を求めて下さる貴方のお気持が、非常に嬉しくて、どう感謝してよいのやら分りません。出来得れば、今すぐにもお会いして、貴方の写真モデルとして緊縛され、責め苛なまれてその素晴らしい雰囲気、酔いしれたく存じます。然し養子の身分である私には、外出時間の自由に恵まれず、今更養子の身分が口惜しく残念に思われてなりません。

然し、私が自由に外出の得られる日があれば、その時こそは、お互いに悩める心を慰め楽しめ合います。私はどの様なポーズにも堪える自信がございますし、又残酷なポーズをすればする程、私の心理が世にも激しく刺戟され、その楽しさは得も云われないのです。

尚最後に、私は某雑誌社の男性ヌード責めのモデルとして、その編集部の方から緊縛、拷問された体験があります。そのフォトも三十枚程頂戴して居ります。お会いした時には全部お見せ致します故、楽しみにお待ち下さい。お会い出来る日を心からお待ちしつゝ、

ンを置きます。

青柳 謙次

○
懐しいお便りと写真を有難う存じます。

私が想像して居た以上に、上品でハンサムなお方なので非常に嬉しく思いました。

早速、アルバムに私の心の友として大切に保存致します。尚、それから一緒に同封されていました責めの写真のとても魅力的な素晴らしさには、私の異常心理が世にも快くうずきたち、お恥しい話ですが、激しく興奮させられました。特に背後から股間にかけて非常に珍らしい縛り方は興味以上に珍らしく感じられ、是非一度、私もこの様にして縛られて見たく思います。

この写真の人物を貴方が縛りそして撮映されたのでしょうか、このモデルの方は誰でしょう。少し羨やましく思います。然しこの責めフォトは貴方の大切なコレクションの一部ではございませんか、若しそうでしたら私の為にわざ／＼お送り下された貴方の優しいお気持が嬉しく、なんと感謝申してよいのやら本当に有難うございました。

あゝ、一刻も早く貴方とお会いしたい！そして貴方の卑しい奴隷として、お気の済む迄責め苛なまれて見たきものを！ 然しこの

様な私達のアブノーマル・プレイも、何時かはきつと実現される事でしよう。いゝえ実現されます。私の自由に外出出来る日が得られた時こそ！ K様それ迄お待ち下さい。

次にモデルの時の感想ですが、お書き致しますと大変長くなります故、詳しくは御面談の折りにお話し致します。某雑誌社とは貴方の御推察通り奇ク社です。場所は奈良で私を縛ったのは編集部の染田氏と辻村隆氏の二人で、私はパンツ一枚の裸体となり辻村さんが後手に縛り上げてパンツを引き剥いだのです。緊縛の快感に激しく興奮した瞬間の堪えがたい恥しさは、今もって忘れる事が出来ません。ついにはあらゆる残虐なポーズで責め苛なまれました。いずれ機会を見てその体験談を奇ク誌上に発表させて頂きたく思っています。

それから貴方の云われる通り、責め場所は土蔵の中が一番適当だと思いますが、あの暗い土蔵の中で、カメラが使用出来るでしょうが、貴方によって私の縛られた残虐なポーズを写して戴ければ、どんなに嬉しい事でしよう。では御返事お待ちしつゝ、

謙次

○
過日は突然訪問などして誠に申し訳ござ

いませんでした。御迷惑とは存じつゝも是非一度御面談致し度く思ひ、丁度雨降り仕事も出来ず絶好のチャンスとばかり、思い切ってお訪ね致した次第です。

プレイの実現が出来なかった事はかえすがえすも残念でしたが、然し御多忙中にもかかわらず快く御面談下された事が嬉しく、又帰りに際しては結構なるおみやげ迄頂戴し、なんとお礼申し上げてよいのか唯感謝あるのみです。

御面接してみても、益々貴方に対する近親感を抱くと共に、是非一度貴方に縛られ虐待されたいとの慾望が強烈となり、出来得ればあの時もっともっと責めや緊縛について話合ひ度く存じました。貴方によって大の男の私が全裸にされて、あらゆる緊縛の数々で責め苛なまれる場面を想像しますと、胸が高鳴るのをどうすることも出来ません。実際の密技は



気心の知り合った者同志が互に縛り縛られ、愛し愛されてこそ真の緊縛の醍醐味が味われるもので、今後は大好きな貴方からモデルでなしに、昔の囚人として本当に拷問され縛られて、責めの快感を心から味わいたく思います。貴方に縛られて心から楽しめたと云う前便の写真モデルの方が非常に羨ましく感じられ、出来得ればその人とも面談致し度く思いますが、その方の住所がわからなければ駄目ですね。

尚御面接の折、この私を見られて、なんだ



こんなつまらぬ男かと、幻滅を感じられた事
と思いますが、何卒文通だけでも末長くお願
い致します。

取急ぎ過日の突然訪問のお詫び旁々御礼
迄。

最愛のK様。過日は御多忙中にもかゝわら
ず、私の満されぬ夢を実現して下され嬉しく
思います。色々と緊縛について無理なお願
いをし、本当に済みませんでした。何卒あの時

の我儘をお許し下さいます様、右伏してお願
い申し上げます。

薄暗い土蔵の中で全裸にされ、荒席の上に
引きすえられた時は、本当にこれから白状を
強請される罪人の様な気が致しました。キリ
／＼と後手に縛られた瞬間のうずくが如き妖
しい興奮、するどく掛けられた忘れ様として
忘れられぬ緊縛の刺戟と快感、苦痛は激しく
も又快よく、浅ましくもみじめな我が責めら
れポーズの数々には、虐げられる者のみの喜
びがありました。

私は残虐な責めも好きですが、淫虐な責
めも又好きなのです。願わくば次の再会の
場合には奴隷として、否、飼われた畜生と
して、あらゆる侮蔑と拷問で責め抜いてほ
しいと思います。例えば全裸で柱に後手に
縛り身動きも出来ぬポーズや、後手の縄尻
に重い石等縛りつけ、さながら人間牛馬の
如く鞭で追い立てている石引きのポーズ等
は、又変った素晴らしい責めフोटとなる事
でしょう。

然し、貴方の非常に刺戟ある縄の掛け方
には感心させられると共に、益々虐待され
たいと慾望が強烈になる事をどうする事も
出来ません。あの日の事を懐しく回想し、

貴方の面影を忍んでおります。

尚同封の画は、私の責めのアイデアの一枚
です。御笑覧下さい。責めフोटの焼付を心
から期待しています。

待ちに待って居りました素晴らしいフोटを
お送り下され、有難とうございました。心よ
り厚く御礼申し上げます。

自分の縛られたポーズのフोटを手に取っ
て、興奮につぐ興奮とはこの事でしよう。物
凄く程堪能させられ、その夜はとても眠れな
く弱りました。唯同じ様なポーズが多くて残
念でしたが、次のプレイ迄には、あらゆる残
虐なる責めポーズの数々を考察しておいて下
さる様せつにお願い申し上げます。プレイの
場合はもう少し太い縄で胸部を縛め上げては
如何でしょう。写真にはもう少し太目の縄の
方が実感が出るのではないかと思いました。

次のプレイの時は、貴方に失礼と存じます
が髯面の儘お会いし、拷問の苦痛にゆがむ罪
人としての顔の表情に気をつけ、責めフोट
として魅力的で実感のある気分を現わしたく
思っております。縛られて思う存分責め苛な
まれましたのですが、自由の得られぬ身が情な
く悲しくなります。気もいらいらとするので

すが、次の私の外出出来る日はお盆の二日間
なのです、この日までお待ち下さい。

では又お手紙にて。 貴方の奴隷より

K様。過日再度のプレイはとても楽しくて
貴方に縄尻を取られて後から突き飛ばされ
て、土蔵の中を引き廻された、あの時の気持
は現在でも忘れる事は出来ません。

海老責めに縛られて鞭でビシリ／＼と叩か
れた時、生れて初めて鞭の味を、責めの醍醐
味を知りました。二十回程叩かれ思わず悲鳴

コンビネーション随想に答えて

長谷川 洋氏に

新妻 吾

奇ク七月号に私への名指しでコ
ンビネーションにたいする意見を
求めていられるので、簡単にお答
えします。一月号のあなたの「コ
ンビネーションについて」は興味
深く拝見しました。また「エロチ
ックな、マゾ的な下着」というあ
なたの気持もわかります。たしか
にコンビネーションは便利で暖い
ばかりでなく、あまりにも実際の
なその構造から多くの少女少女に
性的関心を起させ、羞恥を刺戟す
るものです。したがってマゾヒス

トのあなたがこの下着に愛着し、
それを利用するのは当然かもしれ
ません。 コンビネーションは私も知って
います。たしか幼年時代に一度着
せられた記憶があります。だが不
愉快ですぐ脱いでしまい、二度と
着ることを拒みました。これはあ
なたの言う「マゾ的な服」のため
かどうか知りませんが、元来私は
あまりに暖い肌着が嫌いで、中学
に入っではじめて洋服を着るまで
はキモノの下に股引を穿いたこと

をあげるなんて、真のマゾヒストではありま
せんね。然し私は身体に傷つくのを恐れるの
です。妻の眼が怖いのです。アブノーマルな
我が心の秘密を全裸になった時、妻から発見
されるのを恐れるからです。貴方はこの様な
私を嘲笑するでしょうね。でも嘲笑って下さ
ってもいいのです。私は貴方の囚人であり奴
隷ですからね。

貴方に吊し上げられた責めのポーズは正直
に云って見ますと、快感を通り過ぎて激しい
苦痛のみで全身が安定せず、今にも失神する

もなく、真冬にも足袋を穿かなか
ったので有名な位ですから、性的
関心を別としてもコンビネーション
はいやだったのです。
ではサディズムの立場からの利
用価値如何という問題ですが現在
の私はいかなる美少年にも惹かれ
ないからもちろん対象は女ですが
やはり無関心です。女にコンビネ
ーションを着せたい衝動は全然起
きません。以下その理由を述べま
すが、これはあなたの異常な執着
を批評することではないのです。
裸体とちがって服装にたいするセ
ンジュアルな好みは——多種多様
さと加工性から——千差万別でし

かと思われる程でした。現在の私は、前回に
送って戴いた我が責めのフォトを眺め、こん
度のプレイの場面を懐しく回想し、今日また
人知れず自虐行為を繰り返して居るのです。
私の御主人である貴方に、農繁期の為とは云
え今頃になってペンを取った失礼を、何とお
詫び申してよいのやら、この罰として再度の
プレイ実現の折には思い切りあの薄暗い拷問
室で、着衣から半裸、そして全裸に引き剥い
で、あらゆる緊縛と侮辱で拷問して下さいま
す様伏してお願い致します。貴方の囚人より

かも排他的になりやすいものです
から、自分の趣味を押しつけるこ
とはできません。ただあなたの求
めに応じて私の気持を語るだけだ
と了解して下さい。
私がコンビネーションに惹かれ
ないのは、第一に、「単純に密着
しすぎている」からです。同じ意
味で股引や、バレエの練習のとき
のタイツ姿も同様です。なぜか
いうと、私は肉体の線だけでは満
足しないからです。くっきりと肉
体の線を表現するだけというなら
むしろ全裸体を求めます。ただ全
裸の場合に私は欲望よりも芸術的
な美しさを感じてしまうので、露

を描くならモデルは着衣よりも裸体のほうが望ましい。欲望は着衣によって刺戟されます。そのときの服装で肉体の線を鮮やかに示してほしいのは下腹部から腿の下部までであってそれ以外の部分は適当な膨らみが欲しいのです。もっと正確に言えば、着衣特有のシワやヒダが四肢の動きにつれて美しい変化を生み、それが間接に肉体を暗示する部分と、密着した部分との対照的效果を示してくれる場合に私は刺戟されるのです。だからズボンの註文はむつかしいので細すぎても太すぎてもいけないのです。

第三に、私が「精髓」でかいた凌辱の意味ですが、これは今までも多少誤解されている傾きがあるので、一言したいと思います。小説は別として現実の場合に、それは完全な当事者間の合意の遊戯にかざられているのです。凌辱という言葉と合意という言葉の形式的矛盾についてよく考えてみて下さい。もしも凌辱が相手の人権を侵害するものならば、これはすでに残酷であって、愛し合う関係にかななる情緒をももたらしません。侵害は侵害そのものの、苦痛は苦痛そのものだからです。たとえばあなたは、未知の人間になぐられて快感を感じますか？ そうだと言え、うそになります。真の苦痛は肉体的にせよ心理的にせよ情緒を惹き起しません。だからエリスはサディズムをアルゴラグニアという言葉に含め、次のように言っています。

「アルゴラグニアにおいてもそれと同じことで、要求されているのは残忍そのものではない。目ざされていのは、いろ／＼に彩られた吾々の日常生活の世界の底を流れている大きな原始的情緒の海にとびこんで、これに陶醉する歓喜である」また、――

「愛人に与えもしくは愛人によって与えられる苦悩または圧迫は、概ね無意識な心理過程によって、性的メカニズムの表象となり、そのメカニズムが正規に惹起するのと同様な情緒をその表象からひき起す……」

苦悩は擬似的なものでなければならず、その前提は愛人関係です。私が肉体的苦痛を与えることを好まないのは、肉体的苦痛は心理的のそれに比してより一般的苦痛となりやすいからです。だから私の言う心理的苦痛――凌辱も一般的なものとは区別されねばならないのです。それは愛するものの関係のなかで情緒として楽しめるものでなければならず、国境を越えたら通用しない母国語のようなものです。翻訳し、輸出し、第三者の言葉として発音されたら、言葉の形式的な意味だけが残って情緒は蒸発してしまふのです。

「たとえば銭湯へ行く時でもそのまゝ行かせて多勢の中で、この恥かしい下着を脱いだり着せたりさせるのです」と、あなたは提議する。これは完全な凌辱です。だが私の意味する凌辱とはちがいます。それは第三者の扶けを借りる

(この場合は浴客の眼) ことになりませんが、私は第三者の関与を拒否します。つまり、理解しあっている二人の仲なら何をしてもいいが、他人が私の妻を羞しめることは純粹の暴力だから許さないのです。これは自分たちの行為を知られたくないとか否ではなくて、愛情行為は本来排他的のものだからです。そして、私はサディズムもマゾヒズムも愛情の享樂に外ならぬと信じているからです。

文学は往々にして寝室に侵入します。これは文学が個性を通さなければ一般を描けないのだから真実です。然しローレンスは実際の性生活を親友の前にも持ち出しません。私たちも同様です。サディズムに限って第三者や群衆が登場するのは、そのテクニツクの興味だけが小説に採り上げられるのと、いま一つは真の苦痛と擬似的苦痛とが混同されているからだと思います。実際には個人の家庭ないし寝室に限定されるべきことは、サディズムが性愛であるかぎりノーマルな場合と変わりません。長谷川さん、あなたがコンビネーションを着ることも、愛する人に着せることも結構ですがその儘銭湯にゆかせ他人の視線で羞かしめる様な冷酷な事はなさらないで下さい。

或る手紙に寄せて

川 端 多 奈 子

六月号の誌上では、つい、うかうかと「私の好きな縛られ方」という、歯のうくような題で書いてしまいました。岡田さんの呼び掛けに、まんまと引掛ったような恰好ですが、文中に出てくる方々が皆、私とは何らかの関係のある人々なので、七月号にも引続いて書くようにとの編集部のおすゝめもありましたけれど、何んだか差障りがあるようでお断りしておきました、事実そのまゝの生々しい

記事を発表しますことは、余程の馬鹿でないかぎり書けないものらしいです。典型的なマゾとは馬鹿の代名詞だとさえ云われている位ですもの。どうせ、馬鹿は承知ですけれど。

或る雨の降っている、そうでした、ラジオで暴風雨警報が出ていた日曜日。私はレインシューズとレインコートに身を固めて、その座談会に出席した人の家を訪ねました。横降りの雨は相当きつく、

道ゆく人もまばらでした、こんな日、しかも、たまの日曜日を多奈子は一体、何を目的に人を訪ねてゆくのでしょうか、不案内の土地を、売店で買った地図を頼りにやと尋ねあてたその家は、生憎くとその人は外出して留守でした。

そして、数日して、近くの局留で小宮利子という名宛で来た私への便りは、——、こゝ迄、書いておきますと、私は編集部から転送された二通の読者からの手紙を受け取りました。一通はやはり、昨年の座談会に出席された人から一度、逢いたいから是非返事をくれという便箋に二枚の簡単なものでしたが、もう一通は、四百字詰の原稿用紙に二枚、裏表にぎっちり細字で書かれた相当長文のものでした。

一言にしていえば、六月号の私の告白文に対する感想のようなものですが、おわりに住所氏名を書いて、——又便りしたくなれば致したいのですが、差し上げてよい

か悪いか一応御返事待ちます。——と書いてあるのを見ますと、私に対する私信のようでもありません。私は別にこの方に対してお返事を書く義務もないので、そのまゝに捨ててありますが、読者の中には、この手紙の方のように思っているんじゃない方も案外多くあるんじゃないかと思って、急に現在の自分の心境を書いてみないではおれない気持ちになりました。

で、私の心境を申し述べます前に、一応そのお手紙の概略を御紹介してみましよう。

川端多奈子様へ

初めてお便り致します事に少々困惑して居ます。が御不礼の節お許し下さい、実は奇クは二十七年齢から続けて読んでいますのです、このように誌中の人に手紙を書くのは初めてです。貴女の写真や手記は、もうずいぶん前から誌上でおなじみですが、——中略——実は六月号所載の貴女の手記と写

真を見て、むらむらと何とも知れぬファイトが湧いてきたのです。それは貴女にとどけられる手紙がどれもこれも貴女に対する讚美の辞句によって埋まっている、と貴女がお書きになっている事が、私の氣持を刺戟した為ではないかと思っています。今少し、くわしく考えると、貴女のような女（これは少々貴女への侮辱になるかもしれない）に讚辞を送る男性ばかりしか読者の中にはいないのかという反撥と、そのような手紙を貰っている貴女が、いつしか或る程度にサジ的男性を見くびり、傲慢な態度（貴女は決してそう思ってない）を以って手記を書いていらっしやるのが、ひどくカンにさわった為にファイトを感じたものと思えます。——中略——私は何回となく貴女の写真を見てきたし、コレクシオンもやって来ましたが、その肉体の美しさやポリュームに比し今少し美貌であって欲しい事が最大の不満です、私の希望の被縛モ

デルは、もっとすっきりしたノーブルな顔であって欲しいが、貴女はその点私の好みにマツチしません。奇巧の他のモデルの方にまじな人が居るようです、六月号手記の写真もライトの関係もあります。が全くサツパリでしたね。但し、緊縛されている間に、自然と愉悦にうっとりとなってニンマリ笑って来ると辻村隆氏が書いていられるので現場にいて、その様々の表情を見ていれば、別の素晴らしい魅力が湧いて来るのかもしれない。唯写真に固定された表情はまづいものです。次には貴女の書く文章がのんびりしていて、やゝ鈍重な雰囲気をつよわしている、もう少しぴしぴしと切れるような文章が書けないものでしょうか。これはまだ貴女が本当にぴしぴしと縛られた事がなく、責められる事に真に悩み苦んでいない為かも知れないし、又本来、貴女の性質はオーヨーに出来ていて、反って会って話してみると素晴らしい人なの

かも知れない。——中略——貴女はまだ／＼人生行路に於いて鍛えられる事が少いようです。甘やかされてるマゾヒスト、しかも内面では益々マゾの炎を燃えさからせて、それをとどめる術を知らぬ女性。そして、その顔に似合わず（全く美貌であると思えない）全身これ地上に於ける炎のように美しいロマンティスト。貴女が架空のたくましく高いサジストを夢みて

歩きながら、現実には、しばしばみにくい掌で貴女の夢を切り落され幻滅に心を暗くしている女性、しかも周囲からマゾヒスト女性として甘やかされ貴重がられている生娘。私は貴女の写真を見ると、どうも中途半端な気がして仕方がないので、こんな風に取り扱うのは、貴女を毒する事だ、貴女は不満足のカラの中で満足らしいポーズをとっている。貴女の最初の手





記が載せられた時、何とくだらない事を書いて喜んでゐる女だろーと思ひ、自分でマゾヒストを宣言してゐるのを見て、何と分に過ぎた事を書く小生意気な女だろーと感じました、とにかく棚ボタ式に貴女の夢をかなえてくれる異性はそうザラにはない筈です、だからと云つて、貴女が男性をみくびり、失望の腹立ちまぎれにサディストを自称する男を批難するのは

傲慢と云うものです。マゾを自覚した時、女は第二の女として生れるのです。その道は無限に続き、イバラであると同時に、地上にえらばれた幾人かが味わえる真の愉悦の一生を送る事が出来るでしょう。幾十人かの男性に失望し、それでくさったり生意気になるのはまだ序の口だと考えなくてはいいけないと忠告します。古川裕子氏位になるには、まだ時間が充分にある

のだから精進して下さい。——中略——

ダラ／＼とした手記や、あまり感心しない縛り写真を見て少々心を逆な方向に動かされました。勿論、貴女の写真には私の想像の縄と鞭を以て勿体ないけど責めてあげました。但し、今少しましな女性（すべてに眼がひらけ、肉体特に大腿部と臀部がみのって来た折は）になられた折は、私が真剣に縄を取りたくなるかもしれません。——下略——

私にこの手紙を下さった方は、末尾にちゃんと住所氏名が明記してあったし、——又便りしたくなれば致したいのですが、差し上げてよいか悪いか一応御返事待ちます。——と終りの方に書いてあるのだから、御返事を出すのが本当は礼儀なのでしようが、このお手紙は私にとって、少し癪にさわるので、直接は御返事を書かないこ

とにしました。

私はこの方のおっしやる様に一度だって美貌だと思つた事もありません。然し、若い女性に向つて容貌のことを、こんなにあけすけと書くのは、余程の礼儀知らずかおっちょこちよいだと思ひます。本当なら鼻紙かたきつけにしてやるんだけれど、この前に、東京の人でお返事を出したら、やかましく何んだかんだと云つてくるので手記でちよつと載せて貰つたら、それから、もう、うんとおすんとも云つて来ないので面白くなっちゃった。この方のお手紙も誌上ですっぱぬいてやつたんだから、私の胸がすう／＼としました。

私は縄で縛られることには、ほんの少し興味を持っています、悪口を云われたり、こき下されたりすることには、少しも興味は持っていませんから、はっきり申し上げておきます、この方は私の文章を、だら／＼とした、と何度も云つておられますが、私は田舎

の新制中学を出ただけの無教育な娘で、文章を書くことをお仕事に

いたしておりませんから下手なのはあたりまえです、工場の労組の機関誌の創刊号に私の書いた詩のようなものが活字になったのが最初で、それも、他に誰も投稿する人がなく、やむを得ず私のが載ったというのが実情で、奇巧の編集部の方々が、書け書けとやかましく、それこそ、顔を見るたんびに催促されるような羽目にならなければ書かなかったでしょう。

でも、私の手元へ届いた読者からの便りの限りでは、讚美のものばかりだったのは事実です、そして私が逢ったサディストと云われる方が偶然つまらなくて、貴方のような御立派なサディストの方を見落していたのかもしれないですね。しかし、「私が真剣に縄を掛けたくなるかもしれない」だなんて、貴方も案外、自信マンなのね、誰が貴方になんか縛られて上げますものか、若し、近くにいら

れるのだったら噛みついてやりたい位。

なるほど、私は分に過ぎた小生意気な事を書く小娘かもしれないし、反省がないとおっしゃるのも無理からないところもあると自覚します、それは私の時々載せて貰う短い文章だけで判断されるなら、誤解されるのも無理はないでしょう。でも、私の書いているのは、あれだけじやないんです。

肉体と精神の葛藤や、責めのモデルとしての悩みなど細々と書いた手紙や日記もあります。只、編集部の方が、その中の面白そうところをちよんぎって載せられるので、誤解されることもあります。私が美貌でないという事

については一言もありません。もって生れたものですから。でも、私が何の悩みも抱いていない甘やかされ、貴重がられている、というのは皮相的な見方です、貴方は深刻ぶった悲劇的な顔つきがお好きなのかもしれない。いや、そういうゼスチュアがほしいのでしよう。それだったら、スレチガイ映画や「愛染かつら」なんかに涙を流していらっしゃった方が分に応じているんじゃないでしょうか。

ドラ／＼とした素人女の手記なんかを読まれるより、お涙頂戴の大家の書かれたものの方が、いくら貴方を感激させるかもしれませんのね。

思い出したように、ポツンポツンと雨だれのように書きつゞけて来ました拙い手記も、尻きれとんぼのようですけれど、これぐらいで終りにしたいと思います。私に御声援を下さった皆さま、さようなら。

I. J 生氏へ



六月号読者通信欄 I. J 氏の手錠と承着の着想より (畔亭数久画)

感情教育

【十】

吾 妻
栗 原

新
伸・画

サラリーマン

結城章三郎が結婚してから今日までに、ただ一度、生活の安定した時期がある。それは鷺宮から大塚に移って、K出版社につとめていた三年たらずの間だった。二十年間にタツタ三年だからまさに僅花一朝の夢と成り果てた次第だが、その特殊事情を申し上げるとつぎのごとくである。

当時、営業部長をつとめていた若い男が月給九十円、企画部長のかれが百円で最高だったが、これは一方が独身で、他方が家族持ちだったせいである。だが、章三郎にはさらに歩合ぶあいがついていた。どんなものかという、彼の企画した単行本があたって版を重ねたとき、再版以後のものについては、一部につき定価の1%を彼に支払うという契約なのだ。月給以外に成功報酬を出すというシステムはどここの出版社でもやっていないから、一見すこぶる太ッ腹のようにみえる。だがこれぞ無名の新興出版社の社長が、統制のきびしくなかった時代に一挙に覇をなそうとした苦肉の策であり、商魂逞ましい

政策だったといえよう。だいたい出版という仕事が一歩一歩真剣勝負だから、サラリーの範囲だけの努力でお茶を濁すというわけにいかない。まして企画となると、簡単にはいかない。安易な思いつきなどで失敗する場合を考えると、サラリーの額なんか問題でなくなってしまうのだ。それよりは全精力をうちこませて、ベストをねらったほうがいいにきまっている。しかもその報酬は、成功した場合にだけ、利益のほんの一部を裂けば足りるのだから、これはソロバに合っている。

章三郎はその餌に吊られたわけではないが、元来がサラリーマンタイプではない上に、出版には案外の素質があったとみえて、この政策はうまく当たった。つまり、社も発展すれば、彼もうるおったのである。有名な老舗のS堂が定価一円で千部つくって半分しか売れなかった音楽家の伝記を、二円五十銭の定価で三千部刷ってすぐ再版にこぎつけるような芸当からはじまり、三社三ツ巴で争っている原稿をあとから割り込んで取ったり、相手がI書店だからと皆があきらめている原稿を、外務省に乗りこんで訳者をくどきおとし、見

事ものにして八万部も売ったりした。皮肉にも再版にならなかったのは文部省推薦になった著書一冊きりで、これは社長が時局への思惑から是非とってくれというのでしかたなく出したものであるが、それ以外は全部版を重ねるという盛況だった。おかげで彼の歩合収入は毎月三百円を下らず、多いときは五百円を越した。かりに平均四百円として、いまの金に直すと、ざっと十七、八万円になる。

だが、その金はどこへ行ったのだろうか？ 月々はいる莫大な金は夢のように散り、消えてしまった。たしかに家族づれで近くの小料理屋にたびたびゆき、ヤミの御馳走を食わせたことはある。また三年という間には、いちおう服もとのえたし、本も買いこんだ。だが家具一つ増えるわけでなし、貯金すらなかった。大半の金は作家との交際や接待につかってしまった。もちろんそれらは月に何点も出す書物の企画のためだから、本来は社で支払うべきものだが、バ―や待合の費用を一々伝票につけられるものでもなし、章三郎自身、どこまでが絶対の必要額か見当つかないから、つい自腹を切ってしまうのである（その点はいまの社用族と全然ちがっている）。思えばバカな話だが、そのくらい打ちこんだから成功したとも言えようし、社長も彼の性格をうまく利用したわけだ。しかし貧乏のなかでもけっこう夢を食って生きてきたご当人は、金よりも仕事の成果に酔って、彼は彼なりの満足を味わっていた。徳田秋声や横光利一やその他のいわゆる文壇作家の生態を知りえたことも、Kのような親友のできたこともプラスだった。

由紀の気持はまたべつだった。生れてはじめて月給袋を渡されたとき、彼女はしげしげとそれを眺めてから、タンスの上のラヂオに立てかけて、子供みたいに両手をあわせた。

「なんだいその真似は！ ラヂオがびっくりしてるぜ」と、彼はからかった。

「うちに神棚がないからいけないのよ」と彼女はほえんだ。「でうれしいわ。やっと定収入がはいっているようになったのね」

「つとめれば、だれだって月給をもらうんだ。センチなこと言うなよ」

「だって、しみじみと落ちついた気持味わたの、これがはじめてよ。どうやら質屋とも縁が切れそうだし、真里ちゃんの洋服だって買ってやれそうだし……。いままでは景気が良さそうになると、差押えがきたりするんですもの」

「そらそら、またグチを言う！」

「あら、グチじゃないわ。あたしの言うのはお金じゃなくて、定収入というものが……」

「ダイヤモンドに眼がくれてエ……」

「洋行するよなボクじゃアない。よくも言ったわね」

くやしがつて彼女は武者ぶりついた。

だが、章三郎の言葉がともすれば誇張や大言壮語なのにくらべて由紀の言葉はいつも控えめで真実だった。彼女はたしかに定収入のもたらす安定した生活をのぞんだので、金銭を愛したのではない。その証拠に、百円の月給袋は有難がったけれども、その何倍も入っているもう一つの謝礼袋はろくに確かめようとしなかった。ときによると幾日も封を切らないことがあり、章三郎が勝手につかみだしても用途を訊いたことさえない。まるで親子三人が楽にくらせるかぎり、それ以外の金はあってもなくてもいいと言わんばかりだった。



あまり無関心なので、ときには章三郎のほうから報告することがある。

「今日ね、例の評論家のFを相模屋につれていったんだよ。いまだきホンモノの菊正をつけてき、鰻を入れた茶碗蒸しに、刺身、ヒレカツまで出たんだから、Fの奴、目をまるくしていた。それで三十円だぜ」

「やすいわねえ」

なんとも応揚な返事だった。夫婦そろってこんなふうだったから、金はできなくても友達はたくさんできた。いまジャーナリズムに返り咲いている大衆文学の長老までが食うに困って原稿を売りつけにきた戦時中のことだから、その「友達」のなかにいろいろな人間が侵入してきたのもやむをえないのである。

地下室にて

あるとき、社をたずねてきた客のなかに、Sという男がいた。

給仕がわたした名刺を一眼みた瞬間に、章三郎は「おや!」と思った。もし同姓同名の異人でなければSは彼にとってまんざら無縁の人ではなかったからだ。

いまの若い人たちは名前も知らないだろうが、その昔、実業之日本社から、Nの頭文字で始まる少年雑誌が出ていた。「少年世界」「少年倶楽部」と共に、三大少年雑誌のひとつだった。章三郎は小学校に上らぬこ



ろからそれを愛読し、小学校を卒業するまで（大正五—十一年）年極購読者だった。常連の投書家で、七宝入の銀メダルを十箇ためると銀時計に換えてくれるというので七つまで獲得したが、それからさきはなかなか入選させてくれなかったのをおぼえている。そのとさきの作文の選者がSだったのである。しかもSは少年小説や冒険小説の作者として、当時の少年たちの熱狂的崇拜の的だった。いまのアメリカ式冒険絵物語も大した人気をもっているようだが、おそらく足元にも寄れないだろう。というのは、出版ジャーナリズムの範囲が昔はずっと狭かったから、それだけ少数の作家に人気が集中するのだ。章三郎はませていたから、もちろん涙香や押川春浪ものもよみふけた。しかし、Sの小説にはもっと熱中した。

いまだに文章や、無数の挿画までおぼえている。「黒暗々たる海上に、聞えるのはオーイオーイと呼びかわす声ばかり」とか、「春の夕日は赤々と道を照らした。彼は涙をぬぐって、力いっぱい車を曳いた」とか、実に三十五年前の文章が鮮やかに浮んでくるのだから大したものである。朝よんだら夜忘れてしまう最近の風俗小説などは、これに比べたら紙屑にしかすぎない。

だが、正直に言えば、当時それらを熱狂してよんだ数万の読者の内、現在でも記憶しているものが何人いるだろうか？ 章三郎だけが異様な記憶をもっているについて、彼だけの知る理由があるのだ。なぜなら彼は小説の題をすっかり忘れていたのに、ある場面だけをおぼえているからである。一二の情景は特に強烈である。船が沈没して海上を漂流した少年がある島に辿りつく、待っていたとばかり悪漢が捕えてしま

う。彼は細い豆鎖でギリギリ縛り上げられる。半裸の白い皮膚に食いこむその鎖は実に生々しく描けていた。もう一つは標題の頁いっぱい描かれているのだが、少年が太い木の枝に跨がったポーズで縛りつけられ、そばにおいたダイナマイトの導火線が火を噴いている。彼を救い出そうとして森のなかを探しまわっている博士の一行は、木の枝が揺れるので怪しみながら近づき、やっと彼を発見する。小説の筋では猿ぐつわをはめられているので少年は枝を揺ぶるのだが、さすがに当時の画は猿ぐつわをはめていない。しかし女を連想させるような美少年であることと、大胆な緊縛のポーズとは、今日まで忘れがたい印象をとどめている。おそらく章三郎のサディズムの素質はこの当時からかなり明瞭な形をとっていたものらしく、その証跡はもっと古く、五六才頃までさかのぼることができるのである。だがこの挿画のもう一つの特徴は枝を跨いでいる点にあった。これはのちに実行するに至った、股間を縛る原型なのだ。

Sはこのような小説の作者として、時の流れを越えて彼の記憶にこびりついている。その人間と同名の男が突然現われたのだから、章三郎の好奇心が高まったのもむりはない。彼は名刺を握りしめる

と、すぐに応接間には行っていった。

頭髮は黒いが明らかに五十は越している男が、あわててタバコを揉み消して立ち上った。テーブルの上には原稿の入っているらしい大型封筒がのっている。

「あなたは昔、N誌の記者をなさっていた方じゃありませんか？」

挨拶ぬきで、いきなり彼はたずねた。

「そうです。そのSですが、よくごそんじで……」

「ああ、やっぱり！　じつは私、そのころの熱心な投書家で、あなたの小説の崇拜者だったんです」

うれしさのあまり、彼は声を弾ませた。

「それはどうも……」

と言って、Sはみるみる紅くなった。とたんに章三郎は相手の困惑が伝わるのをかんじた。そして彼も紅くなった。

それは相手の窮状を見抜いたときの、奇妙な羞恥に似ている。明らかにSは原稿を売りにきたのだ。その相手が、じぶんが選者だった頃の投書家で小説のファンだったのでは、テレくさい以上に恰好のつかないものがあるらしい。はたしてSは落着きを失って、この種の用件の人切り出す雑談の糸口さえ見付からぬ様子だった。

章三郎は腕時計をみて言った。

「失礼ですが、あと二時間ほどして、もう一度寄って下さいませんか。それまでには仕事を片付けてしまつて、ゆっくりとお話したいと思ひますから。……よろしかつたらその原稿もおあずかりして」

なぜこんなこと言ったのかわからない。彼は絶対に持ち込み原稿を当てにして企画を立てなかつたから、十中八九は最初からことわることにしていた。第一、読む閑が惜しい。だがSにかぎってこの

まま別れる気がしなかつた。お世辞とも本気ともつかずにそう言つてしまった。

「そうですか。じゃあ……」

往年の選者は口ごもりながら、おずおずと大型封筒をさしだした。その袖口はすりきれ、気品のある弱々しい顔は疲れている。

部屋に戻ると、彼はすぐSの原稿をあらためた。四百字詰百五十枚。これだけでもう単行本にはならない。それでもすぐよみはじめたのは、幼いファン心理がよみがえつたのと、もしやサディスティックな描写でもありはしまいかという好奇心からだつた。だが、編集者特有のカンと早読みで、ものの十枚も繰らぬうちに、彼はあまりの幻滅におどろいてしまった。その文章の古臭さ、たどたどしさ！　いかに昔の少年雑誌にせよ、これが満天下を熱狂させ、作文の選者として崇拜の的だつた人の筆とはとても信じられない。思えばトーカーの世になつて無声映画を見るなからである。時のヴェールはひき剥がされ、美しい夢は無惨に崩れ落ちてしまふのだ。

「よまなければよかった！」。これが偽らざる実感だつた。彼は溜息をつき、さらに全体の筋を拾ひよみしてから（これは編集者が拒絶するためのコツである）元の封筒にしまひこんだ。

それから二時間後、章三郎とSは大塚駅近くのバーで、止り木のような椅子に腰をかけ、一杯五十銭のウイスキーをなめていた。このバーは駅から家の帰り道で、章三郎の馴染の店である。銀座のどのバーよりも気に入っているのは足場に便利だからではなく、異様に荒れ果てた雰囲気のためだ。壁はコンクリートがむきだしで雨漏りのような汚点（しみ）が浮び出し、カウンターの上面になんと裸電球がぶらさがっている。だだっぴろい床にはテーブル一つ、椅子一つなく、章三郎は酔うとよく女給をつれだして、でたらめの踊りをやつた。

その女給の一人は後の「近代文学」のHと彼が色黒きためエチオピアと名づけ、他の一人は肥っているためアイマア（当時の痩せ薬）と名づけた。そしてわれわれは、この店をドストエーフスキアの「地下室の手記」から取って地下室と呼び、こよなく愛した。廃業寸前のこの店にとって、興がのれば洋酒を瓶ごと買いしめる章三郎は最大の顧客だったから、彼はどんなことでもできた。休業日にむりに開かせたり、ドアに鍵をかけて他の客をボイコットし、仄暗い灯のもとでまさに暗々たるドストエーフスキイの世界に惑溺したりした。……

「分量が足りないからとにかく単行本には向きませんがね、それよりもっと突っこんで言うとも、筋がどうも、軍国主義的ですね」

酔のまわってきた彼は、つけつけ言った。Sは一々うなづいていたが、ちょっと首をかしげて訊きかえした。「そりや私もわかっています、いまの御時勢というものを考慮して……」

「皆さんそうおっしゃるんです。時局向きの奴がいいだろうってね。ところが、そういうものは売れないんだから仕方ありません。」

国民は正直ですよ。まあ、あと一年もすればそんなことも言っていられなくなるだろうけど、いまのところは紙で圧迫してくるだけだから、私はどしどしヤミで買って好きなものを出してゆく。いくら特配で紙をもらったって、売れない本を出したかありません。それに、どうせ自由がきかなければ、出版そのものがつぶれるときですよ……」

これは誇張でなかった。章三郎は営業部長を無視して、社長と話合いをつけ、ヤミ紙を果敢に買いつけていわゆる「不急不用」の大きな企画に手をつけていた。たとえばフレイザーの「金の枝」^{ゴールデン・ボウ}などは生活社から誤訳だらけの抄訳が一冊出たきりだが、彼はパレスチ

ナ大学から原書十二巻を持ちかえった友人に完訳をたのみ、第一巻が出るまで毎月百円の生活費を社から出させたりしていた。そしてそれが成功したらバツハオーフェンの「母権」の完訳出版をもくろんでいた。

だからSの時局小説などを出す気は頭からない。彼がバーへ連れてきたのは、ただ少年時代の郷愁にたいする寄附みたいなものである。章三郎はやたらと酒をすすめ、Sをなくさめ、酔わせたがった。

「昔を語っちゃいけませんか、え、Sさん？ ……いまでこそこうして対等にお話もできるが、あの当時あなたは、われわれ少年にとって神様でしたよ。とてもお会いできるなんて思えなかった。奇遇ですなあ。……あの、ホラ、少年を木の股に縛りつけてダイナマイトで殺そうとする小説、あれ、なんという題でしたっけ？」

「たくさん書いて、恥かしいからみんな忘れちゃいましたが、『密偵』でしたかな、あれは」

「ああそうそう、『密偵』だ！ やっぱり覚えてらっしゃるんですね」

ちっとも思い出さなかったが、章三郎はいそいで合槌を打った。自分の記憶よりも作者の記憶がふしぎのような気がした。すると、他に相客のない気安さで、めったに言わないような言葉がこぼり出した。

「白状しちゃうと私はあの小説にすっかり興奮してしまって、それからまもなく覚えたマスターベーションのなかに、いつもあの情景が浮んだのですがね」

「いや、そいつはどうも……」

「ハハハ、ま、それはともかくとして、あの挿画は一つまちがった

ところがありますね。小説の筋では猿ぐつわをはめられているのにあの絵にはそれがない。やっぱり描けなかったんでしょ？」

「じつは私、あの挿画の下図をかいただすよ」

じつと彼の顔をみつめて、相手は急に砕けた調子になった。

「あなたのおっしゃるとおり、本当は描けなかったんです。法律というより不文律で、少年むきの冒険ものには限界がありましたね、縄はいいが、猿ぐつわはいけない。なにか残虐だということになっているんです」

「ははあ！」

「しかし、考えれば妙じやありませんか。文章では差支えないんですからね。そこで私は考えた。子供むきの小説だからこそ、画と本文が一致していなければならぬ。さもないとウソを教えることになる。小説のほうでは声が出せないから助けを呼ぶことができず、ハラハラさせているのに、画のほうは大声が出せるとしたら、純真な子供はふしぎがりますよ。これは教育上よろしくない……」

章三郎は思わず笑いだした。Sの飲むピッチは早くなった。

「それで私はわざわざ下図をかい、ちゃんと猿ぐつわをはめたんですよ。だが、画描きは無断でそれを省いちゃった。そこで、えらい論争が起きましたな」

「結局は常識に従ったわけですか」

「社の方針には背けませんからね。これがきっかけで、私はもう、すっかり少年小説に厭気がさしちゃったんです」

「そりゃそうでしょう。……だが、ずいぶん、ご執心でしたね」

Sは奇妙な笑いかたをした。どちらも普通の会話ではないことを意識していた。ひとたび相手に同様の匂いを嗅ぎつけると、それを

突きとめようとして話は急角度になる。アイマアとエチオピアはとくに酔っぱらって（それはいつも章三郎の勘定になる）ずっとなれた蓄音器にかじりつき、棄て鉢風のすさんだ声で低く合唱していた。

雨よ降れ降れ、悩みを流すまで

どうせ涙にぬれつつ

傷んだレコードの古びた歌。陰々たる夜気に沈んでゆくドストエーフスキイの地下室。安ウイスキイの大瓶はほとんど空だった。

「ねえ結城君、君はさっき、この原稿を軍国主義的だといったが、えらい！……さすがだ。じゃあ、とっときの僕の原稿を見せようか」

「どんなもののさ」

「風流佐渡講釈」

「なに。……ああ、サード侯爵か。ハハ。よむのはいいが、出版はダメだね」

「売れるぜ」

「世に検閲というものなかりせばね。だがS先生。あんたのご執心はわかったが、じっさいに縛ったり、猿轡はめたりした経験あるの？」

「ないね」

「ハハハ。それじゃあ佐渡講釈なんかよむ価値がない」

「おやおや、大きく出ましたね。君はあるとでもいうのかい？」

「もちろん。あるから言うのさ」

「こりや面白い」と、Sはよろけながら椅子を下りると、いきなり章三郎の腕をつかんだ。

「はい、一緒にゆこう。どこだ？　ひとつ、その証拠を見せてもらおうじゃないか」

「僕は商売女を言ってるんじゃない」

「シロウト娘？　なお結構だよ」

「冗談じゃない。……君になんか、伺い知られてたまるもんか」

それからさきはわからない。気がついたときは、二階の部屋に朝日が燦々ときしこんでいた。布団をはねのけると、昨夜の洋服のままだった。そして、となりではSが眩しそうな顔で眼をしばたいていた。

叩かれる

階下の食卓にむかったところは、真理はとくに学校にいて、時計の針は十時をさしていた。飯をよそっている由紀のうつむいた頬に日が当って、睫毛が金色に光っている。

Sは洋服の膝を折ってかたくなった。



「一度又でいいから縛らせてくださいね」

「ゆうべはどうも、たいへんご迷惑をおかけして」「いいえ」

小声で言う、由紀は手早く味噌汁をすくった。気のせいか、表情が冷たい。

「なにか、失礼なこと言いませんでしたか、奥さん」「べつに。でも、ずいぶん酔っていらっしやいましたね。どこでお

飲みになりましたの？」

「ホラ、いつものバーだよ」と章三郎が引き取った。「こちらは僕の大先輩でね、廿年来憧れの的だったんだからたまらないや。飲むほどに酔うほどに話がはずんで、ねえSさん！」

Sは低い声で笑いかけたが、由紀の顔をみるとだまってしまった。彼女は口唇をキュツと結んで章三郎をちらりと眺め、口早に言った。

「お話はあとにして、さっさと召上らないと、あなた、もうおひるよ」

「うむ、もうそんな時刻か」

章三郎は何時に出社してもいいのだから、これはSへの催促みたいなものだった。Sはいそいで食べおわると、五分ほど雑談してから、そそくさと礼を述べて別れを告げた。

それからがいけない。章三郎が二階に上ろうとすると、階段口に立ちふさがった由紀がすごいケンマクで睨みつけている。

「どきたまえ」

「いや。どかない」

「ようし、じゃあ関所破りだ」

いきなりタツクルして一気に抱き上げようとしたが、手足をバタバタさせるので危く階段を落ちそうになった。ふざけているにしては真剣すぎる。

「おい、いい加減にしないか」

「そっちこそいい加減にしたらどう。酔っ払い！」

「なんだその悪口は。たまに酔っ払ったっていいじゃないか。ゆうべ連れてきたSはね」

「廿年来の大先輩でしょ。たいした憧れの的よ」

「だって君、Sはなんにもへんなことを言っただけじゃないや。さっき君はそう云ってたはずだぜ」

「お世辞よ、そんなこと。言えば私たちが恥をかくじゃないの」

「なんだって！」

「私ね、あなたがあんなにグラシなくなるとは知らなかったわ。いたいバーで何をしゃべったのよ？ よくもあんな侮辱を許して、平気でいられたもんね。ふだんのあなたらしくもない！」

章三郎はすっかり慌ててしまった。なに一つ記憶にないだけに、思わせぶりのことを言われると、どきんとする。こうなればもう関所破りどころの騒ぎではない。なだめすかして二階の部屋に連れこみ事情をきくところだった。

ぐでんぐでんに酔って帰ってきたのは一時ごろだった。見たこともない客を連れていたので困ったと思ったが、下に子供は寝ているし、さきに布団を敷いてしまわなければ二階に通す部屋もないので、いそいで客布団をもってあがり、敷いていると、そこへ章三郎が上ってきた。

「こまるわ、こんなおそく。お客さまに出すご飯だってないのよ」

「そんなものいいから、あいっを上げてやってくれ。玄関に寝てるんだ」

仕方なく下りてみると、Sは三疊に突ツ伏している。「二階にお床をとりましたから」と声をかけると、やっと立ち上ったのはいいが、じいっと彼女の顔をみつめて、いきなり寄りかかってきた。はッと思っただが避ける余裕もなく、五十男のいやらしい両腕が肩にからみついた。「だめですわ」と言って押し返そうとすると、「奥さ

ん、奥さん」と耳元に口をよせる。酒くさい息が頬にかかる。そのくせ声は大きい。「奥さん。きれいな奥さん」「いや、そんなことなすっちゃ」「かまやしないんだ。今日は無礼講なんだから。ねえ奥さん、おねがいだからひとつ、パジャマを着てみてくださいください」由紀は胸がつぶれるほどおどろいた。そのとき彼女はまだ平生のズボンを着いていたのだが、急にそれがナイロンと化し、この男の眼の下に全裸の姿をさらけだしたように感じた。だが次の言葉をきいたとき、彼女の羞恥は恐怖にかわった。「そして、一度でいいから、縛らせてくださいね」

「あなた、あなた！」

咽喉をつまらせて由紀はさげんだ。が、章三郎は下りてくる気配がなかった。

「冗談はやめて！」

「いけませんかなあ。それを楽しみに上ったんだがなあ」

「後生だから、はやく二階へいって、おやすみになってください。もうおそいんですから……」

男の言葉は針のように突き刺さった。Sがどういう人間で、なぜこんなことを言い出すのかを考える余裕がなかった。ただ怖くて、うまくこの場を切りぬけようと焦った。

幸いに男はひどく酔っているので、足元も危いくらいだったから兇暴な振舞に及ぶおそれはないと感じた。それに、いざとなれば夫もいる！ いくどか振り離そうとしてはしつこく絡んでくる両腕に負けながら、由紀はやっと階段口までひきずっていった。

とにかく寝かせてしまうよりテはない。ここで大きな声を出されて、子供に起きてこられたりしたら困ると思うから、男のからだを

一段々々押し上げるほかなかった。男はそれをいいことにして、半抱きのような恰好でねぼりついてくる。由紀は眼をつむって厭らしい感触に耐えた。「奥さん、仲よくしましうね、ね」「わかっているから……」涙がこぼれそうになった。夜中にこんな目に合わないければならないとはなんの因果だろう。

ところが、そんな思いをしてやっとな押し上げてみれば、夫は眠っているのではなかった。彼は布団の上にだらしなく腹這いになって、タバコをふかしていた！

「まあ、あなたったら」

「なんだか世話が焼けるようだな。かまわないから、ほっとけよ。ああ眠い！」

かっとして、由紀は口がきけなかった。なにがほっとけだ。いきなり階段をかけおけると、八畳の襖をしめきり、そのまま布団にもぐりこんで哭きだした。口惜しくて、口惜しくて……。

「こういう次第なんでございますの。さだめしナツトクがいったでしょうね」

章三郎はうなだれてしまった。なんともかんともしようがないのだ。青菜に塩とはこのことだった。由紀は涙でキラキラ光る眼で、彼の表情の一部始終を見逃すまいとしている。被告の弁明を今やおそしと待ち構えているのだ。だが正直の話、彼には答えるすべがない。なにひとつ覚えていないのである。

「そいつあ、どうも……」

「どうも、何なの？」

「いや、すまない。まるで記憶がないんだ」

「白ばっくれないでよ。あなたはチャンと起きてて、タバコをすっ

てたのよ。だから下で私が呼んだのも、Sさんが変なことを大声で言ったのも聞えていたはずよ。どうして出て来てくれなかったの？」

「それが、全然……」

「ウソおっしやい。第一、バーで何をしゃべったのよ。それから白状なさいよ」

「それも記憶にないんだよ」

「飲むほどに酔うほどに話がはずんでと、今朝言ったじゃないの」

「……………」

「きたならしいパジャマだの、縛ってどうこうなんてバカな話、したのね。さもないやSさんがあんなこと言う筈なもの。あなたって人は、本当に恥知らずよ。なぜそんなことをしゃべったのよう」

「申訳ない」

「いまごろあやまったって手おくれたわ。もしもSさんが言いふらしてもしたら、どうするつもり？」

「Sだって前後不覚で、ゆうべのことを覚えちゃいない。だからさ……」

「酔っぱらって忘れる馬はいいかもしれないけど」

大きな眼から、ぼろりと涙が落ちた。

「縛らせるなんて言われ



「ふざけないうで
と目大にやれ！」

でも怒ることができず、抱きつかれて死ぬような目にあった私はどうなるの？ 忘れちゃったって、そうはいかないわ」

「じゃあ、どうしたらいいんだ？」

「そんなこと訊かれたって、知るもんですか。ただ、人の変っちゃったあなたが憎らしいのよ。くだらないことにケンカするくせに、じぶんの妻があんな目に会っても平気でタバコすってるんですものねあれを見たとき、私かあっとして、なぐろうかと思ったくらいよ」

いくら弁明しても果てしがない。彼がどこまでも悪いのだから同じことを繰り返すしかないし、由紀は由紀で口惜しがるしかないのだ。章三郎は観念して座り直した。

「仕方がないから、せめてここで、改めてなぐってもらおう」

姿勢を正して、顔を正面にむけた。

眼と眼があった。由紀は口唇をかみしめて、戸惑った。みるみる頬が紅くなり、口ごもった。

「わざと、そんなことを言うのね」

「さあ、早く、やれよ」

「すぐそう、ひとを苛めるんだから」

「冗談じゃない。僕のはうで悪かったとあやまってるんだぜ。正直、僕はおぼえてないんだが、君の説明をきけば成程と思うよ。Sにそんなことを

言ったとすれば、またSの狂態を僕がほっておいたとすれば、全くけしからん話なんだ。だからもう二度と失敗は繰り返さない」と約束して……」

「じゃあ、それでゆるすから……」

「いけない。なぐりたかった気持は尤もなんだから実行しろよ。そして、モヤモヤを残さずに許してほしい。ね、わざと言ってるんじゃないんだ。あのときの憎悪をこめて力いっぱい叩いてくれ」

沈黙がおちた。

由紀は夫に手を出した経験がない。叩けと言われても、正面切った真剣な顔を見ると臆してしまふ。だが、言い出したら

章三郎があとに退かないことも知っている。白い手がおずおずと上った。それは二三度ためらってから、柔かく頬に当たった。



白い手が
おずおずと
上った。

もうすっかり打ちとけた様子で薄笑いをうかべながら、ハトロンの封筒をさしたした。

「これが君、こないだ話した風流佐渡講釈ですよ。出版の話じゃな

「ふざけないで真剣にやれ！」

章三郎がどなりつけたあわてて中腰になった由紀は、力まかせに腕をふった。びしっとな音がして顔がぐらついた。

「一度でいいのかい？」

打った掌に痛みを感じると、

「もう厭、厭、こんなこと……」

と叫んで、由紀は夫の胸にしがみつき、顔をうずめて激しく哭きだした。

夢みる男

数日後、Sはまた社にやってきた。ビルの階下の食堂で水っぽいコーヒ

ー茶碗を前にした彼は、

い。是非君にお目にかけようと思つてね」

章三郎はまじめな顔をして、もう一つの封筒をその上に重ねた。

「おあずかりした小説、十分拝見しましたが、やはりうちの社には向かないので、一応お返しします」

出鼻をくじかれて、Sは妙な表情になった。

「まあ、それはそれとして、こっちはね」

「いや、それは拝見してもしかたない」

彼は眼を伏せてコーヒーをすすった。Sは椅子に身を反らし、タバコをすいはじめた。

「どうも雲行きがちがうようだな。なにか感情を害されたことでもありますか」

「そんなことはありませんよ」と、章三郎は顔をあげて答えた。

「ただ、楽しく飲んで楽しく別れる。それだけだっただいいじゃありませんか」

言葉づかひも調子も紋切型になっていた。

用がすんだら早く帰ってくれと云わんばかりだった。Sのタバコが灰になるまで、二人はとりとめのない言葉を二、三交わして別れた。それきり彼はSに会っていない。

おそらくSはどこかで生きているであろう。しかしあの夜、由紀を抱きしめてくだいたことは記憶していないであろう。それでいいのだ。善意の紳士が泥酔の上で生涯の抑圧をちよっぴり洩らしただけなのだから。それに章三郎がどんなバカなことをしやべって彼を刺戟したのか分つたものではない。批難する資格はない。由紀は由紀で、壮快な平手打のおかげで憤慨を解消してしまい、いまではすこしの実感も伴わない淡い記憶となつてしまつたようである。

ただこれが契機で、章三郎は自分に軽薄な性質があることをいやおうなく認めざるをえなかった。もう一つは、性生活はそれぞれ特殊な形態をもつていればこそ幸福だという平凡至極な認識である。たとえばアブノーマルと名づけられる「暗い谷間」の住民たちが、不当な弾圧に抗議するため団結することはできようが、クラブや結社のような組織をつくつたところで個人の幸福が保証されるわけではない。サディズム一つをとつても、その好みや要求は千差万別である。個々の幸福は、サディズムという一般概念では足りないのだ、そのなかの個々の好みや要求が合致しなければならぬことはノーマルな性関係を好むというだけで恋愛が生れないのと全く同様なのだ。してみれば、ただ相手にサディズムの傾向があると知つただけでなにか特別な共通人種だと思ひこむのは危険な錯覚だと云わねばならない。Sが由紀に口走つた不用意な言葉から、章三郎はそんな感じをうけた。そして、生涯じぶんのプライヴエートな生活は口にすまいと決心した（私がKKという雑誌の存在を教え、古川裕子さんの「囚衣」をよませるまで）。

結城章三郎の歩合ブームは昭和十八年の半ばまでつづいた。偶然本郷三丁目の古本屋で買った一冊の伝記本が彼の運命を変えることになった。かれは涙をながしてよみふけた。株式清算人である水夫上りの男が、絵を専心かきたために年三万フランの収入をなげうつのである。なぜなら天職に生きようと決心したからだ。やがて妻には見棄てられ、子供たちには死に別れて、南海の孤島でのたれ死にするのだが、天職はりっぱに生きて残つた。その男が画家になるために事業を棄てたのは三十五歳のときだった。章三郎も正に三十五歳だった、この暗合に勿体ぶつた意味を附そうとしたら人は腹

画家の伝記はすぐ讖諷され、他の書店から豪華版で出版された。印税は、当時としては法外な三千五百円にのぼった。だが章三郎は、またしても宇頂天になり、頼まれるまゝに友人の一人には五百円を、他の一人には一年間の生活費として千二百円を投げ出してしまった。残額もなんだかんだと食い散らされ、結局手に残ったのは千円

〔讀者通信〕

誌、マ、又、隨、分、の、感、じ、ら、れ、ぬ、雜
 心、し、毎、号、隨、分、の、感、じ、ら、れ、ぬ、雜
 信、欄、が、私、と、全、く、同、じ、の、事、は、一、言
 一、句、が、私、の、全、く、同、じ、の、事、は、一、言
 す、悦、慮、画、家、の、口、繪、氏、は、全、く、美
 の、悦、慮、画、家、の、口、繪、氏、は、全、く、美
 感、じ、さ、せ、ら、れ、立、つ、春、日、嬢、の、両
 手、を、ひ、ろ、げ、て、立、つ、春、日、嬢、の、両
 か、切、腹、遊、戲、の、私、も、合、伊、都、子、さ、ん、な
 の、切、腹、遊、戲、の、私、も、合、伊、都、子、さ、ん、な
 驗、が、あ、り、ま、す、の、肌、を、よ、く、解、り、ま、す、露
 梅、田、淳、二、氏、の、柔、肌、を、よ、く、解、り、ま、す、露
 わ、し、短、刀、の、切、口、も、血、潮、も、見、え、の、せ
 た、絵、も、よ、か、っ、た、切、口、も、血、潮、も、見、え、の、せ
 斬、首、の、図、は、実、に、美、し、い、で、す、ね、の、せ
 梓、由、美、子、さ、ん、の、舞、台、も、是、非、見、え、の、せ
 い、の、美、子、さ、ん、の、舞、台、も、是、非、見、え、の、せ
 イ、デ、ア、と、い、う、繪、久、氏、の、獨、創、性、が、ア
 ある、兵、頭、氏、の、白、へ、の、憧、憬、の、力、が、ア
 ツ、の、素、晴、し、い、白、へ、の、憧、憬、の、力、が、ア
 機、さん、の、函、の、初、め、は、そ、れ、ほ、ど、で、賤
 ない、と、思、っ、た、の、で、あ、き、ま、せ、ん、何
 度、も、見、て、い、た、の、で、あ、き、ま、せ、ん、何

(次号完結)

村松氏の腹部愛好癖、ビキニスタイルは同様、女性の最も美しい衣裳の様に私には感じられ、子供の時から *Ergieren* したものです。須藤氏、先月に続き美しい臍の写真です、ストリツプは到底かなえられぬと思つては夢で、私にとつては、天皇の人間宣言と共に、敗戦によつて与えられた二大贈物です。最後に翠氏の血染めの舞台、筋もよく出来ていますが、麗子女史が遂に女腹切りを二枚も描いてくれた事を大いに感謝致します。一枚は鏡の図で、難は刀がもう少し見えな方はよい。殊に臍がみえな図は残念、舞台上の弓子立腹の図は流石にうまいものです。刀の柄や切口などは満点です、次は杉原虹児氏にもお願い致します、感情教育は切腹ではありますせんが、切腹マニアの私にとつても、大層感心させられますね。一頭、他を抜いた読物です。(大阪、桐子)

房 監 團 パ イ ス 際 国

創 作

三 愛 中 野

無実の罪

「李香雲、明朝午前九時刑を執行する！」

李小姐は、たったいま刑務所長の部屋で銃殺宣告文を読みきかせられたのである。

所長のしやがれた声が耳の底で

「うあん」と鳴っていた。

（違います。私は山口トシ子。東洋人！）

この叫びをいく度、看守、所長へ訴えたことであろう。しかし、路傍の石コロのように黙殺されて来た。

（お前は戦時中、全中国四億の民へ東洋人と云ったことが一度でもあるか？）

反省がキリ／＼身を刺す。

そのまゝふら／＼と夢遊病患者のような足どりで独房へ帰って来た。背後で鉄の扉が重々しく閉められ神経を磨り減らすような鍵の音が、

「ガチャリ」

とした。それは今迄幾度となく聞き馴らされた音であつたろう。しかしいまは、その余韻がヒリヒリと骨身にくいこむのだ。あの鍵で房に入り、あの音で陽の光りを見る女極刑囚――

「銃殺！」

あゝ、何という運命の皮肉さであろう。

（――中国人か日本人かわけのわからないアイマイな生活がこの結果を生んだのだ。女優としてまた、歌姫としての限界点をふみはずしたのであるうか。それとも肌にシミついたエキゾチックさが、スパイという肩書を与えたのであろうか……）

狂笑も喚きも、いや、ありとあらゆる生存慾を奪い去る時間が、爪先からぞく／＼とはいあがつて来る。

看守はいつものように立ち去りかねたと云え、底冷えする隙間から、

「李香雲、何か云い残したいことは……」

と、慰撫するようにいう。が彼女は、白痴のような顔を暗い獄窓に向けたまゝ応えない。彼女は、身長五尺たらずの小柄ながら野性的な顔とぐり／＼した大きな眼、喋る時にはちよつと頸をかしげるのがクセだった。

いま、李小姐の脳裏には、所長の部屋で見た柱時計が浮んでいた。

（午後七時。あと十四時間のいのち――）

キリ／＼と骨身に刺す短針と長針の影。彼女は、この時ほど時間の冷酷さを怨んだことはない。わが肉体を支配するものは立法院長、刑務所長、看守でもなく、実にこの時間であ



る。死霊の嘲笑。独房の底冷え——。
 ピシヤリ、と脳髓をうった銃殺の宣言！
 あらゆるものを抹殺する黒い針と、まっ白い
 文字盤——。

(無実の罪だわ)
 と誰か、頭髪を曳くような叱咤。

れられて来た。

こゝは終戦直後の新中華民国。蔣總統麾下
 のキラ星のような軍隊——。

戦犯はどしどし処刑されていた。偽政府
 フンチン
 汪精衛時代の上海市長陳公博、財政部長周仏
 海、外交界の花形陳誼、宣伝部長林柏生。次

「あれが李香雲だ
 よ。ツンと済まして
 喰わえこんだ漢奸……」

法廷に立った時、
 覗きこんだ傍聴席の
 幾百の眸が囁いた。
 異常なまでに脂切
 った、燃える眼よ、
 たったいま亡び失せ
 よ。——

(いつまでもなぶり
 ものになるのは、も
 うたくさん。あゝ何
 とかして頂戴。早く
 何処かへ行きたい)
 こうして彼女は、
 上海監房から、南京
 中国司令部に近い、
 スパイ団刑務所へ連

は漢奸たちの番が来たのである。

独房の広さは二坪ばかり。まるでギリシヤ
 神話のバンドラの匣の中で生棲する蛆虫。コ
 マギレの呼吸。周囲は部厚なコンクリート。
 獄窓と前面は二尺ばかりの鉄の扉。それが開
 閉されるのは毎日、食後の排泄時二回、独房
 と雑居房の中間へW・Cが設置されている。
 設置されているとは名ばかりで、実は露天便
 所だ。道路に二間ばかり穴を掘り、筵でいく
 つも仕切られている。そこで一齊に、

「シャツ、シユウ……」

である。もち論、女囚ばかりの一群だ。獄
 衣を脱いだ女の柔軟なヒフが踊るようだ。解
 放された数分間の明るい顔と、粘っこい声が
 飛ぶ。

「あんた、オシッコ」

と、やりての女囚が促せば、

「——だってホースがつまってるわ」
 仲間も負けてはいない。

「平常、穴掃除位はしておくものよ」

「して頂戴！」

とやり返す賑かき。

「あゝ焦れたい——」

「何なら、替えてあげましょうか」

「ヘーンだ」

「何がヘーンなの？」

「チリチリ、シユツはご免だわ」

「云ったわねえ」

「もう、出そうよ」

くるりとまくりあげた仲間が、ピチピチした太股を覗かせる。

「ふっ、ふ、ふ」

「笑いごとじゃないわよ」

ひとりが蹲みこんでいう。

「はい、一等サンご案内」

ヒフとヒフをスリ寄せながら交替、そこには、メスの逞しさが充ちあふれていた。どこからかスリーキヤツスルやルビイクウインの吸がらを取り出し、看守のスキを窺って喫う女囚もいる。

又もや南京錠の房の中。こゝでは世俗の一切の権力、黄金——が剝奪されていく。どんなに喚き喚こうとも、また、心底から悔悟したところで、犯した罪は罪として享けねばならない。

それは、何という煩悶と苦悶の日々であつたらう。見るがいい。コンクリートの壁には、極刑囚の赤裸な声が、いく百の爪あとで残されていた。

「ご両親さま、サヨウナラ」

「ナムアミダブツ」

「不愛的中国、我愛の銅銭」

「クソクラエ」

「早く死ニタイ」

「生キタイ」

「午前九時前、十分——」

「イエス様」

「アーメン」

「ザ・エンド」

壁はたゞ黙々として面子^{メンツ}を与え、狂った落書きを抱擁して送り出す。そしてまた、次の死刑囚を迎え入れるのである。人間の咆哮を凝として聞き、耐え、なぶりものにされることを喜んでゐるかのように。

李小姐はドロドロに煮えくり返る時間の底を、ふみ越えようとしていた。静かな獄窓の下へよりかゝる。シヤバでの狂ったような慾情が頭に浮ぶ。渡り歩いた国際四十四ヶ国の人種が走馬燈のように、閃めいては消え、消えてはめら／＼と燃え映るのである。

上海の小姐

昭和十九年三月。——。

李香雲は満州映画協会的女優を秘そかに脱退した。その理由は上海の中華映画社が、好

条件で引抜いたからであるが、何よりも満映が面子^{メンツ}を売出してくれなかった忿懣の腹いせであった。

「満人に、私の真価がわかるものか」

こうして彼女は、ムシリとられた処女地を捨て上海へ渡漣した。

中華映画は、早速彼女を宣伝に利用した。

「ニュー・フェイス」

としてまた、

「歌の女王」

あるいは、

「上海の小姐」

のレツテルをつけ、中支、北支一帯の直営館、大劇場（実演劇場）へ売出させた。真実

彼女も懸命になって、その頃上海での流行歌謡曲、

「我愛的母々、上海的母々……」

を始めとして

「何日君再来」

を中国的捲舌音で唄いまくった。その舞台度胸と云い、声量と云い、ノーブルな節廻しにしろ、全く聞く観客たちを夢幻の世界へ惹き入れた。初舞台は成功。一躍大姑娘のニツク・ネームさえ立ちはじめたのである。

これも映画界につきもの、アノ手コノ手

を使った李小姐の頭の確さではあるが、もう一つ董長(社長)や宣伝部長の宇津へ五体を賭けたからに他ならなかった。彼女は知覚をマヒさせることによって、次のヒヤクを狙った。結果がどうなっていくかという反省より先に、売名と虚栄に憑かれていた。

ちようど蕾んだ花が一時に咲き誇るよう、肉体は爛熟し洗練されて来た。

一年も経過するころには大幹部になり、重役階級はナデ切りだった。その栄光のウラには、渡り歩いた幾十人の男がちらつく。国際的人種が多い。

先ずライシヤム劇場の支配人でロシアンバレエ演出家、マルグットを筆頭に、仏租界の独乙人ケツペル、ユダ一族の資本家モルダン中国作家兼政治家の郭沫若、スペイン舞踊家のキヤロル——数えあげれば切りがない。

上海大美晩報(米因経営新聞)の記者が、彼女をフラツシユするのに一週間つけ廻ったというから、大した出世でもあった。

「社交界の女王」

そういう一時期もあり、そのころが人気の絶頂でもあったろう。彼女の側には取捲連中の二、三人やそこら、いないという日はなかったというから愕ろく。

ある日のこと、記者が塹のグラランド・ハウスに行った時、扉をノックすると

「誰否？」

あの澄み透った北京語でパアツとノブを外され、思わず瞳をあげた記者の前には、一糸も纏わず現われたのである。写真班がまぶしくってまご／＼していると、

「さア、いらっしやい」

キユン、と白蘭花の匂いを発散させながら五体をくねらせた。そして、

「このポーズで何う？」

グイと股を広げられた時には、記者は慌てゝ遁げた。その背後へ、

「ホツ、ホ、ホ」

嬌笑を浴びせたものである。無暴と云おうか、大胆とでも名付けようか、人の意表に出るクセがあった。

殊に彼女は、郭沫若のカミソリのような神経が好ましく、夜の開花に熱をあげた。それに郭氏は東洋人を妻に持ち、東京へも留学した経験を持っていた。そういう私的事情を知っているだけに、なおさら親愛の情が湧き、それが一つに溶けあったのであろう。

仏租界のヤフイ路にあるシヨウシヤな建物日華クラブへ、二人はよく会食にいった。

「ねえ、先生、何になさる？」

「スキヤキ」

と云って郭は、指を二本出した。

「先生は何よりも御好きとみえるわ」

「あの味は支那料理よりも美味だよ」

「というよりも、東京が恋しいンでしよう」

「はゝゝゝ、まさかね」

「東京はどちらにお住いでしたの」

「渋谷です。あそこは北京のような清楚さと、狂わしさがあります」

「まア……」

カチツ！と会わされた眼と眼が、電火のようにパチパチ燃えていく。やがてボーイがスキヤキ鍋を持って来た。

「ねえ、ちよっと、ペエパーミントとブランデーを頂戴！」

「はい。只今」

ボーイがうや／＼しく出ていく。二人は料理をつまきながら、仲よく喋った。洋酒が運ばれる。グラスを重ねる。

「李小姐、無理しちや身体に毒だよ」

「だって……」

「それがいけない」

「先生がいらっしやるんですもの」

「……」

「ねえ、酔わせて——」

「……………」

もつれて、ふら／＼と泳ぐ五体。

「危ない」

受け止めた小姐のヒフは、軟体動物のように柔かい。郭は軽々と抱きあげ、ボーイを促して三階へいく。その部屋はそのような逢引を持つ人々のためにあるかのようにダブルベッドが並んでいた。めら／＼と緋の敷布が胸をつく。

あたりは夜化粧されたヤフイ路地帯。袋小路の日華クラブはオスとメスの挑情に変わっていく。ナメクジの執拗さがあった。

——それから半年目、終戦を迎えた。李香雲は上海に於ける自己の人気を確信していた。だから、港都からはなれなかった。ずる／＼べったりの日々を、グランド・ハウスで暮した。

ある日、突然、中国憲兵たち数人が、彼女の部屋へドヤ／＼と侵入して来た。各自の片手には拳銃が握られている。

「李小姐だネ」

隊長らしいのが念を押す。

「はい」

「——憲兵隊へ同行してくれ」

「何故ですの？」

「上海小姐、覚悟しろ」

「いやよ」

サツと彼女が中国衣を脱ぎ捨てた。若鮎のようなビチビチしたヒフが、一同の眼を惹いたが隊長はぐいと腕を掴んだ。

「漢奸！ いさぎよく観念しろ」

戦後のプレゼントはスパイ容疑だった。

地獄の女王

監房の中には

影を失ったよう

な女囚が三百余

人もいた。頑丈な石塀と鉄窓でとり囲まれた

独房と、幾十の雑居房。



最初李小姐は、この雑居房に入れられた。受刑者のうちスパイ容疑と無期刑の重罪犯が

五十人、あとの大部分は終戦直後のどさくさを利用した軽犯罪者だ。

女囚たちはこゝに入るような芽を、すでに社会生活の一端から発散させていたか、あるいは強靱な男の盾を失ってこのちよっとした動機から、ずる／＼と泥沼に転落した者ばかりである。

軽犯罪の女囚たちの眼からみれば漢奸の存在は、法の權威をまとった看守よりも、いく十倍も怖れられた。仲間たちを戦慄のドン底へたゞき込んだ。李小姐の憐のように光る眼だ。彼女から凝つと見つめられると思わず、

「幽鬼！」

女囚たちは身顫いをして囁きあう。

……その刺すような瞳が、いま何を凝視しているのだろう。いや生きた人間の眼じやなくて、

「死の結晶」

それに似ている。十畳敷位の板張りには、二十名ばかりの仲間が雑居していた。その部屋の中には、膿み、爛れたような悪臭がむん／＼している。

女囚の色わけは、偽政府に味方をした中国人を筆頭に、ポルトガル、ターバンを巻いた印度人、ちよ／＼歩みのユダ一族、ニンニ

ク臭い朝鮮人、灰色の澱んだ眼をした白系露人たちが、監房の中で犇めきあっていた。

李小姐のいる房へ、一人のスペイン人が投獄されて来た。身長は五尺六寸もあるうか、キツネのような顔と何ものかに飢えた深みのある眸が、仲間たちを惹きつけた。名前は、

「ナタシイ」

と云う。このナタシイが、こともあろうに人のスーブを横取りする。腕力で来い、という素振りだ。たまりかねた李小姐が、

「ナタシイ、又盗んだの？」

「何を——」

「トボけちやいけない。部屋のリンチを知っているかい？」

「知らないよ。私はお腹が空いているから戴いた迄さ」

ふてくされのようにいう。

「もう一度云ってごらん」

「幾度でもいうよ」

彼女が喋りかけようとした一瞬、

「畜生！」

豹のように飛びつく。ナタシイも腕には自信があった。

「来い！」

ガクンと構えた途端に、李小姐は素早く太

股へ噛みついた。

一同がメンス時になるとヒステリックになるのも無理はない。咬みあい、引張りあい、殴りあう。いやはや大へんな騒ぎである。殊に互いに反駁しあった同志が、ちよ／＼とでも五体の一部に触れあうと、

「何するンだい」

「それがどうしたの」

「云ったわねえ」

「来い」

「やろう」

まるで山野を放浪する狼だ。殴る、蹴る、噛みつく、引く、掻く、ドタバタ騒動。あの、ヤニ臭い、ニンニク臭い女囚たちの立廻りは全くシヤバでは見られないものである。あちらの片隅、こちらの端では太股も何のその、薄汚れた脛と脛、沸り立つ慾望が湧く。さながら生地獄であろう。

この時、李小姐は止めもせず騒ぎもせず、側で超然と見おろしている。

「地獄の女王」

を想起せしめた。

深夜になると模範囚が呼び出される。看守からよれ／＼の毛布を貸与される。馴らされ

た女体にはこの一枚の毛布と互の体温で、充分睡眠を取らねばならない。ところが午前一時過ぎになると、その時刻を待っていたかのように李小姐が、パチルス菌的悪癖を滲透させた。

その時間が来ると彼女は、空腹の慾望とは別なかなしいまでの悪魔が燃え出す。

最後の潔白

あゝ最後の朝はついに訪れた。

(午前七時。あと二時間……)

確かに新風は、李香雲の方へ流れて来る。

「うあん」

耳鳴りがする。きびしい掟とつめたい十字架――。

「銃殺！」

それは彼女が時間を放棄する時であろう。

(あたしが悪いのです。罪の台に起ちます。)

しかし、もう一日だけ……)

その声の下から死神が、

(恥知らず、早く地獄へ行け)

と、頸のまわりを締めつけるようだ。

彼女は独房の中で静かに身を正した。底冷えのするコンクリートと、冷凍魚のような眼の取組。そこに約束されているものは腐肉だ

けだろう。刻々と近づく時間を肯定しながら看守の来るのを待つ。

ちようどその時である。予期したようにコツコツと靴音がして来たかと思うと、彼女の前で停った。かすれた、気まりのわるいほど優しい声がする。

「――李香雲、時間だよ」

「はい」

「これは新しい獄衣。着替えなさい」

「はい」

死霊の使者は、鉄扉のすき間から獄衣を渡した。

(死の衣裳！)

来るべきものはついに訪れた。すでに頭は真空状態。ロボットのよう動作するだけ。

木綿の黒い中国衣を五体に着ける。想えば、感無量であった。社交界のクインがいま、舞台衣裳ならぬ黒衣を纏う身になるうとは。

(独房よ、サヨナラ……)

そんな身のこなし方。たった一枚の晴着がずっしりと重い。支えた神経が切れそうだ。

双手でそっと顔を撫でる。これが彼女に与えられた最高の化粧術……

「李小姐、何か云い残したいことは――」

使者は決り文句を、定められた時間の中で

いう。

「何も――」

いまさら、誰に、どんな遺言があるう。静かに起ち上った。

「カチツ」

鍵の開く音。

「左へ」

銃殺囚は左へつらなる廊下をふむ。一步そして又一步ずつ、死の淵へ近づくのである。いまや最期の十字架が、彼女を抱擁しようとして待ち構えていた。

そこは礼拝堂だ。金色の十字架がサン然として輝いている。側には牧師の姿が見えた。

彼女はつか／＼と前へ進んだ。

牧師は優しく微笑み、しかも厳然として云う。

「李香雲、神を信じますか？」

「心から……」

「しからば御霊は、天国へ遠る」

「はい」

「お祈りを捧げましょう」

「……」

牧師は聖書を片手に威儀を正した。

「――李香雲は神と俱にあり……アーメン」

「牧師さま、神の召使に何が出来ましょう」

「イエス・キリストへの道——あなたの復活です」

牧師はそう云って、彼女の頭髪を優しく愛撫した。

(ザ・エンド)

いまさらながら、スリ切れた精神と心の醜悪さが口惜しい。支えた神経がふかい呼吸をする何かを叫びたくなった。とたんに冷水が欲しくなる。ふっと前方の神棚を見る。グラスに水があふれていた。たっ／＼と走って、一息に飲み乾した。それはシャバ時代のどんな液体よりもいや黄金では支えることの出来ない味이었다。聖水そのものとも云えよう。

ふと彼方を眺めると、いつの間にか飛来したのであろう、十数匹の雀たちが蟬集して、

「チュツ、チュツ」

と囁りながら彼女の頭上高く舞っている。翅を大きく羽博いて、あるいは嘴でももの云う



が如くしながら、スイスイ飛び交う。その生きる美しさを彼女は、痴呆した人のようにいつまでも眺めている。悠々たるかな天——。

「李小姐——」

たまりかねて看守が促す。

「はい」

くるっと踵を返す。

(歌姫として将又、女優として生き抜いたことがマイナスとは……)

「右へ曲りなさい」

そこは銃殺台のころがっているところだ。彼女は最早、安らかな蓮の座を夢みる。女というどうにもならない位置を反省しながら。

あたりに広々とした庭園になっていた。この白骨のように痩せた肉体には、余りにも眩しい。名も知れない赤い翅の小鳥たちが、

「チツ、チチチ」

と鳴き、

「ヒュツ」

と彼女の眼前を飛ぶ。その天真らんまんさが、彼女の胸をヒリヒリ締めつけた。男という男からまるで餌のように食い荒された肉体には、血の一滴も出まい。男性ホルモン化した五体の奥の底には、あるかなしかの清浄さがぼうふらのように浮遊してい

るだけ。

いまは支えた神経が切れそうだった。やゝともすると眩惑が来そうだ。それをふっと拭き取るように頭をふった。ところで過去の重荷は払いのけるどころか、ますます頭を中心地帯へ侵入して来る。

「あゝ」

喘いだ。喚いてみた。身悶えした。たゞ徒勞に終るだけである。

ちようど、その時である。

「たっく」

と、血色かえて走って来たのは刑務所長である。

「待て、ちよっと待ってくれ」

泡を食って看守の側へ来ると、何かを口早やに囁いた。

「えッ！　じゃ李香雲を——？」

愕然として叫んだのは看守だ。

「立法院長の命令だ」

敵として犯すことの出来ない声が響く。

「奇蹟！」

浮かした足をそのままクルツと返す李小姐である。

（そんな馬鹿なことが起る筈はない）

しかし看守が、

「——所長室へ」

と、ハツキリ云った瞬間、胸の動悸は爆竹のように速度を増していった。

（救われた……）

手の舞い、足の踏むところを知らず——

馳けた。転んだ。部屋へ飛び込んだ。

（ジャスト、午前九時）

一瞬、彼女の足は竦んだ。見よ。中央のテーブルの側のソファで微笑しているのは、かつてのパトロン郭沫若ではないか。

「郭先生！」

声にはならず口の中。張りつめた精気がスウーツと抜けていく。そのまゝへな／＼と坐り込んでしまった。眼先がジーンと熱くなる。

「李香雲、いや山口とし子さん。間にあってこんな嬉しいことはない。すんでのところ処刑だったね。小姐の身元調査は潔白だ。国籍は東洋だったね。今日まで大変だったろう。このつぐないはぼくが責任を持つ。さア、こちらへいらっしゃい」

郭沫若は気軽に起上った。そして、あのぶどうのようにうるんだ眼を、彼女へ向ける。温かい双手を差し伸べた。

作家、郭沫若は蔣總統治下の国民政府立法

院長に出世していた。李小姐の過去をいちばんよく知っているのも彼である。今朝、処刑簿の中に彼女の姓名を発見して、愕然として駆けつけて来たのである。

山口トシ子の眼は暫く、途惑いしたようにきよとんとしていたが、いつの間にか歡喜の白玉があふれていた。

（終）

「読者通信」

店頭でふと見つけた奇ク七月号。こんな素晴らしい雑誌のある事を今迄知らなかった。つな私でした。内容を見て思わずドキリワク／＼。あゝこれこそ私達の世界だ！　来月号から引続き購読しようと思ひました。

扱、読んで行つて思わず愕然としたのは北谷英三氏の「鼻は花なり」でした。私は四十才の男性ですが、物心ついた時から今日迄鼻責め鼻いじめには異常な興味を持ち実行して来て居ますが、他人に恥かしく、時には相手にわからぬ方法で一人満足して居ました。北谷氏の文章を読んで、あゝ天下には矢張り同好の志が居られるのだと意を強くしました。早速旧号の真鍋氏の所論の載つて居るのを注文する事に致しました。真鍋、北谷両氏を始め鼻フアンの皆様、誌上に体験談をどし／＼載せて下さい。編集部の方にお願ひ、鼻責め、鼻いじめの写真（局部大写真）を是非載せて下さい。渴望して待つて居ります。

（江藤 恵夢）

現代文芸に現れた責め



村田 誠 一

◎解説

山本有三 「風」

昭和七年十一月

朝日新聞社発行

A 6版 五四二頁

装釘、挿絵。川端龍子

○山本有三 明治二十年七月。栃木県栃

木町に生る。本名、山本勇造。大正四年東京帝国大学独文科を卒業したが、この学生生活は極めて変則多難なものであった相だ。それが氏の作品に非常に影響を興えているといわれている。

◎作品観賞

創作活動は戯曲より始まり、「生命の冠」「嬰兒殺し」「坂崎出羽守」「女人哀詞」等著名な作品を相次で発表して、中年からは長編小説に筆を染め、「生きとし生けるもの」「波」「風」「真実一路」「路傍の石」等がある。シナリオ、児童物、翻訳物も相当にある。元参議院議員。参議院の「緑風会」の名附親である。

従来と趣を変えて、今回は少し異色あるものを御紹介する。これも一種の責めである。今迄発表したものは、男が女を責めるものばかりで、残虐感はあるが、何

んとなく情艶とか、惨艶とかいうものであった。これは残虐というか、残忍というか、男が男を虐める、弱いものいじめの見本みた様で、読後感には筆者などには好感がもてない。

この「風」は昭和五年十月末から、翌年三月末迄、東京と大阪の朝日新聞に連載され、昭和七年に上梓されたものである。作者としては、珍らしく左翼運動の人物を取材した作品ではないかと思う。

軍隊という名のものが存在していた、大日本帝国時代の陸軍の軍隊生活の一場面である。当時は、軍部の強力な勢力支配下であった為、検閲方針もやかましく、今回こゝ

へ発表した個所は、伏字とされていた。戦後漸く明るみに出されたものである。軍隊生活を知らぬ筆者や、現代の若い人には事実と思えない。然し事実といっても間違いないと思う。軍隊と左翼運動の人々とは、氷炭相いれぬものであったから――

◇ ◇ ◇

厩舎の前に軽重隊の初年兵がずらりと二列にならんでいた。上等兵がけはしい声で呼んだ。

「陶川」

「はい」

「前へ出る」

「貴様は馬がかあいくないのか」

「はい、かあいくあります」

「嘘をつけ」

突然ビンタが飛んで来た。陶川は眼がくらみさうになってよろ／＼した。

「何故しっかり立っとらんのか」

「はっ」

陶川は左の耳がはれあがるほど痛かったが、手をびったり垂

れたまゝ直立不動の姿勢を取った。

「だいたい貴様は横着だぞ。いつもいつも手入を怠ってゐる。そんなことで輜重兵が勤まるか」

「……」

「貴様はまだ馬が恐いのか」

「はい恐いことはありません」

「それなら何故きちんと手入れをしないのか」

か」

「はっ」

「貴様はロシヤの本なんか読んどるといふが本当か」

「そのようなことはありません」

「主義者にかぶれるよりは、もっと馬糞の臭ひにかぶれる」

「はい」

「そういうものに近づいてゐる事が分ると嚴罰だぞ」

「はい」

「陶川」

「ちよっと口をあける」

「はあ？」

陶川はその意味が分からないでもごもごした。

「口を明けるんだ」

「はい」

「もっと大きく明ける」

「はい」

古参者の命令に従って、陶川は出来るだけ大きく口を明けた。

上等兵は革の手袋の先で何が小さいものを丸めてゐたが、さいせん箱に銭を投げこむやうな手つき



をして、そいつを陶川の口の中へひよいとはふり込んだ。

突然口の中に物が飛びこんできたので陶川は無意識にそれをかんだ。なんとも言いやうのないけがらしい味とにほひが口の中にみながった。彼はすぐぱつと吐き出してしまった。

「何故吐き出すんだ」

「はっ」

「だれが吐き出せといった」

「はっ」

陶川の眼には涙がにじんだ。

「何だ。そんな泣声を出しやがって、貴様は軍人ぢやないか。しっかりしろ」

「はっ」

「もう一度口を明ける——何故明けないんだ」

陶川は口を明けようとするけれども、何故か上顎の筋が強直したやうになって、十分に明かなかった。

「やい、もっとあけるんだといふのに、づう／＼しい奴だな。貴様は。」

上等兵は陶川の口の中に指を突っこんで唇を開き、さっきと同じ異物を口の中に押しこんだ。——(以下略)——

板を引はがしたあとの橋桁のやうに材木が

一本空中に横たはつてゐる。

その上を一人の兵士が「おいち、二、おいち、二。」と歩調を取りながら、まるで平地を歩いてゐるやうに悠然と歩いて行った。

そのあとから、また別の兵士が両手を拡げて弥次郎兵衛のやうな恰好をしながら、巧みに釣合を保って渡って行く。

うららかな光が兵士と、梁木と、その下の広い砂場を照らしてゐた。昨日の小雨でいくらか湿りを帯びてゐる砂場からは、かげろふが白く立ちのぼつてゐた。

「次。陶川」

「はい」

陶川はすぐ梁木に登って行った。そして幅三〇センチ程の木材の上を靴でもって歩るき始めた。

「何だ。その態は。もっとしっかり歩け」

古参兵の声に陶川の全身の筋肉はびいんと緊張した。彼は四メートル五〇センチの高所を、自分からかけ声をかけながら、歩調を取ってしっかり歩るき出した。

「よし」梁木を半分ほど渡った頃、下から声がかゝった。

「その辺で、まわれ右をやってみろ」

陶川は梁上でびたつと立ちどまった。そし

て直立の姿勢を保ちつゝ

「まわれ右」

と、自分で号令をかけた。それから右足をぐっと引いて身体を回転し、ふたたび右足を元の位置に引戻そうとした瞬間に、突然平均を失って彼はどうんと砂上に墜落した。

(彼——陶川は所謂左翼系の人物として上官からマークされていた。それが憎しみとなつて、事毎に現われ、馬糞責めとなり、この梁上の曲芸にもひとしい責めとなつて彼の身上に加えられたのである。除隊後彼がある集会の席上で——)

彼は立上った。

「僕は陶川克巳といふものです。現在は東洋ビル会社の倉庫係です。中学は半途退学、兵隊にちよつと引張り出されましたが、これも途中で除隊になりました。在営中怪我をしたので、そのため除隊になったのです。僕は兵営にいた期間は短かったけれども、軍隊内で教へられたことは生涯忘れられない程深いものです。僕は軍隊内で何を教はつて来たか。鉄砲の打方か、馬の手入か。否否、僕が骨身にこたへて感じたことは階級といふ觀念です。お恥しい話ですが、私はひどく貧乏し

ていたくせに、その前までは階級意識に目ざめていませんでした。しかし入隊したおかげで、私ははっきりそれをつかむことが出来ました。軍隊といふ所は最も深刻に階級観念を教へこむ養成所です。星一つ、線一本の相違がいかに人を傲慢にし、いかに人を卑屈にするか、その最も甚しい例は星一つでも上の人から、馬糞を口中に投入入れられても、それに対して抗議することも出来なければ、そいつを吐き出すことさへ出来ないであります。諸君、諸君は馬糞の味を知ってゐますか。恐らくは知っている人はないでせう。しかし全

然知らないはずはありません。諸君もある意味ではかなり馬糞を食はされているのであります。馬糞の味は単に、臭いとか、しぶいとか、胸が悪くなるとかいふくらいのもものではありません。それは実に階級の味です。差別の味です。奴隷の味です。被圧迫者のみが味はう屈辱無念の味です。」

◇ ◇ ◇

(馬糞の味——作品の人物陶川は、馬糞の味は、階級の味、差別の味、奴隷の味といっているが、昨今、甘美なる糞尿とか何んとかいって居られる、汚物愛好

の御方は、馬糞の味を御存じかしら。女馬の糞と、男馬の糞との味覚の相違点について、何んて論文が出るかな——糞——それは矢張り美しい婦人のものに限るんでしよう——。

梁木の上で廻われ右なんて、全く無茶な様な気がする。

然し、これを少し姿をかえて、美しい裸女が上半身は縛られて高い梁木の上を歩るかせられている。それを下から殿様か何にかが、床几によって眺めている風情としたらなにか美しい構図になる。

私が本誌五月号に書きました、「眼帯に憑かれて」の手記をお読みになつた狩井氏がやはり「眼帯とマスク」という題で私と同意見をのべられているのを見まして、同好の人が居られる事を知り、大変に意を強くしました。それで再び茲に拙文をも省みず筆を取りました。

狩井氏のは、写真も入れて、居られましたが、写真Aは私としては、むしろ右前から撮って頂きた

かったのです。それは、何故かと申しますと、左前から撮りますと此の場合は、右眼に眼帯が掛けられているので、左前から撮った場合かんじんの眼帯におゝわれていない右の眼の美しさを充分に現わせないからです。右前より写しますと、眼帯でおゝわれていない残りの一眼の美しさが充分にとれ、又眼帯のゴム紐のきっちりかゝった状態が完全にみられます。片眼

に眼帯をかけた場合、残る片眼の美しさ、表情を充分キャッチしてこそ眼帯をかけた女性の美しさが完全に観察出来るのです。狩井氏の云われる様に眼帯も一種の刑具です。特に人間は眼の見えないこと程不自由な事はありません。眼帯はそのうっとおしい、そして不自由さを感じせしめ、又そのついでにゴム紐は頬にきっちり



女性の美しい眼を被った真白な眼帯、きっちりとし片眼を被いゴム紐が頬の肉にきっちりとは掛っているのを見ると、私はもう興奮の頂点に達するのです。私の最も注意する点は、眼帯の大きさです。むやみに大きな眼帯は魅力を半減します。町の薬局で売っている「アノガス」の眼帯が丁度良く、これにガーゼを眼帯の大きさより少し大きい目に二、三枚重ね水でぬらして当てます。紐はゴム紐のが良く、それも少しきつめできっちり眼帯を押えるのが理想的です。実際このゴム紐の眼帯を一日もかけ

眼帯マニアの手記

眼帯の魅力

菅 野 朔 朗



ていますと、左右の耳を引張って、緊縛の感じを思わせます。まさかいくらなんでも、後手にしばって、猿轡をさして町を歩く

ことは出来ませんから眼帯をかける事により、而も一日中絶対はずしてはいけないう約束をして、町を歩かせ緊縛の感を味わさせるのです。

眼帯をされた女性の美しさの最もよく現れるのは、残された眼の表情にあります。片方の眼を被わ

れている為に、幾分うっとおしく、そして見にくい為に、何となく、あわれっぽい、つらそうな眼になります。之が縛られた時の表情と一致して、何とも云えぬ魅力を呈するのです。特に雨の日、ゴム張りのレインコートを着て、片方の眼に真白な眼帯をかけて、歩いている女性を見るのはたまりません。雨の日は傘をさしてレインコ

ートを着ただけでも、なかなか歩みにくいものです。それを更に眼帯を掛けていると、余計片眼の為に歩みにくそうにしています。そう云う女性を見ると、何かあわれっぽい感じが起り、眼帯の片眼の痛ましさを痛感させます。眼帯は女性の最も大切な顔の中心にかけられるものですから、非常に気になるものです。市中で眼帯を掛けている女性を見ると、大抵少くとも五分に一回は眼帯へ手を持ってゆき、さわっています。これは、一つは眼帯をきっちりさせようというのと、もう一つは、やはり何となく気になり、うっとおしい為自然に手が行くのでしょう。眼帯を掛けているあの胸をふるわす様なうずきと、興奮は、私の外には一般の人々には解って頂けないと思います。いえ、それでも私一人でも良いのです。今日も自ら、悪くもない眼に眼帯を掛けて、そして、眼帯をかけた女性を探しに私は市中へ出掛けるのです。

美しい五月に

告

白

古川裕子

美しい五月になりました。私の住む東北の片田舎にも、きらめくような青葉若葉の輝き、この地方の象徴のように郭公の声も響いて来ます。それにしてもこの媚めかしいばかりの重たい風！ ゆつくりと女の胸の中をなまあたかく

吹き通つてゆくこの胡乱な風！ この風は私に久しく忘れていたものを思い出させる。私の肉体の中に眠っているものを媚薬のように目醒めさせる。あゝ今日のようない日、このけだるい五月の午後が、昏れかけてゆく opium のようなこの夕暮、私の身体の中には私の「怖れ」が鈍く澱んだ瞳をして頭をもちあげてくる。乳房にはピンクのアンニユイが、下半身には死斑のような私の「分身」がゆっくりと、しかし誰も抑えようもない鈍重な身振りで、立ちあが



ってくる。あゝ私の嵐が近づいてくる！

仰げば困憊した五月の空、私は身をよじり目を光らせて、じっと嵐を待っている。思えばなまぐさく淫蕩なこの私。

机の上に顔をふせ、唇をゆがめ、額を手の甲にこすりつけ、火のうに熟い呼吸で肩をよじらせ、自らの中に目覚めた分身が身体中のりうつるのを待っている。身体中に満ちわたってくるのをまっぴる。もう何にも考えられない！ うずくような胸の鼓動と淫蕩な肩齒を噛みしめ眉をしかめて変貌を待っている。てんかんの人は発作の前に、言いやうのない、身体中を球が駆け廻るような前兆を感じるという。ヒステリーの人は発作前に咽喉に球がつきあがり、つまるような気がするという。

私は一体何だろう。このような下半身からの悶えはやがて私の全身を——私の全人格を変えてしまう。私は普段とは全く別な女になってしまう。正気の時には夢にも考えられない自分が、時を得顔に潤歩し、夢遊病者のように無責任な破廉恥な行動をし始める。

嵐が過ぎてしまえば、そこにあるのは深い深い羞恥と自虐。髪の毛をかきむしり、身を投げ出して消え得べくもないあの悔恨。

私のようなものが「変質者」。世の害悪。三日前正気の時に、遂に意を決して精神科医をたずねた。

しかし得たものは殆どなかった。医師は冷静に私の云い分を聴き私の精神を分析し——たゞそれだけであった。すくなくとも私を「慰さめて」くれただけだった。当座はそれでも気が休まった。私は自らも努めて普通の人間であると思おうとした。おだやかな五十がらみの医師に私の洗いざらいを打ちあけたあの勇気と努力の代償としても、私は何か攪まねば気がおさまらなかった。でも一度嵐が吹

きすさめば、私は全く私でなくなってしまう。そこにいるのはたゞ一匹の「淫獣」だけ。

今の私の頭の中はすさまじい「凌辱」への期待と幻想だけ！

誰でもいい。私の「特殊な性欲」を満足させてくれる異性——本当に誰でもいい。その人の人格や性格など何が問題となるのだ。誰でもいい、ただ私が満足する方法で私の性欲を満足させてくれる男！ たゞそれだけでいい。普段の上品ぶった分別や、持って廻った、ものの云い方は今はあとかたもない。爪を噛み歯を喰いしばって、私は「私の男」を求める。さあこゝにマソヒストの女の売りものがある。勝手にもてあそぶがいい。たった一人ではものたりない。何人でも、いや何十人でも、そんなことの好きな「男」はみんな、寄ってくるがいい。そしてこゝに裸で立っているこの女を、君たちの勝手にするがいい。

縛りたい男は縛るがいい。お望みのもので——麻縄でも鎖でもコードでも革紐でも荒縄でも。

首縄をうんと締めあげるがいい。背中の手首もちぎれる程、肩の関節もはずれる程。そしてこの女を泣かせるがいい。女の泣き声は悪くない——そう思う人は、うんと虐めるがいい。

猿ぐつわの嵌めたい人は嵌めるがいい。さあ、何をおどおどしているの。さっさと自分の下のものをはずしてこの女の口につめこむがいい。ふるえることはない。うんと、くさいくさい男性の臭いを嗅せるがいい。

嵌口具を嵌めたい人は——さあ、ぐずぐずしないで、あなたの持ってきたそのカバンからお望みのものをとり出しなさい。そしてそこに立っている女に、心ゆくまで嵌めるがいい。女をおもちやにし

女をいじめる機会なんぞ、そうめったにあるものではない。あとで悔まぬように思う存分望みをとげるがいい。あなたは私の呼びかけた手紙をくれた六十人のうちの一人。その権利を持っている。さあ遠慮しないで！ 何をぐずぐずしているの。いくじなし！

女を鞭で叩きのめしたい人は早くきなさい。自分の工夫したその御自慢の鞭で、この私を叩きなさい。息の切れる程！ さあ早く。

ほら、もう後手に身うごきも出来ない程括られて、猿ぐつわを噛まされて、あなたの目の前に転っている。このもりあがったおしりをこの白いやわらかい肩を、この桃色のもゝを、この乳房を、ねえ、なぜ早く叩かないの。手紙では大きなことを云っておりながら、今になってなぜそんなにふるえるの！ 口ほどにもない人！

さあ早く。この女の白い膚をみみず腫れだらけにしてしまいなさい。床の上に血だらけでヒクヒクとうごめくまで、徹底的にお仕置をしてしまいなさい。さあ、さあ、何をしてるの。

あゝ、あなたは女を天井から吊ってみたいといっていた人。やってごらんないな。関節ぐらいぬけるかもしれないけど、それがなによ。傷害罪で訴えはしやしないわ。馬鹿々々しい。こっちから頼んでお願いしているのじゃあないの。何人も集って本当にいざとなるといくじがない。

鳥のように、豚肉のように、さかさに吊りたいの、それとも四つ足を括ってぶらさげるの？ 駿河責め？ どうするのよ。絞首刑？ はりつけ？ 片足吊り？ それとも両足を開いて、さかしの晒し？ さあどうしようというのよ！

あなただったのね。女を縛って公衆の面前をひき廻してみたいと書いてきたのは。いいでしょう。おやりなさい。前に経験がある

わ。縛られて東京から水戸までつれてゆかれたわ。兇暴な精神病者にされたわ。あやしまれなかったかって？ そりやあ怪しまれた。上野で汽車にのるとすぐに公安官と警官がつれだってやってきたわ。夫が偽の精神科医の診断書を見せたの。いいえ用紙も判も本ものよ。夫の友人の精神科医の机の上から一枚失敬して来て、机の上に放り出してあった認め印を知らぬ顔で押してきたの、なかみは、もっともらしく書いたわ。そしたら警官も信用した。だけど、縛られマスクをされた私を、ことさらにじろじろ見るの。そしてこうい

「麻縄じゃ可愛想だよ。せめて兵児帯か何かにしなさい。これじゃ人権侵害だ。」

夫は

「これがあばれ出すと不思議に縄をといってしまうので、今日は外であばれられては困ると思って、可哀想だったけど麻縄を使いました」つて。

私は出来るだけ、うつろな目をしていたけれど車中の視線が全部縛られた私に集って恥しくもあるし——でもそれより、ねじきられるように昂奮したの。中年の男など、わざわざ遠くから席を立て私を見にくるやつもいたわ。

「首縄があんなに喰いこんでる。痛そうだ」

いやらしい目をして私をじっと見るのよ。私は首をたれて囚人のようにうなだれていたわ。夫はわざと私の合羽型の外套をきせ直して後手首縄の私を立たせて衆人の前に晒したの。どの駅でも、新しい乗客が乗りこんできて、世にも珍らしい見世もののように私を見るの。あれが本当の野晒し刑。あなたも、あゝしたいの？ いいわ

またやりましょう。この淫獣をあなたの好きなように括って、白昼、引き廻なさいな。私も久し振りで嬉しい。

生涯自分のもとで終身刑の女囚として檻禁したいといていたのはどなた。あなた。

たしか私にゴムの袋をかぶせてしまうといっていたわね。さあ、やって頂戴

むかしもそういうことがあったわ。一週間は被らされていると顔の皮膚が生白くなり、汗だらけになって、吹き出もの一杯出来るわ。一日一回息を抜きにぬがせてもらわないと、顔が腫れあがってくることを、あなたは御存じかしら。それに袋が薄い生ゴムであつたりすると、ゴムの刺戟だけで唇などふくれあがつてしまうものよ。でも結構、さあかぶせて頂戴、そしてあなたの奴隷として自由にな

さい。私はそんなことのためにこの世に生れて来た女なのだから。女を一人飼っておくのもいいものよ。それでもゴムの袋をすっぽりと顔にかぶせられて全裸な女なんて怪奇なものね。それがお楽しみになりたいのなら、さあどうぞ。あなたのその手錠を嵌めましょう。手は後に廻すの？　ここに貴方の思うままになる女がいるのですもの。

くすぐり責めはかなり惨酷なもの。私にとっては鞭打たれるより



も、吊るされるよりも辛い。苦しくて涙が出て来ます。しかしあなたはそれがおやりになりたいとおっしゃる。やってごらんなさい。苦しめば少しは私の罪も償なわれるでしょう。むかし自らの罪のつぐないのために鞭打ちを受けた修道女のように。私は自分でも呆れる程のマソヒストだけど、くすぐり責めに対してだけは、不思議に快樂よりも苦痛を感じる。でも、うんと「苦しませ」なさい。この「悪い女」にはそれが適当なのです。

排泄物を口に入れられることも辛いこと。これにはひどい嫌悪感がともないます。夫との生活に於てもこれを強行されたことは二度しかない。これだけはお慈悲ですから勘弁して、ほかのことなら何でもします。これだけはやめて。もしも、私を少しでも可愛いと思っただけなら、こんなに嫌がることだけはお慈悲ですからゆるして。

もしも是が非でもなさりたいとおっしゃるなら、私は出来るだけ抵抗する。そんな私でも力づくで括りあげられ、手足の自由を奪われたら、哀願するよりほかはない。それでも無理になさろうというならば、私を失神させて。意識のない時なら、仕方がありません。私にまざまざと意識させて、それを飲ませようとなさるのは、あまりに惨酷です。くすぐり責めは辛いけれどもまだ我慢が出来る。でもこれだけは駄目。あの亡夫に対してさえ、これを強行された時は、憎くかった。嫌だった。

だからこれだけは私のわがままとしてゆるして下さい。お願いです。お願いです。

嫌がることを無理強いにするとところに本当の面白さがあるのだという男のかたたちが沢山います。泣いていやがる私を力づくにおさえこんでひどいめに合せたいなら。……それは私の悦虐ではなくて本当の刑罰です。

私のような女には、その「刑罰」こそ必要なのだとあなたはおっしゃるのですか。

マソヒストの女が悦んでいる間は遊戯なのだとあなたはおっしゃるのですか。

でも何を云っても結局そうされてしまう。辛くても嫌でも泣いて

も苦しんでも結局無駄です。自ら播いた種ですもの。私のような女は嫌がる権利もない筈でした。

あゝ何でもいい。私は本当にそういう目にあいたい。机の上の空想でなしに。頭の中でのむごたらしい空想は、一層私をおおいたてる。こゝには六十人のかたの呼びかけがある。私は出掛けよう。誇りや道徳や名誉やが、いったい何だというのだろう。私の本質は徹底したマソヒスト。世間から明らかに「変質者」として指弾され、危険な猛獣視される資格を私は充分に持ち合せている。世間態をつくるい、表面を如何に糊塗しようとも、神と自分をあざむくことは出来ない。自分を見つめる自分の目には、私自身逃げ場所がない。

今日のようない日、私は一匹の獣となって悶える。ありのまゝのマソヒストとして、何もかもぶちまけてしまいたい欲望にかられる。身のうちにわきかえるものが、私から一切の高等な感情を払拭してしまう。そこにあるのは低劣なゆがめられた本能だけ。

ある男のかたたちは、お酒に酩酊すると、平素立派なかたたちが驚く程本能をむき出しになさるやうに、今の私には美しい感情も、澄んだ感覚も、向上しようとする意欲も悪をにくむ心も、何にもない。たゞ私は私の方法で満足したいだけ！ たゞこのわきかえる思いを性欲の充足によって鎮めたいだけ！

私は何度か結婚を考えた。私のゆがんだリビドーを合法的に満足させようために。

でも反対に冷静な時にあり余る私の自意識が、どうしてもその決心をさせない。その踏ん切りをつけさせない。このように全く相反した二面をもつ女を妻とする人は、結局二人の女を妻にするような

ものだ。目まぐるしく変転するこの二重の人格——私を受け入れてくれる男のかたが、果してこの人格の変転に耐えていって下さるだろうか。それは本当におぼつかない。いや、それよりも、そのような私が、相手のかたを果して本当に幸福にしてあげられるのだろうか。結婚ということは、すくなくとも相手を精神的にか、肉体的にか、或はその両方の面に於て、たとえ少しでも結婚以前よりもお互に幸福にならなければ意味がない。

私を求めてくださる大部分のかたは、当然今日のような私のみを求めておられるようだ。そうです。この獣のような私が、たしかに私の七〇パーセントを占める部分です。そして、今日のような日、私はたゞそれだけなのです。

でも普段の私は——いやあと三〇パーセントの私は、たゞそれだけではない。自分自身でもてあます程複雑な心の女なのです。私はせめてそのどちらかでありたい。そうすれば私の処世はもっと単純で、もっともっと明るいものになっている筈だ。

このめんどろな女を果してあのかたがたが大きく抱擁して下さいだろうか。すくなからず生意気で理屈っぽく、その上美人でもないこの女を。

私にはその見通しがつかない。すくなくともこの私の出現は、そのかたに対して意外にマイナスになるのではないか。この危惧は私の結婚への決心をにぶらせる。苦しくても辛くても、悶えてもうめいても独りでいれば、迷惑は自分だけ、人様に対する害毒は最小限にいくいとめられる。——私は独りでいよう。結論はいつもこうなってしまう。

もっとはっきり割り切って考えよう。世上の道德がどうであろうと

私は私の「性慾」だけを、便宜な方法で満足させよう——この恐しい考えは、今日の様な日の私をひきずり廻す。「妾」でも「娼婦」でも、何だっけかまうものか。手紙をくれた多くの男のかたたちのすくなくとも数パーセントは、この私によって彼らなりに「性慾」だけを満足させようと意図している。札幌のS氏はそうだった。そしてこの手紙の幾通かは——私の偏見を計算に入れても——純粹に客観的に、そう解釈しても誤りではあるまい。それならば私も、そのつもりで出掛けてゆこう。たとえば新橋駅前にての待ち合せ、お互いの目じるし。会ってからのレストランでの食事。お互いの性癖についての説明、会話、打ち合せ。そしてその夜一夜の温泉マークのホテルでの遊戯。あと二人は離れてしまいかも知れないし又時々同じように会うかも知れない。このような形式の会合は、今日のような私の心をそその。いまにも出掛けてゆきたい程、私をそりたてる。道德が何だ、この禁断症状にも似た苦しみにくらべれば世間の道德などが何であろう！

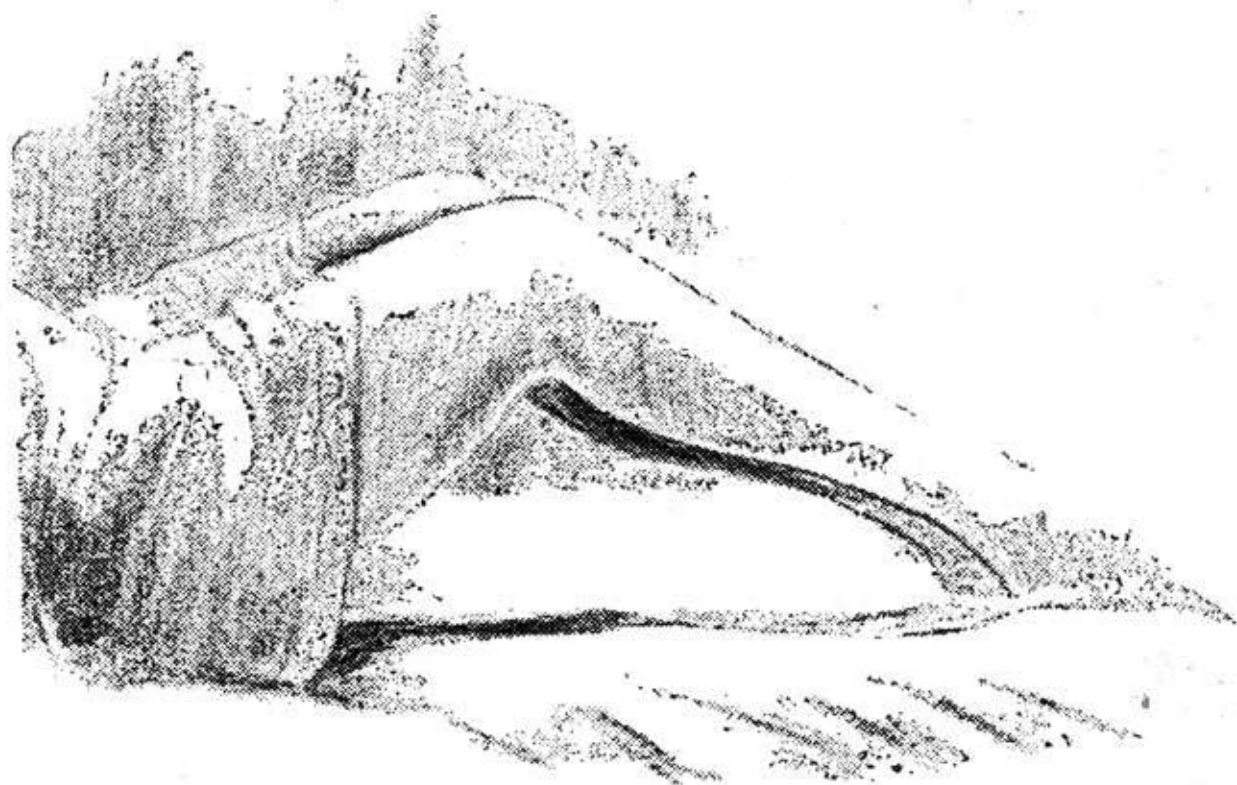
しかし私の嵐がすぎると、この考えは私を震えあがらす。そう考えた自分への嫌悪に身を世もない思いをさせられる。のみならず札幌や大阪での経験が私に強いブレーキーをかける。あの真似はもう沢山だと。お前はまた「娼婦」になりたいのか、と。

こゝ数年私はこの世でたった一人で生きている。血のつながる親類は——すくなくとも私が知る限り——一人も居ない。今身をよせている義兄も、要するに単なる姻戚にすぎない。たった一人でこの世に生きている私は、現実には生きている一人の女として性慾以外にも骨に沁み通るような孤独な想いに耐え兼ねることがある。寂滅の世界にたゞ女一人生きていく寂しさを誰が察してくれるだろう。し

よせん二人の人間は——自分と他人とは——永遠に理解し合えるものではない。たとえ恋人同士であろうと夫婦であろうと、又どんなに仲の良い姉妹であっても、二人の人間は永遠に二人の人間なのだ。二人の人間がお互いに、すみからすみまで理解し合えたということは、永久にそして絶対に有り得ない。それは理解し合えたところ「錯覚」する一瞬はあるかも知れない。しかし「錯覚」は永久に「錯覚」であって理解し得たことではない。

この世に「孤独」であるということは、多くの肉身にかこまれていてさえ、そうなのだ。ましてひとかたならず気むつかしく、しかも弱虫で、その上、ゆがんだ本能を持って余している私のような女を、いったい誰が、理解してくれるだろう。いや理解してくれたと「錯覚」をもたせてくれるだろう。

私は今迄本誌のような性質の雑誌に、その性質



を踏み越えるような、七面倒な理屈をならべたて、編集者と読者を辟易させて来たような気がする。

「孤独」な私は、それと意識しながらも自分をそこにぶちまけて一つには私自身が自分を再発見するために、一つには自分を露出することで私の「性慾」と「孤独」とを満足させるために、そしてもう一つは、読者の皆様が、この「現実」の中に生きている血のかよった一人の女の像を、作意でない条件のもとに御覧になっていただいて、私の生意気さを満足させたかったために。私にとっては、蜘蛛の巣のように複雑した私の心理と、猛々しい本能の叫びとを、洗いざらいぶちまけて、第一に自らの「解放」をしたかったのだ。卑近な言葉を使えば、そうすることによって性の圧迫から解放されたかったからだ。今日のような日、性感は私の中に沸きかえり私を苦しませ私を悶えさせる。書くことによって、——この露出症的な恥じ知らずな心境描写をすることによって、息を抜きたかったからだ。

狡猾な私は、それと同時に、私という人間の環境と性格と行動と心理とを述べつくすことによって、自らの「ゆがめられた本能」への読者の同情を惹きたかったのだと告白しないではいられない。このような性格の女が、今の日本に、どう生きているか、何を悲しみ何を喜んでいるか、他人様にはどうでもいいようなことを、まるで子供のよう——子供が母親にかきくどくように——述べたてゝ世間に甘えたかったのだ。

でも読者の要求なさることは、こんな七面倒な心理では

あるまい。わざわざお金を出して、舌たらずの女の「理屈」などを
読みたいために本誌をお買いになるのではあるまい。

私の書くものを、本誌上の他の作品にくらべて見れば、他のかた
がたのものの何と卒直なこと、何と端的なこと、何と明るいこと。

私はうらやましい。みな堂々と生きておられる。卑屈な、おどお
どとした生きかたでなく、或は無邪気に、或は卒直大胆に、或は技
巧をこらして、そしてどなたも確固とした筆力で書いておられる。
右を顧み左をうかがい、おどおどしながら自分と世の中に気兼しつ



SHIN

ゝ、しかも猶、自らの「安全」のためにこんなものを書か
ずにはいられないこの私。

最近、私は二通のお手紙を戴いた。一通はどこで私の本
当の住所をお知りになったのか、直接に私宛に——しかも
古川裕子ではなく本名の私に——書き送ってこられた長
文のいかめしいお便り。いや「お便り」などという生易し
いものではない。これは私への叱責、私の背徳への厳しい
追求であった。完全な署名はなく、ただ「大阪・関」とのみ
記してあったが、文面によれば、相当齢をとった教育者か
或はしかるべき責任の地位にある人のように読みとれる。
字も毛筆に巻紙で仲々名筆名文である。

第二のものは、奇譚クラブの編集部を通じて送られて来
たもので、これは皆様もおなじみの吾妻新様からのお手紙
だった。

私はこの二通を同時に受けとった。第一のものは私を震
えあがらせた。第二のものは私に考えこましてしまった。

大阪、関氏の内容は大略こういう意味合いのものである
「お前の書くものは甚だ変態的挑発的で年少者若年者を害すること
甚しい。あれで身を誤るものがどれほどあるかわからぬ。どうい
うつもりでそのような卑穢なものを書いているか、自分には想像も出
来ぬが、女は女らしく、少し身をつゝしみ自ら考えて見たらどう
か。公刊の誌上のあのような記事が、どんな影響を与えているか、
考えてみたことがあるか。以後慎しむように。いや絶対にこのよう
な自他ともに迷惑な行為はやめて貰いたい。それがお前自身のため
でもある。」

それは丁度親が娘を叱るような手紙だった。それ以上に私への憎悪に溢れていた。私の行為への憤激にみちていた。私はこの手紙がどういふいきさつで「本名」の私宛によこされるようになったか知らない。又それを不思議に思っている。たゞ明瞭な事実は大阪の関なる見知らぬかたが古川裕子が私なることを知っていて叱責の手紙をよこされたということである。私は怖しくなってしまった。

このお手紙の内容については、私は何にも弁解したくない。相当長文のお手紙で、中には、何か私を編集者と間違えられているのではないかと思われるフシがあったり、時には必要以上に脅迫的に感じられる部分もあった。ともあれ私はこの内容について「関」氏と論戦する気はない。もともと私は人と議論をすることは嫌いです。自分の考えを人に押しつけることの何と困難であり、何と無意味なこと！しかし私は慎んでこの御老人（らしい）関氏の御言葉をうけたまわっておく。そして出来るだけ御意見にそうよう努力することを約束する。

でも、それにも拘らず私は今こんなものを書いている。五月の気候は、五月のむせるような空気と気圧とは私の気を狂わしてしまう。このような女が「無用の存在」であることはわかっています。でも卒直に申して私も一人の「人間」です。何とかこの世の片隅に生かしておいて下さい。

「安全弁」がないと私は死ななければならぬ。これは、「道徳的な善悪」ではないのです。

私の意志の弱さはお説の通り、何も否定するすべもありません。しかし、私はこれ以上の御迷惑はかけません。せめて私は、あなたのおっしゃる「無害」な——「有益」とまではとてもまいます。

が——存在になるよう努力致します。でもたった一つ、これだけはつぶやかして下さい。「人間にはいろいろな性格があって、誰もがあなたと同一な考えかただけするものではない」と。生意気な！とおおこりになったら、曳かれものの小唄とききのがして下さい。私は真面目でありたく、心細い意志の力ではあるけれど、今迄もそう努力して来たつもりです。その成果があがらなかったことについては、これは私の責任で、何とも弁解のしようもありません。吾妻様からのお手紙は、私信でございます上、未だ吾妻様におゆるしを戴いておりませんので、その内容を詳しく申しあげるわけにはまいません。

しかし要するに一言で申せば、私に今迄のような折りにふれた断片的なものではなく私が、生れ落ちてから今日までの半世について系統的に書いて見ないかという御懇意なのです。

この御手紙をいただいてから私は深く考えこんでしまいました。第一に私の生涯にその価値があるだろうか。いやどんな人間も、人間でありさえすればその生涯を本当に真面目に不屈な良心をもって記録し残しておくことは、人間への理解という点で何らかの価値を持つ筈だ。殊に私のような場合は精神医学的な資料としての価値をその上加えるかも知れない。だけどそれはまさしく「不屈の良心」によって書かれた場合に限る。アンドレ・ジイドが「一粒の麦もし死なずば」を書いた。あの不屈な良心。それが私に持てるだろうか、私は弱い女で、他人に対しては発表を前提としていなくても何かととりつくろいたくなる。余り恥しいこと、余り破廉恥なことを洗いざらい書きつける勇氣は仲々ありそうもない。いや他人に対してどこるか、折りにふれて書きつけてきた私の秘密のノートでさ

えも、いつかは人の目にふれる時のことを考えて、心ならずも嘘を書きおくことがないとは云えないこの私、そのような私が人目にふれたら私の職業も私の名誉も失ってしまわなければならないような、そんな恥多い私の行状と心理とを、本当に書きつくすことが出来るだろうか。

書く以上私は作為でありたくない。発表して金もうけをするというならば又考えようもあるけれど、それは私はしたくない。

書けるか書けないか——その見通しが私にはまだついていないのです。

第二に、人間の書いたものは、焼け失せてしまわない以上、誰かの目に触れることを覚悟しなければなりません。それには現在まで私自身がコマゴマと書いて来た十四冊のノートがあります。そして私の秘蔵している、あられもない自分の悦虐の三冊のアルバムがあります。そして夫との遊戯につかった数多くの責め道具が、そっくりそのまゝ残っています。私が死の直前にふらふらと起きあがって、これらを仕末しない限り、これら是否応なしに人の目にふれるのです。今更私が、あらためて書きつづらなくても、これらの資料は十二分に私の本態を物語ってくれるでしょう。

奇譚クラブに発表された私の所謂「告白」——それは勿論、発表ということにともなう私流の作為が混じているものですが——真面目に注意ぶかく読んでくださった忍耐強い読者がもしあるとすれば、あれだけでも相当に私という女が、どんな人間か、又このよきな性癖をもった女が現代の日本という環境でどんな心境にあるかをかなりにお察し願えると思います。これは私のうぬぼれかも知れませんが、だとすればこの上何をつけ加えましょう。

私は、だんだん吾妻様の御慈恵に應ずる元気がなくなってきたのです。

また、どうしても書くか書かないかの最後の決心がつかかねていきますので、失礼千万にも吾妻新様に御返事も申しあげておらない有様です。

こゝに書きましたことを中間報告といたしまして、吾妻様、失礼ついでに、もう少し私に考えさせて下さいまし。この文も、私の興奮が醒めてくるに従って又もや理屈になってしまいました。この二三回、読者の皆様は私の書きましますものに退屈していらっしゃるかも知れません。私は川端多奈子様がうらやましい。このかたは失礼乍ら私と同様な血をもっているらしい。そして私などよりも、はるかに天衣無縫の明るい性格をお持ちです。お書きになるものも私の牛のよだれのように御談議の多いものとはちがってはるかに直截で堂々としていらっしゃる。これは皮肉や、あてこすりではありません。私は皮肉を申す程意地が悪い女ではありません。

私は時々、川端様がうらやましくなる。他人の芋は大きく見えるのかも知れません。私は何故もつと卒直でないのだろう。何故自分の行為や性格について、かくもおどおどと弁解し理屈づけ説明しなければ気が休まらないのだろう。本当に自分がのろしくなる位です。

奇譚クラブの編集部のかたが、こんなくりに言に対して貴重な誌面を提供して下さる御好意に甘えすぎてはいないか——私はつねに心苦しく思っております。でも狂気の日に書き始めても最後はきつとこんな議論になってしまう。ごめんなさい。

でも私は氣をとり直して申します。この誌上でもたった一人位、

生きている女がいて、マソヒズムの心理と行動とをめぐって、厭きもせず筆まめに書きつけているものがあっても良くはないかと。生きている現実の女の複雑な心理は作為の女のように簡単ではないのだと。これは哀れな私のえらがりです。

夜がふけて来ました。なまあたたかい風が私の乳房の間を吹きぬけてゆきます。

今夜は紫水晶のような五月の夜。こんな夜は私の身悶えをする罪の夜です。おそらく私は一晩中、真白なシーツの上で寝苦しい夜を転々として過すでしょう。少女時代からの私の悪癖——呆れはたことに三十代も半ばになる今日まで未だにやめられないあの習慣——そのための少女時代の折檻は私にマソヒズムをよびました——あゝ、偉そうなことを云っても私はこんな人間。お嗤い下さい。暗い窓の外を見れば、星が光って空気が香るようです。深く呼吸す

ると五月の夜の精気が胸の底まで沁みこんできます。そして私の身体の中に云いようなない悶えを残してゆきます。

女の生理は悲しい。このやわらかい頬、このゆたかな乳房、もりあがった肩、まるい腰からお尻にかけての線、私のものも、そして足寝床の上に足を投げだしている女。声をあげて、——声をあげて異性を呼んでいるこの女の膚、私の心とは全く関係のない、このなやましく白い淫獣。

この膚に縄が喰いこみ、この頬が猿ぐつわにひきしぼられ、このゆたかな白くやわらかい腰に鞭のあとがつくとき、小賢しい私はこの世から消え失せ、私の肉体は歓喜の声をあげる。そして生理の充足感にむせび泣く。あゝ誰か、あゝ誰か——私を泣かせて！ 天へのぼるあの悦虐のよろこびの中で。私をむせび泣かせて！

☆

☆

☆

に就て

四 十 六

本誌六月号に、小生の小論と写真が掲載されました事は、本当に大きな喜びでした。加えて、読者通信の欄に本誌三月号所載の小論に対し、賛意を表された御意見を見た事は、まことに吾が意を得た思いをした次第です。

其後、投稿しようしようと心がけ乍ら、最近の景気不振に仲々そうした余裕を身近に見出し得ず、とうとう今日に到った事を甚だ残

念に思っています、落着いてゆっくりと、と思うと仲々機会がないので、とりあえず写真だけでも、と思いお送りする事にしました。

写真(A)は、先月の小論の内容の一部であります、くわしい解説(微細にわたる敘述文としたいのですが)は次の機会にゆずるとして、削筆に説明しますと、

一、女性の容貌の美は、主としてその鼻の

三度び女性の鼻

真 鍋

美しさに存すること。

二、特に欧米に於て「少し上を向いた鼻」が珍重されて、事実には明らかな如く鼻の美は鼻腔の美に集約せられること。

三、鼻及び鼻腔の美に対する美意識は、これを単に眺めることより、進んでこれに触れて弄ぼうとする意慾を当然に結果すること。

四、その弄ぼうとする意慾は、美を専有し破壊しようとする男性のサディズムに通じ否、サディズムそのものと思われること。

五、この写真は、日本人には珍らしく、理

(A)



想に近い鼻の穴を持った女性に就て、右の美的感覺を強調すべく試みた習作であります。

六、即ち、モデルの鼻をセロハン・テープで下から上に吊りあげ、(一端を両方の穴の中間のところ、しっかりと穴の内側に沿ってはりつけ、他の一端を思いきりつり上げて、額の中央にはりつけた)顔の上部を黒い衣で掩い、つり上げられた鼻、鼻の穴を、強

調的に撮影して見ました。

七、唇が上向けられた鼻によって、当然に上にひきあげられ、白い歯並が否応なしに露呈している様は、女性のマゾヒズムに関連し、否、マゾヒズムそのものを明らかに示すと思われます。

八、この場合、わざと全裸体にせず、半裸体にしたのは、鼻の穴と、前記のサディズム

ス、マゾヒスムスの感覚を強調する為でした。

九、全裸のもの並に、まる裸にした上縛りあげたもの並に、えび責、逆えび責め等のものもありますが（特に逆えび責めと、逆さはりつけは優れた感じが得られました）公開をはかる点もありますので、残念乍ら適当な機会にゆずり度いと思います。

写真（B）は、同じくセロハン・テープで上に吊りあげられた鼻の穴を、下から覗き加減に写したものであります。この写真のモデルの両眼に看取される感情は、明らかにマゾヒスティッシュな要素を示して居り、私としては成功と考えています。

写真（C）は、同じく思い切り上に向きあげられた鼻の二つの穴に、煙草をつゝこんだものであります。サディスティッシュな慾望はかゝる煙草をさしこむと云う行為によって、充分にその目的が達せられたものと考えますが、この写真は、あまり満足すべきものではありませんでした。煙草よりも、もっと太いものを、と考えて見たのですが、それでは、折角の鼻の穴の美しさをそこなってしまうので、煙草にして見た次第です。

次の機会には、煙草以外の何か適当な品物

を用い、一方

に於て鼻腔の美を保ち乍ら他方に於てモデルに堪えがたい苦痛を与えると云う様な、二つの目的を同時に達成せしめ度いと考えています。

最後に、モデルの獲得の

（B）



経緯については前に申述べた通りであります。そろ／＼新しいモデルがほしくなっています。女性にして、この私の趣味に賛同され進んでモデルになって下さる方があると幸いなのですが。誌上を通じて御連絡の方法あれば、編集部に於て可然と取計いを得度くお願いする次第であります。

第二部

以上を書き終えて、投函しようとポストのところ迄散歩しかけた途中、はからずもKK七月号の発売を拝見、而して北谷英二氏の所

論を通読、感銘のあまり、この第二部をつけ加えることにしました。右様の事情故、とりまとまらぬ点は御寛容を願ひ度い。

北谷氏の七月号所論「鼻は花なり」には、たゞ／＼敬服の他なく、且、又、どの点に就ても満腔の賛意を表します。お若いのに似合わず、堂々たる論文でした。ことにパスカルのパンセを持ち出されたのには恐縮、往年の高校生時代をなつかしく想い起した次第です。「ハリガネによる吊り」「洗濯バサミによるハサミ」「鼻もみ」このいずれも、小生

も実験した経験を持って
います、残念ながら写真
の作品はありませんが。

然し、「鼻つめ」と「鼻
輪」は未だ経験なく、次
の機会に早速やって見ま
しょう。早速と云っても

独身の小生にはかなり面
倒な事なのですが、本当
は直にやって見たいもの
です。そしてハリガネ、

洗濯バサミ、鼻もみのいずれも、一緒に写真
にとりたいと思います。

木で括る、鼻締め、乱刺法、の三つについ
ては、小生はあまり面白いと考えない、北谷
氏の云われるサデイスティツシユな目的を達
する為には、今少し他の合理的な方法の方が
良いかと思われれます。

北谷氏の書かれた以外で、小生の経験した
方法としては、次の三つがあります。いずれ
も海外での体験で、日本で適当な女性に出会
う機会なく、残念に思っているのですが。

一、床こすり。板じき(或は、リノリユ一
ム)の床面に鉛筆を塗り、それを女性の鼻で
綺麗にこすりとりしめる方法です。白人の高

(C)



い鼻で、這いつくばった
恰好で(時には後手に縛
りあげ)床をこする姿は
素晴らしいものでした。も
と通り美しくなる迄は、
鞭でおどかして実行させ
るのですから、サデイス
ムスは充分に満足しまし
よう。その女性と高い美
しい鼻が真黒になるのは
勿論です。

二、鼻腔掃除。これは字の通り、鼻の孔の
すみずみ迄掃除をしてやるのです。耳鼻科の
医療器を用い、或は、ハリガネで吊り上げ、
思うさまに弄び、開かせつゝ掃除をする事
は、かなり興味深いことでした。

三、仮面。外国のことゝて、折にふれ仮装
舞踏会がありました。その時に、眼を掩う黒
いマスクにハリガネの鼻吊りをくつゝけ、マ
スクをすれば自然と、鼻の孔が思いきり上向
けられる様にした訳です。その上殆んど半裸
の服装で、一と晩踊りに行った時の楽しさは
今思い出してもゾクゾクする位です。日本で
は機会を得ませんが、北谷氏の云われる如く
男性に於てサデイスムスが、女性に於てマゾ

ヒスムスが完全に満足させられた事は勿論で
す。

とにかく、北谷氏の所論には全く御同感と
申す他なく。先輩などと云われると恥ずかし
いばかりであります。本当に数多い変態マ
ニアの中で、女性の鼻を美とする人々が少な
いのに驚きながら、それだけ北谷氏の御意見
を哀心より喜んでゐる次第です。

目下暇のないまゝ、この度はこれでお許し
下さい。次号迄に海外での其他の経験や、目
下計画の中の事など発表致しますよう、北谷氏
よりも、この上とも御教示賜らんことを願ひ
上げます。

本誌十月号は、

秋季特別増大号です。

口絵本文共画期的な内容の
充実と大増頁を敢行!

◎特別増大号、 定価 百四十円

あらゆるケースのアップノーマルを網羅、
絢爛豪華な諸企画は次号九月号誌上に堂
々発表いたします。



【読者通信】

(投稿歓迎)

口絵・挿絵について希望を申し上げます。畔亭画伯の絵は全く本誌の誇りです。この新鮮にして高貴ある色気は、最近流行の映画「ロママの休日」のヘップ・バーンに一脈相通じるものがあり、他のどの様な雑誌にも見られない逸品です。特に本月号の豹、水葬、戯画回転等に、この特色が存分に発揮されています。唯、時代物の場合何となく生気が薄れるのは画風との間にずれがある為でしょうか。特に牛裂きについては豹に見られる様な力強いものを大いに期待していたのですが、綺麗ごとだけのものでやゝ調子抜けさせられました。(検閲を慮つての為とは思いますが)写真については魅力ある

新人が毎月登場するのは嬉しい限りです。本月号の春日嬢の如き異色の麗人まで現れ、本誌の躍進がうかがわれます。縛り一遍倒でなく「縄を用いない遊戯」等新しい趣向で非常に好ましく感じました。次々とこの様な新方面をお願いします。何時迄も縛りのみにこだわっていたのでは飽きますから。

挿絵のかわりに写真をもつと云うのは前からの願でしたが、本文中に写真を沢山取入れて下さった狩井氏に深く感謝致します。それにしても写真入掲載を大いに期待していた一席入選作「被虐願望の女の手記」の実現がなさそうなので残念です。本文について一言お願い致します。本誌が確固たる基礎を築いて来るとそれにつれて健全な歩みと云う方向に行くのは自然の成行とは思いますが、何処迄も望んでいながら容易に果せられない赤裸々な本能の慾望を適当にみだし、又その吐け口を与えて下さるのと云った本質を忘れないで編集してほしいと思います。現在それから外れていると云うのではありませんが、唯最近お上品ぶったり、何か道徳的こじつけをやるうとする様な議論が往々見られるので申上げるのです。尙貴重な

入選作品や投稿が検閲を遠慮して削除され訂正されて、入選作らしくもない凡作となつて掲載される事は作者にとつても読者にとつても非常に遺憾です。入選作品集とか、告白手記集といった特別刊行物としては戴けないものでしょうか。発行部数の

関係もあるのでは値は幾分高くなつても止むを得ないと思ひますが、装釘等は増刊程度の簡単なものとしたいと思ひます。最後に特別会員を多数持つ事は非常に大切な事と思ひますので、積極的に働きかけて下さつてはと存じます。

(T M)

○ 毎月店頭に「奇ク」の出るのが待ち遠しい位で、ロマンチックなサド・マゾのグラビヤや読物等盛沢山な内容にいつも敬服して居ます。私もマゾの傾向を持つ三十才の男ですが、気が弱く徒らに諸兄



姉の告白や作品でひそかに慰めてあります。今日は思い切つてペンをとりましたが、文才もない上異常なマゾを笑われそうな気がして「やっぱりやめておこうかな」と思ひました。私が異常なマゾに気付いたのは中学を終える頃で、いわゆる「性」に目覚める十六、七才でした。婦人雑誌で月経帯の事を知りそれが欲しくて堪らず、小使いを貯めてやつとの事で買い求めた時は全く天にも昇る様な気持ちで早速帰つて身に付け有頂天になりました。次いでブラジャ、ズロース、ストッキング、シュミーズと云う様に女の肌着に執着、深夜こ

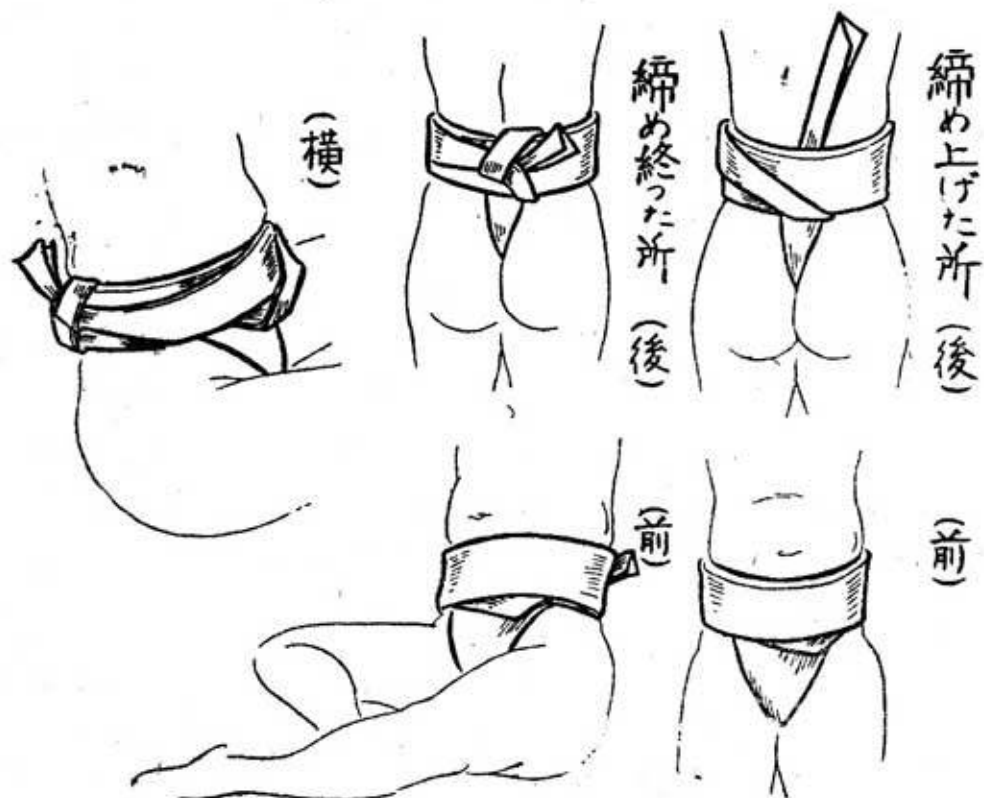
っそり身にまよっては喜んでいました。また磔刑、火焙りといった刑罰にも興味を寄せ、しかもそれが素裸の若い女が処刑されている様な空想が好きで江戸川乱歩の妖虫、黒トカゲを熱読し、洋の東西を問わず処刑場面の出てくる映画も見、自分がその女になった様な想像のもとに自宅で実演して満たしていました。最近では自分で縛り、いじめられてゐるつもりでうめいたり、そんな姿態を写真にとつて一人慰めています。まずブラジャをつけ適当に胸をふくらませ乳房の感じを出し、月経帯をつけさらに化粧して紐でいろいろな縛りを演じます。猿轡や目隠しも好きで同時にする事もあります。七月号のグラビヤ被虐モデルの出現を待つ春日ルミ嬢の様な若く美しい女性に縛られ、女の汚れたズロースを口に押しこまれ、磔刑やくすぐり責め等いろいろの方法でいじめてもらえたらどんなに嬉しい事だろうと考えています。拙い文章でしたが読者通信にでも載せて頂ければ結構です。私の悦虐姿態を撮った写真を同封しておきます。発表して下さいませんか。

(大阪、伊豆操)

爽やかな初夏の候となりましたが、貴書房の事業は益々御隆盛の様子が小生もよそお喜び申し上げます。つきましては此の度小生の我儘なお願いを早速開届けられ転送書状をお送り下さいまして有難うございました。先日申上げました通り、これ等の方々と常時文通する事は出来かねる事情にありますので、小生より諸氏にあてゝ出した返事にも住所を明らかにせず差し上げました。その代り折を見て直接個々にお会いして色々お話をしようと思つていますが中には御不満の方があって再び貴書房に住所の問合せ書状の転送を依頼される方が無いとも限りません。それで小生も手紙の中でそれをお断りし、貴書房に御迷惑をおかけせぬ様にお願ひしてやりましたから、それでも尚且依頼があつた場合はお断りして返送される様お願ひします。尙此の度お便りを戴きました方(杉山氏、小杉氏、山下氏、兵庫の某氏)以外の方から転送書状ありました節は、私としても一度もお答えしない事も心苦しいので御手数数々誌上で御連絡下されば当方で考慮して連絡場所を申し上げますからその節は宜しくお願ひ致します。色々御面倒を

おかけ致しますが貴書房の良心的なお取計いに甘えて依頼致す次第です。それから奇巧の御企画には心から敬意を払つておりますが、切腹について益々充実に希望すると共に、現在やゝ女腹切の方に偏向している様な気がします。より深刻悲痛な我々男性の切腹願望者の熱望に答える企画をどうし発表せられるよう期待しております。奇巧が私達切腹同性愛の者にとつては唯一つの光明でございますので、気儘なお願ひをするわけです。(児島輝彦)

○ 小生寄稿「美少年の秘密」誌上にて拝見致しました。挿絵も良く出来て居り、二枚目の雪夫が布団に寝ている図は幻想的で良く、多くの同好の人達に随喜の涙を流させるでしょう。一枚目の角力支度の図は、揮のしめ方が間違つて居ります。ソドミヤンは非常に感覚



が鋭敏で、殊に挿絵の可否は大きく紙価を左右しますので、殊に最近多くの読者からも挿絵を正確に描く様にとの要望がある程ですから、左に角力揮の締めた所の絵を数枚同封致します。次に雪夫の容貌は良く出来て居ると思ひます。今後ともあどけない少年らしい容貌に特に御留意下さい。

(山口幸一)

☆奇譚クラブ九月号予告☆

●本誌の誇る口絵・写真●
 確実なる定日発行と清新潑刺たる企画により完全に類誌を圧倒し去った本誌の真価に期待下さい。

組写真 野外劇場撮影行
 新作まぞひすちつく・ふおと
 ニューフェイス・モデルの表情
 滝 麗子縛り方教室
 杉原 虹児幻想画集
 新着外国アブ・フォト
 戯文 戯画、畔亭数久
 (外に実写、写真多数)
 私に訴える……吾妻 新
 サディズム審判の一被告として
 随筆、奇ク随想……須藤 律夫
 サディズムの女性才 昭吾
 轢殺願望……青葉 模一
 女体美と特に其臀部に就て
 弓女(続・腋窩譚) 狩井 麗作
 被虐哀歎……真鍋 鍛次郎
 読者通信から見たアブの種々相
 草双紙に見る女腹切 川合伊都子

大好評連載 感情教育……吾妻 新

きもの デパート人形……白金 紅次

読切アブ 身を灼く女……松井 籟子

小説 (我因わ) 雄花の微笑(ナルキッス)……幹 蘭次郎

自刃……大島 一

美少年の秘密……山口 幸一

半公刑(続)……篠原 咲恵

性 液……伊藤 晴雨

マゾヒストの手帖沼 正三

責め撮映行 野外縛りの記録……辻村 隆

残虐なる女性達……森本 愛造
 現代文芸に現れた責め……村田 誠一
 現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正
 外に懸賞告白入選作品

七月号の口絵、伊藤晴雨氏の乱れ髪は傑作でした。特につづし島田の襟足の美しさには魅力を感じました。この様な写真を拝見していると氏が「責め絵は芸術品なり」と云われたのも尤もな事と云なずかれます。「縄を用いない縛り遊戯」のアイデアは大変面白く、黒と白のパンティの対照も妙でたゞ加虐者の女性の姿態が同じ様に撮られていたのが単調でしたが、下に組伏せられていた女性は良くこれていると思いました。春日ルミ嬢の表情にもっと感情が出ていたらよかったです。本号で興味深く読んだのは「血染めの舞台」と須藤律夫氏の「腋窩への省察」です。こう云う熱心な研究家の手記はとても面白い。北谷英二と云う人の「鼻は花なり」と云う文章は全く傑作です。読んでいて笑ってしまいました。ホモ関係の作品がもっとあるとよいと思いますけれど、編集方針がサド、マゾを重点視しているならば仕方ないと思います。終りの方の読者通信に、「鏡子ちゃん殺し」について一寸載っていましたが、あの事件を最も煽情的に読者の猟奇的関心に媚びて報道したのは東京で一流を誇

る新聞であつたのですから苦笑してしまいます。それどころか怒りさえ覚えます。それら東都で大新聞を誇る読売、毎日、東京、東京タイムス等々々の新聞が、一面には社説やその他の欄でアブ雑誌の弊害を説き乍ら、三面に於て全く人道無視、道徳無視、読者の好奇に媚びた大見出しで、エロ雑誌がこのけの記事を載せるのですから呆れ果てたものです。「腹部愛好癖」を書かれた村松と云う人が、「これ程人間の内的な性向を各般にわたって論じた本は、まだ小生見た事も読んだ事ありませんでした。……人間の感情、性向の質的考察をつぶさに研究する楽しみが味えました」と云っています。これ等貴誌の存在理由をよく説明していると思います。エロ雑誌以上のものが確かに奇クにはあります。また普通の好色家の好むエロよりももっと前進したものが奇クにあると思います。大体好色でない人間等いないので、いたらその方がよっぽどアブノオマルです。こゝでセックス論議をしても仕方ありませんが、私等ごく冷静に客観的に考えてみてもこうした特殊な性雑誌(大人の読物として)の存在をみとめたいと思います。

低劣なエロ雑誌は当局が騒がなくとも自然に淘汰されてしまうものです。読者は決して甘いものではないありませんから。存在理由のない出版物等当局が弾圧する前に消えています。(東京、青山三枝吉)

○ 拝啓、貴誌益々御隆盛の趣何よりお喜び申し上げます。待望の奇巧の発行を待遠しく毎月愛読致して居ります。私は店頭で見付け次第すぐに購入する事にしております。それは一時でも待つ事が出来ないからです。毎月末ともなつて来ますと気がそわそわして来ます。この様に私を喜ばせて下さる編集の方々に深く感謝するのみであります。次に七月号での私の感じた事を遠慮なく述べさせて頂いてます。まず図解の「縛り終るまで」の写真はとても良いと思いました。この様な縛り方の写真をどしどし公開される事を望んでおります。次の頁の連続写真はあまり趣味が持てませんでした。やはり縄で縛る所が一番良いと思われました。それにストッキング、コルセット、ハイヒール、ブローズ、タイツ等のアクセサリにして責めの構成をして下さい。これが私の念願であります。それにモデルになる人

々の顔や裸体を写真として出して下さい。どの様な人が縛られてるか写真を見るとすぐわかる様な事がありますれば又一段と面白い事でありましょう。又、春日ルミ嬢があの肉付の良い体で苦痛にもだえる場面の図をとって下さい。それもマゾの人によって(私の空想図、春日嬢を腹と乳房を締めつけ羞恥を感じる様な所を責めつける。この様な責めに春日嬢の苦痛の顔、こんなのはいかゞですか)

〔編集部通信〕

愛読者の皆さんへ

類誌が、改題だ、休刊だ、合併だ、廃刊だ、と騒いでいる中に、本誌はそれを尻目に益々快調、悠々と独走をつづけ、将来、文獻的価値の高まるのを信じて、真摯に自分の途を歩んでおります。私達が毎号誌面にフレッシュな感覚を盛り上げ、異色雑誌の新しいスタイルを打ち樹てるべく、邁進する機関車の如き逞ましい野心を以て当っています事は躍動する誌面によって察して頂けると幸いです。たとえば、本誌編集の苦心を知ら

? それに良く画けていたのは滝麗子氏の「梯子を用いた縛り」が大変良かったです。又杉原虹児氏の「空想の夢」とでも云いましょうか? これも良く描けていたと思います。次に「悦虐回想録」の男性(男子)マゾが女性(女子)マゾの小説を書いていたと云うたいのです。弟に姉がいると苦しい責めにあつて、こんな場面、こんな事を、と早くこの様なものを見、な、て来ます。又小説で

ず、只その隆昌をのみ嫉み、徒らに猿マネを演じようとする輩があつても、そういう独創性のない無定見な編集は、何れ永續性のない泡沫雑誌としての儂ない運命を辿る事は、火を見るより明らかであります。現に過去の歴史が、かくす事の出来ない事実として、私達の眼前にその醜い残骸を露呈しているのでもわかります。

私達は、日々に新に、日に新に一日も、止まる事を知らず、泉の如く湧き出る豊富な空想性によって、皆様と共に打ち樹てた異色雑誌の金字塔を更に輝やかしいものにしたいと願ひいたします。無定

は「股裂き散華」がとても私の気に入った一つであります。こん後益々この様なものを書いて下さる様多山皓氏にお願い致します。又畔事数久氏の「回転」面白いと思います。だが①と④と⑥はちよつと奇抜過ぎはしないでしょうか? 次に松井籟子氏の「私の求めた男」は余り簡単すぎて興味が持てませんでした。今度は読切小説を書かれるそうですが、やはり去年の「淫火」と云った様な小説を書いて下さい。(F・Hより)

見なる模倣や、こけおどかしのハツタリ、内容の空虚な美辞麗句の宣伝文句を極力排撃して、地味にして健全なる雑誌の発展を約したいと思ひます。今や、私達の胸奥をよぎる数々の新しいプランは、華々しい次回への実行を俟って胎動しております。私達は、本誌新年号に於て皆様へ訴えた言葉を今再び、こゝに確認する事が出来るのを喜ぶものであります。

何卒、この奇譚クラブというさゝやかな雑誌に対して、御声援と御鞭撻を賜るよう、お願い致します。

◆原稿募集◆

- 一、本誌の内容に適したものでしたら、どんな形式でも問いません。
- 一、必ず未発表の作品に限ります。
- 一、責絵、責写真についても自信のある方は御応募下さい既に優秀なる作品は誌上に紹介しております。
- 一、締切日は特に定めません。掲載篇は作品に応じ発表後謝礼を差し上げます。
- 一、枚数は十枚から三十枚程度但し内容によつては五十枚位迄は構いません。
- 一、誌上の匿名は御自由ですし筆者の個人的秘密は厳守いたします。
- 一、何卒、奮て皆様の力作をお寄せ下さるようお待ちいたします。

奇譚クラブ編集部

最寄有名書店へ御予約下さい

本誌は、他誌のように合併号の発行や休刊等することなく、毎月確実なる発行を続けておりますが、熱狂的なファンのお増のため各地で本誌の入手難が伝えられておりますので、是非、最寄りの有名書店へ毎月御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

☆代理部より☆

迅速確実をモットーにしています代理部の事務処理は読者の皆様は絶大な信用を博しております。今回、従来の分譲品以外に多数の新版を追加しましたので、何卒多少に拘らず御用命の程お待ち致します。

特別会員募集

本誌並にKK通信の購読者を以つて組織しております特別会員は、漸増の一途を辿つており、その連絡誌として発展して参りましたKK通信もこゝに、第二十号を迎えました。今後、更に内容の充実と新しい企画による飛躍を意図しております。この方々には是非お申込下さるようになります。申込用紙は郵券八円同封に送ります。

◎編集方針について

読者の皆様の声をもっと本誌に誌上に反映させる雑誌として有名な本誌を、更に一段と皆様の身近かなものにするため、編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上或は直接の回答を行う外、今後の本誌の編集に関して、それらの御意見を活かし、以て清新潑刺とした雑誌に育て、行きたいと考えます。

◎直接購読者募集◎

一月分一冊(送料共)百円
三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買洩れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別及雑誌承認

奇譚クラブ

第八巻 第八号
毎月一回一日発行

八月号

定価 百円

昭和二十九年七月二十五日印刷
昭和二十九年八月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

大阪府堺市区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。